

秋 田 市

藩 校 明 德 館 跡

— 市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書 —

2002.2 秋田市教育委員会



調査区空中写真（写真上：西）



第III層面発見遺構、1号溝跡（東→）



第IV層面西側発見遺構（東→）



出土陶器（唐津系）



出土磁器（肥前系）



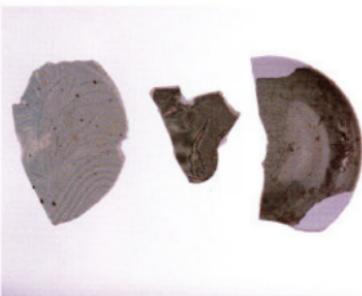
出土磁器（染付大皿）



出土磁器（中国産漳州窯）



出土磁器（肥前系色絵）



出土磁器（肥前系青磁）



出土陶器（瀬戸美濃系・唐津系京焼風）



出土陶器（唐津系銅緑釉・掛け分け）

序

秋田市は、街づくりの一環として秋田駅周辺及び中央街区既成市街地の都市機能の充実と都市施設の整備をはかるために、中通一丁目地区に市街地再開発事業を計画いたしました。しかし、当該地は久保田城下の内町で、藩校明徳館が建っていた重要な地域であることから遺跡の保護について協議を重ね、工事着工前に発掘調査をして遺跡を記録保存することにしました。

調査区は市街地の中心部であることから遺構の残存が懸念されましたが、調査の結果、江戸時代及びそれ以降の遺構と共に、多量の陶磁器が出土しました。そして、久保田城下では初めての調査であることから、貴重な成果を得ることができました。

本報告書は、その発掘調査の成果をまとめたもので、文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用されることを願っております。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成にご指導、ご協力くださいました関係者の皆様に深く感謝申しあげます。

平成14年2月

秋田市教育委員会
教育長　飯　塚　　明

例　　言

- 1 本報告書は、市街地再開発事業に伴う蕃枝明徳館跡（秋田市中通一丁目4）の緊急発掘調査である。
- 2 本事業の実施にあたっては、秋田県補助金の交付を受けて行った。
- 3 本報告書の執筆は、安田忠市（第1章、第2章、第3章第2節の木製品、第4章）、伊藤武士（第3章第2節の動物遺存体と木製品以外の遺物、第4章）、中川宏行（第3章第1節、第2節の遺構、第4章）、小野隆志（第3章第2節の動物遺存体）が行い、安田が編集した。なお、整理にあたっては神田和彦、小野隆志の協力を得た。
- 4 出土遺物の中で、肥前系陶磁器の鑑定は有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏にお願いした。
- 5 発掘調査、整理作業の過程で、下記の各氏より指導、助言を賜った。（敬称略・順不同）
秋田県公文書館、財団法人千秋文庫、秋田市立中央図書館明徳館、秋田市立佐竹史料館、新野直吉、富樫泰時（秋田県立博物館）、大野憲司、武藤祐浩（秋田県文化財保護室）、高橋忠彦・利部修・高橋学・半田あきは（秋田県埋蔵文化財センター）、五十嵐典彦（秋田市文化財保護審議委員）、脇原俊行・加藤民夫（秋田市史編さん室）、関根達人（弘前大学）、高橋與右衛門・羽柴直人（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）、井上雅孝（滝沢村埋蔵文化財センター）、早瀬亮介（東北大学）、田邊由美子（千葉県立中央博物館）、福原茂樹（広島市文化財団）、田中賢人（三田市教育委員会）、倉田芳郎
- 6 遺跡の地形・地質は、「土地分類基本調査 地形・地層・地質・土じょう　秋田 経済企画庁総合開発局国土調査課 1966年3月」を参照した。
- 7 発掘調査による出土遺物、実測図、写真その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

凡　　例

- 1 本文中の陶磁器・土器・その他の遺物については、材質や焼成等により陶磁器・土器・土製品・ガラス・瓦・石製品・金屬製品・錢貨・木製品の基礎分類ごとに記述した。
- 2 本文中の陶磁器については、基本形態や機能に基づく器種ごとに記述した。また、陶磁器の皿類は口径等によって、小皿（口径12cm未満）、五寸皿（口径12~15cm台）、中皿（口径18~24cm台）、大皿（口径30cm以上）の区分を付加した。
- 3 実測図の中で、磁器の青磁は器種を問わず「青磁」の文字と_____のスクリーントーンで図示し、白磁は文字のみで示した。陶器は皿・鉢類についてのみ、鉄種は_____、胴綠釉は_____のスクリーントーンで図示し、その他の器種の鉄釉は文字のみで示した。
- 4 本文中の陶磁器の生産地については、国内産は肥前系、瀬戸美濃系、京信楽系など主要な大規模生産地（地方）に関してその生産地の製品を主とし、それに直接技術的影響を受けた周辺及び地方の窯の製品も含め「系」として示した。また、より具体的な生産地として窯を限定できるものについては、中国産の津州窯、秋田県の在地窯である寺内窯や白岩窯等のように記述した。
なお、肥前系陶磁器の産地同定及び年代については有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に鑑定を依頼したが、報告文の内容については、ご教示をもとに執筆を行った担当者に責がある。

目 次

序

例言・凡例

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査期間と体制	1
第3節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の環境	4
第1節 遺跡の位置と地形・地質	4
第2節 近世の周辺遺跡	4
第3節 明徳館の概要と変遷	8
第4節 久保田城の概要	10
第3章 調査の記録	11
第1節 基本層序	11
第2節 遺構と遺物	11
1建物跡、2柱列、3井戸跡、4溝跡、5土坑、6その他の遺構、7ピット出土 遺物、8遺構外出土遺物、9動物遺存体、10陶磁器・土器類一覧	
第4章 まとめ	137

第1章 調査の概要

第1節 調査に至るまでの経過

秋田市都市開発部は、第8次秋田市総合計画の中で「潤いある快適空間都市」づくりを施策のひとつに掲げており、秋田駅周辺及び中央街区等既成市街地の都市機能の充実と都市施設の整備をはかるために、中通一丁目地区に市街地再開発事業を計画した。しかし、当該地は秋田落久保田城下の内町（侍町）で、藩校明徳館が建っていた場所であることから重要な地域であり、秋田市教育委員会と埋蔵文化財の保護について協議を重ねた。

その結果、計画変更が不可能であることから工事に先立って緊急発掘調査を実施して遺跡を記録保存することとし、平成12年5月26日付けで発掘調査を依頼され、下記のとおり実施した。なお、調査にあたっては、事業予定地内における遺跡の範囲を確定していないことから、先にトレンチを設定して範囲を確定し、その後に本発掘調査を行った。

なお、本事業は秋田県緊急地域雇用特別基金事業費を活用して行ったことから業務委託としたが、発掘調査（平成12年度）及び整理作業（平成13年度）は秋田市教育委員会が調査員となって実施した。

第2節 調査期間と体制

発掘調査（平成12年度）

調査期間 平成12年6月5日～11月10日

調査面積 約2,200m²

事業主体者 秋田市都市開発部まちづくり整備室

調査担当者 秋田市教育委員会文化課

調査体制 秋田市教育委員会文化課

文化課 課長 小松正夫

課長補佐 小国裕実

文化財担当

主席主査 鎌田照平

主査 安田忠市（調査担当）

主事 伊藤武士（調査担当）

主事 中川宏行（調査担当）

業務委託者 株式会社 本郷建設工務所

調査作業員 伊藤弘義、佐藤忠喜、小松田祝、天野宣治、加賀屋喜久雄、福島弘、齊藤利美、伊藤文男、佐藤定雄、佐藤兼雄、山本峰吉、須原明彦、鈴木銀一、鈴木末藏、齊藤健三、三浦吉司、佐々木昇三、佐々木正義、大坂拓矢、高橋力哉、進藤武美、青木賢司、佐藤竹治、戸崎秋光、佐藤祐男、長尾景元、山下清、秋本修、高橋金蔵、佐藤学、塙本祐治、渡辺範、佐藤洋子、細川ひろ子、大山貞子、宮田トキ子、鈴木博子、森泉裕美子、池田淑子、井上理

子、伊藤里佳、堀井千春

整理作業（平成13年度）

整理期間 平成13年6月18日～平成14年2月28日

事業主体者 秋田市都市開発部まちづくり整備室

調査担当者 秋田市教育委員会文化課

調査体制 秋田市教育委員会文化課

文化課 課長 小松 正夫

課長補佐 日野 久

文化財担当

主査 安田 忠市（整理担当）

主事 伊藤 武士（整理担当）

主事 中川 宏行（整理担当）

主事 神田 和彦

主事 小野 隆志

業務委託者 株式会社 本郷建設工務所

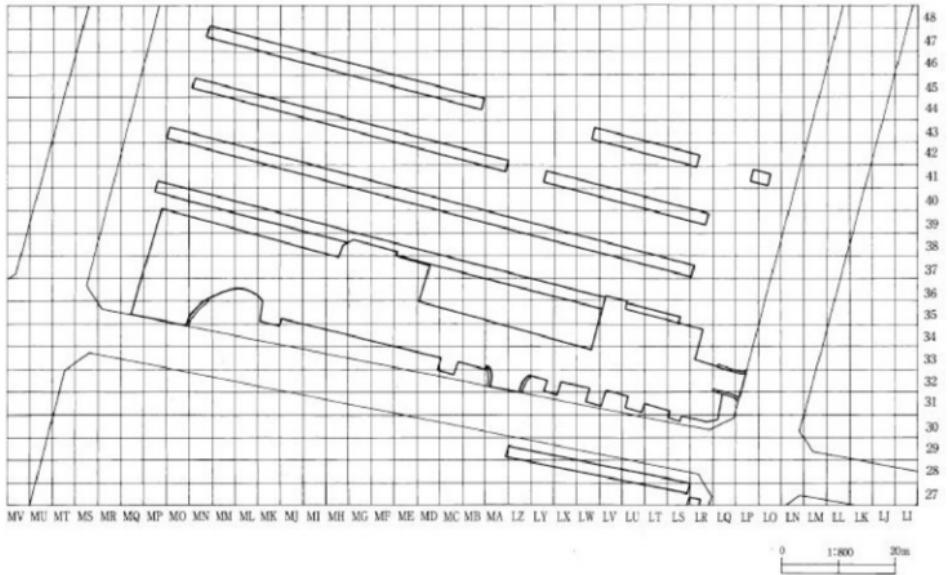
整理員 伊藤弘義、小松田税、須原明彦、千葉隆樹、土佐菜穂子、高橋真樹子、森泉裕美子、石井悦子、山田明見、渡辺千春、岩谷みゆき、石塚春美、宮田美奈子、工藤嘉子

第3節 調査の方法と経過

調査区に任意の点1箇所を選定し、この基準杭から南北基線とこれに直交する東西基線に4×4mのグリッドを設定した。グリッドは東西方向（X軸）に東から2文字のアルファベット（MA、MB、MC···）を、南北方向（Y軸）に南から2桁の数字（35、36、37···）を配し、その組み合わせをグリッド名（MA35・MB36・MC37···）とした。

発掘調査は6月5日から11月10日まで実施した。6月5日、現場事務所を設営し、調査区の草刈りやフェンスの設置を行う。7日から16日まで重機によるトレンチ掘りを行って調査の範囲を確定する。調査予定地の北半は旧秋田県立児童会館や交通災害センターの建築によって、また、仲小路を隔てた南側は旧日本赤十字病院の建築によって既に地下遺構が破壊されており、遺構が残っていた旧県立児童会館の敷地南側を調査対象とした。

6月19日、調査区の第I層（表土）掘り下げを開始する。表土を剥がした段階（第II層面）で、秋田県師範学校関係の校舎の布基礎と礎石を確認する。7月3日から調査区東側から第II層を掘り下げて第III層面を追う。明治期の師範学校関係の建物跡や溝跡・柱列等が発見される。8月22日から第III層を掘り下げて第IV層面を追う。調査区中央部の一部では第III層中程で柱列が確認される。調査後に掘り下げて第V層面を追う。第IV層面が最終面であり、江戸時代の生活面と考えられる。柱列・井戸跡・溝跡・土坑等が発見される。10月27日にバルーンによる空中撮影を行う。11月3日に市民を対象にした現地説明会を行い、約130名の参加があった。11月10日に発掘調査関係機材を撤収して調査を終了する。



第1図 グリッド配置図

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地形・地質

遺跡の位置

遺跡は秋田市街地のはば中央部にあたる秋田市中通一丁目4番地内に所在し、秋田駅の西約600mの地点である。

北緯 $39^{\circ}42'52''$ 、東経 $140^{\circ}7'30''$ で、日本海から約5.3km内陸へ入った地点で、西側約300mに旭川が流れ、北側約500mに久保田城跡（千秋公園）が位置している。

遺跡の地形・地質

遺跡は地形区分では低地にあたり、秋田低地と呼ばれている。秋田低地は第三紀層を切った海拔-70m前後の谷を埋めて第四紀層が堆積しており、秋田市北部の飯田・四谷地区周辺では-40m前後に、また、秋田市南部の仁井田地区周辺では-14~19mの埋没段丘が存在すると考えられている。そして、秋田低地の南部では雄物川などの河川の旧流路が見られ、軟弱地盤を形成している。調査区は東半と西半では地山の地質が分かれており、東半は湿地であることからスクモ層であり、西半は粘質土の堆積である。

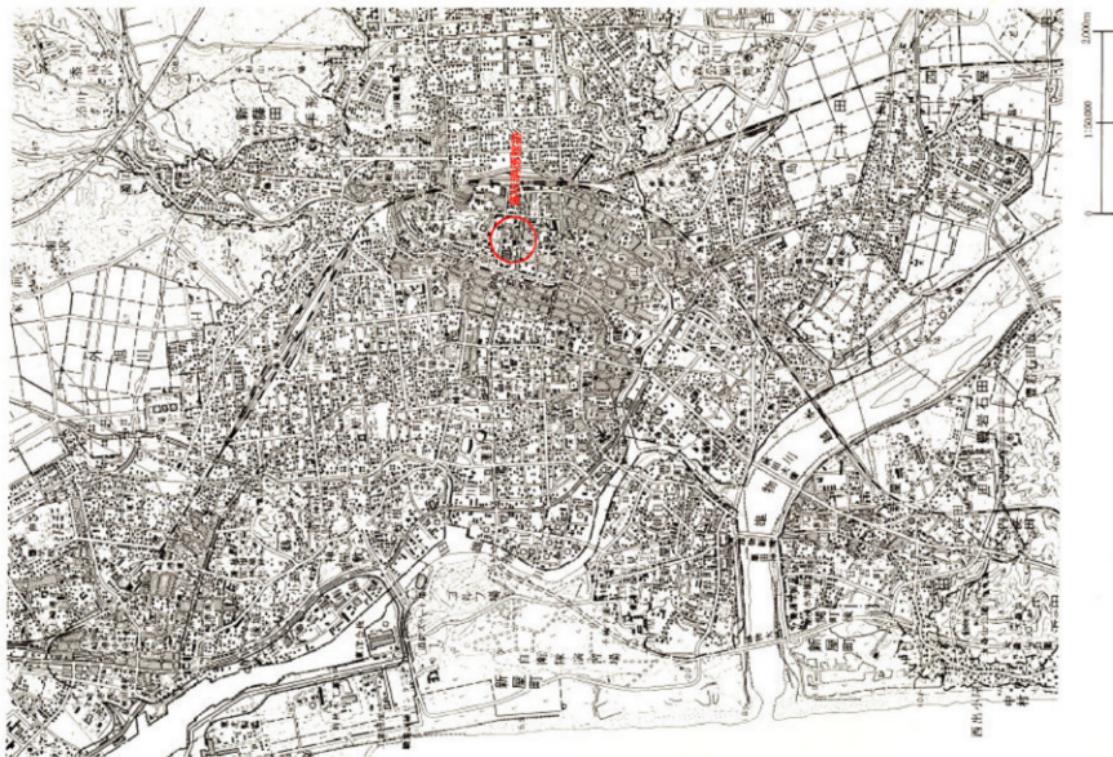
遺跡の北側に位置するは千秋公園は千秋公園台地と呼ばれ、この千秋公園台地は北東側約1.3kmに位置している手形山から古旭川（現在の旭川は久保田城築城によって掘り替えた川）の浸食によって切断されたと考えられる独立台地である。標高は40m前後であるが、3段の段丘（40、35、25m）からなっている。千秋公園は手形山台地と同様に第四系の礫層や含礫砂層（湖西層）からなり、構成物質は最上部に1~2mの褐色の粘土質火山灰層が、次に最大径10cm前後の礫を含む礫層と砂層が30m以上あり、これらがその下部の第三系の泥岩（船川層）や砂質シルト（並岡層）を厚く覆っている。なお、砂礫の部分では所々にクロスラミナがみられ、砂の部分は水平で細かい層理を示している。

第2節 近世の周辺遺跡（第2図）

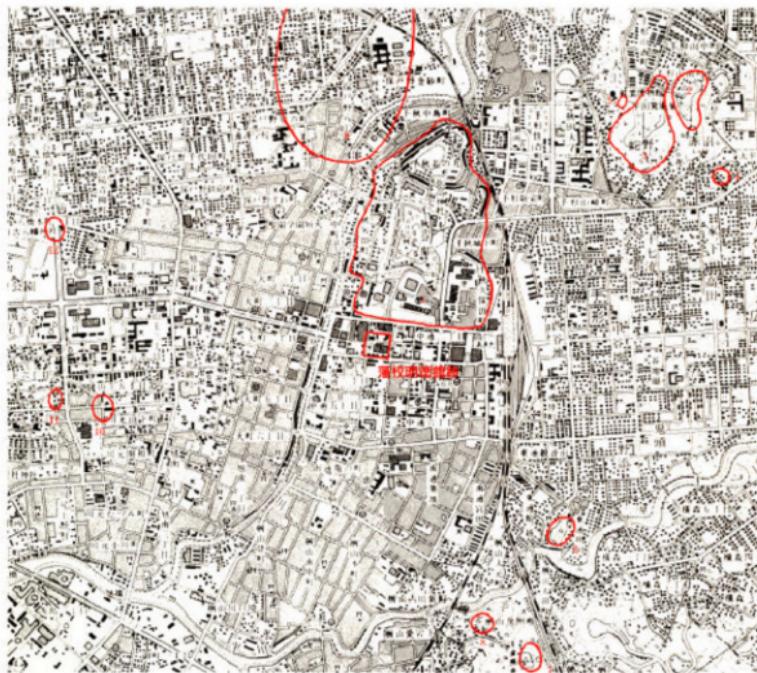
秋田市教育委員会が昭和61年から63年に実施した秋田市遺跡詳細分布調査報告書に基づいて、近世の周辺遺跡を概観してみたい。

近世の遺跡は、藩校明徳館跡の北約500mに久保田城跡（1）、北東約1.9kmに平田篤胤墓（5）、南東約1.9kmに金照寺山一ヶ森遺跡（8）、南西約1.5kmに鈎砲所跡（11）、北西約1.9kmに八橋一里塚（12）などが位置する。

久保田城跡は秋田藩主佐竹氏12代約270年間の居城で、現在の千秋公園一帯である。平成8年度に「千秋公園再整備基本計画」を策定し、平成9年度に都市公園整備事業による表門とその周辺整備によって表門復元のための発掘調査を実施し、表門の礎石と両側に取り付く土塁を調査している。そして、平成12年の表門復元に伴う工事立会時に、表門の梁間の間に柱掘り方を確認している。また、小規模な建物跡が発見され、創建期の門と考えられている。^(注3) 平田篤胤墓（国指定史跡）は国学四大人の一人である平田篤胤（1776~1843）^(注4) の墓である。金照寺山一ヶ森遺跡は昭和50年にマイクロウェーブ回線中継所新設に伴う緊急発掘調査が秋田考古学協会によって実施され、調査の結果、墳丘状盛り土や掘立柱建物跡が発見され、

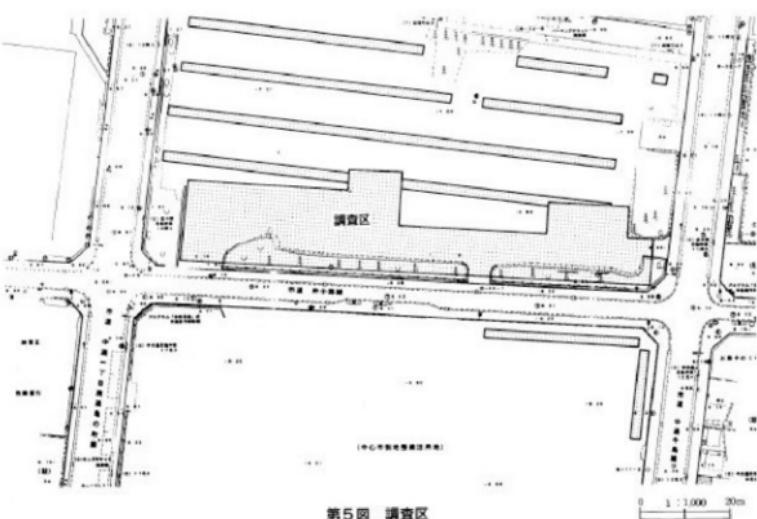


第2図 遺跡の位置



第3図 周辺の遺跡

#	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構・遺物
1	久保田城跡	秋田市千秋公園	城館	近世	表門・御講堂跡、土塁・井戸跡、磁器・陶器・瓦、金属製品
2	柳沢道路	秋田市広面字柳沢	集落跡	縄文	聖穴住跡(8軒・土坑1基、繩文土器(円筒下層a・七式)・石器・偏平打製石器・磨製石斧)
3	蛇野道路	秋田市手形字蛇野	遺物包含地・城郭	縄文・平安・中世	石器・赤褐色土器
4	桜田郡内遺跡	秋田市広面字赤沼	遺物包含地	縄文	繩文土器片(後期)
5	平田築堤墓	秋田市手形字大沢	墓地	近世	
6	香奇館	秋田市東通明田	城館	中世	帶郭・腰郭
7	七ヶ森遺跡	秋田市横山金照町	塚		塚
8	全勝寺山一ヶ森遺跡	秋田市横山金照寺	塚	近世	墳丘状盛り土・掘立柱建物跡・唐津焼・寛永通宝
9	ノゾヌ里里制遺跡	秋田市豊田勢八丁、第一ノゾヌ	里制遺跡	奈良・平安	
10	鍋子山遺跡	秋田市川元松丘町	遺物包含地	縄文	繩文土器
11	鶴瓶所跡	秋田市山王六丁目	遺物包含地	平安・近世	赤褐色土器・須恵器・鐵滓
12	八幡一里塚	秋田市八幡木町一丁目	一里塚	近世	



江戸時代初期の唐津焼の小皿、江戸時代中期の七輪、寛永通宝などが出土している。なお、墳丘状盛り土については、古墳などの遺構ではなく、性格は不明であるが江戸時代の構築と考えられている。鍛錬所跡は大鍋を鋳造する施設として、藩が安政6年（1859）に建てた所である。八橋一里塚は慶長9年（1604）に江戸日本橋を起点として主要街道に一里ごとに榮かれた塚で、八橋一里塚は日本橋から143里である。また、北側約2.3kmには秋田藩主佐竹氏の菩提寺である天徳寺（重要文化財）^{（註6）}が、北西約3.6kmには近世陶磁器・瓦・煉瓦の窯跡である寺内焼窯跡が位置している。

注1 「秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書」 秋田市教育委員会 1989年3月

注2 「久保田城跡 - 表門復元に伴う発掘調査報告書 -」 秋田市教育委員会 1997年9月

注3 「久保田城跡 - 表門復元に伴う発掘調査報告書 -」 秋田市教育委員会 2001年3月

注4 「秋田市の文化財」 秋田市教育委員会 2001年3年

注5 「秋田市金照寺山一つ森遺跡発掘調査報告書」 秋田考古学協会 1976年2月

注6 「寺内焼窯跡 - 寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査 -」 秋田市教育委員会、秋田城跡調査事務所 1991年3月

第3節 明徳館の概要と変遷

藩校明徳館が建っていた中通一丁目地区は「中通の郭」と呼ばれ、城の南側に位置する。中通の郭は侍町の中心地区で、慶長12年（1607）に町割りが開始されているが、初めて手が付けられた所である。

藩校明徳館は秋田藩9代藩主佐竹義和（1775～1815）の命によって、寛政2年（1790）に落成した藩校である。人材育成の場として藩校設立の機運が全国的に高まる中で、秋田藩でも学館創設の準備が整えられ、寛政元年（1789）に創設が布達される。同年9月に上棟式が行われ、翌2年3月に工事が竣工した秋田藩で唯一の教育機関である。初めは「学館」と呼ばれた。この場所は藩の腰が設けられていた所で、既と隣接する家臣の屋敷を引き上げて敷地とした。寛政5年（1793）に「明道館」と改称し、同7年（1795）に医学館、文政8年（1825）には和学方を併置している。そして、文化8年（1811）に組織を整えて「明徳館」と改称した。この時の学長にあたる初代祭酒は中山善茂である。天保9年（1838）には明徳館本堂と旧校舎2棟を残して焼失し、同14年（1843）に再建、今まで東側にあった正門を南側に移して敷地をほぼ正方形にしている。その後、明治2年（1869）までの約60年間「明徳館」と呼ばれていたが、翌3年（1870）には秋田藩学校、そして、翌4年（1871）には秋田県学校となった。

明徳館は、初期には全学生を一室に集めて講義するいわゆる講堂型の教場形態であった。そして、五教のほかに「儀礼」と「周禮」を加えた7科目、さらに、寛政7年（1795）には「医学局」、そして文政8年（1825）には「和学局」が設けられ、9学科別に教場が設けられた。生徒は大きく東学と西洋に分けられ、東学は講書堂に於いて15歳以下の生徒が「大學」、「中庸」、「論語」を学び、西洋は16～17歳以上の生徒でやや経史の大義に通曉する者が義理研究する教場で7局に分けられていた。なお、講書堂の南側には寄宿舎があり、郡部の学生を収容し、儒学生室を南舍、医学生収容を北舍と呼ん



（小学教科秋田縣定語より）

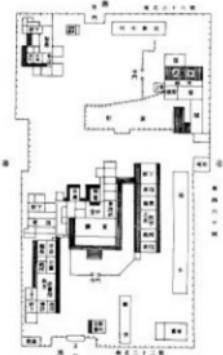
第6図 明徳館の図

だ。

その後、明治5年（1872）に秋田県本部学校となって県庁が移転したが、翌6年（1873）には建物が焼失している。この年に上中城町に伝習学校（師範学校の前身）を創立する。そして、翌7年（1874）に伝習学校と洋学校を合併して秋田県太平学校を新築するが、明治10年（1877）に全焼している。翌11年（1878）に再建し、同年に秋田県師範学校、そして、秋田師範学校に改称しているが、同14年（1881）に焼失している。同16年（1883）に再建し、その後、秋田女子師範学校を合併し、秋田県尋常師範学校、秋田県師範学校、秋田女子師範学校、秋田師範学校女子部となり、昭和21年に秋田大学を手形学園町に開学した。そして、昭和36年に秋田県立児童会館（福祉会館・婦人会館を共有）を新築し、平成2年に解体されて現在に至っている。

藩校明徳館関係年表

年号	西暦	内 容
寛政元年	1789	学館の創設を布達
寛政2年	1790	学館を開校
寛政5年	1793	学館を明道館と改称
文化8年	1811	明道館を明徳館と改称
天保9年	1838	明徳館本堂と旧校舎2棟を残して焼失
天保14年	1843	明徳館を再建（正面を南面とし、敷地をほぼ正方形とする）
明治3年	1870	明徳館が秋田藩学校となる
明治4年	1871	秋田県学校となる
明治5年	1872	秋田本部学校となり、県庁が移転
明治6年	1873	建物焼失
明治6年	1873	上中城町に伝習学校を創立
明治7年	1874	伝習学校と洋学校を合併して秋田県太平学校を新築
明治10年	1877	秋田県太平学校全焼
明治11年	1878	秋田県太平学校再建
々	+	秋田県師範学校と改称
々	+	秋田師範学校と改称
明治14年	1881	秋田師範学校全焼
明治16年	1883	秋田師範学校再建
明治19年	1886	秋田女子師範学校を合併
々	+	秋田県尋常師範学校と改称
明治31年	1898	秋田県師範学校と改称
明治32年	1899	附属小学校新築
明治40年	1907	本館・女子寄宿舎が全焼
明治42年	1909	秋田県師範学校の男女を分離して、秋田県師範学校を手形に移転
明治43年	1910	秋田県女子師範学校を新築
昭和2年	1927	秋田県女子師範学校焼失
昭和3年	1928	秋田県女子師範学校焼失
昭和18年	1943	秋田師範学校となる
昭和24年	1949	秋田大学を手形学園町に開学
昭和36年	1961	県立児童会館（福祉会館・婦人会館共有）を新築
昭和43年	1968	秋田赤十字病院新築
昭和49年	1974	秋田県交通災害センター新築
平成2年	1990	県立児童会館を解体
平成11年	1999	秋田赤十字病院解体



明徳館平面図
(千秋文庫蔵、加藤民夫「明徳館の研究」より)



明徳館平面図
(千秋文庫蔵、加藤民夫「明徳館の研究」より)

第7図 明徳館の変遷

第4節 久保田城の概要

久保田城は、秋田藩主佐竹氏12代約270年間の居城で、現在の千秋公園一帯である。

慶長7年（1602）に常陸国水戸城（茨城県水戸市）から秋田に転封された佐竹義宣（1570～1633）は、当初旧領主秋田実季（1576～1659）の居城であった土崎湊城に入城した。しかし、湊城は狭小の平城であることから新城を築くこととなった。そして、仁別川（旭川）を西方へ移すことを前提に久保田神明山を選定し、転封の翌年である慶長8年（1603）5月に着工した。城は未完成であったが約1年後の同9年（1604）8月28日には湊城を破却して新城へ移り、それ以降も継続して城の整備を図った。

久保田城は、本丸及び二の丸・三の丸・北の丸からなっている。本丸は台地の最も高台に位置し、城の中核で藩主の住居である本丸御殿や政務所等が置かれていた。二の丸は本丸の正面としての玄関口にあたり、諸役所（境目方役所・勘定方役所等）や金蔵・腰等が置かれていた。三の丸は二の丸の北側に位置する現在の彌高神社後方で、北の丸の間の細長い高台である。二の丸の東部を上中城、南部を下中城、北東部を山の手と言い、家老級の重臣の屋敷等が置かれていた。また、山の手に続く台地は、佐竹氏の氏神である八幡宮の境内であり、八幡山と呼ばれていた。北の丸は城域の北端に位置し、二の丸から長橋を渡って北へ進んだ所で、初戸や大木屋等が置かれていた。

久保田城下の町割りについては、侍町（内町）と町人町（外町）を画然と分離し、町人町の外側に寺町を配して整備した。この中で、侍町の町割りは慶長12年（1607）に開始され、3回にわたって整備が行われている。

久保田城は秋田藩主佐竹氏の居城であったが、明治4年の廃藩置県後に陸軍省の所管となった。そして、同23年に旧藩主の佐竹氏に払下げとなり、翌24年に秋田市が借り上げて公園とし、同28年に県に移管されて整備が行われた。その後、昭和28年に再び秋田市に移管され、現在は千秋公園として開放され、市民の憩いの場となっている。

第3章 調査の記録

第1節 基本層序（第8図）

調査区の基本層序は、第Ⅰ層 暗褐色土に大小礫が混入、第Ⅱ層 暗褐色土に明黄褐色粘質土が混入、第Ⅲ層 明黄褐色粘質土、第Ⅳ層 極暗褐色土に褐色土が混入、第Ⅴ層 黒褐色スクモ層、第Ⅵ層 青灰色粘土で、調査区中央部では一部に第Ⅲ下層として褐色土が堆積している。これらの層は、第Ⅰ層が表土、第Ⅱ層から第Ⅴ層が造成土、第Ⅵ層が地山で、第Ⅶ層には火災の痕跡が認められる。なお、調査区西側には第Ⅳ層及び第Ⅴ層は確認されず、第Ⅳ層が地山粘土層となっている。

第2節 遺構と遺物

遺構は、第Ⅱ層面から建物跡（1号）、第Ⅲ層面から建物跡（2～5号）柱列（1～4号）、溝跡（1～7号）、土坑（1、2号）、性格不明遺構（1号）、第Ⅲ下層から柱列（5号）、第Ⅳ層から建物跡（6、7号）、柱列（6～9号）、井戸跡（1～5号）、溝跡（8～10号）、土坑（3～18号）、性格不明遺構（2～3号）、柱穴等が発見されている。遺物は、陶磁器・土器・土製品・ガラス・瓦・石製品・金属製品・錢貨・木製品等が出土している。

1 建物跡

1号建物跡（第9図）

調査区中央部を中心に第Ⅱ層面で発見したが、部分的に搅乱を受けている。

南側は調査区外へ伸びていてことから全体を把握することはできないが、確認した範囲では東西約60m（柱間：1.8m、一部1.3m）、南北約6m（柱間：1.8m）の東西棟の礎石柱建物跡である。主軸方向は桁行が北に対して東へ12度振れている。礎石は31基確認され、長軸35～60cm、短軸30～50cm、厚さ20～30cmの自然礫で、上面がほぼ平坦なものである。礎石と考えられる根石の掘り方が残っているものが4基確認され、長軸40～60cm、短軸40cmの円形及び梢円形を呈し、確認面からの深さは10～15cmである。また、礎石を据えるために布振りをして根石を詰めた溝状の掘り方も認められ、幅50～90cm、確認面からの深さは10cmである。そして、南端には東西に長さ約67m、幅40～70cm、厚さ65cmの布基礎が発見され、南側調査区外へ伸びている。

2号建物跡（第9図）

調査区中央部から東側の第Ⅲ層面で発見したが、北側は搅乱を受けている。

全体を把握することはできないが、確認した範囲では桁行10間（柱間：1.9m、一部3.4m）の東西棟の礎石柱建物跡と考えられる。主軸方向は桁行が北に対して東へ15度振れている。礎石は11基確認され、長軸35～60cm、短軸30～40cm、厚さ10～30cmの自然礫で、上面がほぼ平坦なものである。

I
II
III
III下
IV
V

第8図 基本土層柱状図

出土遺物

陶磁器（第26図1、図版14）

1はNo.11柱掘り方埋土出土である。磁器染付の香炉で、体部に桐文、頸部に草花文を染付けている。在地の寺内窯産の可能性がある。

3号建物跡（第10図）

調査区西側の第Ⅲ層面で発見したが、南西隅が搅乱を受けている。

桁行3間（2.2+2.2+2.2m）、梁間1間（0.9m）の東西棟の礎石柱建物跡である。主軸方向は桁行が北に対して東へ14度振れている。礎石は7基確認され、長軸40~60cm、短軸25~50cm、厚さ15~20cmの自然礎で、上面はほぼ平坦なものである。

3号柱列と重複し、これよりも古い。

4号建物跡（第11図）

調査区中央部を中心に第Ⅲ層面で発見した。

南側は調査区外へ伸びてることから全体を把握することはできないが、確認した範囲では桁行25間（柱間：2.1m）、梁間2間（0.8+2.1m）の東西棟の掘立柱建物跡で、中央部より東側及び南側が掘立柱、西側が礎石柱となっている。主軸方向は桁行が北に対して東へ15度振れている。南側の掘立柱の柱掘り方は2列確認され、北側の柱列は桁行2間で、長軸1.4~1.5m、短軸0.8~1.2mの隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは55~70cmである。南側の柱列は長軸0.9~1m、短軸0.8~0.9mの梢円形及び隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは65~90cmである。一辺20cmの角柱が12本残存し、柱の底部には長軸55~75cm、短軸30~45cm、厚さ15~20cmの板状に加工された礎板が据えられている。礎板の上には高さを調整したと考えられる平板が置かれているものもある。礎板にはぞ穴が認められるものや、角を丸く加工しているものがあり、二次的に転用されている可能性が考えられる。西側の礎石柱の礎石は13基確認され、長軸35~55cm、短軸30~45cmの梢円形を呈し、厚さ15~30cmの自然礎で、上面はほぼ平坦なものである。

2号柱列と重複し、これよりも古い。

出土遺物

陶磁器（第26図2、図版14）

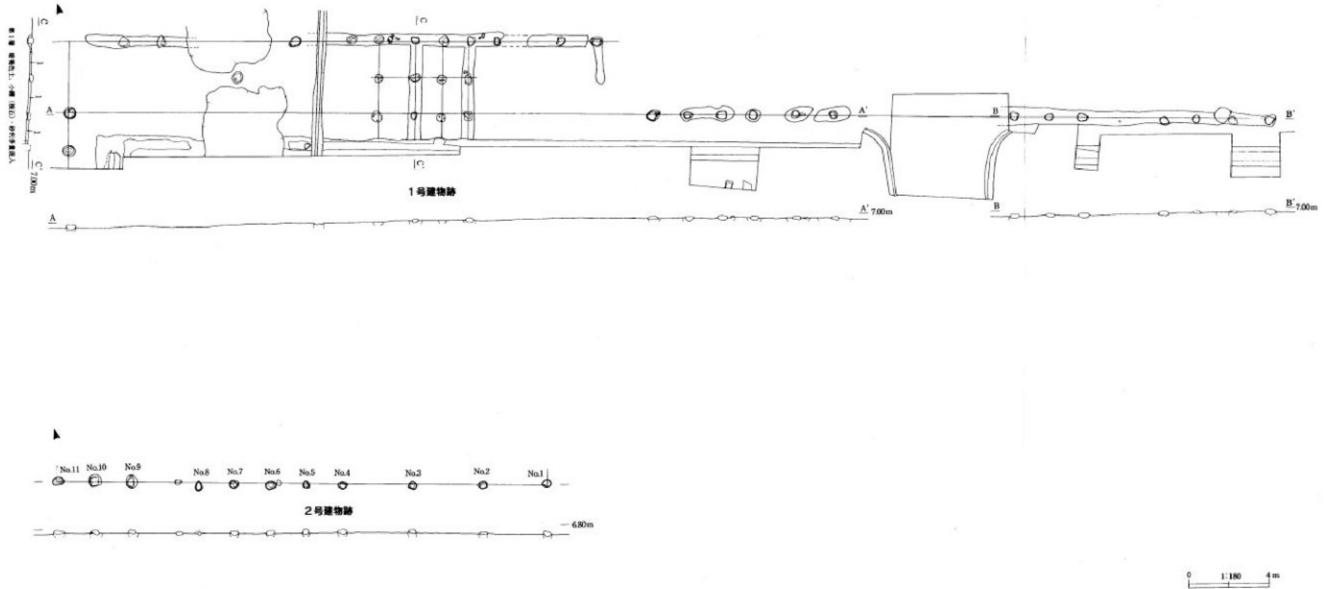
2はNo.10柱掘り方埋土出土である。肥前系陶器（吉津系）の灰釉折縁皿である。釉は灰黄褐色で、高台付近は露胎である。

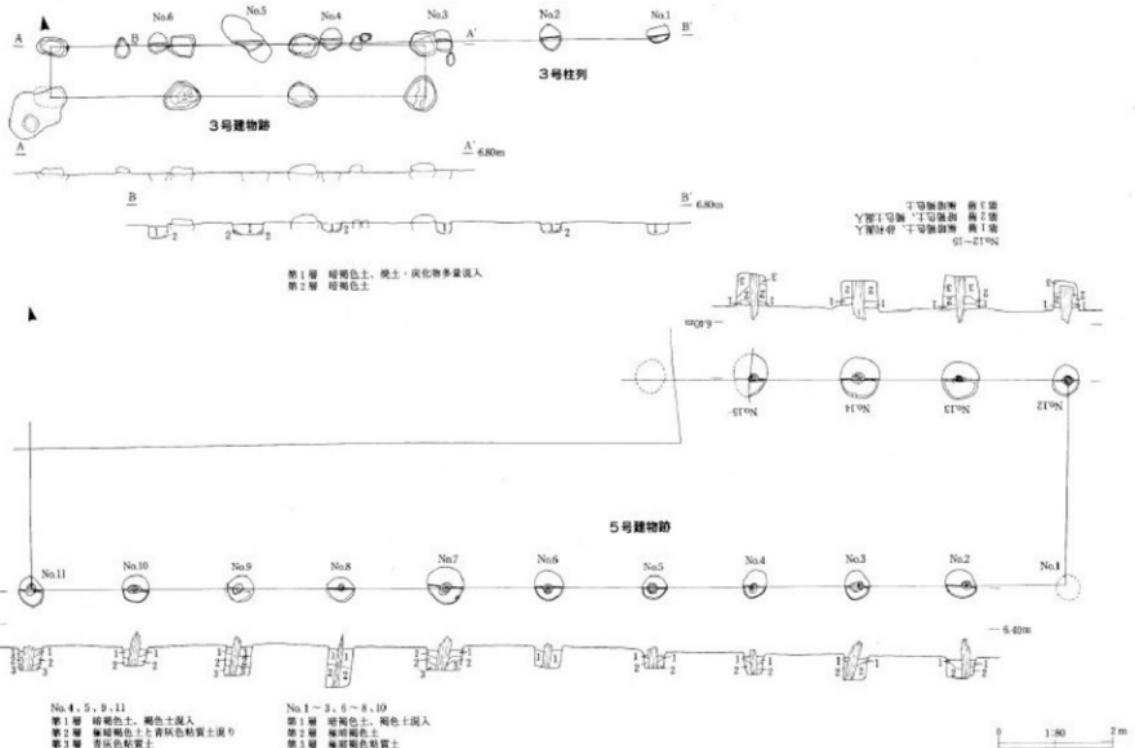
5号建物跡（第10図）

調査区東側の第Ⅲ層面で発見したが、北西隅及び南東隅は搅乱を受けている。

桁行10間（柱間：1.8m）、梁間1間（3.6m）の東西棟の掘立柱建物跡である。主軸方向は桁行が北に対して東へ15度振れている。柱掘り方は長軸45~65cm、短軸45~65cmの円形及び梢円形を呈し、確認面からの深さは20~65cmである。径10~20cmの丸柱が14本残存している。

4号柱列、1号土坑、1号性格不明遺構と重複し、1号土坑、1号性格不明遺構よりも古く、4号柱列との新旧関係は確認されない。





第10図 建物路・柱列

出土遺物

陶磁器（第26図3、図版14）

3はNo.3柱掘り方埋土出土である。肥前系磁器染付小瓶で、草文を染付けている。

6号建物跡（第11図）

調査区中央部から東側にかけて発見したが、南側及び東側は調査区外となっている。

確認した範囲では桁行23間（柱間：2.0m）、梁間2間（1.8m）以上の東西棟の掘立柱建物跡である。主軸方向は桁行が北に対して東へ15度振れている。柱掘り方は長軸60~90cm、短軸45~75cmの円形及び楕円形を呈し、確認面からの深さは10~30cmである。全体的に削平を受けていることから浅く、柱は抜き取られている。底部には縦30~60cm、横20cm、厚さ10cmの板状に加工された礎板が据えられている。

5号井戸跡、7号土坑と重複し、7号土坑よりも古く、5号井戸跡よりも新しい。

7号建物跡（第12図）

調査区西側の地山面で発見したが、北東側は擾乱を受けている。

桁行3間（1.8+1.8+1.8m）、梁間2間（1.8+1.8m）の南北棟の掘立柱建物跡である。主軸方向は桁行が北に対して東へ15度振れている。柱掘り方は長軸50~85cm、短軸50~70cmの円形及び楕円形を呈し、確認面からの深さは35~60cmである。北東側と南東側の隅柱は抜き取られているが、その他の隅柱は一辺14cmの角柱が使用されており、それ以外の柱は径18cmの丸柱である。また、全ての柱に焼痕が認められる。

5号土坑、6号柱列と重複し、5号土坑より新しく、6号柱列との新旧関係は不明である。

2 柱列

1号柱列（第13図）

調査区東側の第Ⅲ層面で発見した。

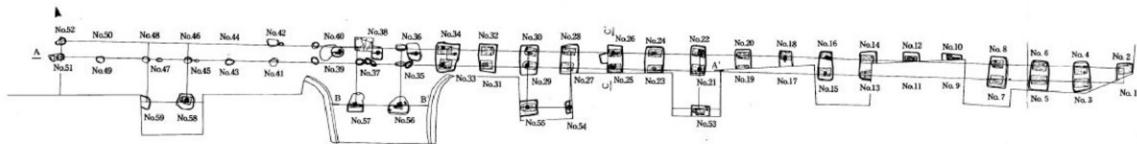
6基の掘り方からなる東西方向の柱列である。方位は北に対して西へ75度振れている。柱間隔は全て1.8mである。柱掘り方は長軸50~70cm、短軸40~50cmの円形及び楕円形を呈し、確認面からの深さは35~40cmである。径15~20cmの丸柱が5本残存し、底部には礎石が据えられている。

2号柱列（第13図）

調査区中央部の第Ⅲ層面で発見した。

4基の掘り方からなる東西方向の柱列である。方位は北に対して西へ76度振れている。柱間隔は全て1.9mである。柱掘り方は長軸60~85cm、短軸50~65cmの楕円形及び隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは25~35cmである。径20~25cmの丸柱が残存し、底部には礎石が据えられている。

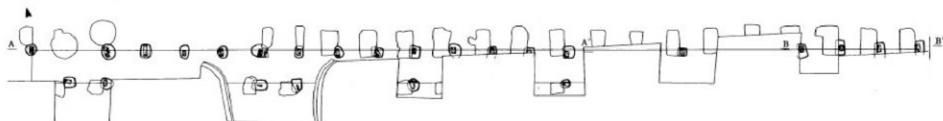
4号建物跡と重複し、これよりも新しい。



4号建物跡



0 1:60 4m

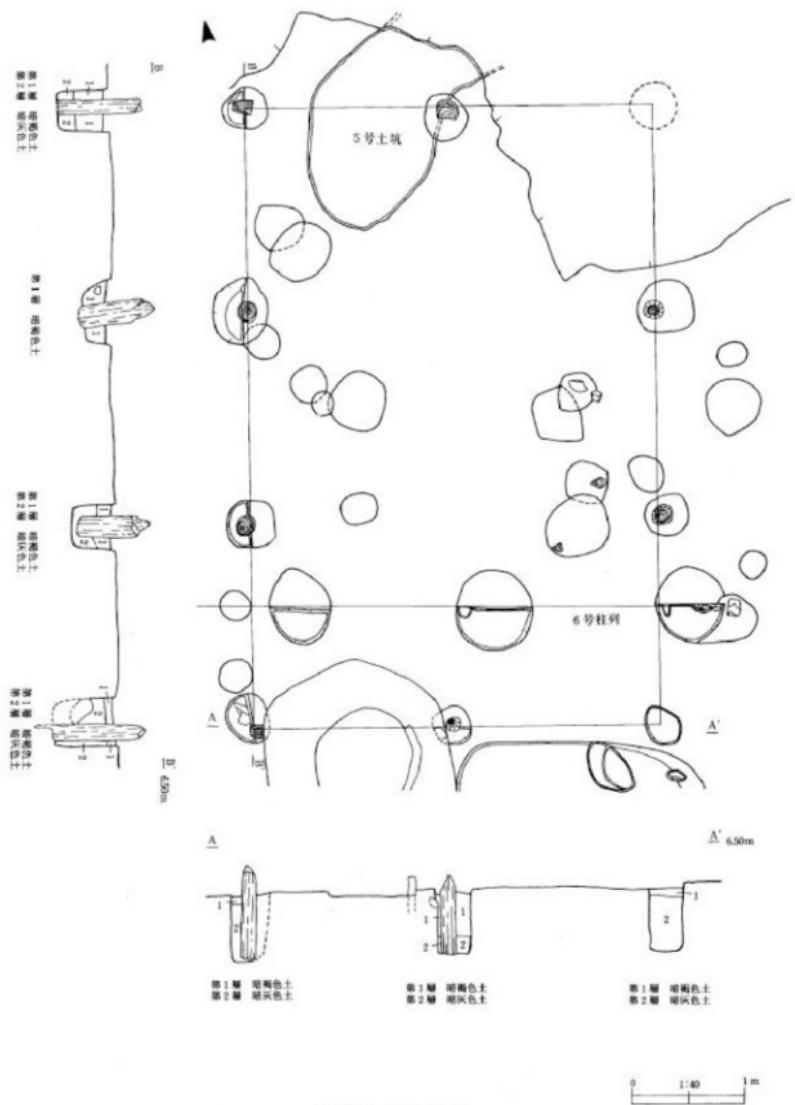


6号建物跡



0 1:60 4m

第11図 建物跡



第12図 7号建物跡

3号柱列（第10図）

調査区西側の第Ⅲ層面で発見した。

6基の掘り方からなる東西方向の柱列である。方位は北に対して西へ77度振れている。柱間隔は1.5mと1.9mである。柱掘り方は長軸35~75cm、短軸30~35cmの円形及び楕円形を呈し、確認面からの深さは10~20cmである。柱は抜き取られている。

3号建物跡と重複し、これよりも古い。

4号柱列（第13図）

調査区東側の第Ⅲ層面で発見した。

10基の掘り方からなる東西方向の柱列である。方位は北に対して西へ76度振れている。柱間隔は全て1.8mである。柱掘り方は長軸45~50cm、短軸30~45cmの円形及び楕円形を呈し、確認面からの深さは15~35cmである。径15cmの丸柱が6本残存し、柱痕跡が認められるものも1基ある。4基の掘り方底部には礎石が据えられている。

1号土坑と重複し、これよりも古い。

5号柱列（第13図）

調査区中央部の第Ⅴ層下層で発見した。

11基の掘り方からなる東西方向の柱列である。方位は北に対して西へ75度振れている。柱間隔は全て1.9mである。柱掘り方は長軸95~1.2m、短軸55~75cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは60~90cmである。径15cmと20cmの丸柱が2本残存し、底部には縦35~55cm、横20cmで上面が平坦、下面が半円形に加工された礎板が据えられている。

5号井戸跡と重複し、これよりも新しい。

出土遺物

陶磁器（第26図4~7、図版14）

4はNo.3柱掘り方埋土、5はNo.4柱掘り方埋土、6、7はNo.6柱掘り方埋土出土である。4は釉下彩を施す磁器碗である。5は肥前系磁器碗破片で、草花文を型紙擠りしている。6は肥前系陶器（唐津系）灰釉溝縁皿で、釉は灰白色で、砂目積み痕がある。7は古代の須恵器蓋である。

6号柱列（第14図）

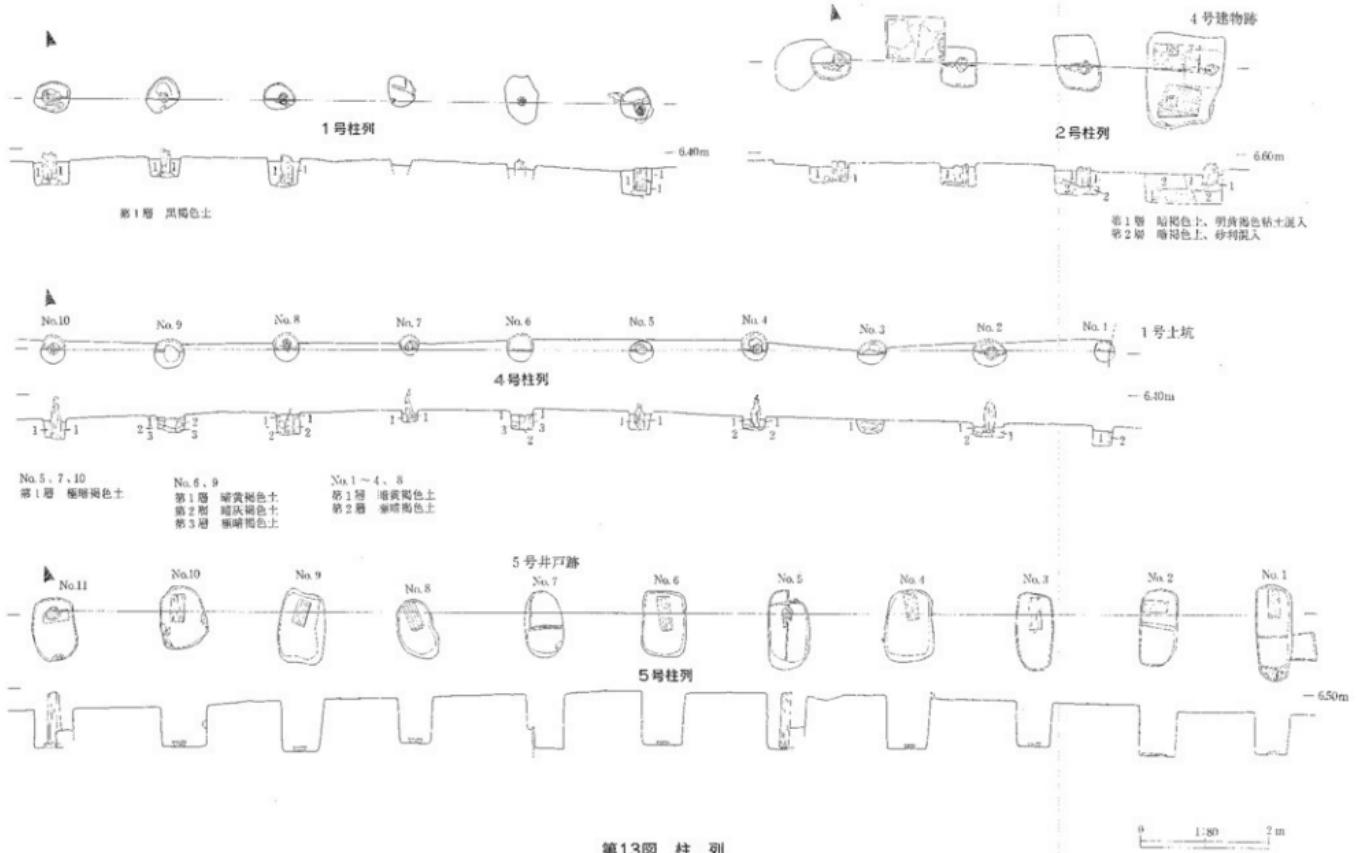
調査区西側の地山面で発見した。

4基の掘り方からなる東西方向の柱列である。方位は北に対して西へ75度振れている。柱間隔は全て1.8mである。柱掘り方は長軸55~60cm、短軸70~75cmの円形及び楕円形を呈し、確認面からの深さは20~40cmである。柱は抜き取られている。

7号建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

7号柱列（第14図）

調査区西側の地山面で発見した。



10基の掘り方からなる東西方向の柱列で、全体に削平を受けて浅くなっている。方位は北に対して西へ75度振れている。柱間隔は全て1.9mである。柱掘り方は長軸50~70cm、短軸40~60cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは10~40cmである。柱は抜き取られている。

9号柱列と重複し、これよりも新しい。

出土遺物

銭貨（第85図1、図版51）

1は柱掘り方埋土出土である。銅銭の寛永通寶で、銭文の書体等から古寛永（初鑄1636年）の分類に該当する。

8号柱列（第14図）

調査区西側の地山面で発見した。

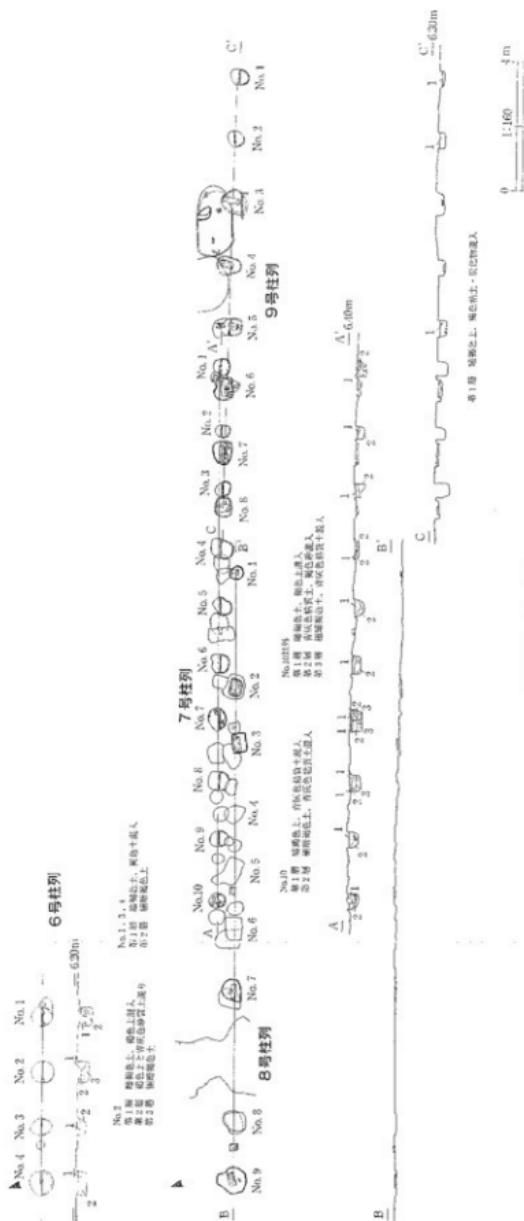
9基の掘り方からなる東西方向の柱列で、全体に削平を受けて浅くなっている。一部擾乱によって確認されない掘り方もある。方位は北に対して西へ75度振れている。柱間隔は確認した範囲で1.9mである。柱掘り方は長軸45~90cm、短軸40~85cmの円形及び楕円形を呈し、確認面からの深さは深いものでも6cmである。柱は抜き取られているが、柱の底部には縦20~45cm、横10~20cmで上面が平坦に下面が半円形及び平坦に加工された礎板が5基据えられている。

9号柱列、1号井戸跡、8号溝跡、10号土坑と重複し、9号柱列、8号溝跡よりも古く、1号井戸跡、10号土坑よりも新しい。

出土遺物

陶器（第26図8、図版14）

8は柱掘り方埋土出土である。肥前系陶器（唐津系）灰釉皿で、胎土目積み痕がある。底部高台内側に「東」の墨書きがある。



第14図 柱列

9号柱列（第14図）

調査区西側の地山面で発見した。

8基の掘り方からなる東西方向の柱列で、全体に削平を受けて浅くなっている。方位は北に対して西へ72度振れている。柱間隔は全て1.9mである。柱掘り方は長軸50~80cm、短軸50~70cmの円形及び橢円形を呈し、確認面からの深さは10~25cmである。一辺10cmの角柱が1本残存し、その他の柱は抜き取られている。柱の底部には継40~70cm、横20~40cmで上面が平坦、下面が半円形及び平坦に加工された板が6基据えられている。

7、8号柱列、8号溝跡、10号土坑と重複し、7号柱列、8号溝跡よりも古く、8号柱列、10号土坑よりも新しい。

3 井戸跡

1号井戸跡（第15図）

調査区西側の地山面で発見した。

掘り方平面形は一辺1.7mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは95cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。掘り方の中央部には東西1.2m、南北1.1mの隅柱横棧型の井側を組んでいるが、上部はかなり腐食している。井側の横棧は確認面から約50cm下に1段認められる。隅柱は一辺約10cmの角柱で、底部には礎石を据えている。そして、これらの外側には幅20~30cm、長さ90~100cmの縦板を一辺につき3~6枚組んでいる。

8号柱列と重複し、これよりも古い。

出土遺物

陶磁器（第26図9~11、図版14）

全て埋土出土である。9は肥前系磁器染付碗で、山水文を染付けている。10は肥前系陶器（唐津系）灰釉溝縁皿の破片である。11は素焼きの陶器皿で、底部回転糸切り無調整で灯明皿として使用されている。

木製品（第37図1~3、図版53）

全て埋土出土である。1、2は人形である。いずれも断面形が長方形で、立体的に加工され、上部に括りが施されている。2は下方が欠損している。3は板杓子と考えられる。身の部分が半円状に加工され、柄の下方が欠損している。

2号井戸跡（第16図）

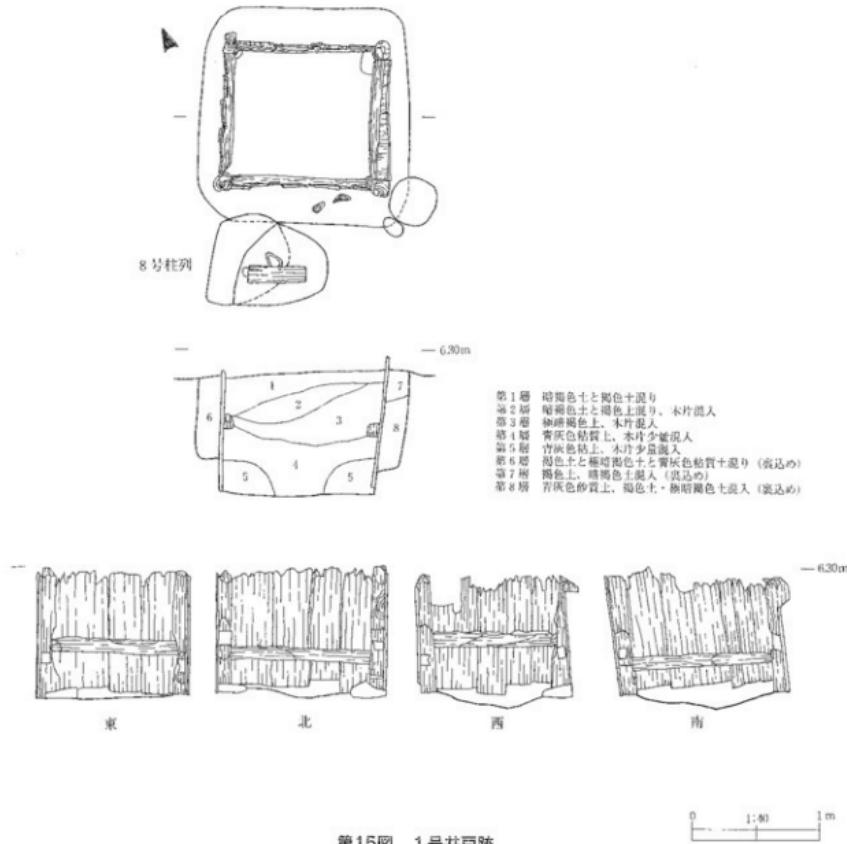
調査区西側の地山面で発見した。

掘り方平面形は径約2.1mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは1.8mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。掘り方の南寄りには径75cmのほぼ円形の掘り方があることから、この部分に円形の井側を組んでいたと考えられる。そして、壁はほぼ垂直に立ち上がっていることから、井側は桶か筒状のものと考えられる。

出土遺物

陶磁器（第26図12、13、図版14）

いずれも埋土出土である。12は瀬戸美濃系陶器瓶類の体部破片で、外側に鉄輪が掛かる。欠損している



第15図 1号井戸跡

が、耳などの突起物が付く部分と考えられる。13は古代の須恵器壺の体部破片で、外面には平行タタキ痕、内面には同心円状の當て具痕が認められる。

木製品 (第37図 4 ~ 6、図版53)

全て埋土出土である。4、5は箸であるが、いずれも折れている。5は両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。断面形は円形に近い形である。6は板杓子と考えられるが、羽子板に近い形態である。板状で、身の部分が長方形に加工されているが、半分が欠損している。

3号井戸跡 (第17図)

調査区西側の地山面で発見した。

掘り方平面形は、長軸3.1m、短軸1.9mの橢円形を呈し、確認面からの深さは2.9mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面の井側内には径20cm前後の自然礫を敷いてある。掘り方の中央部には一辺90cmの隅柱

横桟型の井側を組んでいるが、上部はかなり腐食している。横桟は約60cm間隔で5段残存している。隅柱は径約8cmの丸柱で、底部には1箇所に礎石を据えている。そして、これらの外側には幅20~50cm、長さ1m~1.8mの縦板を一辺につき4~5枚を2段に組んでいる。

出土遺物

陶磁器（第26、27図15~18、図版14）

全ては埋土出土である。15は肥前系磁器染付丸皿（五寸皿）で、牡丹唐草文を染付けている。16は肥前系磁器染付碗で、裏底に「宣明年製」銘がある。17は磁器染付火人で、西洋の酸化コバルトを用い方形枠に野菜等を染付けている。18は肥前系陶器火人で、鉄釉と刷毛目装飾を施している。

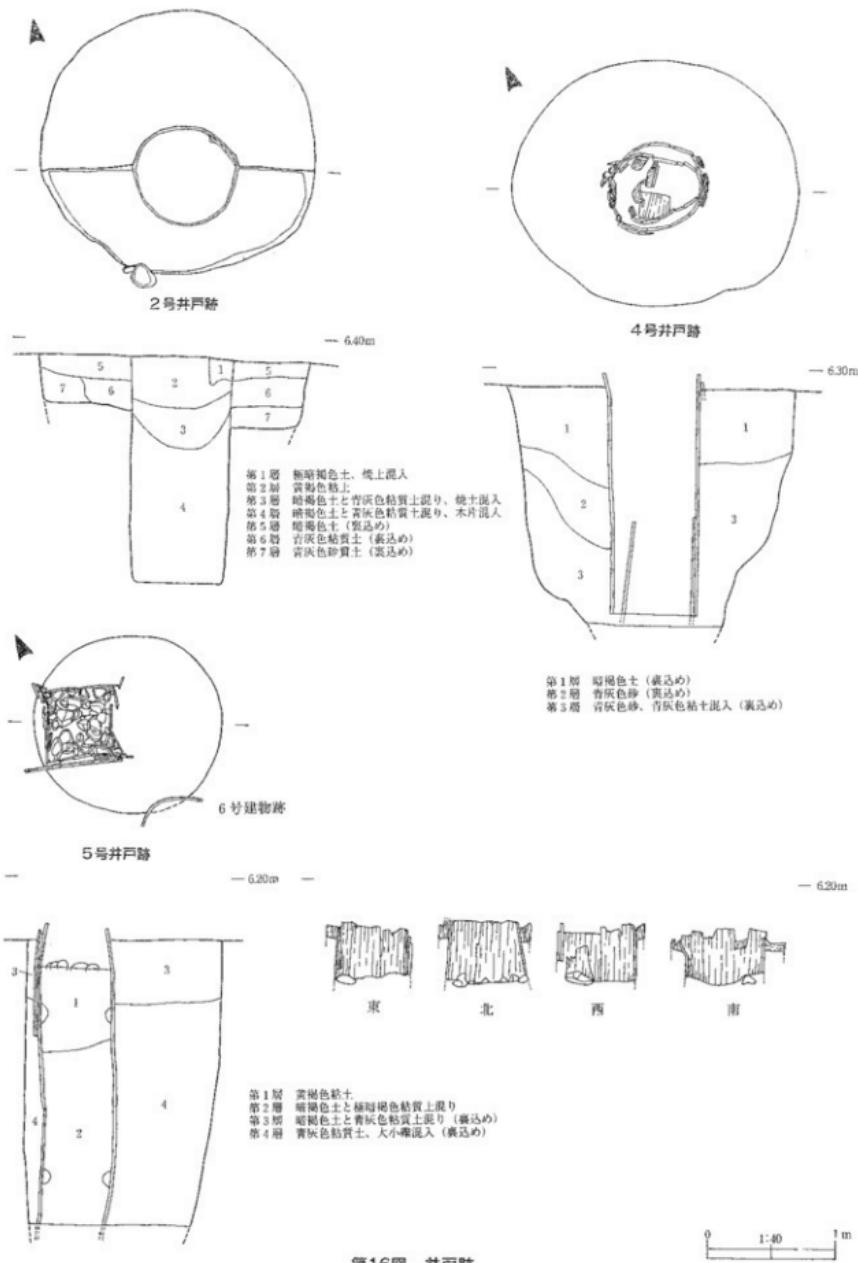
木製品（第37~39図7~36、図版53~55）

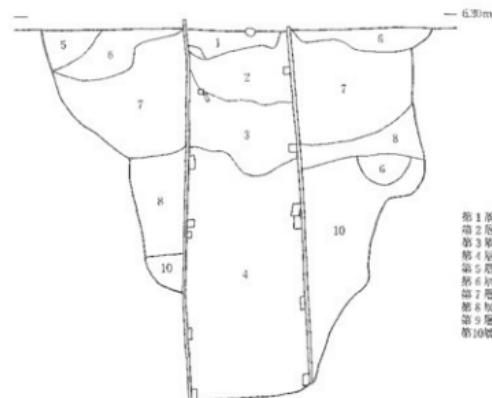
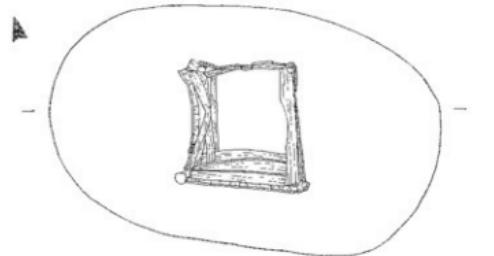
全て埋土出土である。7は木筒である。表面に「□七□□□□□八□」、裏面に「川□□」が認められる。板状で先端部が尖り上部に孔が穿たれている。8~17は箸である。箸はまとめて投棄したと考えられ、折れているものも数えると約100本程発見されているが、代表的なものを抽出した。両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。長さ・太さには若干のばらつきはあるもののほぼ一定と考えられる。18は板杓子である。板状で、身の部分が半円状に加工されている。19は蓋のつまみである。板材の中央部が山形状に加工され、両端に2本と中央に1本の釘で固定するものである。20は蓋である。中央部に小孔と木釘、そして変色部分が認められることから、つまみが付いていたと考えられる。21は曲物である。側面に柄を差し込んだ孔が認められることから柄杓と考えられる。底板はない。22は蓋である。中央部に小孔と釘、そして変色部分が認められることから、つまみが付いていたと考えられる。下方には黒漆が塗られている。23~26は容器底板である。23は下面よりも上面が小さく作られている。24は小型であることから柄杓の底板と考えられる。25、26の下面には3箇所に長方形の削りが認められ、木片状の板を側面から打ち込んで側板と固定したと考えられる。また、中央部断面に小孔と木釘がめられることから、2枚の材を合わせて加工したものである。27は板杓子である。板状の材で、身の部分が方形に加工されている。28は戸の把手である。比較的大型の戸に付くものと考えられ、段状に加工され、側面に孔が穿たれている。29は用途不明木製品である。円柱の材の中程に刻みを入れ、上面がくぼんでいるものである。30~36は串である。30、31の中央部には孔が穿たれており、両端が尖るものである。断面形は長方形であるが、31の両端は丸味がある。32、33は先端部が尖るものである。34~36は雑に加工されている。35の中央部には孔が穿たれ、木釘が残っている。

4号井戸跡（第16図）

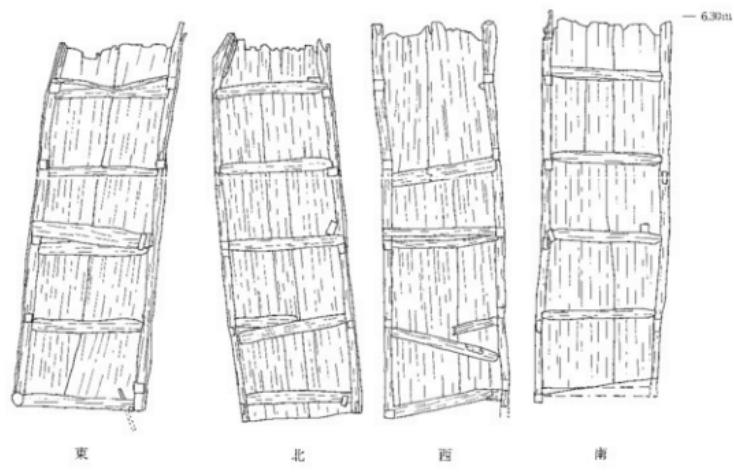
調査区西側の地山面で発見した。

掘り方平面形は長軸2.2m、短軸1.9mの椭円形を呈し、確認面からの深さは2m以上である。壁は緩やかに立ち上がるが、井戸が深いことから底面を確認することができなかった。掘り方の中央部には径70cmの円形で桶状をなす井側が据えられている。井側は幅10~15cm、長さ1.9mの縦板を円形に組んだ桶状のもので、さらにその外側に添板を組んで補強している。そして、井側の内側には確認面から1.1mの所に、幅10~15cm、長さ75cm以上の縦板を円形に組んだ井筒が据えられており、桶状をなすものと考えられる。埋土下層には釣瓶が横になった状態で出土している。





第1層
褐色砂質土、小埋琵人
黒暗褐色土。
第3層
黒暗褐色土、木片混入
第4層
青灰色砂質土、木片多量混入
第5層
黒暗褐色土（窓込め）
黒褐色砂質土（窓込め）
第7層
黒褐色砂質土（窓込め）
第8層
黒褐色砂質土（窓込め）
第9層
青灰色粘土、青灰色粘土混入（窓込め）
第10層
青灰色粘土、青灰色粘土混入（窓込め）



第17図 3号井戸跡

0 1:40 1m

出土遺物

陶磁器（第26図14、図版14）

14は井戸底面付近の埋土出土である。肥前系磁器染付丸皿（小皿）で、ザクロ折枝文と捻花文を染付けている。

木製品（第39図37～43、図版55）

全て埋土出土であるが、43は埋土下層出土である。37～41は箸である。他にも数本発見されているが、代表的なものを抽出した。全て破損であるが、両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。断面形は円形に近い形である。42は板状木製品である。中央部に孔が穿たれ、破損品であるが、両端が尖る形態と考えられる。43は釣瓶である。方形に作られ、底面よりも上面が大きい形態である。上面に棒状の把手が付き、把手中央部が一回り細く加工されている。

5号井戸跡（第16図）

調査区中央部の第Ⅳ層面で発見した。

掘り方平面形は径約1.4mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは2.3m以上である。壁は東側は緩やかに、西側はほぼ垂直に立ち上がる。井戸が深いことから底面は確認できなかった。掘り方の西側には一辺60cmの隅丸方形型の井側を組んでいるが、上部はかなり腐食している。井側は隅柱を組まないもので、2段の横棟と欄板で構成されている。横棟は上部が約60cm、下部が1.1mで2段認められる。そして、幅20～50cm、長さ約1.4mの縦板を一辺につき2枚を2段に組み、さらにその外側には添板を、上部には横板をあてて補強している。本井戸は廃棄されたと考えられ、埋土上面まで径10～15cmの礫が詰まっていた。

6号建物跡と重複し、これよりも古く。

出土遺物

陶磁器（第27図19、図版14）

19は埋土出土である。肥前系磁器白磁丸皿（五寸皿）で、蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台無軸である。

出土遺物

木製品（第40図44～52、図版56）

全て埋土出土である。44～51は箸である。ほとんどが両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。断面形は円形に近い形である。52は棒状木製品である。先端部が尖るものであるが誰に加工され、上部が欠損している。

4 溝跡

1号溝跡（第18図）

調査区東端から西側の第Ⅲ層面で発見したが、東側は調査区外へ伸びている。

長さが70m以上の東西方向に伸びる溝跡で、東側が深くなっている。1回の作り替えが確認され、当初の幅は70～80cm、深さ約10cmで、断面形は皿状を呈する広く浅い溝である、作り替え後の幅は20～30cm、深さ約30cmで、断面形は逆台形状を呈する。側壁には板材が残存しており、内側に杭を打ち込んで補強している。

4～6号溝跡と重複し、4号溝跡よりも古く、5号溝跡よりも新しいが、6号溝跡との新旧関係は不明である。

出土遺物

陶磁器（第27～29図20～50、図版14～16）

全て埋土出土である。

〔磁器〕22、25、39は瀬戸美濃系磁器、20、21、23、24、26～38は肥前系磁器である。

20、21、23～28は磁器染付けである。20は端反型の皿で、内側面に山水文、裏文様は松葉文を染付けている。22は内磁方形皿で、型打成形により文様を陽刻している。21は丸皿（小皿）で、見込みに手描き五弁花文、内側面に紅葉文を染付けている。

23、24は小杯である。23は山形の草文を型紙摺りし、24は芭蕉文で裏底にくずれた「宣明年製」銘がある。25は端反形の小碗で、仙芝文を描く。26も小碗で、花弁文様を描く。27～29は丸碗である。27は水翠文に四方捺文、28は草花文、29は一重綱目文を染付けている。26は底裏にくずれた「大明年製」銘がある。30は青磁染付の丸碗で、外側が青磁、見込みにコンニヤク印判の五弁花文を染付けている。31は青磁の丸碗で口紅を施す。32は白磁小杯で口紅を施す。33は色絵の小碗であるが、上絵はほとんど剥落している。裏底は二重圓線内に「大明萬曆年製」銘がある。

34は染付の油壺と考えられる。35は瓶で、草花文を染付けている。36は白磁合子である。37は色絵で獅子型の香炉の脚部と考えられる。

38は染付火入の破片で、線描きの蛸唐草文を染付けている。39は染付櫻水入で、草花文を鉄釉で型紙摺りしている。

〔陶器〕40～47、49は肥前系陶器（唐津系）、48是在地の寺内窯産で、それ以外は产地不明である。

40は黄白色を呈する灰釉皿で砂目積み痕があり、疊付以外全面施釉している。41、43は灰釉折縁皿である。41は釉が晴緑色を呈し、43は透明に近い釉で蛇ノ目剥ぎを施す。42は丸皿で、白化粧土により刷毛目文を描き、透明釉を掛けて蛇ノ目釉剥ぎを施す。41～43の高台付近は露胎である。

44、45は鉢である。44は内外に透明釉を掛け内側面は二段にわたり白化粧土により刷毛目文を描き、蛇ノ目釉剥ぎした部分に鉄漿を塗って。45は内側面に鉄釉と銅様釉を掛け分けし、蛇ノ目釉剥ぎを施している。外側は透明釉で高台付近は露胎である。

46は刷毛目文の碗であり、白化粧土で刷毛目文を内外に描く。47は鉄釉掛けの壺である。48は壺底部で、外面に濃淡2種類の鉄釉を重ね掛けしている。49は灰釉小碗であり、釉は灰白色で高台付近は露胎である（口紅を施す）。50は鉄釉掛けの灯明皿と考えられる。

土器・土製品（第29図51～55、図版16）

全て埋土出土である。51は素焼き土師質の灯明皿である。52は古代の須恵器台付壺である。底部回転ヘラ切り後高台周辺にナデ調整を施している。53、54は土器のかわらけ小皿である。手づくね成形のもので、灯明皿として使用されている。55は素焼きの土製人形の首部分である。

金属製品（第84図1、図版50）

1は埋土出土で、銅製の小型の匙である。

錢貫（第85図2～4、図版51）

全て埋土出土で、銅錢の寛永通寶である。錢文の書体等から2、4は新寛永（初鋲1697年）に、3は新寛永の「文錢」（初鋲1668年）の分類に該当する。

木製品（第40図53～61、図版56）

全て埋土出土である。53、54は容器底板である。いずれも円形に加工され、54の周縁部には小孔が穿たれている。55、56は下駄である。いずれも台部に別の歯部を差し込む差歎下駄である。前縫穴1個に横縫穴2個が穿たれているもので、前縫穴の両側には指圧痕が認められる。57は容器底板と考えられ、片面の周縁部が薄く削られている。中央部断面に小孔が認められることから数枚の材を合わせて加工したと考えられる。58は曲物の蓋か底板と考えられるが、小型で中央部に孔が穿たれていることから蓋の可能性が高い。59は下駄の差歎である。破損品であるが台形状に加工されている。60は下駄である。台部の前・後部周縁を残して内側を削っているものである。61は棒状木製品である。断面形がほぼ方形に加工され、一端に孔が穿たれている。

2号溝跡（第18図）

調査区東側の第Ⅲ層面で発見した。

幅は中央部で85cmと広くなるが、それ以外は30～40cm、深さ約15cmで、長さ17.5m以上の東西方向に伸びる溝跡である。断面形は鍋底状を呈する。側壁には板材が残存しており、内側に杭を打ち込んで補強している。

5号溝跡、1号性格不明遺構と重複し、これらよりも新しい。

出土遺物

陶磁器（第29～31図56～63、図版16～18）

全て埋土出土である。

〔磁器〕56～59は肥前系磁器染付である。56は丸皿（五寸皿）である。57は中皿で草花文を染付けている。58は深皿で菊花文を染付け、二重圈縁の内側に蛇ノ目釉剥ぎを施す。59は大皿で内側面は二重圈縁の外に花唐草文、内に鳳凰に牡丹とザクロの文様を染付けている。裏文様は七宝文と飛雲文で、裏底に「大明成化年製」銘がある。底部内外面にハリ支えとハマ痕が認められる。漆雜痕がある。

60は肥前系磁器青磁の丸皿（五寸皿）で、蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台無釉である。

61は中国産青磁碗の破片で、口縁部にくずれた電文を彫りで描いている。

〔陶器〕62、63は肥前系陶器陶器（唐津系）である。62は銅緑釉の丸皿（五寸皿）で蛇ノ目釉剥ぎ施し、高台付近は露胎である。63は刷毛目文鉢である。外側面に白化粧土により刷毛目を描き、口縁部には鉄釉と銅緑釉を掛け分けている。内側面と外側面の下半には鉄釉を粗く刷毛塗りする。

土器・土製品（第31図64、図版18）

64は埋土出土で、土師質の焼塙壺である。板作り成形で刻印等は認められない。

錢貨（第85図5～8、図版51）

全て埋土出土で、銅錢の寛永通寶である。錢文の書体等から5は新寛永の「文錢」（初鑄1668年）に、6～8は古寛永（初鑄1636年）の分類に該当する。

木製品（第41図62～67、図版57）

全て埋土出土である。62は椀で、赤色の漆が塗られているが、底部外面には黒色漆が塗られ、「金」の文字が認められる。63は箸である。両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。64、65は容器底板である。64は小型であることから柄杓の底板と考えられる。65には樹皮が縫じ合わせをする

ように取り付けられている。66は下駄である。連唐下駄で、小型のものである。67は下駄の差歛で、台形状に加工されている。

3号溝跡（第18図）

調査区中央部の第Ⅲ層面で発見したが、東側が調査区外へ伸びている。

幅50～70cm、深さ40～45cmで、長さ21m以上の東西方向に伸びる溝跡である。断面形は鍋底状を呈し、西側が若干深くなっている。側壁には板材が残存しており、内側に杭を打ち込んで補強している。

4号溝跡と重複しているが、新旧関係は確認されなかった。

出土遺物

陶磁器（第31図65、66、図版18）

いずれも埋土出土である。65は肥前系磁器染付碗の破片である。外側面に梵字文を染付けている。66は西洋の酸化コバルトを用いた銅版転写の染付小碗である。

4号溝跡（第18図）

調査区西側の第Ⅲ層面で発見したが、南側が搅乱を受けている。

幅50cm、深さ約25cmで、長さ5.4m以上の南北方向に伸びる溝跡である。断面形は鍋底状を呈する。側壁には板材が残存しており、内側に杭を打ち込んで補強している。

1、3号溝跡と重複し、1号溝よりも新しいが、3号溝跡との新旧関係は不明である。

出土遺物

陶磁器（第31図67、68、図版18）

いずれも埋土出土である。67は瀬戸美濃系磁器染付小杯で、68は中国産の可能性がある染付皿である。

ガラス製品（第31図69、図版18）

69は青色ガラスの瓶である。

錢貨（第85図9、図版51）

9は埋土出土の銅錢で、劣化により銭文が判読不能である。

5号溝跡（第18図）

調査区東側の第Ⅲ層面で発見したが、北側は調査区外へ伸びている。

幅60～80cm、深さcmで、長さ7.7m以上の南北方向に伸びる溝跡である。板材が3条確認され、板材を補強するため内側に杭を打ち込むことから、西側の板材を中心に2回の作り替えがあり、当初は幅が広く、作り替えによって幅を狭くしたと考えられる。

1、2号溝跡と重複し、これらよりも古い。

出土遺物

陶磁器（第31、32図70～80、図版18）

全て埋土出土である。

〔磁器〕70～77肥前系磁器である。70はロクロ型打成形による染付輪花皿である。内側面に草花文を染付け、裏文様は唐草文である。裏底は二重方形枠に「福ヶ」銘がある。71は青磁皿であり、高台は釉剥ぎ

して鉄錆を塗っている。

72～76は染付丸鉢である。72はコンニャク印判の菊花文と手描きの草花文を組み合わせている。裏底にくずれた「大明年製」銘がある。外側面に73は草花文、74は若松文、75と76は一重網目文を描く。75は見込に文様と裏底に方形枠内に銘があるが、欠損により不明である。また、漆緞ぎ痕がある。77は色絵人形の一部である。赤色と緑色の絵具による上絵が認められる。

〔陶器〕 78～80は肥前系陶器（唐津系）である。78は明黄褐色を呈する灰釉折縁皿で、釉は透明に近く全体に施釉する。砂目積み痕がある。79は刷毛目文折縁皿で、白化粧土により内側面に刷毛目文を描き、鉄釉と銅緞釉を掛け分けている。高台付近は露胎で、胎土目に近い砂目積み痕がある。80は鉄釉折縁皿で内側面に鉄釉、外側面に透明釉を掛ける。

銭貰（第85図10、図版51）

10は埋土出土で、銅銭の寛永通寶である。銭文の書体等から古寛永（初鑄1636年）の分類に該当する。

木製品（第41図68、69、図版57）

いずれも埋土出土である。68は容器底板である。小型であることから柄杓の底板と考えられる。中央部断面に小孔と木釘が認められることから、2枚の材を合わせて加工したと考えられる。69は箸で、一方が尖るものである。

6号溝跡（第18図）

調査区西側の第Ⅲ層面で発見したが、部分的に擾乱を受けている。

幅約40～50cm、深さ10～15cmで、長さ48m以上の東西方向に伸びる溝跡である。断面形は鍋底状を呈し、東側が若干深くなっている。側壁には板材が部分的に残存しており、内側に杭を打ち込んで補強している。

1号溝跡と東端で重複しているが、新旧関係は確認されなかった。

出土遺物

陶磁器（第33図81～87、図版18、19）

全て埋土出土である。

〔磁器〕 81は西洋の酸化コバルトを用いた型紙擠りの染付碗である。82は産地不明の青磁染付丸皿（小皿）で、緑の絵具と白の筒描きで菖蒲文を描く。83、84は瀬戸美濃系磁器染付である。83は小碗で源氏香文と草花文を染付けている。84は丸碗で若松文様を染付けている。83、84とも全体に濃くほんやりした染付である。85は肥前底器の青磁大皿である。内側面にヘラ彫りにより草花文を描く。

〔陶器〕 86は素焼きの灯明皿である。87は陶器質の焼塩壺である。ロクロ成形で底部回転糸切り無調整である。

ガラス製品（第33図88、図版19）

88は埋土出土で、暗緑色のガラス瓶である。

瓦（第81図1、2、図版48）

いずれも底面出土である。1は櫛斗瓦、2は棟瓦の平瓦部分と考えられる。ともに灰色を呈するいぶし瓦である。

7号溝跡（第18図）

調査区西側の第Ⅲ層面で発見した。

幅50～65cm、深さ約40cmで、長さ4.8mの南北方向に伸びる溝跡である。断面形は逆台形状を呈する。

出土遺物

陶磁器（第33図89、90、図版19）

いずれも埋土出土で、肥前系磁器染付皿の底部破片である。ともに内側面に牡丹文を染付け、裏底には一重方形枠に「貞米」の銘がある。

8号溝跡（第19図）

調査区西側の地山面で発見したが、西側が搅乱を受けている。

幅20～50cm、深さ14～18cmで、長さ7.5m以上の東西方向に伸びる溝跡である。断面形はU字状を呈し、東側が若干深くなっている。

9号柱列、9号溝跡と重複し、9号溝跡よりも古く、9号柱列よりも新しい。

9号溝跡（第19図）

調査区西側の地山面で発見した。

幅50～65cm、深さ8～12cmで、長さ5mの南北方向に伸びる。材木堀を掘えたと考えられる布堀り溝で、断面形は皿状を呈し、南側が若干深くなっている。柱掘り方は全体に削平を受けて浅くなっている、柱痕は確認されない。

8号溝跡と重複し、これよりも新しい。

10号溝跡（第19図）

調査区東側の第Ⅳ層面で発見したが、西側が搅乱を受けている。

幅15～30cm、深さ14～18cmで、長さ7.5m以上の東西方向に伸びる溝跡である。断面形は皿状を呈し、東側が若干深くなっている。側壁には板材が残存しており、内側杭を打ち込んで補強している。

11号土坑と重複し、これよりも古い。

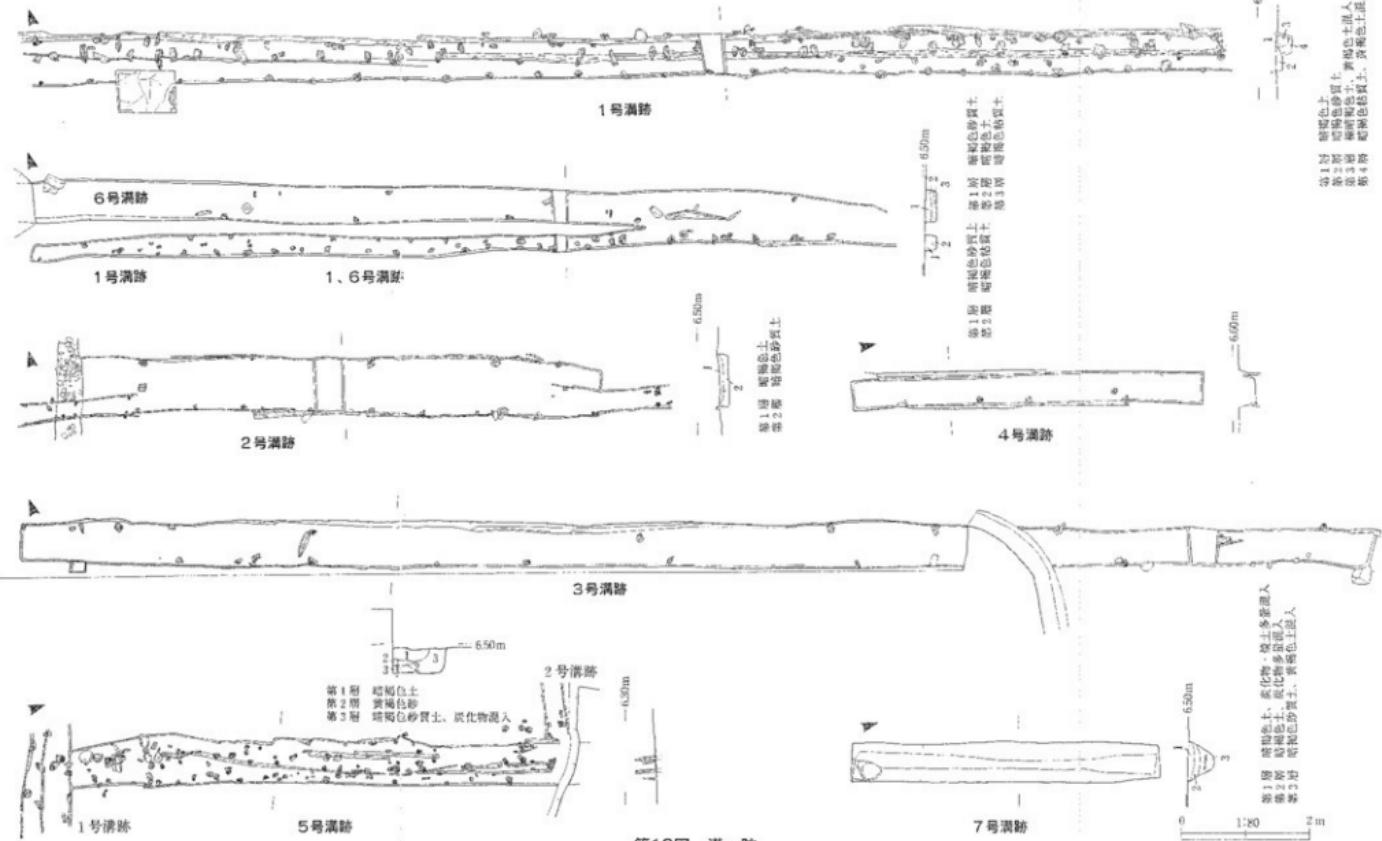
5 土坑

1号土坑（第20図）

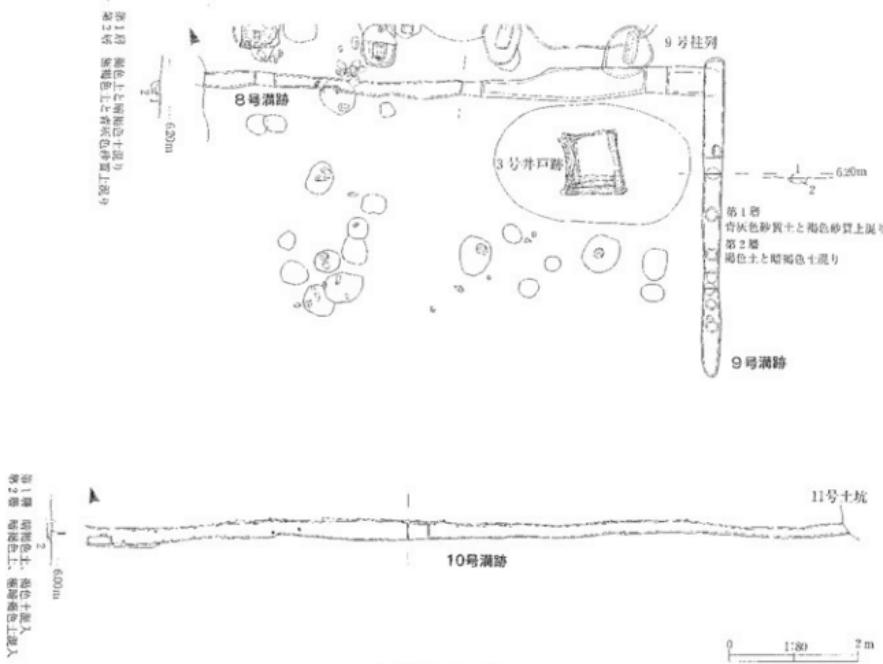
調査区東側の第Ⅲ層面で発見した。

長軸5.4m、短軸3.6mの楕円形を呈し、確認面からの深さは南側が45cmで、北側に緩やかに傾斜する。壁は緩く立ち上がり、底面は平坦である。埋土には多量の木片が入っていることから、木片を一括廃棄したものと考えられる。

5号建物跡、4号柱列、1号性格不明造構と重複し、1号性格不明造構よりも古く、5号建物跡、4号柱列よりも新しい。



第18図 溝跡



第19図 溝跡

出土遺物

陶磁器（第34図91～95、図版19）

全て埋土出土である。

〔磁器〕91～94は肥前系磁器染付である。91は丸皿（五寸皿）で、内側面に宝文、裏文様は一本線の唐草文を染付いている。ハリ支え痕と漆錐ぎの痕がある。92は丸碗で、高台無釉部分に鉄泥を塗る。染付文様は柳文と思われる。93は丸碗で外側に花唐草文、見込みに手描き五弁花文を染付けている。裏底に丸枠に「金」の篆書体かと思われる銘がある。94は碗で、裏底にくずれた「入明年製」銘がある。

〔陶器〕95は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗で、高台は削り出しであり、露胎となっている。

瓦（第81図3、図版48）

3は埋土出土の軒桟瓦である。瓦当の文様は唐草文である。赤瓦であり、釉が厚く掛かり極暗赤褐色を呈する。

木製品（第41図70～77、図版57）

全て埋土出土である。70は下駄である。差歎下駄で、前縁穴の両側に指圧痕が認められ、小型である。71～77は箸である。箸はまとめて投棄したと考えられ、折れているものも数えると約50本程発見されているが、代表的なものを抽出した。全て破損品であるが、両端を削って加工しているもので、断面形はほぼ円形をなし、77は他と比較して大型である。

2号土坑（第20図）

調査区西側の第Ⅲ層面で発見した。

長軸1m、短軸80cmのほぼ長方形を呈し、確認面からの深さは17cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

3号土坑（第21図）

調査区西側の地山面で発見したが、北側が擾乱を受けている。

確認した範囲では長軸1.8m、短軸70cmの長方形を呈し、確認面からの深さは45cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は平坦である。

出土遺物

陶磁器（第34図96～98、図版57）

全て埋土出土である。96～97は肥前系磁器染付皿である。96は見込に「斎」の字、97は内側面に雪の輪文と柴垣文、裏文様には一本線の唐草文を染付ける。97には漆継ぎの痕がある。98は肥前系陶器（唐津系）鉄絵鉢の破片である。

木製品（第41図78、79、図版57）

いずれも埋土出土の箸である。破損品であるが、両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。

4号土坑（第21図）

調査区西側の地山面で発見した。

長軸2.7m、短軸1.1mの不整形を呈し、確認面からの深さは2mである。壁は北側が深く内湾していることから全体を確認することができなかった。その他はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

14号土坑と重複し、これよりも新しい。

5号土坑（第21図）

調査区西側の地山面で発見したが、北側が擾乱を受けている。

確認した範囲では長軸1.7m、短軸1.1mの不整形を呈し、確認面からの深さは18cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

7号建物跡と重複し、これよりも古い。

6号土坑（第21図）

調査区西側の地山面で発見した。

長軸1.1m、短軸95cmのほぼ長方形を呈し、確認面からの深さは75cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

7号土坑（第22図）

調査区中央部の第IV層面で発見した。

径1.5mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは2mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みがある。

6号建物跡と重複し、これよりも新しい。

8号土坑（第21図）

調査区西側の地山面で発見した。

長軸80cm、短軸70cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは40cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

9号土坑（第21図）

調査区西側の地山面で発見した。

長軸1.1m、短軸95cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは70cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土に多量の箸が入っていることから、一括廃棄したものと考えられる。

出土遺物

陶磁器（第34図99、100、図版19）

いずれも埋土出土である。99は肥前系磁器染付皿で、内側面に山水文を染付けている。100は肥前系陶器（唐津系）灰釉溝縁皿で甚筋底風であり、高台付近は露胎である。砂目積み痕がある。

木製品（第41図80～87、図版57）

全て埋土出土の箸である。箸はまとめて投棄したと考えられ、折れているものも数えると約100本程発見されているが、代表的なものを抽出した。両端を削って加工しているものが多く、ほぼ中心部に最大径がある。87は用途不明木製品である。6角形に面取りされ、上面が大きくくぼんでいるものである。

10号土坑（第22図）

調査区西側の地山面で発見した。

長軸2.2m、短軸1.1mの楕円形を呈し、確認面からの深さは40cmである。壁は西側はほぼ垂直に、東側は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

9号柱列と重複し、これよりも古い。

出土遺物

木製品（第42図88～90、図版58）

全て埋土出土である。88、89は箸である。89は破損品であるが、いずれも両端を削って加工していると考えられ、ほぼ中心部に最大径がある。90は下駄の差歎で、台形状に加工されている。

11号土坑（第22図）

調査区東側の第IV層面で発見した。

長軸3.6m、短軸2.3mの不正形を呈し、確認面からの深さは45cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底

面はほぼ平坦である。

出土遺物

陶磁器（第34、35図101～105、図版19）

全て埋土出土で、肥前系磁器染付である。101は皿で、内側面に唐草文を染付け、裏文様も唐草である。102、103は丸碗で、102は草花文、103は菊散らし文を染付けている。104は青磁染付の蓋で外側は青磁、内側天井部の二重圓線内にコンニャク印判の五弁花文を染付けている。105は唾壺の口部分である。内側面に梅樹文を染付けている。また、101、103、105には漆雜ぎ痕がある。

土器・土製品（第35図106～113、図版19）

全て埋土出土である。106は土師質の輪花皿で、口縁部は溝縁状である。内側面に赤漆を塗った痕跡が部分的に認められる。107～113は非ロクロ製手づくねのかわらけである。107～109は小皿、110中皿、111は大皿、112は碗形である。底部を丸底もしくは丸底風に成形した後にナデにより平滑に仕上げ、さらに体部上半から口縁部にかけて強い横ナデを施し一段の軽い段を形成する。111、112は外面に煤状付着物が認められる。113は瓦質の火鉢である。

錢貨（第86図57、58、図版52）

いずれも埋土出土で、銅銭の寛永通寶である。57は銭文の書体等から古寛永（初鑄1636年）の分類に該当するが、58は劣化により銭文が不鮮明で分類が困難である。

木製品（第42～44図91～127、図版58～60）

全て埋土出土である。91、92は木筒である。91は板状で先端部が若干細く加工され、上部に孔が穿たれ、「□大□□人与助」が認められる。92は薄い板材に「酒代入」が認められる。93～102は箸である。他にも少量発見されているが、代表的なものを抽出した。全て両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。103、104は蓋である。103のつまみは横からめ込んで固定するもので、内側の周縁部は一回り削って加工している。104は中央部に小孔が認められることと変色していることから、つまみを固定した釘穴と考えられる。105は柄杓である。小型の曲物で、側面に柄を差し込んだ孔が認められる。106～109は容器底板と考えられる。106～108は比較的小型であることから柄杓の底板と考えられるが、106、108には樹皮が綴じ合わせをするように取り付けられている。108には墨書きが認められる。109は比較的大型で、中央部断面に孔が認められることから、2枚の材を合わせて加工したと考えられる。また、曲物の側面と固定するための木釘が認められる。110は栓である。容器の栓と考えられ、上面よりも下面が小さく加工されている。111～113は下駄である。111、113は差歎下駄で、111には漆が塗られ、前緒穴の両側には指圧痕が認められる。112は連歎下駄である。114～119は下駄の差歎である。全て台形状に加工され、底面に砂の圧痕が認められるものである。120は人形の後頭部である。顔面部分はなく、耳などに胡粉が認められる。121は櫛状木製品である。大型であることから馬に用いられたと考えられる。122は手鏡の台部と考えられるが、鏡は認められない。123は容器の蓋と考えられ、中央部に「アキタ小カ山村クホタ」の焼印が認められる。材の両側断面に小孔が2個ずつ認められることから、数枚の材を合わせて加工したものである。124～126は串である。全て先端部が尖るもので、126は雑に加工されている。断面形は124の先端部は蒲鉾状で中心部が隅丸長方形に、125は隅丸長方形に、126は長方形をなす。127は棒状木製品である。断面形は長方形をなし、先端部が欠損する。

12号土坑（第22図）

調査区西側の地山面で発見したが、南側が削平を受けている。

長軸1.1m、短軸1mの楕円形を呈し、確認面からの深さは35cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

13号土坑と重複し、これよりも古い。

出土遺物

木製品（第44図128、図版60）

128は埋土出土の下駄の差歛で、台形状に加工されている。

13号土坑（第22図）

調査区西側の地山面で発見したが、北側が擾乱を受けている。

長軸75cm、短軸70cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは35cmである。

12号土坑と重複し、これより新しい。

出土遺物

陶磁器（第35図114、115、図版20）

いずれも埋土出土である。114は肥前系磁器染付丸碗で、草花文を染付けている。115は肥前系陶器（唐津系）灰釉皿で、釉は暗緑色を呈し、高台附近は露胎で糸切り痕を残す。

14号土坑（第21図）

調査区西側の地山面で発見した。

長軸3.2m、短軸1mの不整形を呈し、確認面からの深さは東側が40cm、西側が80cmで、西側が深くなっている。壁は緩やかに立ち上がり、底面西側は平坦で、東側は不整地となっている。埋土には多量の木片が入っていることから、一括廃棄したものと考えられる。

4号土坑と重複し、これよりも古い。

出土遺物

陶磁器（第35、36図116～120、図版20）

全て埋土出土である。116、118、119は肥前系磁器染付である。116は丸皿（五寸皿）であり、山水文を染付けている。117は中国漳州窯系呉須赤絵の折縁皿で、上絵はかなり剥落している。底部高台付近には砂粒が粗く付着している。118は丸碗で外側面に草花文を染付け、裏底に「大明年製」の銘がある。119は内側面に花弁状の彫刻込み文様のある鉢である。120は内外面全体に鉄釉掛けした擂鉢である。

木製品（第44図129～132、図版60）

全て埋土出土である。129は曲物で、一部分のみの発見である。側面に柄を差し込むための孔が認められる。130は容器底板と考えられ、両面に刃物痕が認められる。131は下駄である。差歛下駄で、後部の齒が欠損している。132は棒状木製品である。一部分のみの発見であるが、刀形の形態をなし、良く整形されている。

15号土坑（第23図）

調査区西側の地山面で発見したが、西側は擾乱を受けている。

確認した範囲で長軸1.7m、短軸1.5mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは60cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土には多量の木片が入っていることから、一括廃棄したと考えられる。

16号土坑（第23図）

調査区西側の地山面で発見したが、南側は擾乱を受けている。

確認した範囲で長軸7.2m、短軸1.6mの不整形を呈し、確認面からの深さは南側が45cm、北側が10cmあり南側が深くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土には多量の木片が入っていることから、一括廃棄したと考えられる。

出土遺物

木製品（第44図133、図版60）

133は埋土出土の棒状木製品である。断面形は長方形に近く、両端を欠損している。

17号土坑（第23図）

調査区西側の地山面で発見したが、西側は擾乱を受けている。

確認した範囲で長軸2.7m、短軸1.2mの不正形を呈し、確認面からの深さは東側が1m、西側が10cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土には多量の木片が入っていることから、一括廃棄したと考えられる。

出土遺物

木製品（第45図134～147、図版61）

全て埋土出土である。134～143は箸である。他にも数本発見されているが、代表的な者を抽出した。一端が欠損しているものもあるが、両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。144、145は人形である。いずれも板状の材を加工し、上部に括りが施されている。146、147は串である。146の断面形は蓄鉢状をなしている。147は雑に加工されている。

18号土坑（第23図）

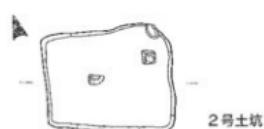
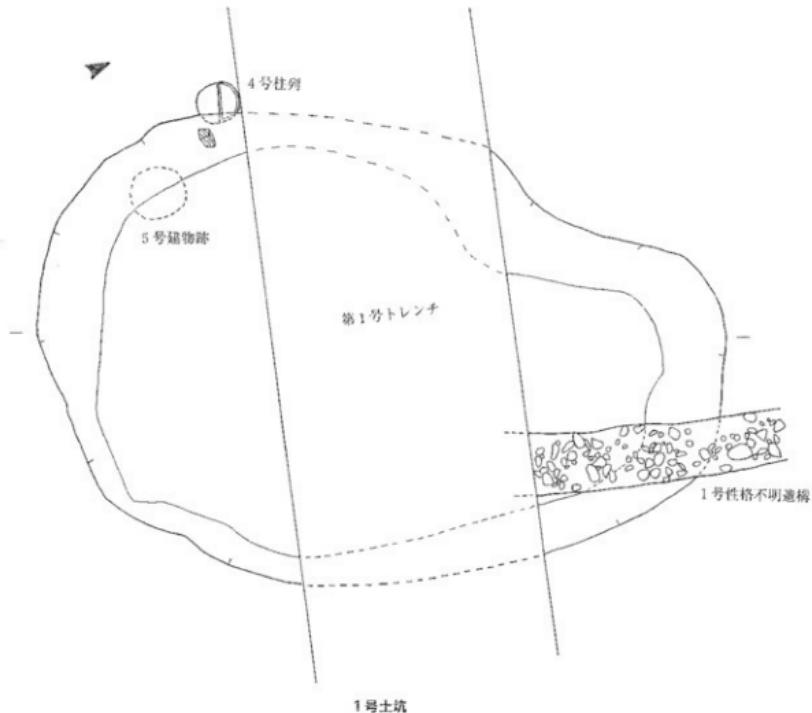
調査区東側の第IV層面で発見した。

長軸3.1m、短軸1.7mのほぼ長方形を呈し、確認面からの深さは20cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

出土遺物

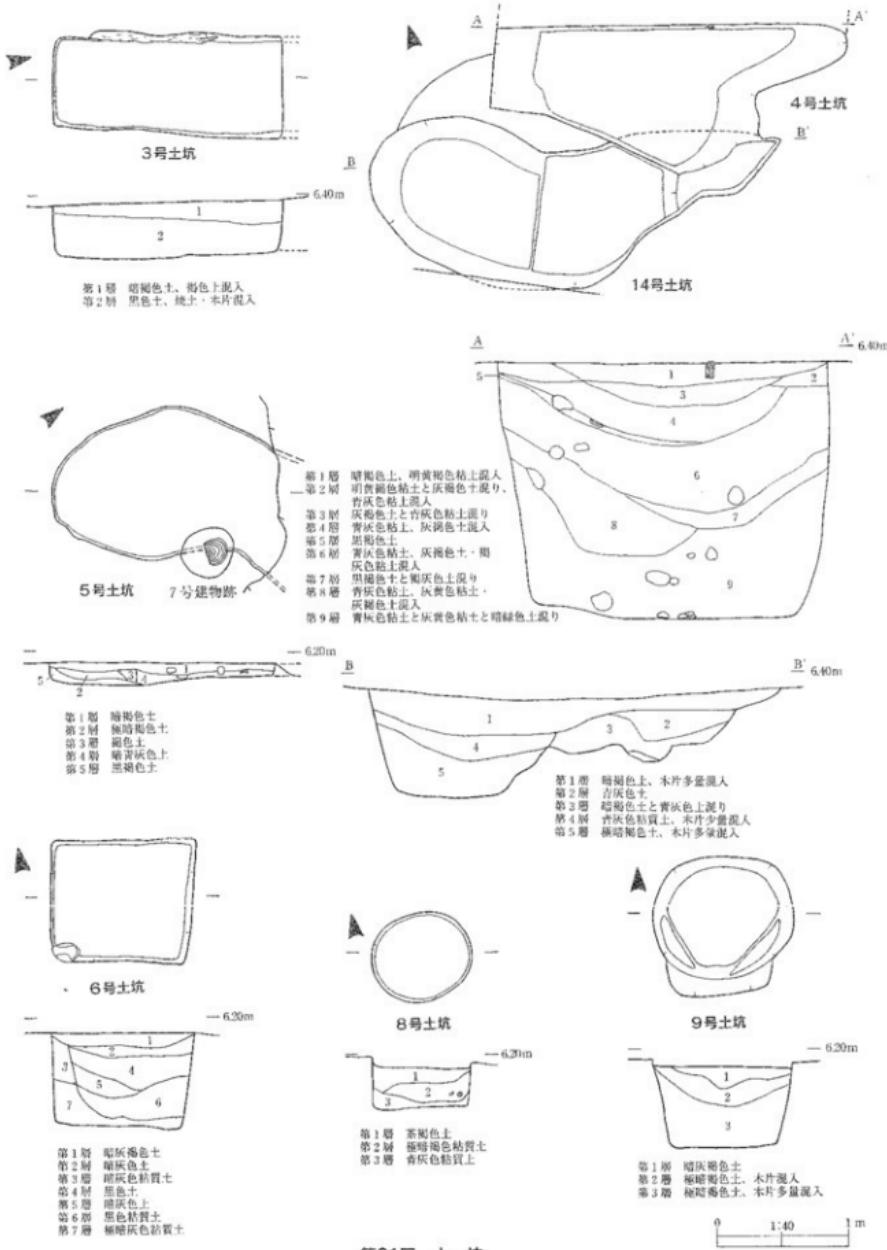
木製品（第45図148、図版61）

148は埋土出土の下駄である。差歎下駄で、台部は長方形に加工されている。他に箸が数本発見されているが折れているもので図示しえなかった。

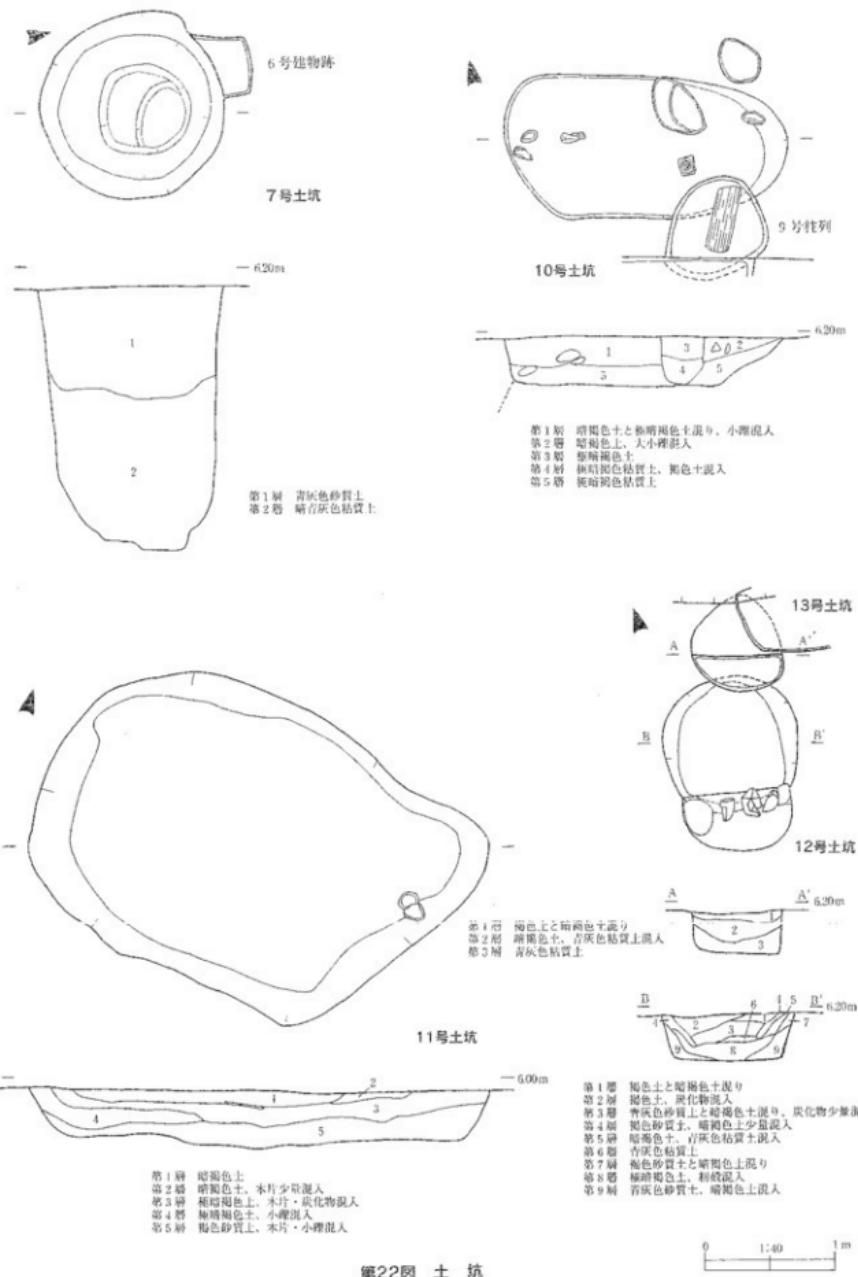


第20図 土 坑

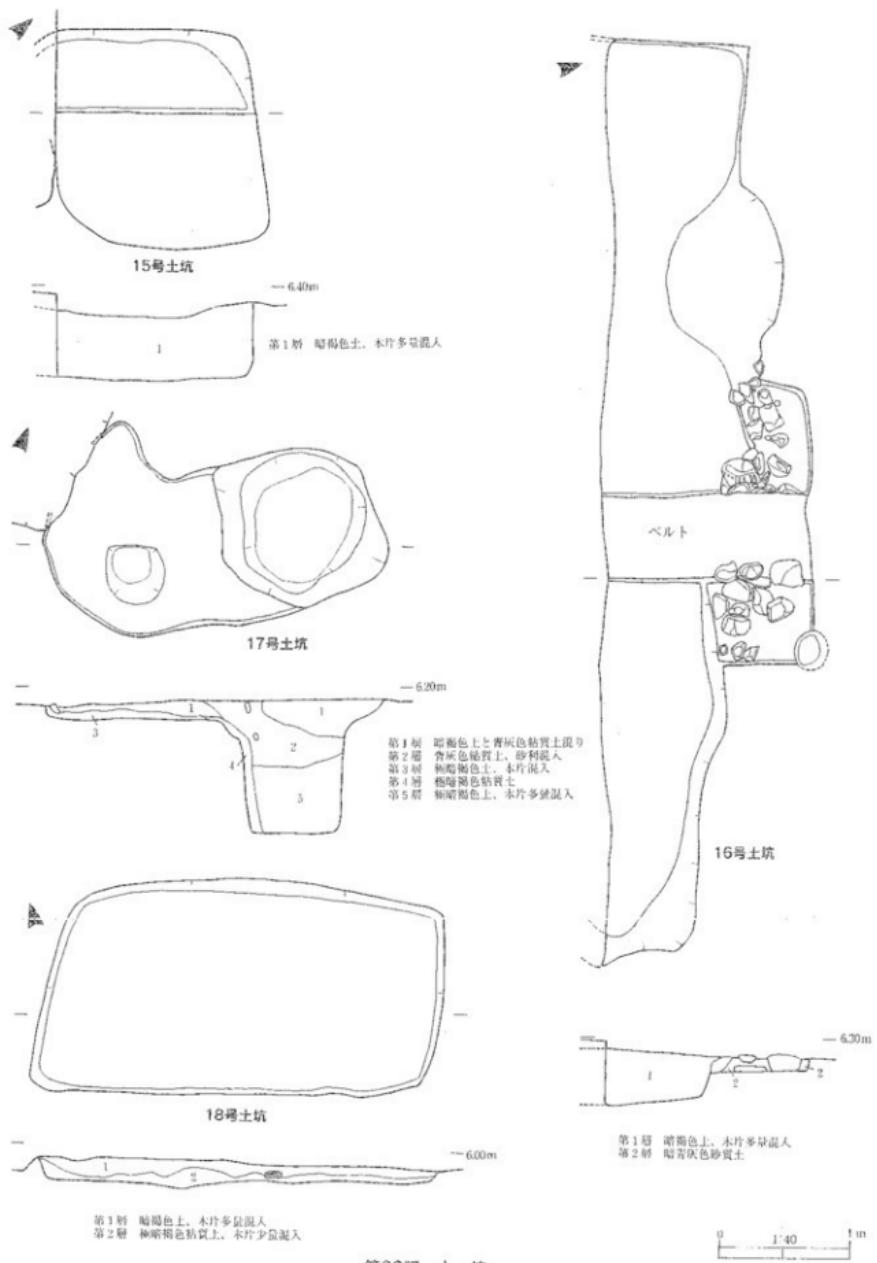




第21図 土坑



第22圖 土坑



第23回 土坑

6 その他の遺構

1号性格不明遺構（第24図）

調査区東側の第Ⅲ層面で発見したが、南側が搅乱を受けている。

東西8.5m、南北が西側3.9m、東側4.3m、幅25~45cm、確認面からの深さ10~15cmで、「コ」の字状に開まれており、溝の中には径10~15cmの礫が充填している。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。主軸方向は北に対して西へ10度振れている。

5号建物跡、2号溝跡、1号土坑と重複し、2号溝跡よりも古く、5号建物跡、1号土坑よりも新しい。

2号性格不明遺構（第25図）

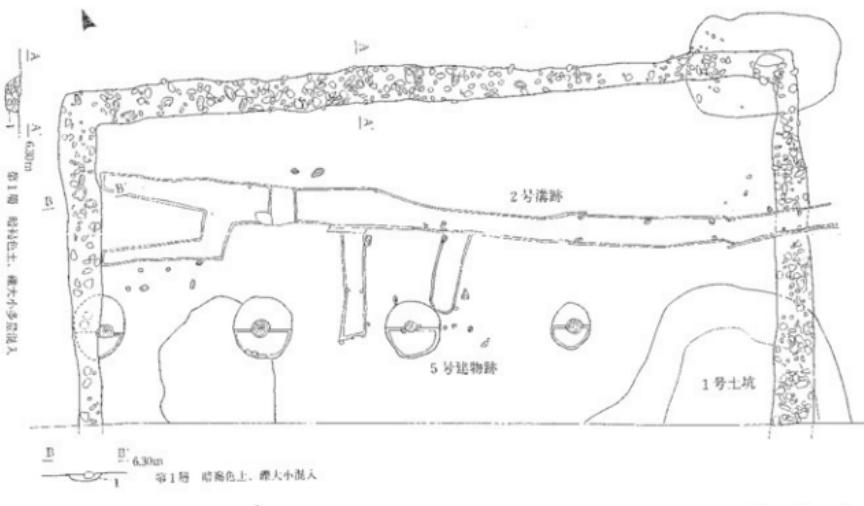
調査区西側の地山面で発見したが、北側が搅乱を受けている。

確認した範囲では長軸1.8m、短軸1.4mの楕円形を呈し、確認面からの深さは30cmである。壁は東が緩やかに立ち上がり、西側はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。幅20~30cm、長さ約1mの板村が折り重なるように入っている。

出土遺物

陶磁器（第36図121、122、図版20）

いずれも埋土出土である。121は肥前系磁器端反碗の蓋である。外側面に蓮花文と墨弾きによる四方摺文、内側面に蓮花文と四方摺文、外側つまみ内側に「乾」銘を染付けている。焼締ぎ痕もある。122は瀬戸美濃系陶器の志野皿である、灰白色の厚い釉に貫入が入る。



第24図 1号性格不明遺構

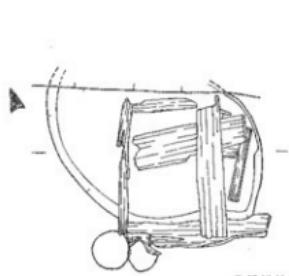
木製品（第45図149～153、図版61）

全て埋土出土の箸である。両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。

3号性格不明遺構（第25図）

調査区西側の地山面で発見したが、北側が擾乱により削平されている。

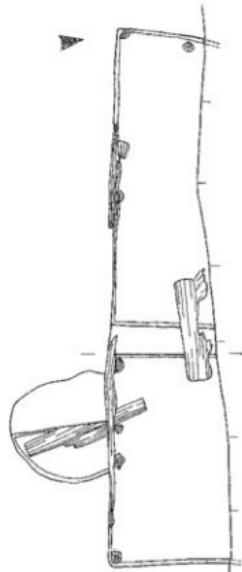
確認した範囲では長軸4.1m、短軸70cmの長方形を呈し、確認面からの深さは10cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。調査には板材が据え付けられており、径10cmの丸柱を隅と側面に打ち込んでいる。



2号性格不明遺構



第1層 楊葉褐色土、炭化物混入
第2層 精耕褐色土と黒褐色土混り、木片・炭化物混入
第3層 黄灰色土と青灰色土混り、黒褐色土混入
第4層 黄灰色土と青灰色土混り、黒褐色土若干混入
第5層 青灰色粘質土、精耕褐色土・黄灰色土混入
第6層 青灰色粘質土、暗褐色土混入

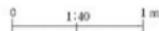


3号性格不明遺構



第1層 黒色土、焼土・炭化物混入
第2層 骨灰土上、炭化物混入

第25図 性格不明遺構



7 ピット出土遺物

陶磁器（第36図123、図版20）

123はMA34グリッドのピット埋土出土である。肥前系磁器染付丸碗で、山水文を染付けている。

木製品（第45図154、図版61）

154はL T32グリッドのピット埋土出土の比較的小型の差歛下駄である。

8 遷構外出土遺物

トレンチ出土遺物

陶磁器（第46、47図124～137、図版20、21）

124、129は第3トレンチ出土、125～128、130～137は第1トレンチ出土である。

〔磁器〕124～127、129～133は肥前系磁器染付である。128は産地不明である。

〔皿類〕124は皿で、底部内外面に砂目積み痕がある。125は丸皿（小皿）で山水文、126は丸皿（五寸皿）で内外面に草花文、見込みにコンニャク印判の五弁花文、裏文様に一本線の唐草文を染付けている。127は輪花皿（小皿）で、山水文を染付け、蛇目四形高台である。

〔碗類〕128は小碗で源氏香文と葵文を染付けている。

〔蓋類〕129はバラを描いたもので、産地不明の近現代の蓋である。130は蓋物の蓋で、外側面に雪の輪に草花文を染付けている。

〔壺瓶類〕131、132は瓶であり、生掛け焼成で高台疊付のみ無釉となっている。132は一重網目文を染付けている。133は小瓶であり、草花文と笠文を染付けている。

〔陶器〕134～136は肥前系陶器（唐津系）である。

〔皿類〕134は鉄絵折縁皿（小皿）で、簡略化された草文を描く。高台は露胎であり、胎土目積み痕がある。135は灰釉折縁皿で、釉は灰白色を呈し、高台は露胎である。砂目積み痕がある。

〔碗類〕136は鉄釉碗である。

〔蓋類〕137は大型の蓋で灰色の地に透明釉を掛け、その上に簡描きで網文様と飛雲文を描く。在地の寺内窯産の可能性がある。

瓦（第81図4、図版48）

4は第1トレンチ出土である。軒棧瓦で、瓦当の文様は平瓦部が波（山形）文、丸瓦部が三巴文である。紅柄水溶液を塗布し焼成した赤瓦であり、暗赤褐色を呈する。

木製品（第87図155～159、図版62）

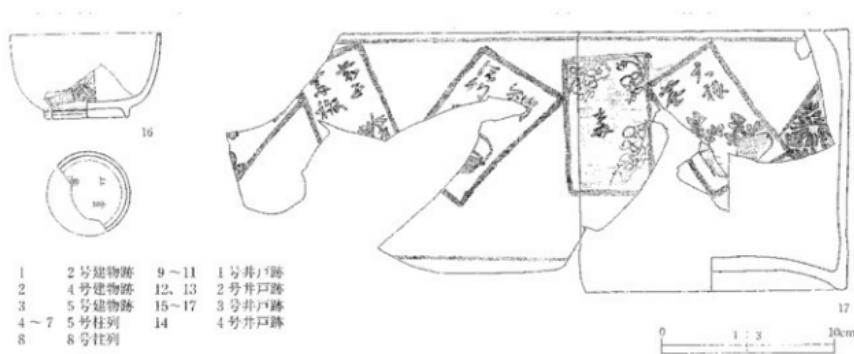
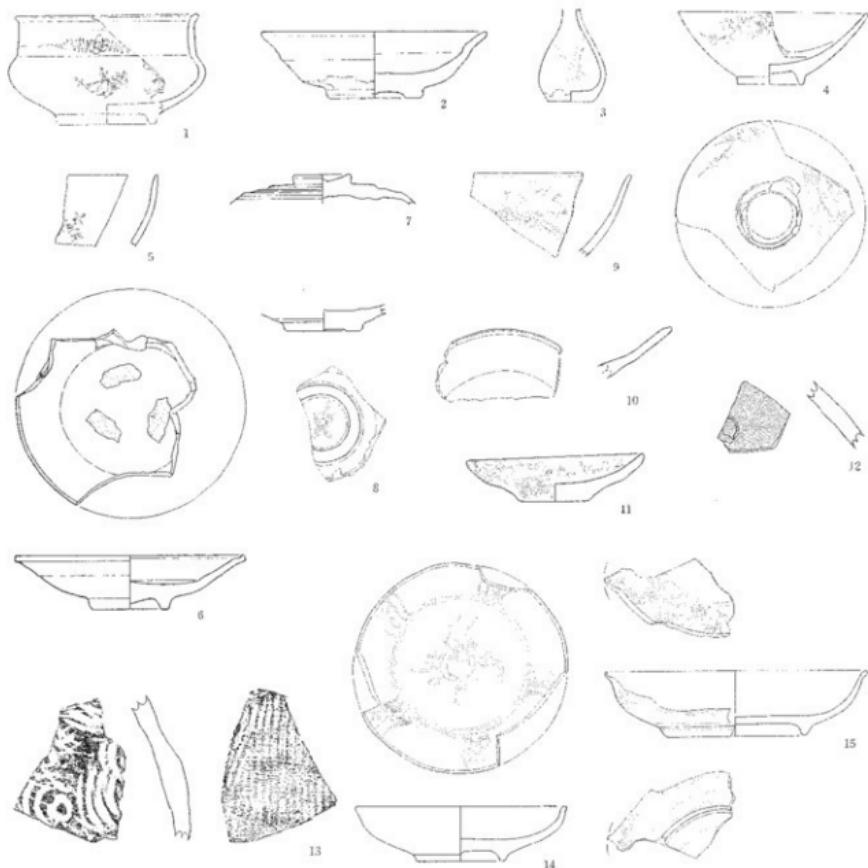
155は柄杓で、側面に柄を差し込んだ孔が認められる。156は容器底板である。中央部断面に小孔が認められることから、2枚の材を合わせて加工したと考えられる。157～159は下駄である。157、158は連歛下駄で、158には漆が塗られている。159は差歛下駄で台部が隅丸長方形に加工されている。

搅乱出土遺物

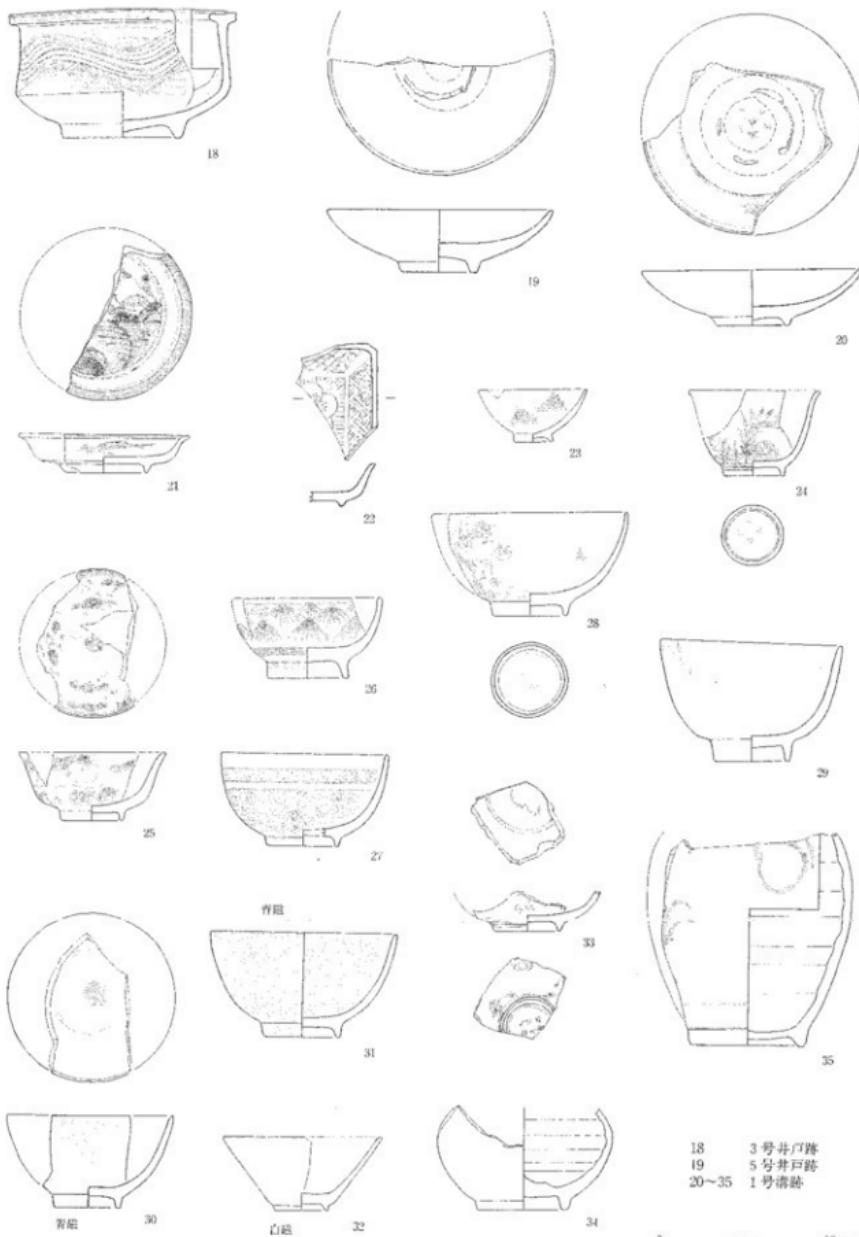
陶磁器（第47図138～143、図版21、22）

138～143は搅乱穴の出土である。

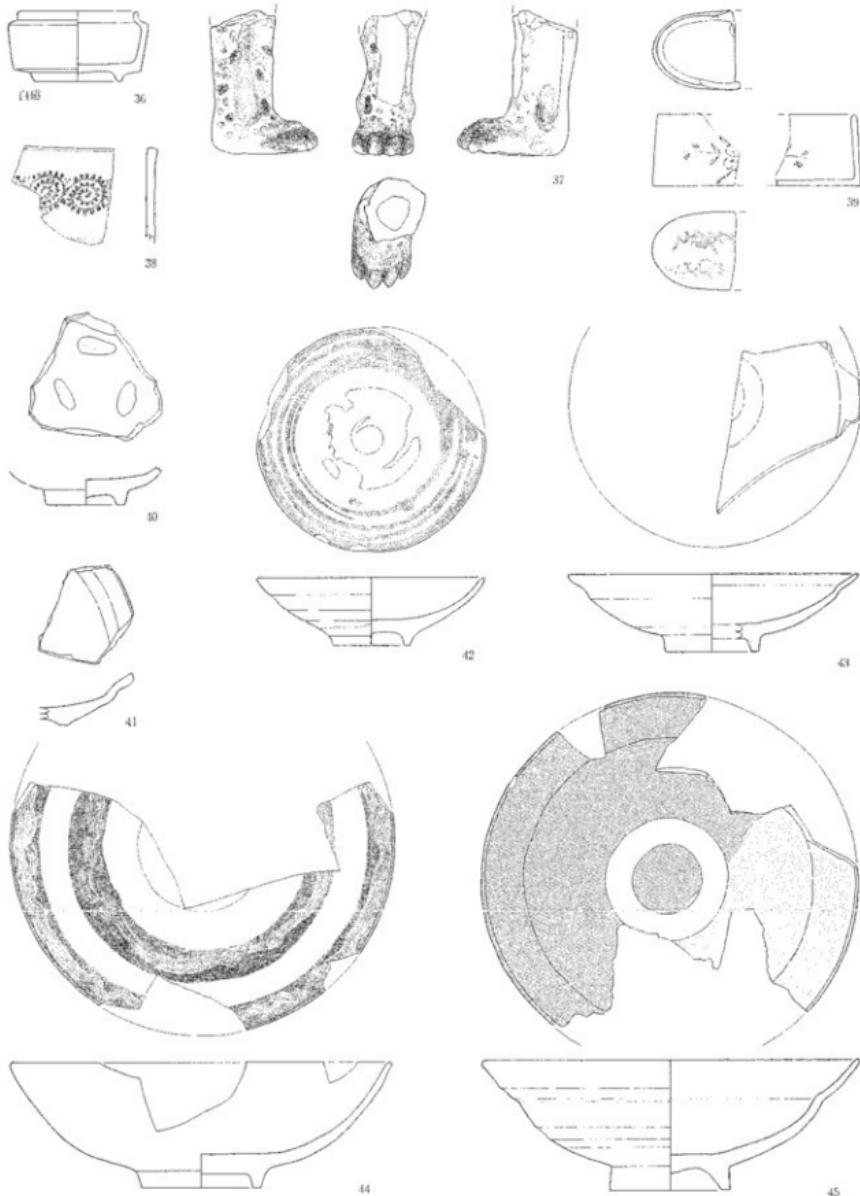
〔磁器〕138～141は肥前系磁器で、139は白磁、それ以外は磁器染付けである。



第26図 通横内出土遺物



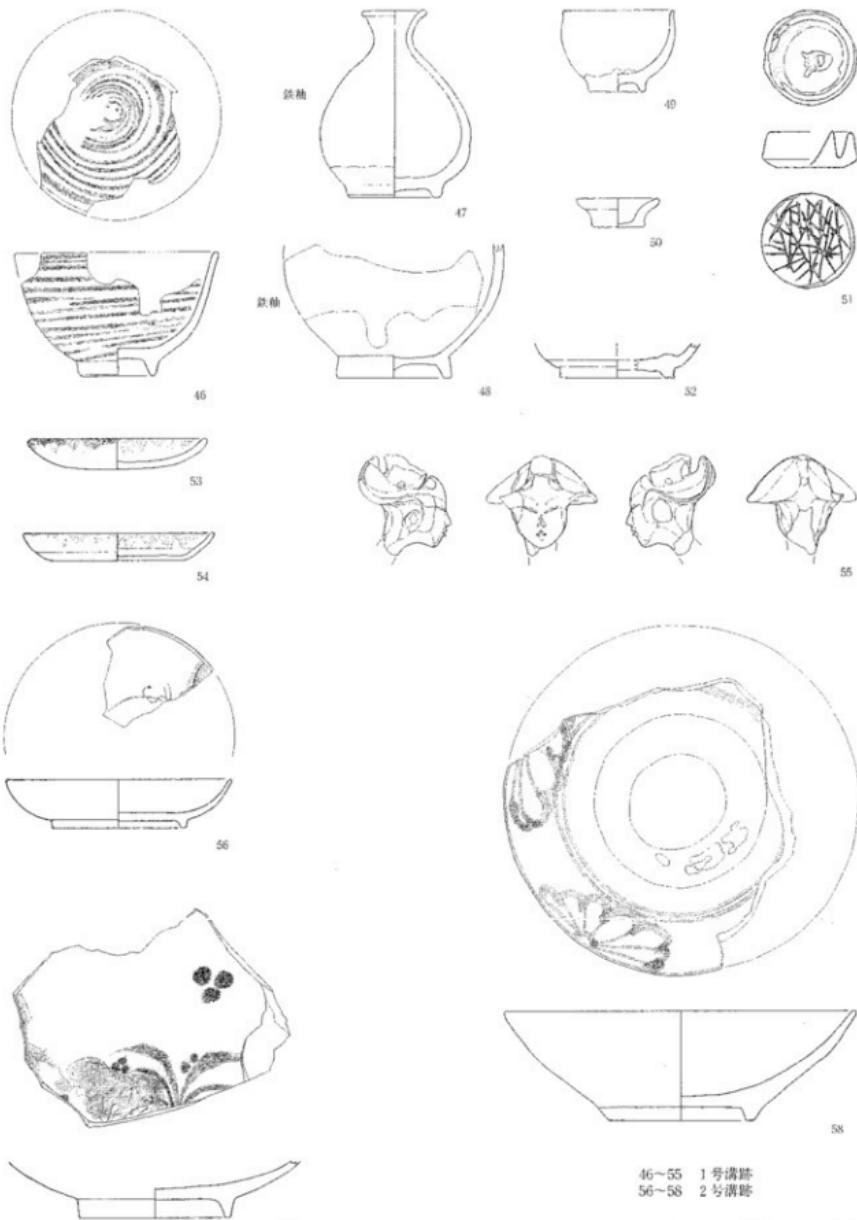
第27图 遗物内出土遺物



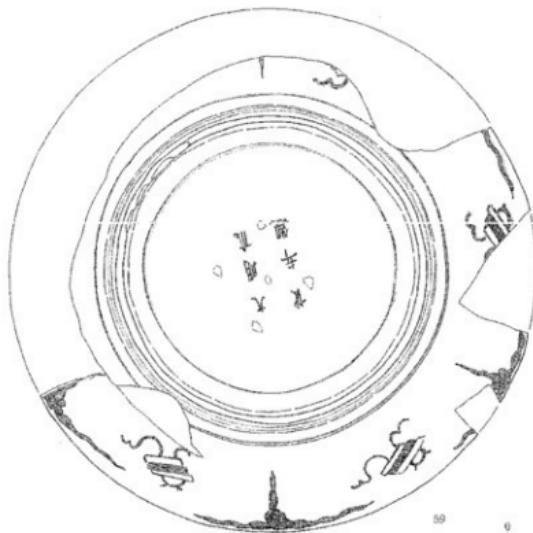
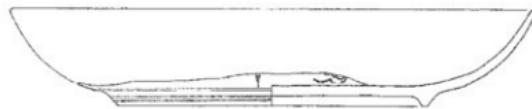
36~45 1号溝跡

第28図 遺構内出土遺物

0 1 : 3 10cm



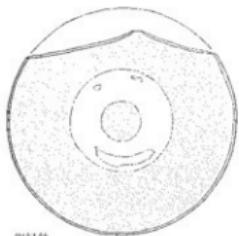
第29図 遺構内出土遺物



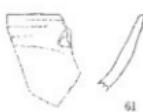
59 2号溝跡

6 1 : 3 10cm

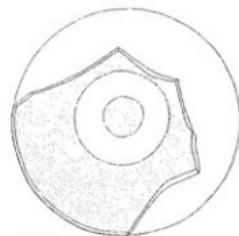
第30図 遺構内出土遺物



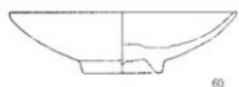
網紋片



61



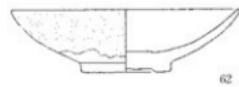
網紋片



63



64



65



66

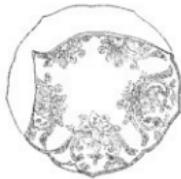


67

青磁



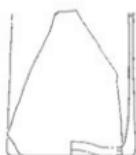
68



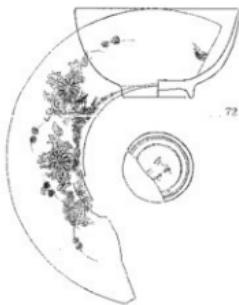
69



70



ガラス

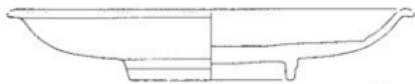
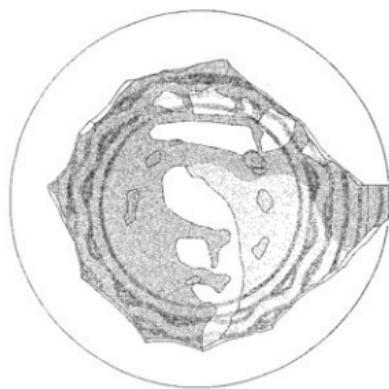
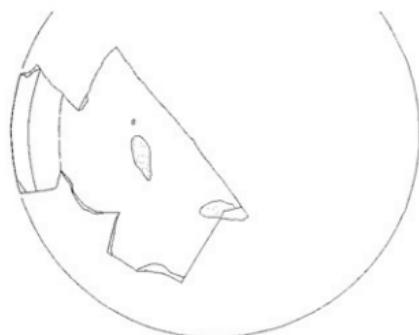
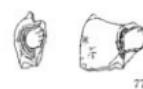
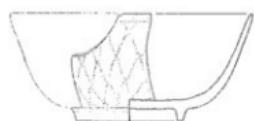
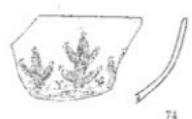
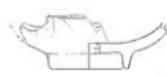
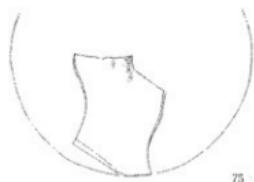
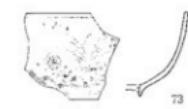


72

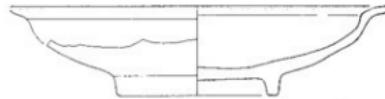
60~64 2号溝跡
65, 66 3号溝跡
67~69 4号溝跡
70~72 5号溝跡



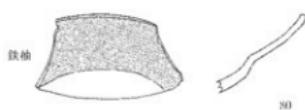
第31図 遺構内出土遺物



78



79



80

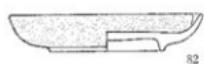
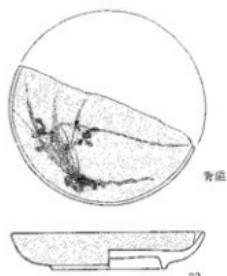
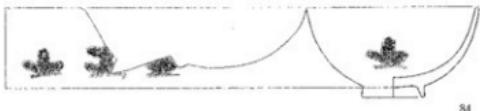
73~80 5号溝跡

第32図 造横内出土遺物

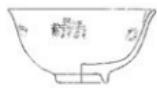




81

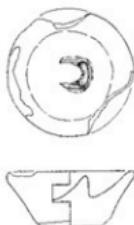


81

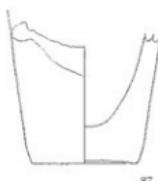


85

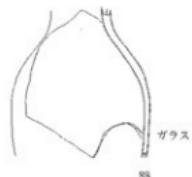
83



86



87



88



89



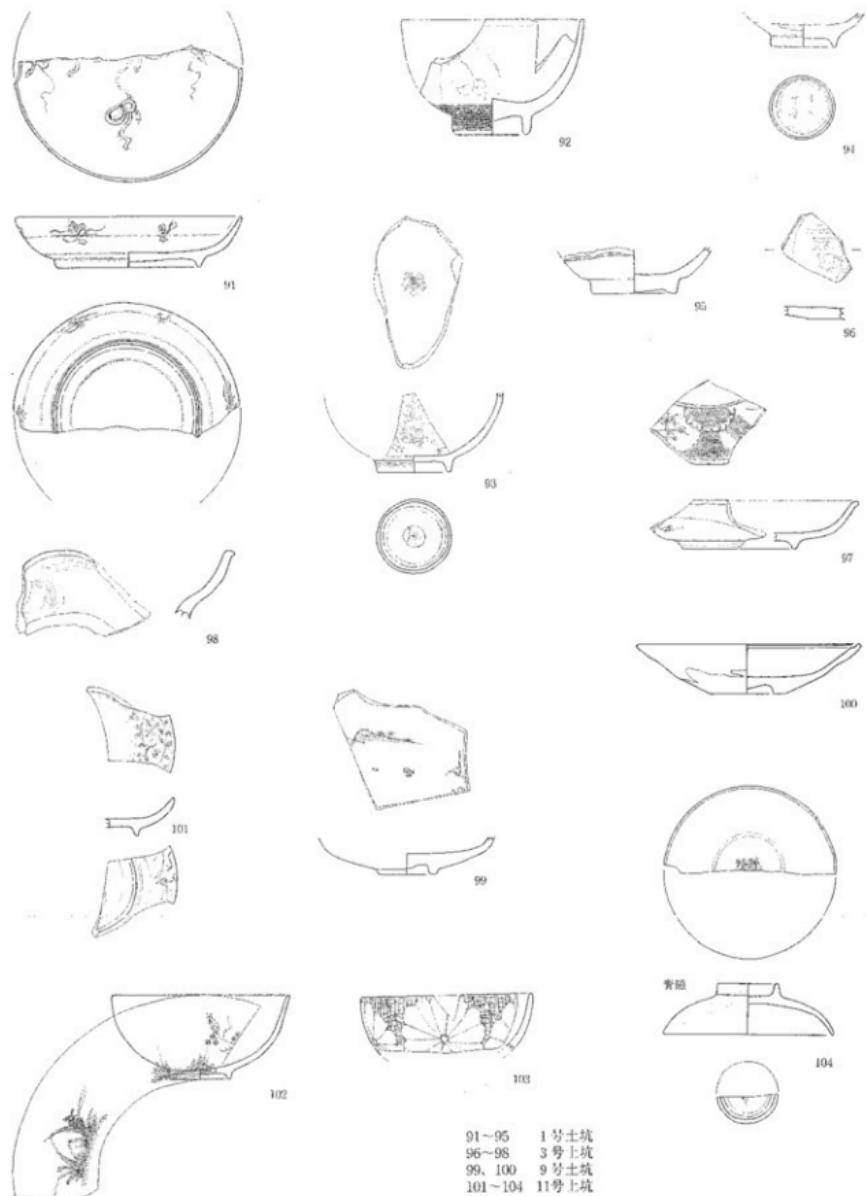
90



81~88 6号講路
89、90 7号講路

第33図 遺構内出土遺物





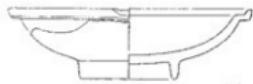
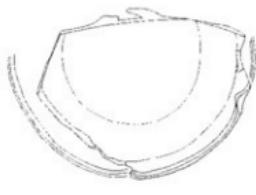
91~95 1号土坑
96~98 3号土坑
99, 100 9号土坑
101~104 11号土坑

0 1 : 3 10cm

第34図 遺構内出土遺物



105



106



107



108



109



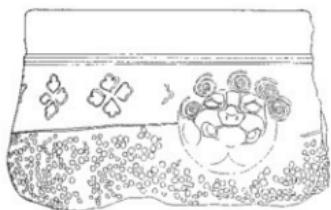
110



111



112



113



114



115



116

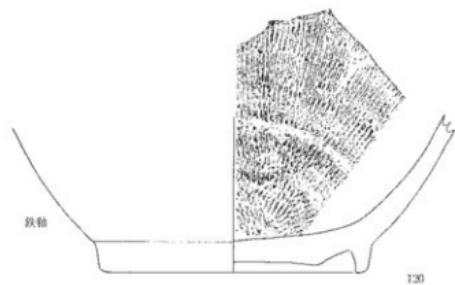
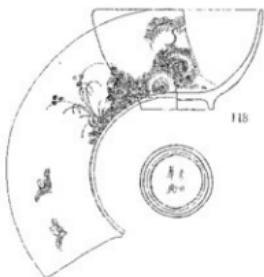
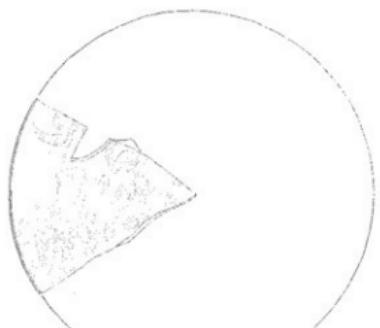


117

105~113 11号土坑
114, 115 13号土坑
116 14号土坑



第35图 遗构内出土遗物



121



122



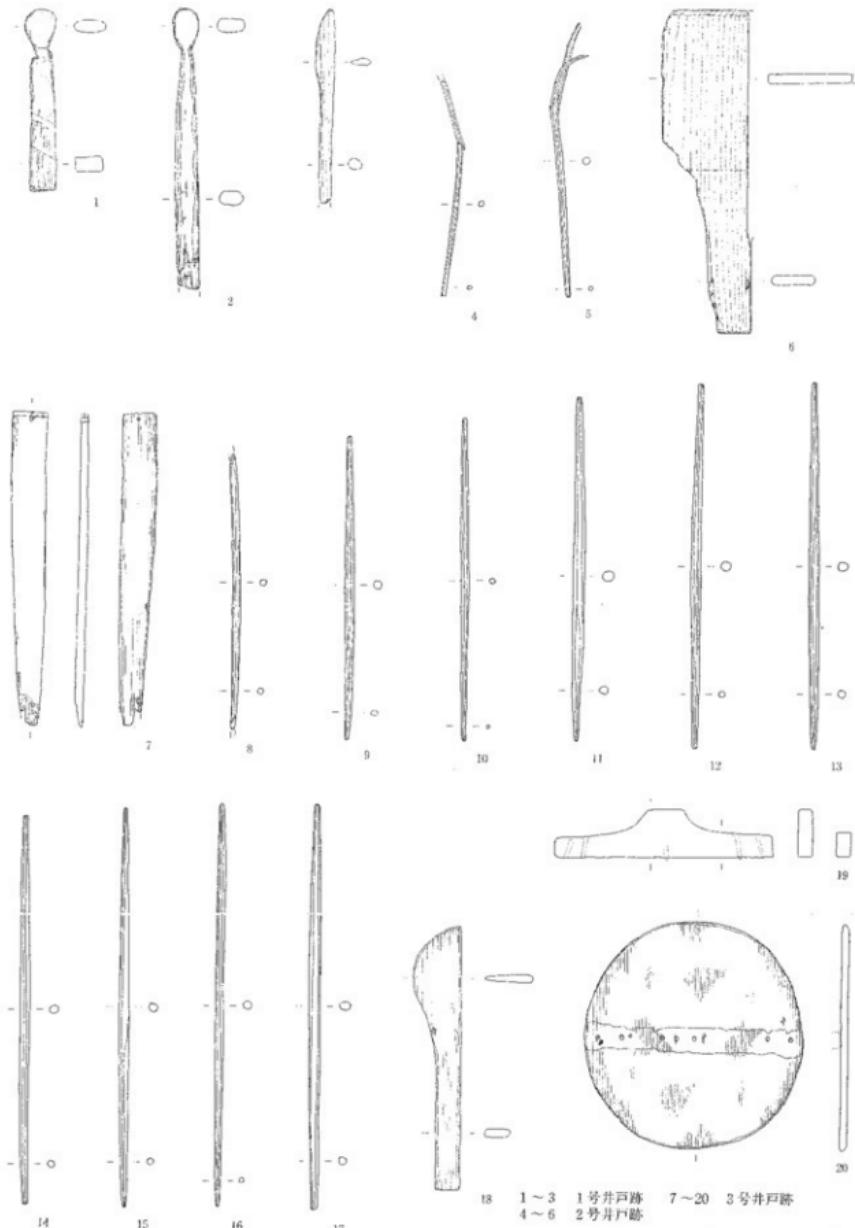
123



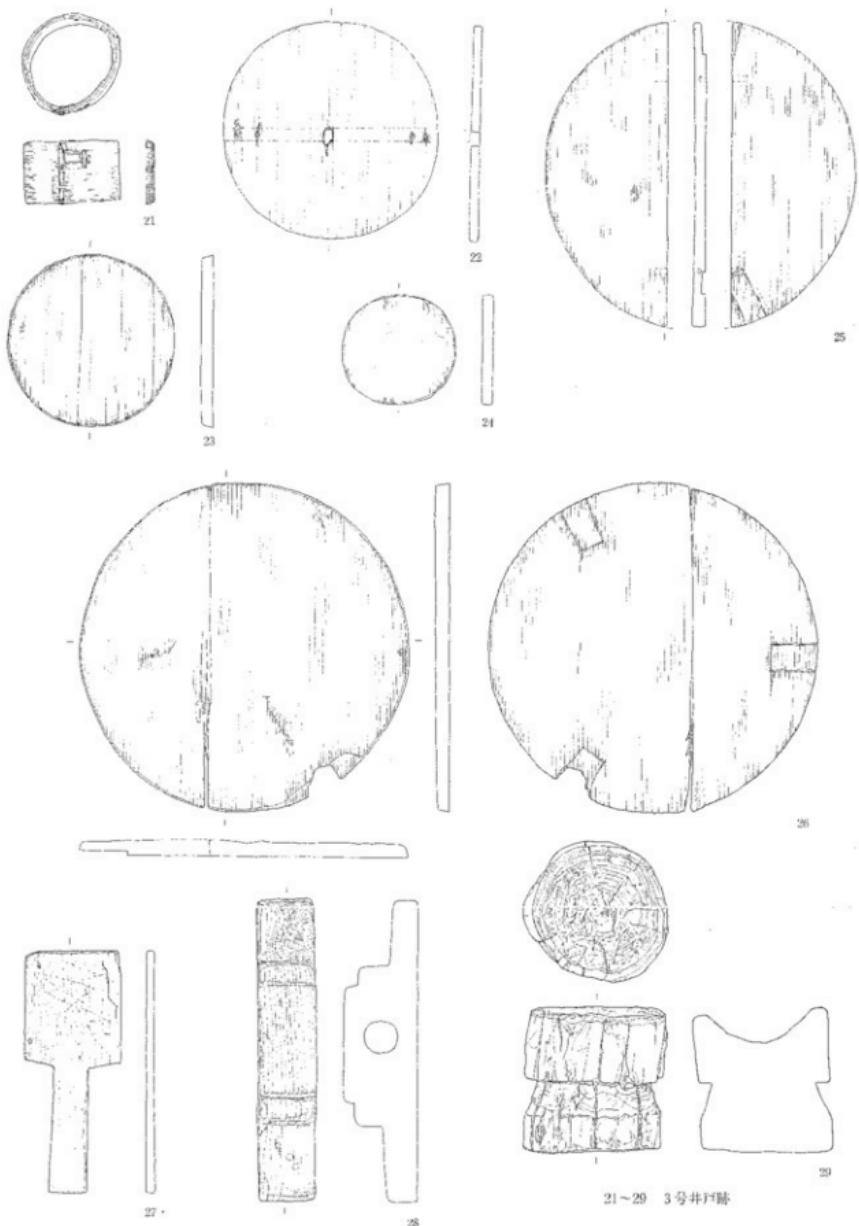
117~120 14号土坑
121、122 2号性格不明遺物
123 ピット



第36図 遺構内出土遺物

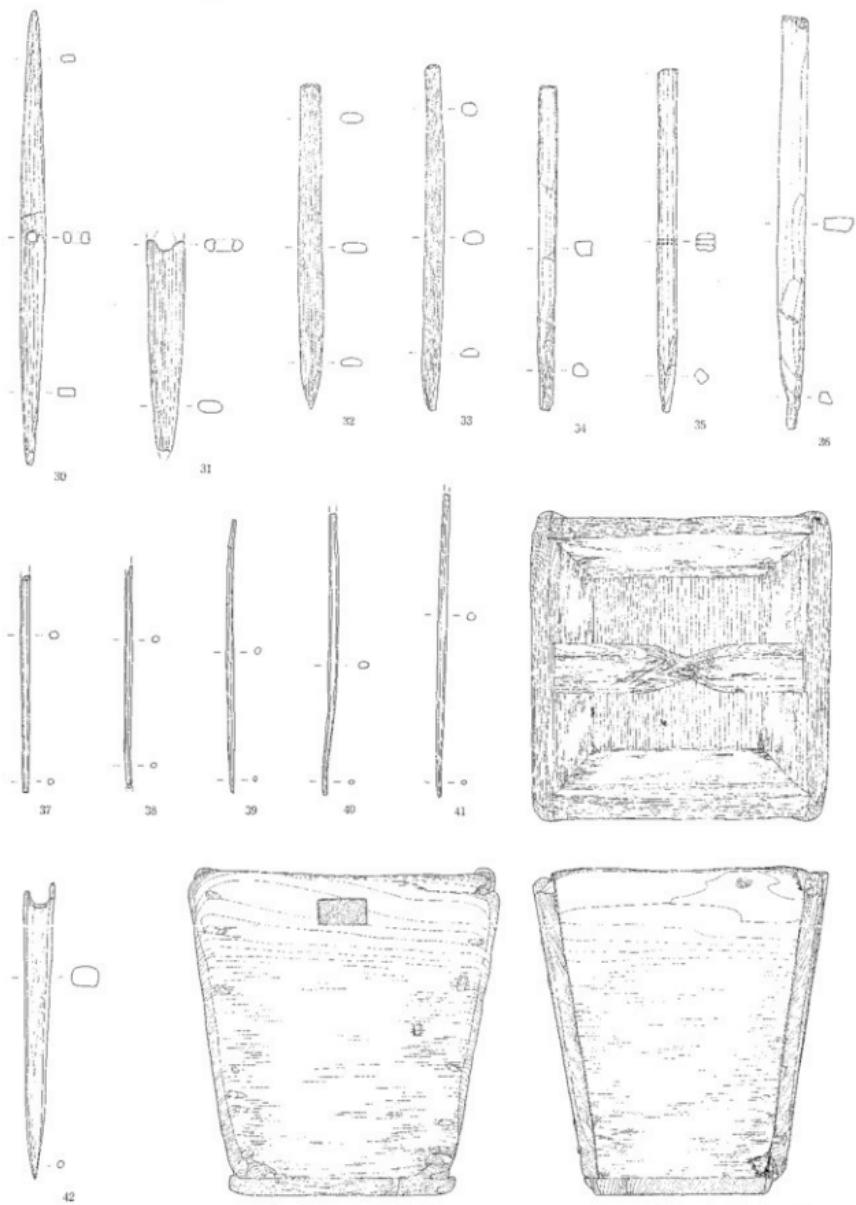


第37図 遺構内出土遺物（木製品）



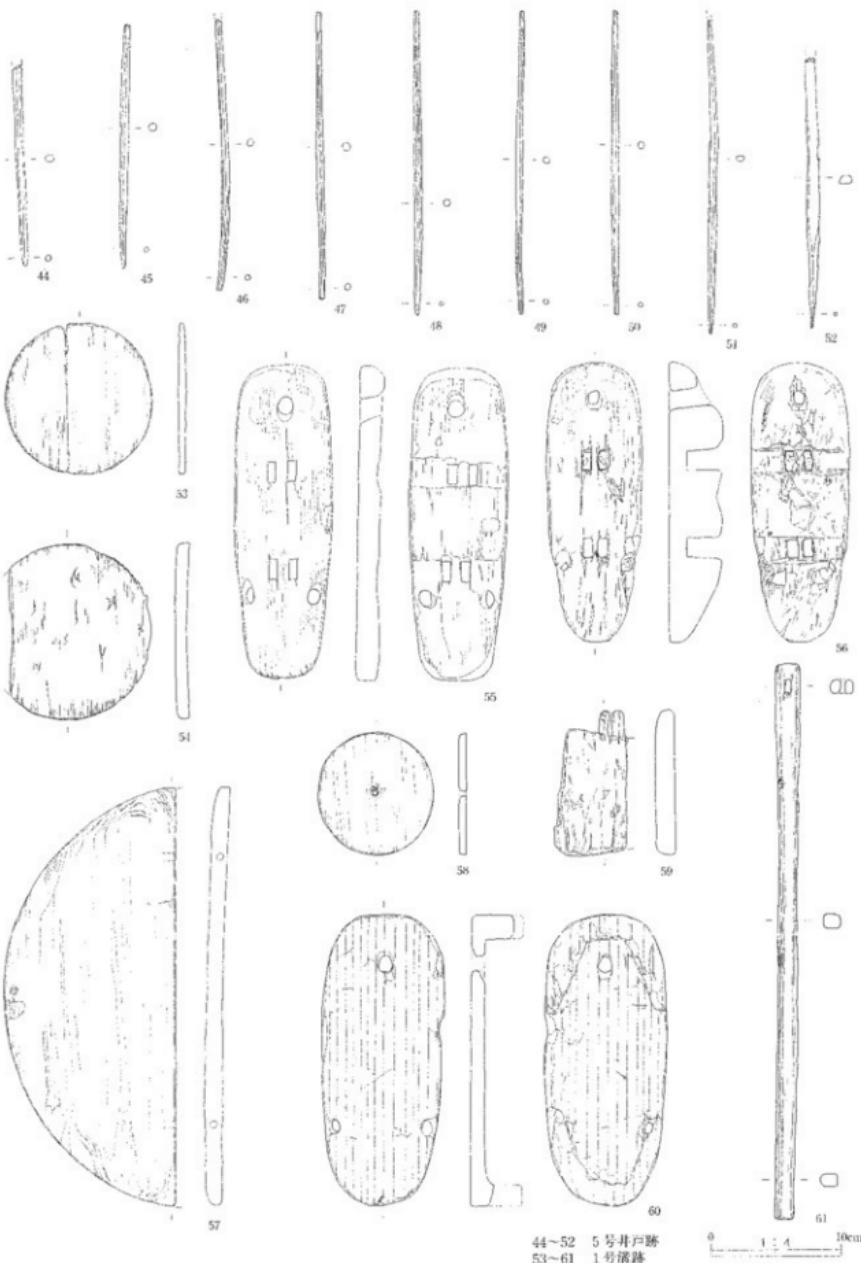
第38図 遺構内出土遺物（木製品）

0 1 4 10cm

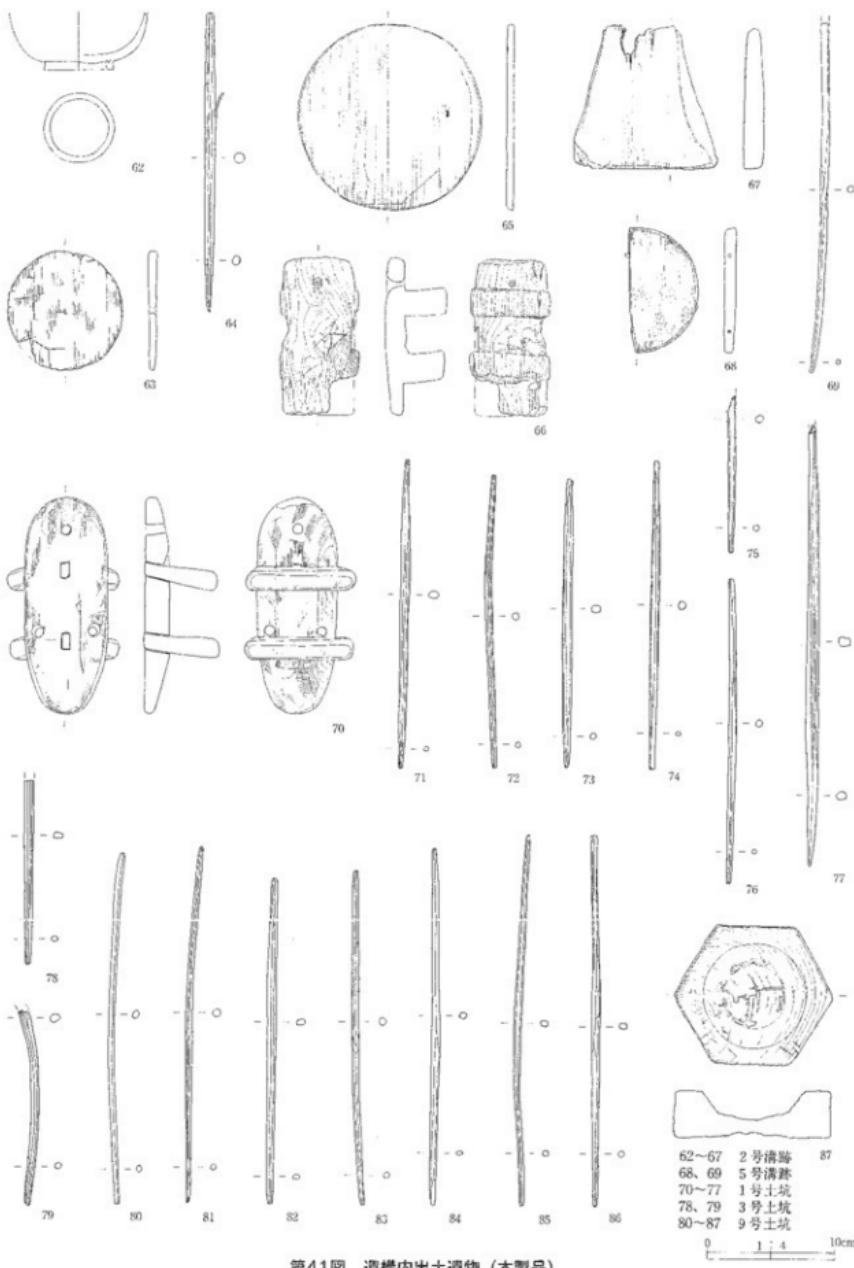


第39図 遺構内出土遺物（木製品）

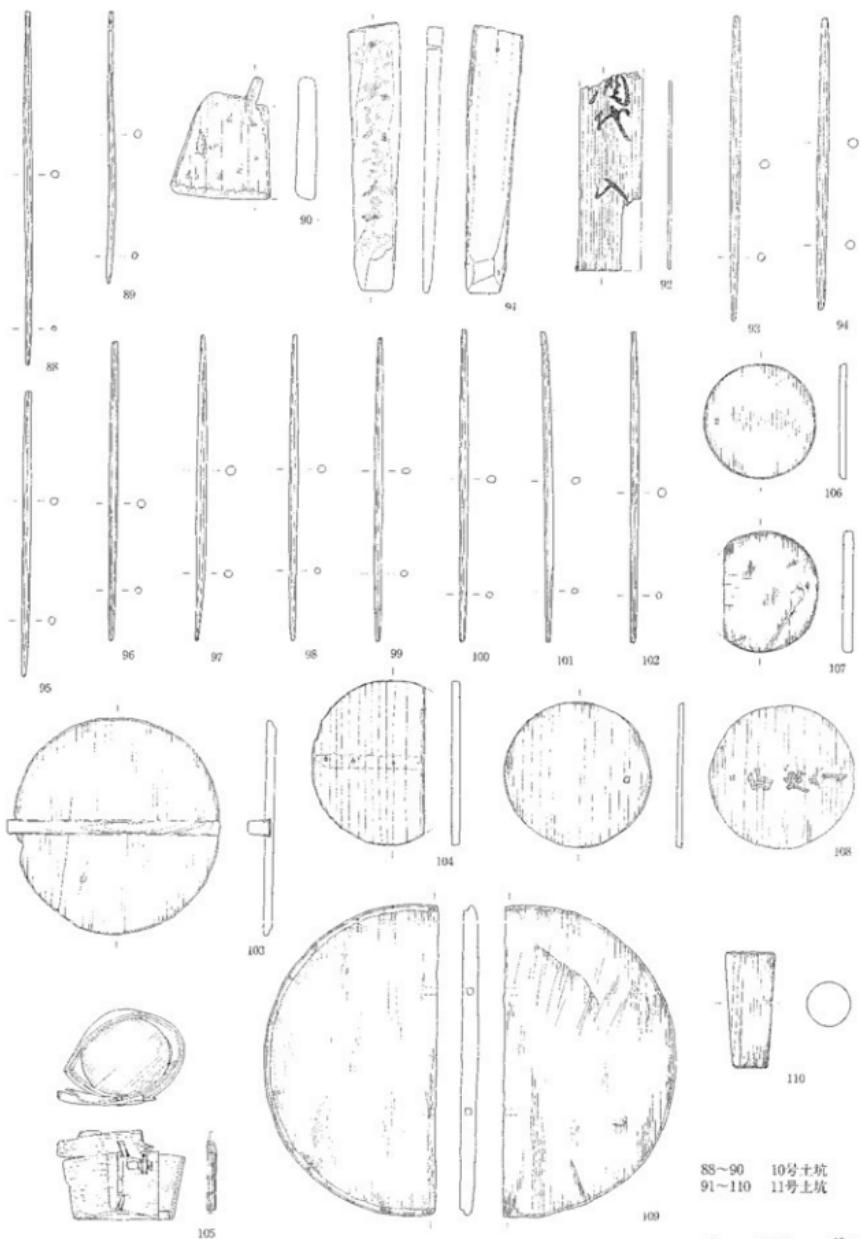
0 1 : 4 10cm



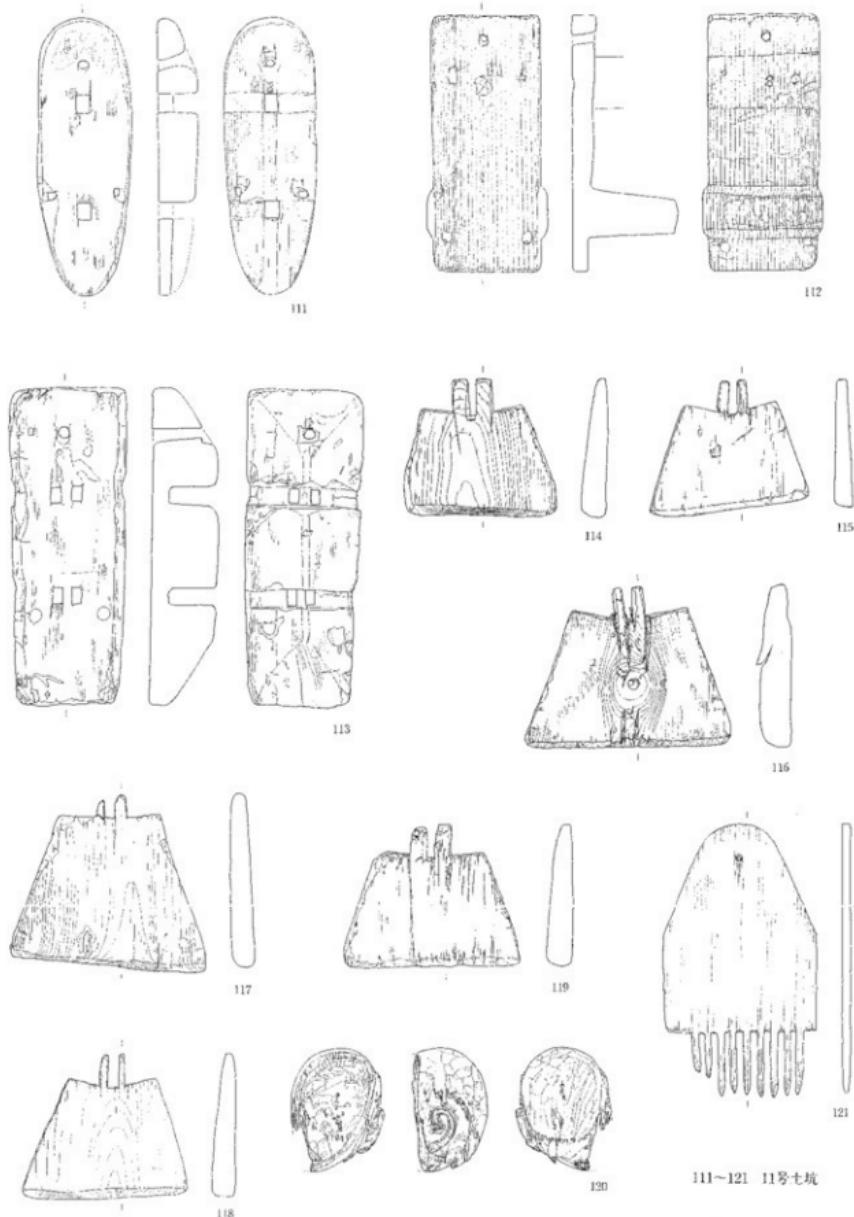
第40図 遺構内出土遺物（木製品）



第41図 遺構内出土遺物（木製品）



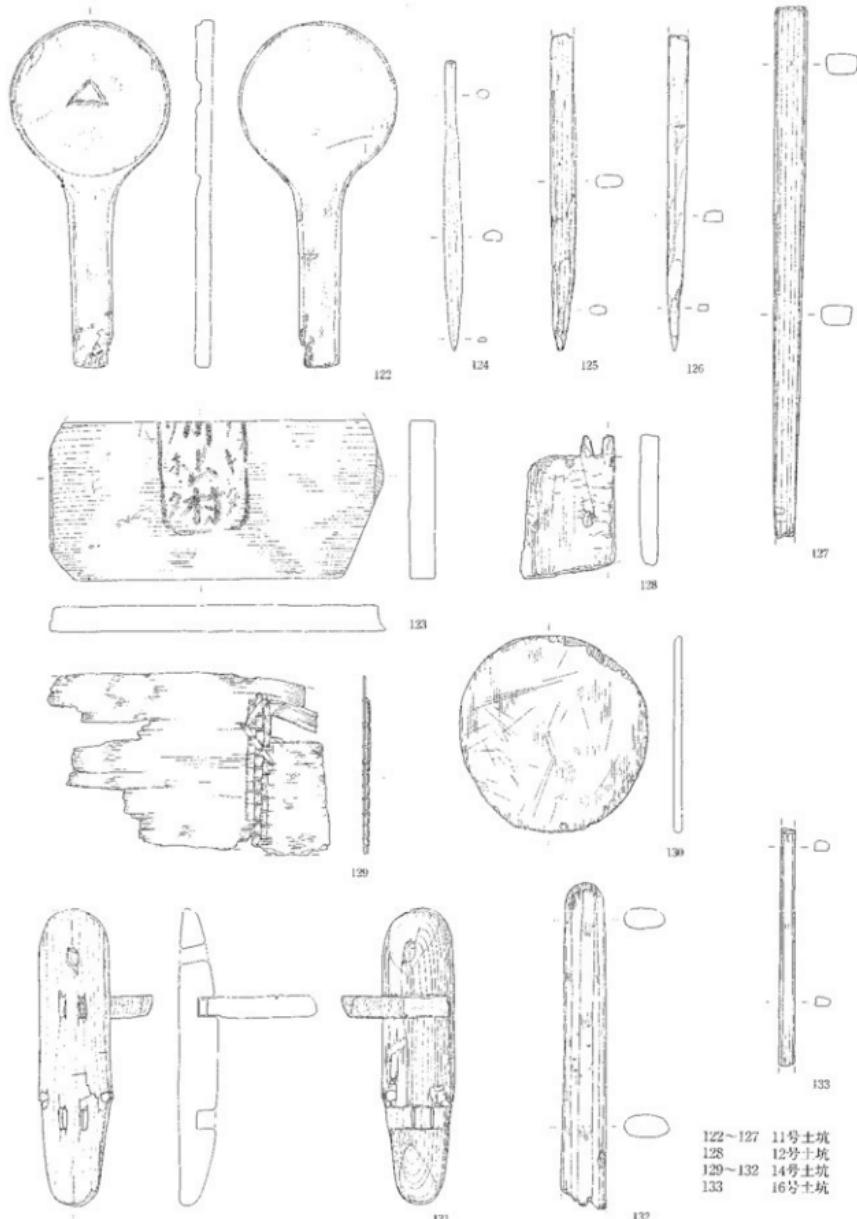
第42図 遷横内出土遺物（木製品）



111~121 11号土坑

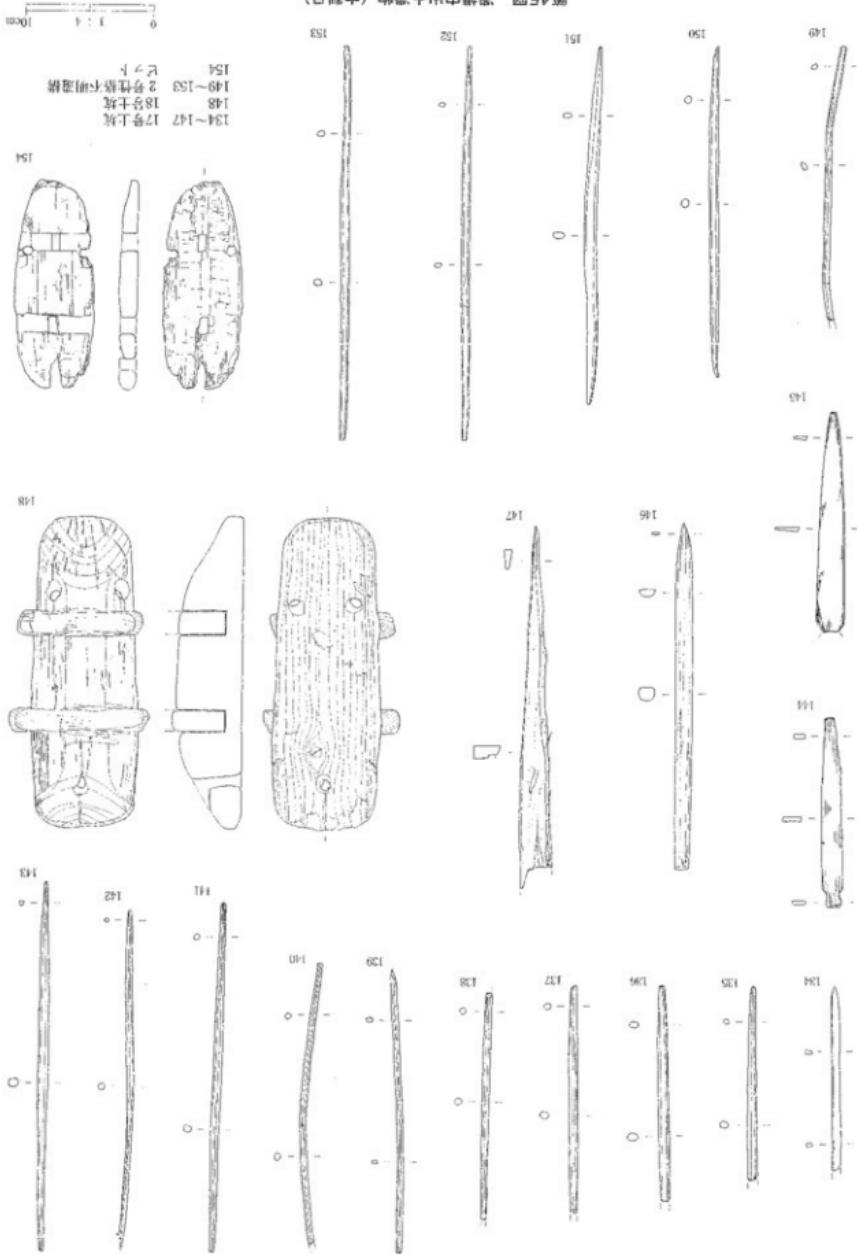
第43図 遺構内出土遺物（木製品）

0 1 : 4 10cm



第44図 遺構内出土遺物（木製品）

第45図 遺構内出土遺物(木製品)



(皿類) 138は丸皿(小皿)で、文様は不明。蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台無釉である。139はいわゆる濁し手の白色を呈する白磁皿で、ロクロ型打成形により牡丹折枝文を陽刻している優品である。裏底にハリ支え痕がある。

(碗類) 140は小碗で、くずれた文様は不明である。141は小瓶で竹文を染付けている。

(陶器) 142は肥前系陶器(唐津系)で、143は産地不明である。

(鉢類) 142は鉢で、内側面に鉄釉と薄い銅緑釉を掛け分けし、蛇ノ目釉剥ぎを施している。外側体部下半から高台付近は露胎となっている。

(壺瓶類) 143は陶器の瀬徳利で、緑色の釉と白色土の筒描きにより笠文を描く。

表様・表土出土遺物

陶磁器(第47~51図144~188、図版22~25)

157、159は表様で、その他は表土出土である。

(磁器) 144~170は磁器である。144~149、153~154、156~161、165、168、169は肥前系磁器染付である。155は瀬戸美濃系磁器染付である。162~164は産地不明の磁器染付である。150~152は肥前系磁器白磁、166、167、170は肥前系磁器色絵である。

(皿・鉢類) 144は丸皿(小皿)で内側面に龍と飛雲文を描き、裏文様は唐草文である。蛇ノ目凹形高台である。145は丸皿(小皿)で、山水文を染付けている。146~148は丸皿(五寸皿)である。146は内側面に雪の輪文と樹木文、147は雪の輪文と松文、148は割菊文を染付けている。各々見込みに文様があるが、欠損により不明である。146には裏底にハリ支え痕がある。149は輪花皿(小皿)で山水文を描き、口紅を施している。150~151は貝殻状に型押成形された白磁紅皿である。153、154は小碗である。153は草花文、154は笠文を染付けている。155は端反り形の小碗で、外側面の下に菊文、見込みに草花文を染付けている。165は染付鉢である。生掛け焼成で、内側面に花弁状の彫り込みをして、見込みに銀杏葉三方削文を描く。

(碗類) 156~161は丸碗である。156、157は外側に雪の輪と草花文、158は竹文、159は紙摺りの花文と草花文、160は雷文と草花文、161は草花文を染付けている。156は裏底にくずれた「済福」、158は見込みに粗雑な手描き五弁花文を染付けている。

(蓋類) 162~164は碗の蓋である。162はよろけ繪文を染付けている。163は西洋の酸化コバルトを用い、鶴と菊の文様を紙摺りしている。164は千鳥と人物文及び菊割文帯を染付け、「福定製」の銘がある。

(壺瓶類) 166、167は色絵油壺である。上絵はかなり剥落している。167は丸に花文を描く。

(香炉) 168は染付筒型香炉の底部である。

(仏飯器) 169は仏飯器で、線描きの蛸唐草文を染付けている。

(色絵人形) 170は大型の色絵人形で、衣袋の頭部と考えられる。口と肩の後ろに赤色の絵の具が認められる。

(陶器) 171~177、180~188は陶器である。171~175は肥前系陶器(唐津系)である。176、177、186は在地の白岩・寺内窯産と思われる。182も肥前系の可能性があるが、その他は産地不明である。

(皿・鉢類) 171は鉄釉溝縁皿で、見込みと高台付近には釉が掛かりきらず、露胎となっている。砂目積み痕がある。172は鉄絵丸皿で、灰オリーブ色を呈する灰釉を掛け、内側面に鉄釉で文様を描いている。173は銅緑釉丸皿(五寸皿)で、内側面に施釉する。172、173とも蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台付近は露胎

である。174は刷毛目文鉢である。外側面に白化粧土により刷毛目を描き、口縁部には鉄軸と銅線軸を掛け分けている。内側面と外側面の下半には鉄軸を粗く刷毛塗りする。176は叢灰釉鉢で灰白色の釉を掛けている。

(碗類) 175は灰釉小碗で、釉は灰色を呈し細かい貫入があり、豊付のみ露胎となっている。

(蓋類) 177は上瓶・急須の蓋であり、白化粧の上に透明釉を掛けている。

(灯火具) 180は灯盞式の受付皿である。鉄軸掛けで、底部回転糸切り無調整である。

(擂鉢) 181～185は擂鉢である。全体に鉄軸が塗られているが、181、183、184は豊付のみ無釉としている。

(その他) 186は窯道具の脚付ハマである。187は不明製品である。188は陶胎染付の便器であり、西洋の酸化コバルトとを用い草花文を染付けている。

土器・土製品 (第50、51図178、179、189、図版24、25)

(灯火具) 178、179はひょうそくで、素焼き上師質である。178は底部回転糸切り無調整である。179は底部に釘穴がある。

(須恵器) 189は古代の須恵器壺の胴部破片であり、外面に格子目状に叩き痕、内面に同じ凹状の當て具痕がある。

錢貨 (第85図11、図版24)

11は表探で、銅錢の元豐通寶（北宋、初鑄1078年）である。錢厚が薄く錢文も不鮮明で、錢容から模鑄錢の可能性がある。

木製品 (第87～89図160～188、図版62～64)

160は木簡で、薄い板材の片面に「第一□□□□」の墨書が認められる。161、162は椀である。161は底部からほぼ垂直に立ち上がり、赤色漆が塗られている。162は底部から湾曲しながら立ち上がり、黒色漆が塗られている。163は木杓子である。板状で、身の部分が半円状に加工されている。164～173は箸である。一端が欠損しているものもあるが、両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。174、175は折敷である。いずれも木釘を打った小孔と木釘が認められる。174は方形に加工され、175には絵を描いた墨書が認められる。176は蓋で、栓をするための孔が穿たれている。中央部断面に小孔が認められることから2枚の材を合わせて加工したと考えられる。177～181は容器底板である。177～180は小型であることから柄杓の底板と考えられ、177には小孔に木釘が打ち込まれている。178には樹皮が縫じ合わせをするように取り付けられている。181は梢円形をなし、下面に長方形の割りが認められる。182～187は下駄である。182～184は逆齒下駄、185～187は差歛下駄で、差歛下駄の歯は認められない。182は小型で、183、185には漆が塗られている。188は下駄である。一本造りで板状をなす。緒穴が6個認められ、緒穴部分の側面が抉るように彫られている。

第Ⅱ層出土遺物

陶磁器 (第52～68図190～352、図版25～37)

(磁器) 190～320は磁器である。

(皿・鉢類) 190～203は染付丸皿（五寸皿）である。190、193～203は肥前系で、191は在地の寺内窯産の可能性がある。その他は產地不明である。190は内側面に沢瀉文、裏文様は松葉文、191は内側面に沢瀉に蝶文、裏文様は源氏香文を染付けている。192、193は内側面に牡丹花唐草、裏文様は唐草文、見込みには手書き五弁花文を染付けている。裏底に192は二重方形枠内に「渦福」、193は「筒江」の銘がある。194には裏底にハリ支え痕がある。195は内側面に花唐草文、見込みにコンニャク印判の五弁花文を染付け、蛇ノ目釉剥ぎを施す。196～199は裏文様が唐草文で、見込みにコンニャク印判の五弁花文を染付けるタイプである。内側面には196が山水文、197が花唐草文、198、199が草花文を染付けている。裏底に196、197はくずれた「大明年製」銘、198、199は雑な「渦福」銘がある。200～203は見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施すタイプの丸皿（小皿）である。200～202は内側面に二重格子文を染付けている。203は草花文を染付け、高台無釉である。204～206は肥前系青磁丸皿（五寸皿）で見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台無釉である。207は產地不明の染付皿で、内側面に草花文を染付け、高台内に「□歳十二月□」と判断不能の墨書がある。208は染付皿で、裏底に丸枠に「寿福」合字の銘があり、肥前長吉窯の製品と考えられる。209～213は肥前系染付中皿、深皿である。209は中皿で、内側面に草花文、見込みにコンニャク印判を染付け、蛇ノ目釉剥ぎを施す。210は深皿で内側面に葉文を染付け、蛇ノ目釉剥ぎを施す。211～213は中皿で、内側面に211は鷺文、212は花唐草と柴垣に草花文、213は水鳥文と裏底に「渦福」を染付けている。213には漆錆ぎ痕がある。214は中国漳州窯系の呉須染付折線皿である。内側面に牡丹文と宝文、見込みに宝文、外側面に宝文と草花文など多様な文様を染付けている。高台周辺に砂粒が粗く付着する。215は肥前系白磁皿であり、型打成形により草花文を陽刻している。216～223は染付輪花皿（小皿）である。217～223肥前系で、216は在地の寺内窯産と思われる。218～220山水文、221は草花文、222は波に千鳥文、223は若松に鶴文を染付けている。217～220は口絵を施している。219、221には焼断ぎの痕があり、219には「天モ」「セテ」、221には「三つ」という焼錆印がある。224～226は肥前系の糸切細工成形による染付変型小皿である。224は木瓜型で、内側面に草花文と墨彈きによる波文、見込みに四弁花文、裏文様に花唐草文を染付けている。225、226は扇型に山水文を染付けている。227は型打成形の方形皿で、山水文を染付ける。釉に貫入が見られ、呉須の発色もにぶい。產地不明である。228は肥前系色絵変型皿である。乳白色の地に赤・緑・青・黄などの絵具で牡丹唐草文を染付けているがかなり剥落している。漆錆ぎ痕がある。229、230は肥前系白磁紅皿、231は色絵紅皿である。229は型押し成形による貝殻型である。230、231は丸形である。231は赤色の絵具により羽與板と羽の文様を染付ける。

(碗・小杯類) 232は白磁のミニチュアの碗である。376の仏像と共に作して出土した。233～238は染付小杯である。233、234、237、238は肥前系であり、235は產地不明、236は中國産の可能性がある。233は筆文、234は花草文、235は人物文、236は竹文と漢詩文、237は草文、238は筆文を染付けている。236は裏底に「道光年製」銘があり、焼錆ぎ痕と焼錆印の「仙」がある。239～248は染付小碗である。239～242は丸型、243～248は端反型である。239～242は肥前系、243～247は瀬戸美濃系、248は產地不明である。239は唐草文、240は草花文、241は梅花散らし文、242は梵字文、243は源氏香文と葵文、244は渦文、245は花唐草文、247は山水文、248は草花文を外側面に染付ける。246は内外面に仙芝文を染付ける。241～247には見込みにも文様があり、241は梅花文、245、248は草花文、247は谷川文を染付ける。その他は文様が不明である。243～246は全体に濃くぼんやりとした染付である。241には焼錆ぎ痕がある。249～265は染付丸碗である。254は產地不明で、その他は肥前系である。249は外側面に精緻な花唐草文、見込みに手書きの

五弁花文、裏底に「大明成化年製」銘を染付ける優品である。250は外側に菊花文と唐草文、裏底に「大明成化年製」銘、251は見込みに菊花文、252は外側に二重網目文、内側に一重網目文と見込みに菊花文、裏底に一重方形枠にくずれた「渦福」銘、253は外側に一重網目文を染付けている。254は西洋の酸化コバルトを用い銅版転写により松葉文様を染付けている。255は外側にくずれた山水文、256は草花文、257はコンニャク印判で柄に花文を染付けている。258には漆巻き痕がある。258は外側に紅葉文、259は丸文に紅葉と草花文で、紅葉の葉のみコンニャク印判で染付けている。260は外側に雪の輪に梅樹文、261、262は雪の輪に草花文、263は丸文に菊花文、264は丸文に格子目文、花文を染付けている。264、265は外側面と見込みに梵字文を染付けている。裏底に258は「大明年製」銘、259～262は極めて簡略化した「渦福」銘、263は一重方形枠に「渦福」銘がある。266～269は染付端反碗である。268は瀬戸美濃系、269は肥前系と考えられる。その他は産地不明である。266は外側と見込みに筆文を染付けている。焼巻き痕と焼錆印「中小」がある。267は外側に宝珠文とのし文、見込みに井桁菱、268は花文と氷裂文、269は内側面に草花文を染付けている。270は肥前系青磁染付端反碗である。外側青磁で内側に山水文を染付けている。271、272は染付広東碗である。271は外側と見込みに山水文、272は外側に山水文、見込みに「壽」字文を染付けている。271は在地の寺内窯産、272は肥前系と思われる。273は染付蓋物の身である。じんじ仙芝文を染付けるが産地不明である。焼巻き痕がある。274は肥前系青磁染付丸碗である。外側青磁で、口紅を施し、見込みにコンニャク印判の五弁花文を染付けている。275、276は肥前系白磁である。275は小坪、276は碗である。277、278は肥前系色絵である。277は紅猪口で、赤色で海老文様を描く。278は小碗で高台近くの獅目と宝珠の輪郭を染付け、朱色地に剥落した黄色で花唐草を描き上絵付けしている。

(蓋類) 279～289は染付蓋である。280、284は肥前系、281、286、287是在地の寺内窯産、その他は産地不明である。279は壺物の蓋で、宝文と「壽」字文を染付けている。280は蓋の蓋と考えられ、山水文を染付けている。281、282は広東碗の蓋で、281は外側に山水文、裏側天井に葵に千鳥文、282は外側に葉の文様を染付けている。283は端反碗の蓋で、外側に鳥と梅花文、裏側に雷文帯と宝珠文、つまみ内側に「壽」字で染付けている。284は青磁染付蓋付碗の蓋で、外側が青磁で、裏側に四方摺文帯と鳳凰文を染付けている。285～288は蓋物の蓋である。285は菱形竹に梅樹文、286は線描きのみじん唐草文、287も線描きの龍に宝珠文を染付けている。288は西洋の酸化コバルトを用い、スタンプにより葉とつる草文を染付けている。285には漆巻き痕がある。

(壺瓶類) 289～295は肥前系染付瓶類である。289、293は小瓶である。289は外側に草花文と華文、291は草花文、293は線描きの鯉唐草文と松葉文294も線描きの鯉唐草文を染付けている。295は御神酒徳利、草花文を染付けている。296、297は肥前系染付油壺である。296は草花文を染付けている。

(水滴) 298、299は肥前系色絵である。298は型押し成形により、獅子と牡丹文を陽刻し、白磁に瑠璃釉と鉄釉を掛け分けしている。299は鳥型水滴と思われ、赤色の絵具で上絵付けをしている。

(瓶水入) 300は肥前系鉄釉瓶水入で、鉄釉の搔き落しにより筆文を描いている。内側には透明釉を掛け底部は露胎である。

(段重ね) 301は色絵の段重ねで、上段に青色を染付け、下段に黄色を上絵付けしている。産地不明で近代以降のものである。

(仏花瓶・香炉) 302～304は肥前系青磁仏花瓶である。302、303は釉色調がオリーブ灰色系、304は明るい緑灰色系である。305、306は香炉である。305は陶胎染付であり、白絵土の上に山水文を染付けている。在地の寺内窯製品の可能性がある。306は肥前系青磁香炉である。三段の状線に獸脚が付く。釉は明緑灰色を呈し、高台付近は露胎となっている。

(高脚壺・仏飯器) 307は肥前系色絵の高脚壺である。赤色と緑色の絵具で草花文を描いている。308～311は肥前系染付仏飯器である。壺部外側に308、309は笠文、310は唐草文、311は雨降り文を染付けている。

(火入) 312、314は火入である。312は肥前系染付の小型の火入である。型打成形により、人物文と格子日の文様を陽刻し、大まかに呉須を染付け、透明釉を掛けている。313は西洋の酸化コバルトを用いた雷文帯と山水文を染付けた大型の火入である。産地は不明である。314は肥前系青磁の火入である。釉は明緑灰色を呈する。蛇ノ目凹形高台であり、高台には薄く鉄錆が塗られている。

(人形) 316～318は色絵の人形である。315～317は肥前系、318は産地不明である。315は人形の手であり赤色の上絵付けが部分的に認められる。316は鳥型の人形が水滴の可能性もある。濃い赤色と緑色の絵具で上絵付けしている。317は青磁赤絵の人形である。318は背面と底部に穴がある用途不明の人形である。

(その他) 319は磁器質の不明製品で、何かの蓋の可能性もある。320は戸車であり、車輪面のみ白色釉が施釉されている。

〔陶器〕 321～382は陶器である。

(皿・鉢類) 321～328は皿である。321は産地不明、322～328は肥前系（唐津系）である。321は灰釉小皿で、明黄褐色地の上から灰白色の釉を内側面に掛けた。外面は露胎で高台は削り出されている。322は灰釉丸皿（五寸皿）で、釉は灰オリーブ色を呈し、高台付近は露胎となっている。323～325は銅線釉皿で323は丸皿（小皿）、324と325は丸皿（五寸皿）である。内側面に銅線釉、外側面に透明釉を掛け、蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台付近は露胎となっている。326は京焼風陶器の皿であり、浅黄色の地に透明釉を掛け全体に細かい貫入が入る。高台付近は露胎で、底部に「？」の墨書きがある。327は掛け分け折縁皿で、内側面に銅線釉で鉄釉を掛け分けている。328は鉄釉折縁皿で内側面に鉄釉を掛けている。327、328とも外側面に透明釉を掛け、高台付近は露胎となっている。329～331は鉢である。329、330は肥前系（唐津系）で、331は在地の寺内窯もしくは白岩窯産と思われる。329は京焼風陶器鉢である。浅黄色の地に、山水文を染付け、内外に透明釉を掛け細かい貫入が入る。高台付近は露胎で、裏底には「福次」の印銘と浅い円刻がある。330は刷毛目文鉢で、内側面に白化粧土により液状の刷毛目文を描いている。331は八角鉢で鉄釉を塗った上から、内外面に薫灰釉を厚く重ね掛けしている。

(碗類) 332～339は碗類である。332は京信楽系、335～337は肥前系（唐津系）である。333是在地の寺内窯製品の可能性がある。334は産地不明である。332は灰釉丸碗で、灰色緻密の胎土にやや透明感のある灰釉を内外面に掛け、細かい貫入が入る。高台豈付のみ無釉である。333は灰釉端反小碗で、灰釉の上に筒描きで螺文を描いている。334は端反碗で、白色化粧土の上から口縁部に雨降り状に緑色釉を掛け、さらに透明釉を掛けている。335～337は京焼風陶器碗である。335は外側に、336と337は見込みに山水文を染付け、内外に透明釉を掛け細かい貫入が入る。高台付近は露胎である。336は裏底に「柳金」の印銘と円刻がある。337は裏底に「マロシ」の墨書きがある。338は刷毛目文碗で、内外面に白化粧土で刷毛目文を描き、透明釉を掛けける。339は灰釉碗で、内外面ににぶい黄橙色の釉を掛け細かい貫入が入り高台付近は

露胎である。厚手のどっしりとしたつくりである。

(蓋類) 340～351は蓋である。340、343～348、351は在地の寺内窯産の製品またはその可能性があるものである。342は信楽産の可能性がある。その他は産地不明である。340～350は土瓶・急須類の蓋である。340は上面に青緑色の釉を掛けた。341は万古焼風の焼き縮め陶器で、鐘状のつまみが付き、薄く火拂が掛かる。342は灰白色の地に透明釉を掛け、その上に草花文を色絵付けしている。343は白化粧の上に鉄釉で絵付けし、透明釉を掛けている。344と345はオリーブ灰色の釉の上から簡描きで文様を描いている。345は裏側天井部に「明□□御便□□□御用」の墨書きがある。346は灰オリーブ色の灰釉、347は海皇釉、348は鉄釉を上面のみに掛けている。349は鉄釉に掛けた後、搔き取るよう斜格子を描いている。347～349は下面底部に回転糸切り痕を残す。350は平蓋で、上面に灰白色の釉を掛けた。つまみは欠損している。351は銅蓋で、内外面に灰釉を塗っている。

(壺瓶類) 352～364は壺瓶類である。355は瀬戸美濃系、352、353は在地の寺内窯もしくは白岩窯産の可能性がある。357、361～364は寺内窯産であり、それ以外は産地不明である。352は小瓶で、外面に鉄釉、さらに上半に海鼠釉が重ね掛けされている。353は瓢箪型壺利の上半部で海鼠釉掛けである。354は赤褐色の薄い鉄釉が全体に塗られた壺利である。型押しした衣袋の文様があり、頸部が欠損している。355は鉄釉掛けの瓶で、仏花瓶となる可能性もある。356は鉄釉掛けで把手付の瓶である。357は船釉掛けの花瓶の下半部と思われる。358、359は外面全体に薄い鉄釉を塗った壺類と思われる。360～364は小壺である。すべて底部付近を除く内外面に施釉されており、底部に回転糸切り痕を残すタイプである。360は鉄釉、361～363は灰釉が掛けられている。

(瓶入) 365～367は瓶入である。在地の寺内窯産と考えられる。底部を除く全体に灰白色の釉が掛けられている。366は底部全体に365、367は外周のみにケズリ調整を施し、回転糸切り痕を残す。

(鍋類) 368は行平鍋である。内外面にオリーブ灰色を呈する灰釉を施釉している。把手部に型押しによる「壽」字が認められる。産地は不明である。

(灯火具) 370～375は灯火具である。370、375は在地の寺内窯産の可能性があり、その他は産地不明である。370、373は灯蓋式の受付皿である。370は暗緑色の灰釉、373は鉄釉が底部を除き掛けられている。371、372、374、375は有脚のひょうそくで、底部に釘穴がある。375のみ鉄釉が掛けられており、その他は土師質に近い素焼きである。374は灯心を立てる部分が欠損している。

(仏像) 376は陶器の仏像である。

(その他) 377は窯道具の脚付ハマである。

(擂鉢) 378～391は擂鉢である。378は越前産の可能性があり、その他は産地不明である。378は無釉焼締め、379～381は内外面に鉄釉が塗られている。381は重ね焼き痕が明瞭に残り、378～380は使用による内面の磨滅が日立つ。

(大甕) 382は大甕である。外面に鉄釉が掛けられている。内面に白色の付着物があり、便壺としての使用が想定される。

土器・土製品（第68～70図383～394、図版37、38）

(須恵器) 383は古代の須恵器台付环の底部である。底部回転ヘラ切りで、台取り付け後周辺にナデで調整を施している。

(かわらけ) 384は非クロコロ製の手づくねかわらけである。内面底部に不定方向、口縁部に横方向のナデで調整を施す。385はロクロロ製のかわらけである。底部回転糸切り無調整である。384、385とも煤状炭化物があり、灯明皿として利用されている。

(土風炉) 386～389は素焼き土師質の土風炉である。386は裏底に「天保六年□月吉日」、387は「□□四年□月七日□求え也」、389は「寛政六年寅二月吉日□□□□」の墨書きがある。在地の寺内窯産の可能性がある。

(火鉢) 390、391は素焼きで土師質の火鉢口縁部である。390はうさぎの飾りと花文の型押しし、391は菱型文の型押しによる文様がある。産地は不明である。

(土錘) 392～394は土錘である。393と394は大型で、焼成も堅緻で陶器質に近い。

瓦 (第81図5～8、図版48)

5は軒棟瓦である。瓦当の文様は3と同文様ではあるが異範の唐草文である。赤瓦で、釉が厚く掛かり極暗赤褐色を呈する。6は棟瓦の丸瓦部で、灰色を呈するいぶし瓦である。7と8は鬼瓦の一部である。ともに赤瓦であるが、7は紅柄水溶液を塗布して焼成したもので暗赤褐色を呈する。8は釉が厚く掛かり極暗赤褐色を呈する。

金属製品 (第84図2、3、図版50)

2は真鍮製もしくは銅製の毛抜きである。3は真鍮製もしくは銅製の煙管吸口部分である。煙管については、その形態等から3は古泉弘氏による煙管編年のⅣ期に該当すると考えられる。

石製品 (第82図1～6、図版49)

1～2は灰色の粘板岩製で方形を呈する硯である。3～6は凝灰岩製の砥石である。

銭貨 (第85、86図12～40、図版51、52)

全て銅錢である。12は永樂通寶(明、初鑄1408年)、13は天禧通寶(北宋、初鑄1017年)、14～40は寛永通寶である。銭文の書体等から21～26、30～32、34は古寛永(初鑄1636年)、背面に「文」の字がある29、35、40は新寛永の「文錢」(初鑄1668年)、17～20、27、36～39は新寛永(初鑄1697年)の分類に該当する。新寛永のうち36は、「永」の字の末画が大きく跳ね上がる書体の特徴から、秋田市川尻の銭座で錢鑄された秋田川尻錢(初鑄1738年より1745年にかけて鑄錢)と判断される。28、33は欠損、劣化により銭文が不鮮明で分類が困難である。13～28は紐は腐食していたが縫(錢差)の状態で一括で出土した。

木製品 (第89図189～194、図版64)

189は箸である。両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。190、191は容器底板である。190は大型で、中央部断面に小孔と木釘が認められることから2枚の材を合わせて加工したと考えられる。191は小型であることから柄杓の底板と考えられる。192、193は下駄である。192は小型の差歎下駄であるが、歎は認められない。193は一本造りで、前後の周縁を残して削って歎としているものである。194は刷毛である。毛を挿むために板を削って加工しているが、柄の部分は1枚である。

第三層出土遺物

陶磁器 (第70～75図395～442、446～448、図版38～43)

〔磁器〕 395～419は磁器である。

(皿類) 395～406は肥前系の皿である。395は染付紅皿である。外側面に筆文を染付けている。396～398は染付丸皿(小皿)である。内側面に396は松葉くずれ文、397は草花文を染め付けている。401は丸皿(五寸皿)葡萄蔓草文を染付けている。399は青磁丸皿(小皿)である。400は白磁丸皿(小皿)である。396～400は全て内側面に蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台無釉のタイプである。402、403は青磁皿である。402は中盤で、緑灰色の釉を全体に塗り、高台壘付にのみ鉄錆を塗る。403は脚付の大皿で、内側面にヘラ彫りで本の葉文様を描く。明綠灰色の釉で骨付のみ無釉である。404は染付輪花皿(五寸皿)で、見込みにザクロ折枝文を染付けている。405は染付変型小皿である。糸切組工成形で、内側面に松文を染付ける。406は肥前系白磁紅皿である。型押しによる貝殻型である。

(碗類) 407は瀬戸美濃系染付小碗である。外側に源氏香文を染付け、口紅を施している。408～411は肥前系染付丸碗である。外側に408は筆文様、409は草花文、410は雪の輪に草花文、411は雨降り文を染付けている。412は肥前系白磁丸碗である。乳白色を呈し、口紅を施している。

(鉢類) 413は肥前系染付鉢である。外側面に草花文、裏底は二重方形枠内に「満福」銘を染付ける。

(蓋類) 414は肥前系染付蓋物蓋である。外側面に草花文に蝶を染付けている。焼継ぎ痕と焼継印がある。

(壺瓶類) 415は肥前系染付小瓶で、外側面に草花文を染付けている。416は肥前系白磁の小型油壺である。乳白色の釉が掛けられ、底部付近は露胎である。417は肥前系染付唾壺と考えられる。外側面に波文様を染付けている。

(水滴) 418は肥前系色絵の巻口型水滴である。赤色の絵具で上絵付けしている。

(鬱水入れ) 419は肥前系色絵の鬱水入れである。赤色と緑色の絵具で上絵付けし、口縁部に口紅も施している。

(陶器) 420～442、446～448は陶器である。

(花瓶) 420は瀬戸美濃系の瓶類の下半部と考えられる。白色の地に透明釉を掛け緑色の織部釉を流し掛けている。

(碗類) 421は肥前系(唐津系)小坏である。釉はオリーブ灰色で、底部は露胎で回転糸切り無調整である。

(皿類) 422～433は皿である。422～430、432、433は肥前系(唐津系)であり、431は瀬戸美濃系である。422は灰釉丸形の小皿であり、釉は灰白色で高台付近は露胎である。423は灰釉滲縁皿であり、釉は灰白色で高台壘付のみ露胎である。砂目積み痕がある。424～428、430は全て見込みに砂目積み痕があるタイプの灰釉折縁皿である。釉の色調は、424、426、427がオリーブ灰色、425、429が灰白色、428がにぶい黄橙色、430が黄白色である。424～427、429は高台付近が露胎となっており、釉が薄く安定している。428と430は壘付のみ無釉となっている。431は黄瀬戸の丸皿で、斑状に銅緑釉が掛けられ、全体に貫入が入っている。432は掛け分けの折縁皿で、内側面に銅緑釉と鉄釉を掛け分け、外側面に透明釉を掛けている。433は刷毛目文の中皿で、内側面に白化粧土により刷毛目を描き、その上から銅緑釉を掛けている。外側の下半には鉄釉を粗く刷毛塗りする。432、433とも蛇ノ目釉剥ぎを施している。

(鉢類) 434と435は肥前系(唐津系)の鉢である。434はいわゆる絵唐津の鉄絵鉢である。内側面に植物文を描き、その上から内外に透明性のある灰白色の釉を掛けている。435は刷毛目文鉢である。口縁部は溝縁状であり、内側面に白化粧土で波状の刷毛目文を描きその上から内外に透明釉を掛けている。見込みには砂目積み痕がある。

(碗類) 436~441は碗である。436、438~441は肥前系（唐津系）、437は京信楽系、442は在地の寺内窯産の可能性がある。436は刷毛目文碗で灰色硬質の地に白化粧土で刷毛目文を描き、高台豊付以外の全体に透明釉を掛けている。437は錫絵染付の碗である。灰白色で緻密な地の高台付近を除く内外に、灰白色の透明性のある釉を掛け、その上から外側に錫絵を絵付けしている。438、439は京焼風陶器の筒形碗であり、にぶい黄橙色の灰釉が施釉され細かい貫入が入っている。438は高台付近が露胎、439は豊付のみが無釉となっている。438は外側面に山水文を染付けており、裏底に円刻と「清水」の印刻がある。440は呉器手の灰釉碗であり、豊付以外ににぶい黄色の釉がかかり、全体に貫入が入っている。441は鉄釉掛けの玉縁碗であり、鉛色に近い釉が厚く掛かり、高台付近は露胎となっている。

(蓋類) 422は土瓶の蓋と考えられ、外側面に鉛色に近い鉄釉が掛かり、裏底は回転糸切り痕を残している。在地の寺内窯産の可能性がある。

(仏像) 446は陶製の小仏像である。

(擂鉢) 447は小型の擂鉢である。焼締めて全体に赤褐色を呈するが、口縁部にのみ鉄釉を薄く塗る。肥前系の可能性がある。

(壺) 448は大壺の口縁部から頸部である。無釉に堅敏に燒締められ赤褐色～黄橙色を呈する。信楽産の可能性がある。

土器・土製品（第75図443~445、449~451、図版42、43）

(灯火具) 443と444は素焼きで土師質のひょうそくある。444は裏底にすべり止めのためか線刻がある。445は灯蓋式の受付皿で、素焼きで土師質である。

(かわらけ) 449~450はロクロ製のかわらけ小皿である。449と450は底部に回転糸切り痕を残す。449と450は焼成堅敏で陶器質に近い。451は軟質である。450は煤状付着物が多く、灯明皿として利用されている。

石製品（第82、83図7~11、図版49）

7は方形を呈する粘板岩製の温石と考えられる。8は暗灰色の粘板岩製で、方形を呈する硯である。9は黒色の粘板岩製で、楕円形を呈する硯である。10、11は凝灰岩製の砥石である。

銭貨（第86図41、42、図版52）

41、42は銅銭の寛永通寶である。銭文の書体等から41は古寛永（初鑄1636年）の分類に該当し、42は劣化により銭文が不鮮明で分類が困難である。

木製品（第90、91図195~213、図版65、66）

195、196は曲物である。195には底板が認められる。196は側面に孔が認められることから柄杓と考えられる。197は蓋である。上面に小孔が2列認められることと変色していることから、2本のつまみが付くものである。198~200は容器底板である。全て小型で、199、200は円形に、198は楕円形に加工されている。201~208は下駄である。201~204は連歎下駄で、台部が長方形に加工され、204の緒穴の両側には指圧痕が認められる。205~207は差歎下駄で、台部が205は長方形、206は楕円形で、207は隅丸長方形に加工されている。208~木造りで板状に加工され、隅丸長方形の台部の側面から斜めに緒穴が穿たれています。209は串である。一端が尖るもので、断面形は薄鉢状をなす。上部に小孔が穿たれ、木釘が打ち込まれていて。210は横樋で、一本造りである。後で台として用いられたと考えられ、身の部分に大きな刻みの跡が認められ、火を受けていることから全面が弱く炭化している。211は楔である。木片を片面から削って片

刃状に加工したものである。212、213は用途不明用具である。212は板状で中央部の幅が広く加工されているものである。213は下方が尖り、上面がくぼむものである。断面形が「V」字状で、独楽に近い形状をなす。

第三層下層出土遺物

陶磁器（第75～78図452～480、図版43～45）

〔磁器〕452～471は磁器である。

（皿類）452～460は全て肥前系の皿である。452～454は染付丸皿で、452は（小皿）、453～454は（五寸皿）である。内側面に452は方形紙枠に山水文、453は草花文を染付けている。454の内側面は欠損によって文様は不明であるが、蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台無釉である。455は青磁丸皿（五寸皿）で、蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台無釉である。欠損しているが、456は染付小皿、457は染付中皿と考えられる。456は内側面に鹿と紅葉文、457は内側面に花唐草文と草花文、裏底に一重方形枠の角「福」銘を染付けている。457にはハリ支え痕がある。458は染付の中皿で、内側面にうちわ文様、外側面に山水文、裏底に「宣明年製」銘を染付けている。459は色絵の中皿で、内側面に草花と蝶文、外側面も草花文を赤・青・緑・黄色の絵具を用い上絵付けしている。460はロクロ型打成形による染付の花形皿（五寸皿）である。見込みは二重線内に草花文を染付けている。

（碗・小坏類）461～467、471は全て肥前系の碗・小坏類である。461は染付小坏である。外側に筆文を染付けている。471は高台付きの小坏である。外側に宝文を染付けている。462～466染付碗である。462は丸形の小碗、463、465、466は丸碗、464は筒形碗である。462は外側に一重圓線と欠損により不明な文様、463は草花文、464は一重綱目文と裏底に「大明」銘、465は菊花文、466は梅樹文と見込みに花文様を染付けている。467は青磁染付の蓋付碗である。外側が青磁で、内側口縁部に文様、見込みに二重圓線と手描きの五弁花文を染付けている。

（蓋類）468は肥前系青磁染付の碗蓋である。外側が青磁で、つまみ内側には二重形枠に「簡江」銘を染付けている。内側面は四方襷文帯と見込みに菖蒲文を染付けている。

（壺・瓶類）469は肥前系磁器の染付瓶である。外側に二羽一対の鳳凰文と飛雲文を染付けている。疊付のみ無釉である。

（仏飯器）471は肥前系磁器の染付仏飯器で、外側にくずれた山水文を染付けている。

〔陶器〕472～480は陶器である。

（皿類）472、473は肥前系（唐津系）の皿である。472は灰釉折縁皿で、釉は灰オリーブ色で、体部下半以下露胎で砂目積み痕がある。473は掛け分け折縁皿で、内外面に薄い銅線と鉄釉を掛け分け、蛇ノ目釉剥ぎを施し、外側面に薄い灰白色の灰釉を掛けている。

（碗類）474は黒色の鉄釉を内外に掛け、外側面に簡描きをする碗である。高台付近は露胎である。产地不明である。

（蓋類）475は土瓶急須の蓋であり、草文を染付け透明性のある灰白色釉を掛けている。在地の寺内窯産である。

（灯火具）476は灯籠式の受付皿である。全体に鉄釉が塗られ、在地の寺内窯産の可能性がある。

（仏像）477は陶製の仏像（千手觀音像）である。

(擂鉢) 478、479は焼締め無釉の擂鉢である。478は堺・明石産の製品と考えられる。479は产地不明で、使用によってかなり磨滅している。

(珠洲系中世陶器) 480は珠洲系中世陶器の壺胴部破片である。外側に平行叩き目、内側に無文當て具痕がある。

土器・土製品（第78図481、482、図版45）

(土風炉) 481と482は素焼きで土師質の土風炉である。482は口の部分で、裏側に「□司」の墨書きがある。在地の寺内窯産の可能性がある。

瓦（第81図9、図版48）

9は棟瓦の丸瓦部である。紅柄水溶液を塗布して焼成した赤瓦であり、暗赤褐色を呈する。

石製品（第83図12～15、19、図版49、50）

12は粘板岩製の方形を呈する硯である。13、14は凝灰岩製の砥石である。15は礫岩製の不明製品で、孔が穿たれている。19は灰色の粘板岩製で方形を呈する小型の硯である。

金属製品（第84図4、5、図版50）

4は刀装具の小柄である。銅製で刃の部分は欠損しており、片側に型打ちによって陰刻されたと考えられる入り組んだ連続文様の装飾が認められる。5は真鍮製もしくは銅製の煙管吸口部分であり、部分的に金色の鍍金が認められる。

錢貨（第86図43～46、図版52）

全て銅錢である。43は真書体の治平通寶（北宋、初鑄1064年）である。錢厚が薄く錢文も不鮮明で、錢容から模鋳錢の可能性がある。44～46は寛永通寶である。錢文の書体等から46は古寛永（初鑄1636年）に、45は新寛永（初鑄1697年）の分類に該当する。44は劣化により錢文が不鮮明で分類が困難である。

木製品（第92、93図214～233、図版67、68）

214は箸である。両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径がある。215、216は曲物である。215には底板が認められる。216は側面に孔が認められることから柄杓と考えられる。217は蓋である。中央部につまみが付くもので、釘で固定している。218は栓で、上部が一回り大きく加工されている。219～223は容器底板である。219～221は小型であることから柄杓の底板と考えられ、219、221には刃物痕が認める。223の下面には3箇所に長方形の割りが認められ、上面には漆が認められる。224～232は下駄である。224は連歛下駄で、台部が長方形に加工されている。225～232は差歛下駄で、台部が231、232が長方形で他は隅丸長方形ないしは梢円形に加工されている。228、232には漆が塗られ、229、230、232は小壺である。前縁穴の両側に指圧痕が認められるものもある。233は用途不明木製品である。一端が反っていて、2箇所が突起状に加工され、孔が穿たれているものである。同形状のものを2本並べて台に乗せた様を想像させるものである。

第IV層出土遺物

陶磁器（第79、80図483～505、図版45～47）

〔磁器〕 483～496は磁器である。

(皿類) 483～488は全て肥前系の皿である。483は折縁形の染付小皿である。見込みに草花文を染付け、器面全体に細かい貫入が入る。484と485も染付小皿である。485は菊花形になると考へられる。484は内側

面に沢瀉文様、485は月とすすき（兎）の文様を染付けている。486は白磁丸皿（五寸皿）である。蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台無釉である。487は型打成形による染付変形皿で、方形もしくは菱形の皿である。内側面に山水文を染付け、全体に貫入が入る。488は糸切細工成形による白磁の変形皿で、木瓜形である。口紅を施し、変形高台で、裏底にはハリ支え痕がある。

〔碗類〕489～495は全て肥前系の碗である。489～492は染付丸碗である。489は外側面に一重網目文、490は草文と草花文、491は草花文、492はコンニャク印判の菊花文を染付けている。491は裏底に「大明年製」銘がある。493、494は染付碗の底部である。493は見込みに「壽」字文、494は見込みと裏底に一重方形枠の角「福」銘を染付けている。495は青磁染付碗の底部である。外側が青磁で、見込みは二重圓線内にコンニャク印判の五弁花文、裏底にくずれた「宣明年製」銘を染付けている。

〔壺瓶類〕496は白磁の瓶の胴部破片である。外側面に線彫りによる陰刻で草花文を描いている。

〔陶器〕497～505は陶器である。

〔皿類〕497～503は皿である。497～501は肥前系（唐津系）、502と503は瀬戸美濃系である。497、499、500は灰釉溝縁皿、498は鉄釉溝縁皿である。497は灰色の地でオリーブ灰色、498は赤褐色の地で釉は暗赤褐色、499は赤褐色の地で釉は灰白色、500は橙色の地で釉は白色である。497、499、500とも外側にはほとんど釉が掛っておらず、露胎となっている。497、498、499には砂目積み痕がある。500には煤状炭化物が付き、灯明皿として利用されている。501はいわゆる絵唐津の鉄絵皿である。内外面に植物文を描きオリーブ灰色の透明性のある釉を掛けている。高台付近は露胎であり、胎土目積み痕がある。502と503は志野鉄絵の丸皿である。鉄釉で絵付けし、全体には灰白色的釉が掛けられ、貫入が入っている。502は見込みに植物文を描く。

〔碗類〕504、505は碗である。504は肥前系（唐津系）、505は瀬戸美濃系である。504は灰釉碗で、やや端反形となっている。全体に灰白色の釉が掛かり、貫入が入る。505は鉄釉碗で光沢のある黒褐色の釉が高台付近を除き掛けられている。

土器・土製品（第80図506～508、図版47）

〔須恵器〕506は古代の須恵器壺の胴部上半から頸部の破片である。外面にタタキ目、内面に同心円状当て具痕がある。

〔かわらけ〕507は非クロ釦の手づくねのかわらけ小皿である。丸底風で、側面に強い横方向のナデを施し、一段の軽い段を形成している。煤状付着物が認められ、灯明皿として使用されている。

〔土錘〕508は素焼きの土錘である。焼成堅緻で陶器質に近い。

瓦（第81図10、11、図版48）

いずれも平瓦と考えられる。いぶし瓦で、灰褐色及び黒褐色を呈する。

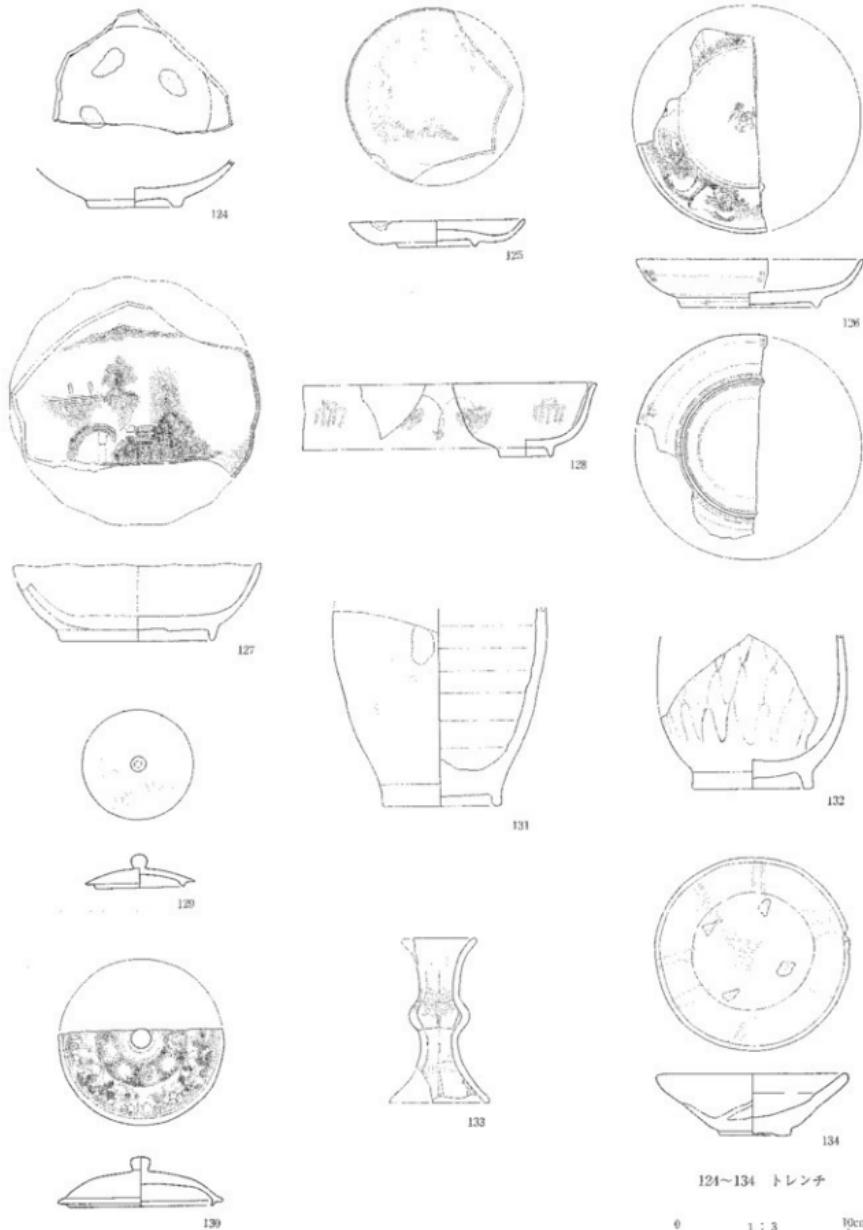
石製品（第83図16～18、図版50）

16、17は凝灰岩製の砾石である。18は緑色片岩製で中央に穿孔がある不明製品である。

金属製品（第84図6～8、図版50）

6、7は真鍮製もしくは銅製の煙管雁首部分である。7は火皿部分が欠損している。8は真鍮製もしくは銅製の煙管吸口部分である。煙管については、その形態等から6は古泉弘氏による煙管編年のⅣ期に該当し、7、8はⅢ期以降に該当すると考えられる。

錢貨（第86図47～56、図版52）

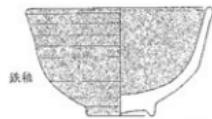


第46図 遺構外出土遺物

0 1 : 3 10cm

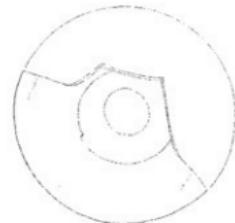


135

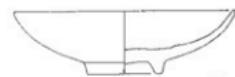


136

136



138



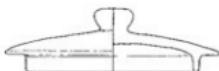
141



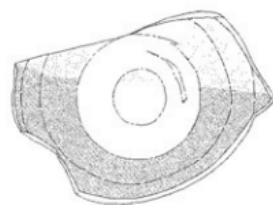
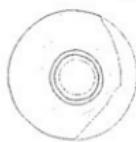
白磁



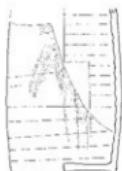
139



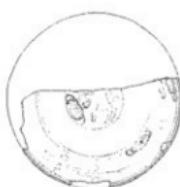
140



142



143



144

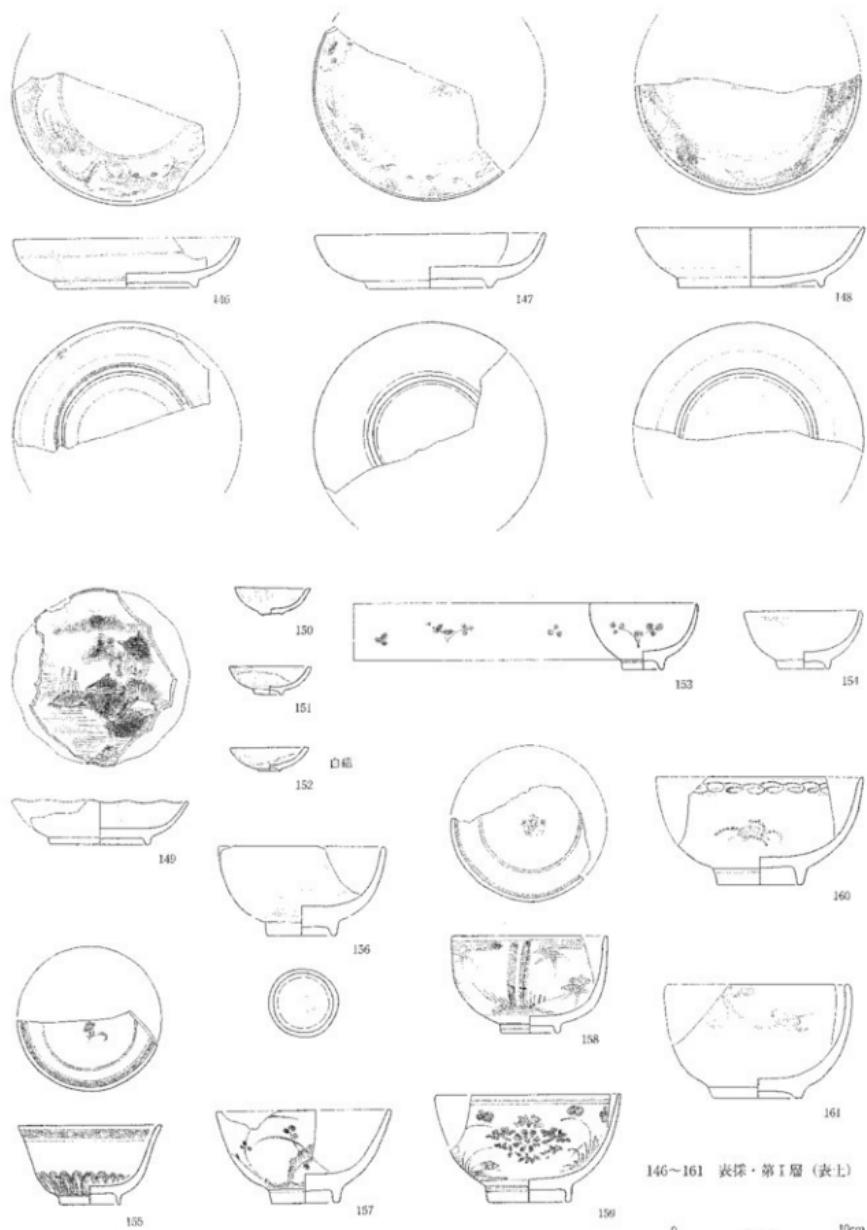


145

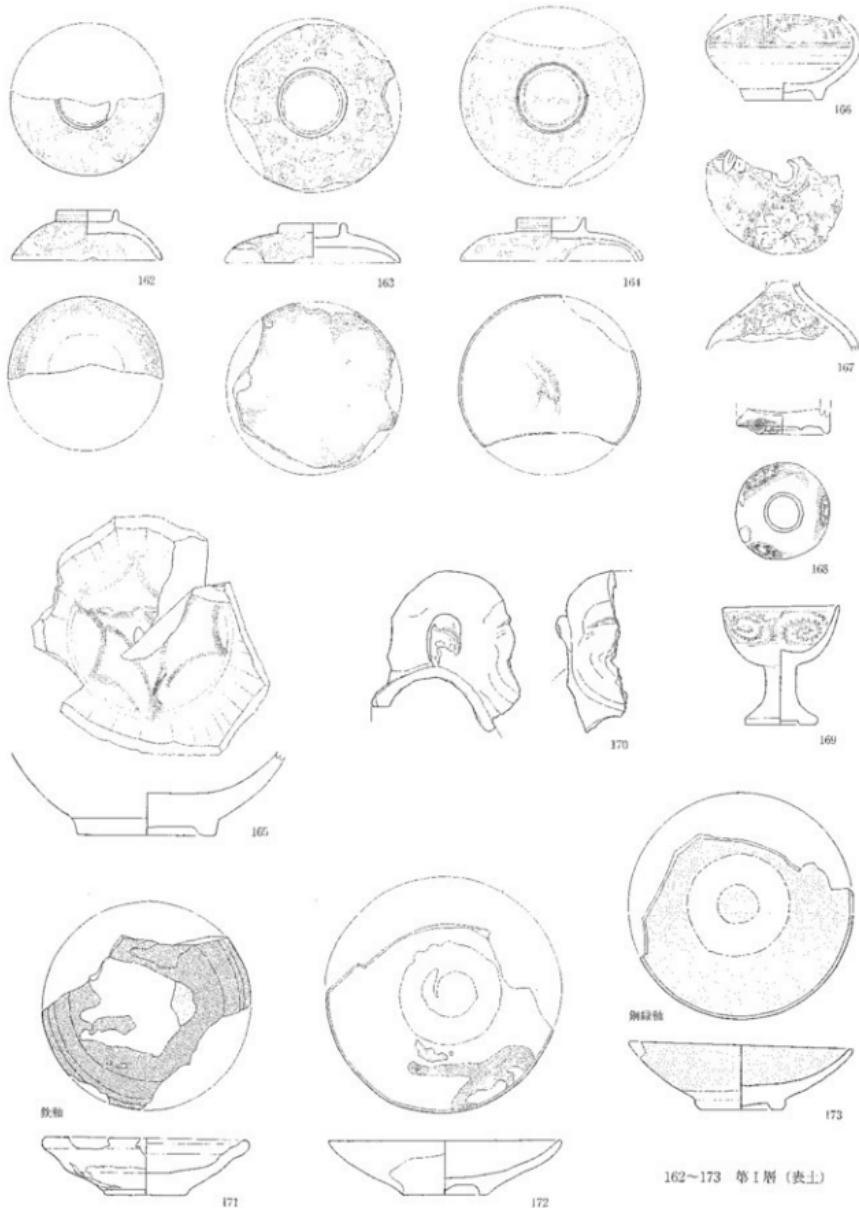
135~137 トレンチ
138~143 捜査
144, 145 表様・表土

0 1 : 3 10cm

第47図 遺構外出土遺物

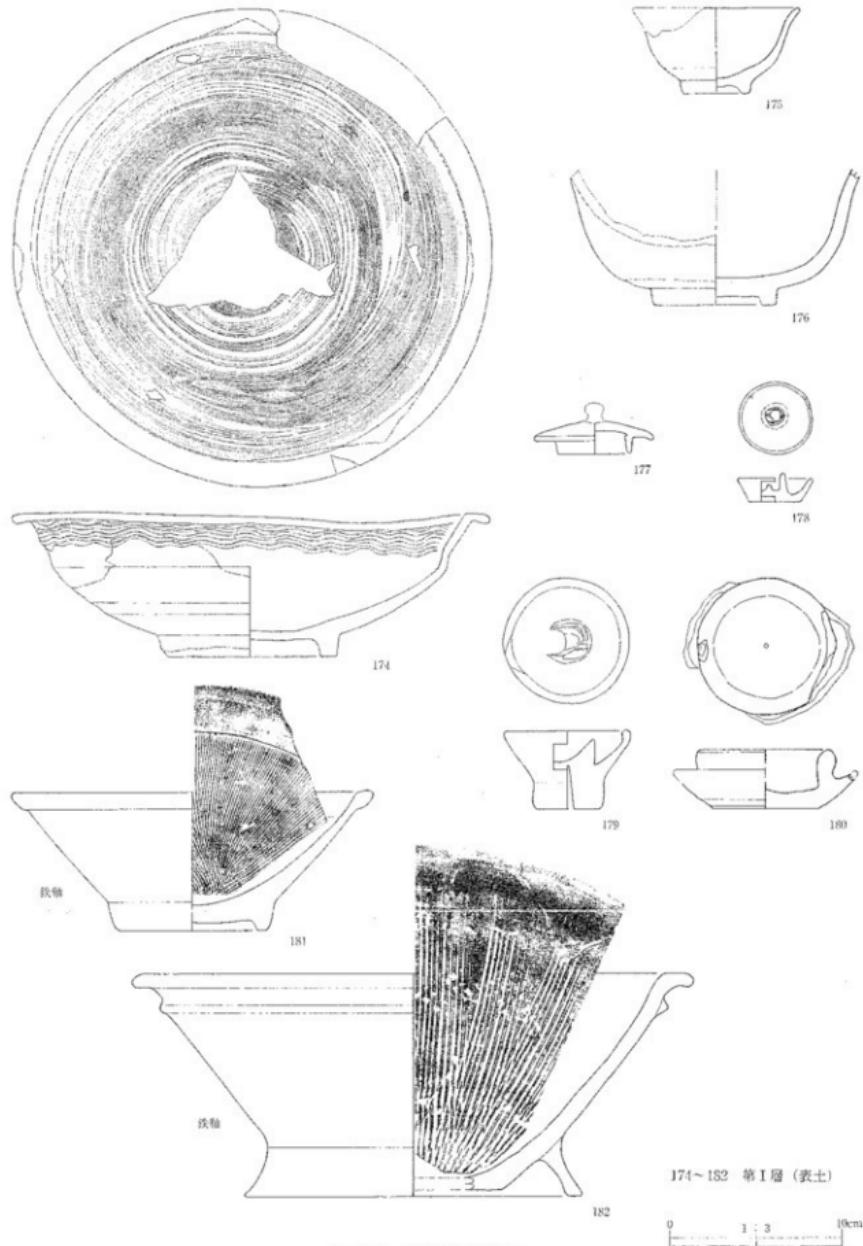


第48図 遺構外出土遺物

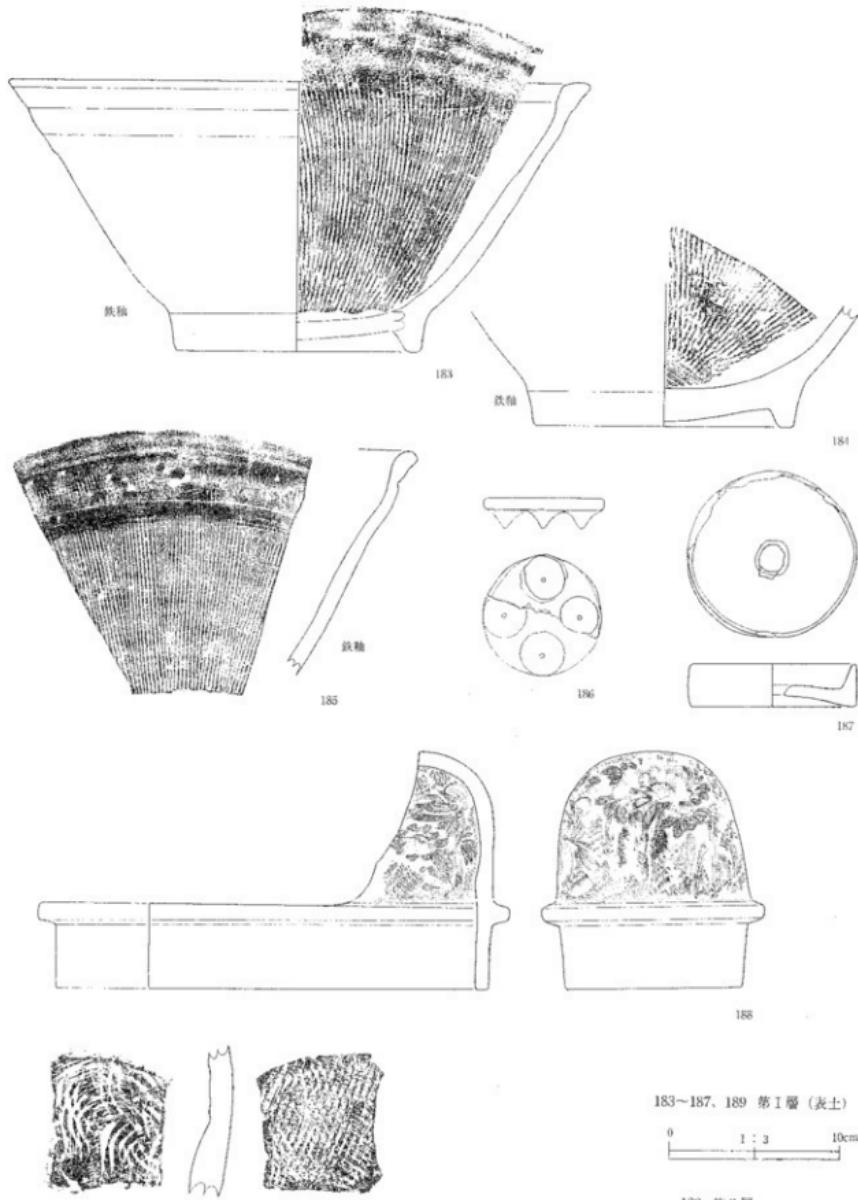


第49図 遺構外出土遺物

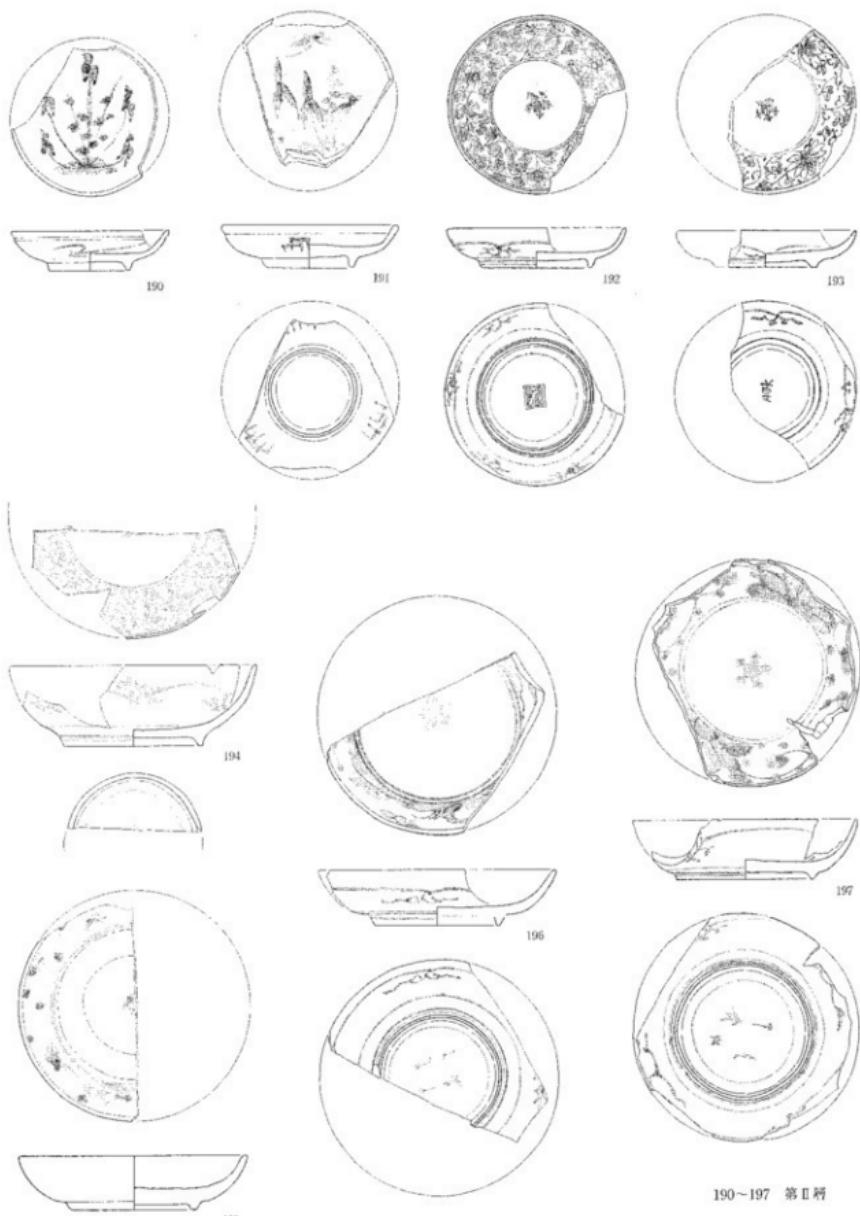
0 1 : 3 10cm



第50図 遺構外出土遺物

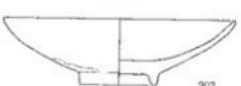
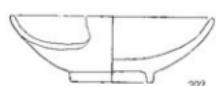
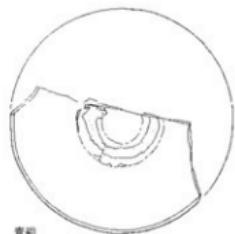
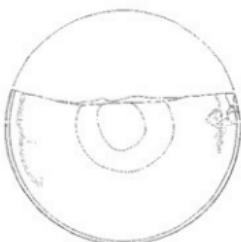
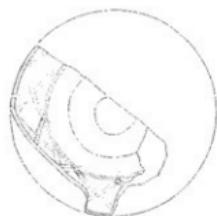
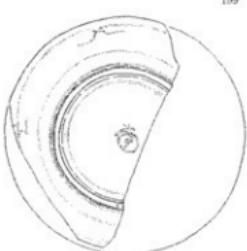
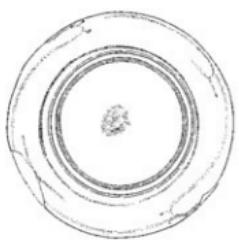
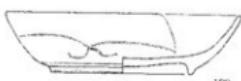
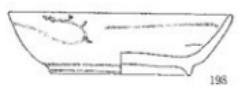
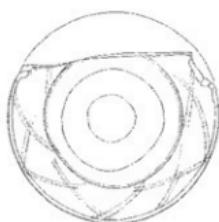
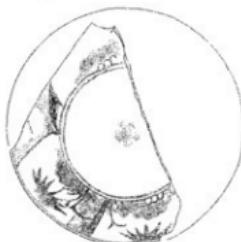
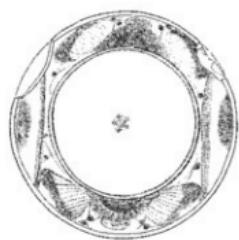


第51圖 道橫外出土遺物



第52図 遺構外出土遺物

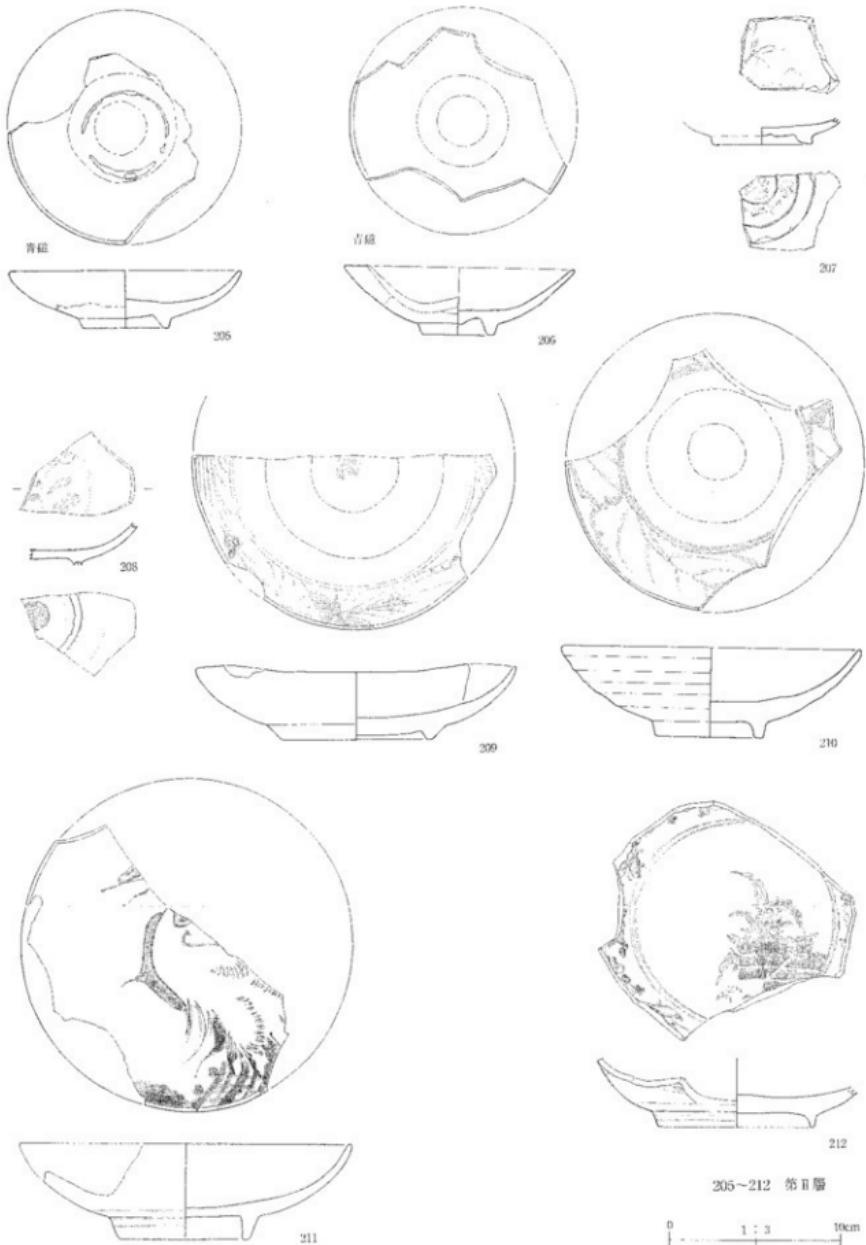
0 1 : 3 10cm



198~204 第II層

0 1 : 3 10cm

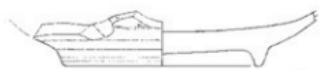
第53図 遺構外出土遺物



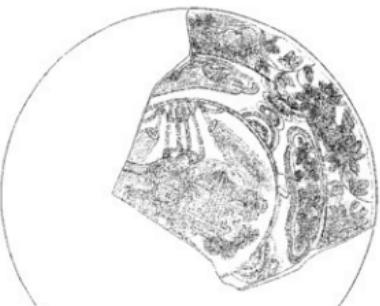
第54図 遺構外出土遺物

205~212 第II層

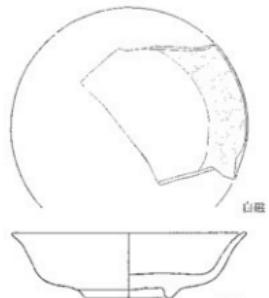
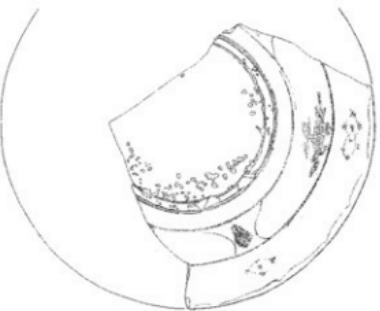
0 1 : 3 10cm



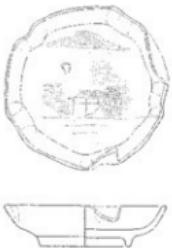
213



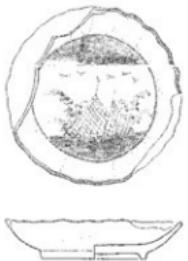
214



215



216



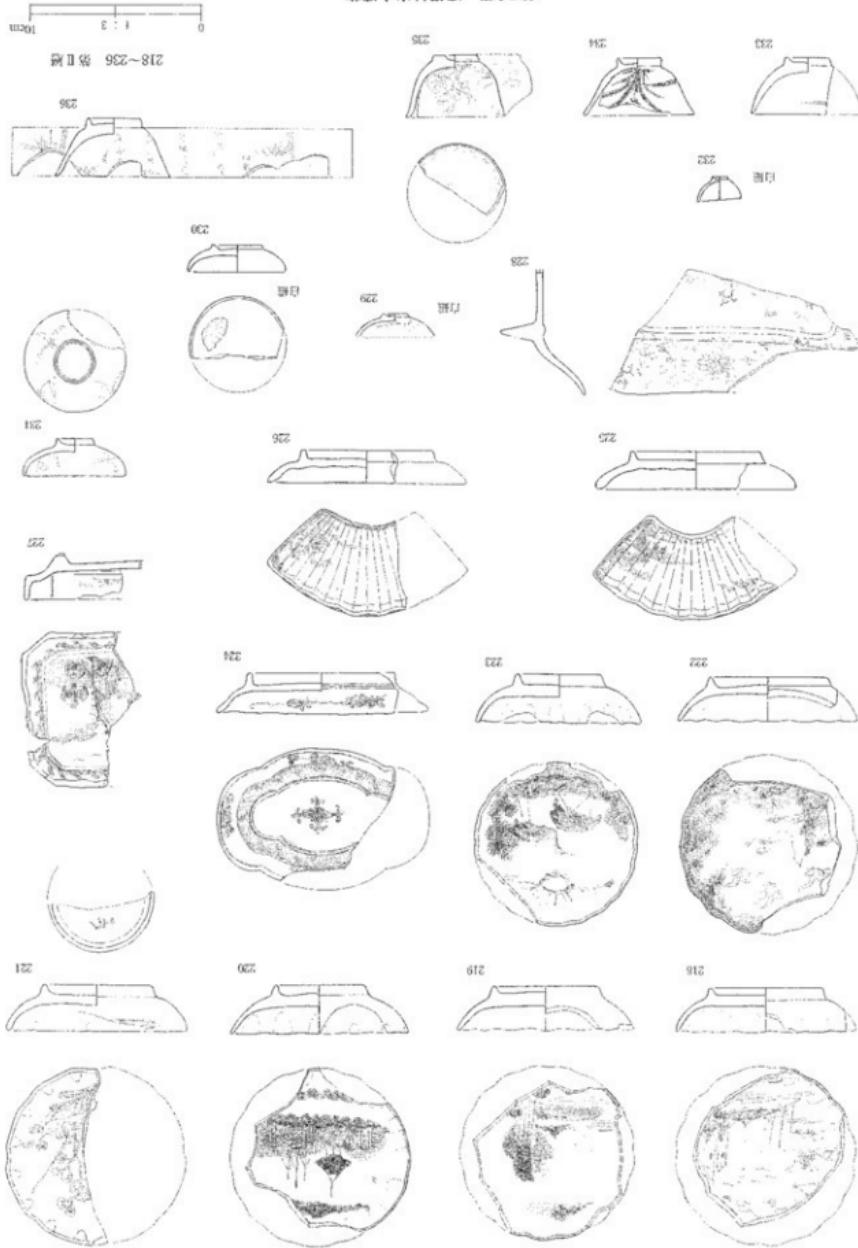
217

213~217 第II層

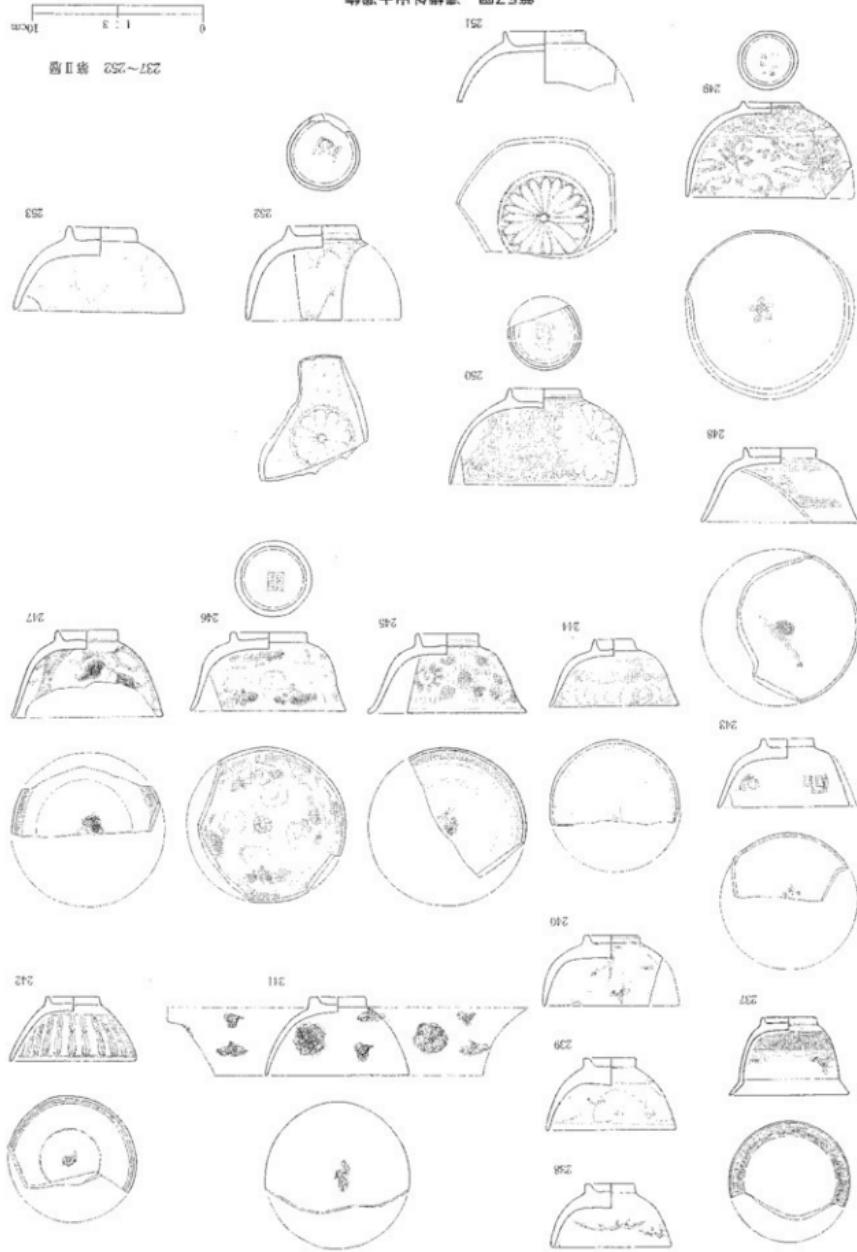
A scale bar at the bottom right of the figure, showing a ratio of 1:3 and a length of 10cm.

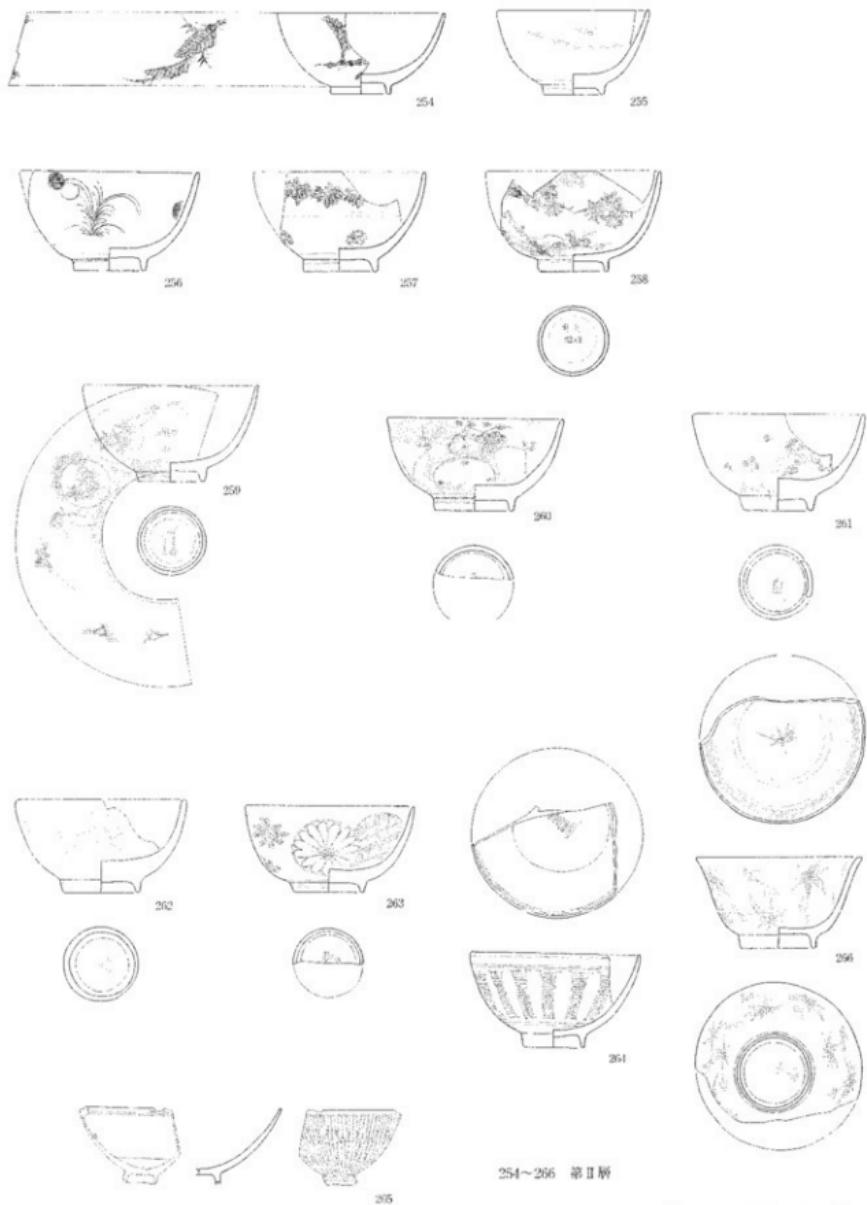
第55図 遺構外出土遺物

圖56 圖 遷都外出土遺物

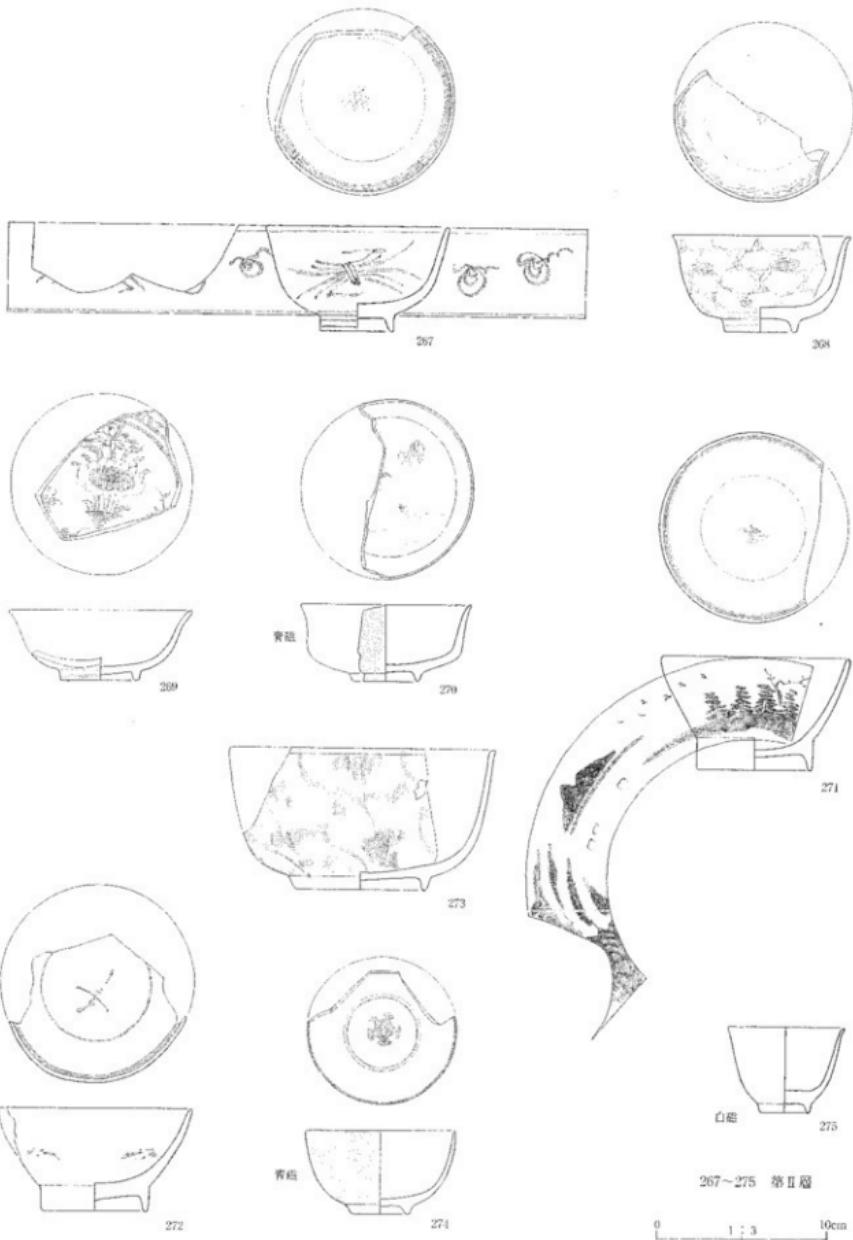


第57回 滅黨士女圖

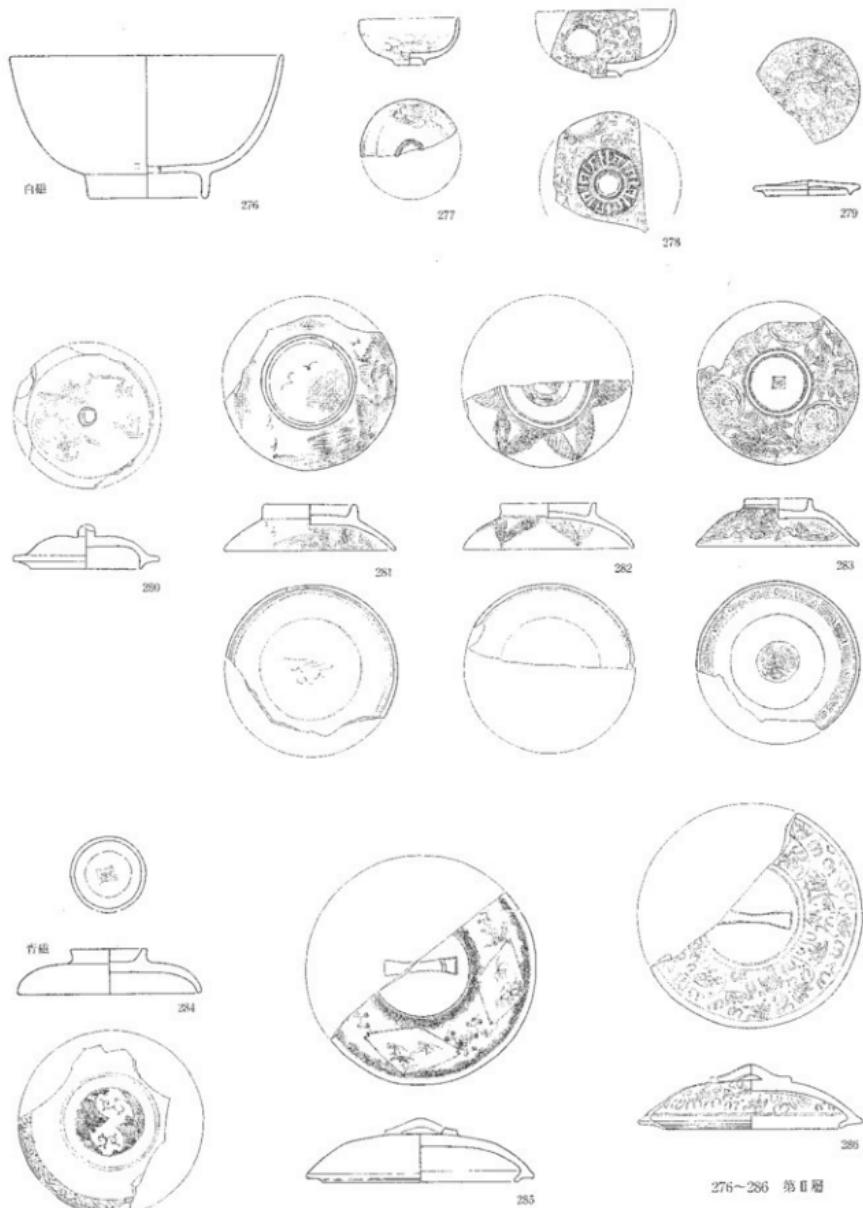




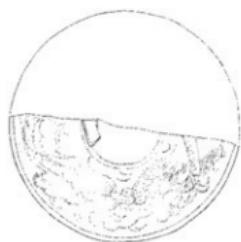
第58図 遺構外出土遺物



第59図 遺構外出土遺物



第60図 遺構外出土遺物



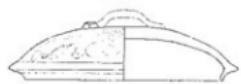
297



298



299



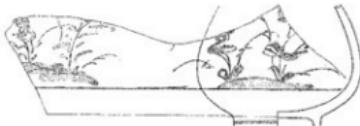
300



301



302



303



304



305



306



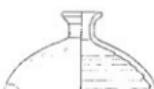
307



308



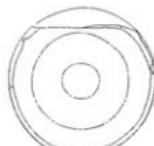
309



310



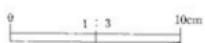
311



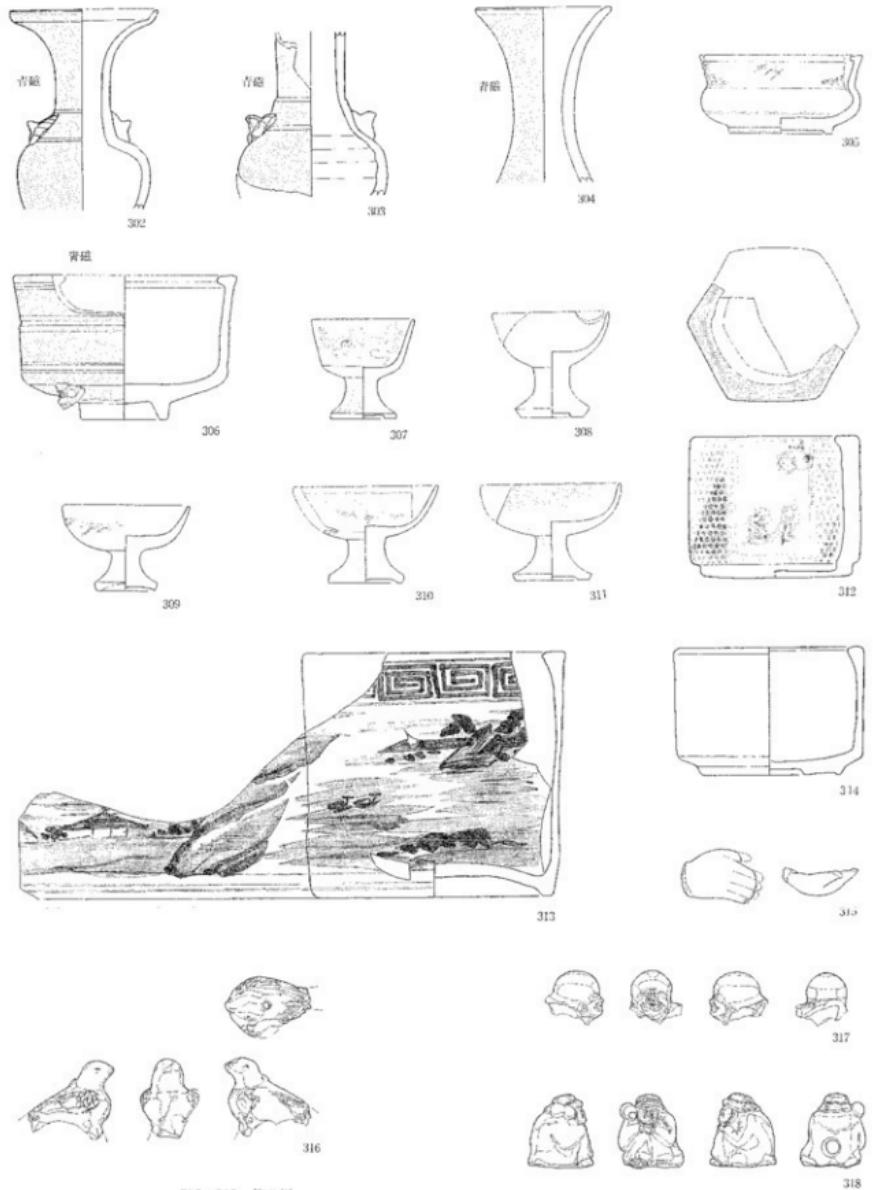
300

301

287~301 第Ⅱ層



第61図 遺構外出土遺物



302~318 第Ⅱ層

第62図 造橋外出土遺物

0 1 : 3 10cm



319



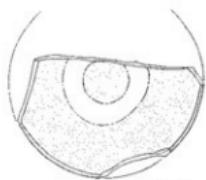
320



321



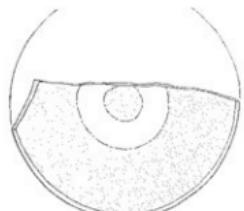
322



銅鋤袖



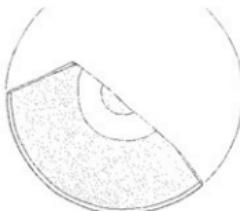
323



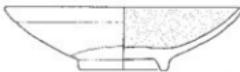
銅鋤袖



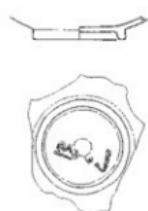
324



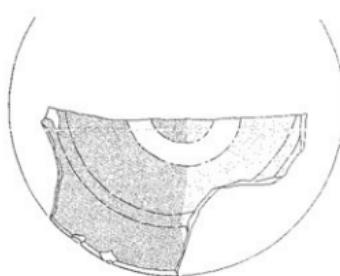
銅鋤袖



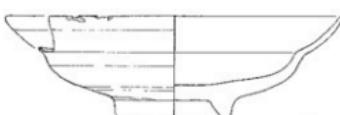
325



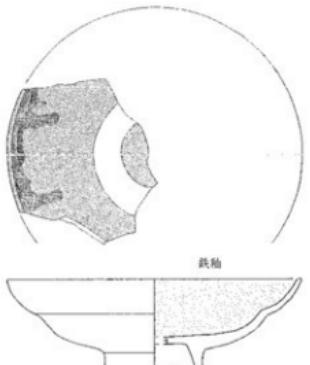
326



銅鋤袖



327

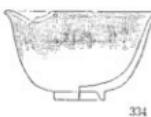
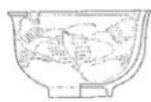
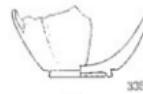
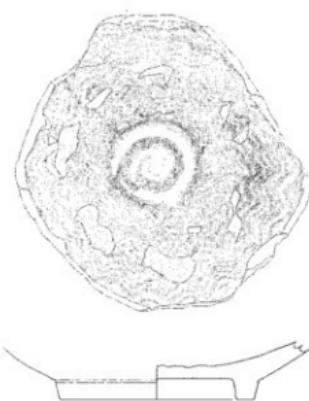
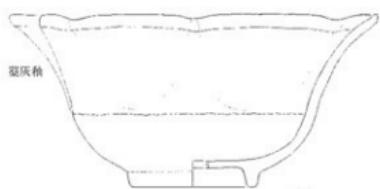
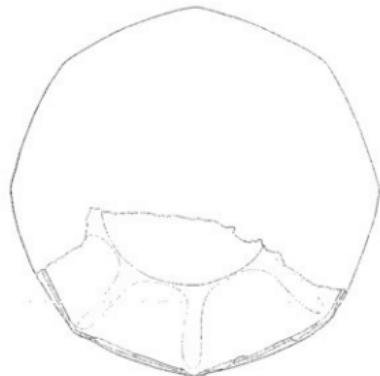
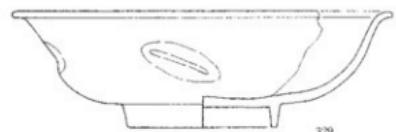


328

319~328 第II層

0 1 : 3 10cm

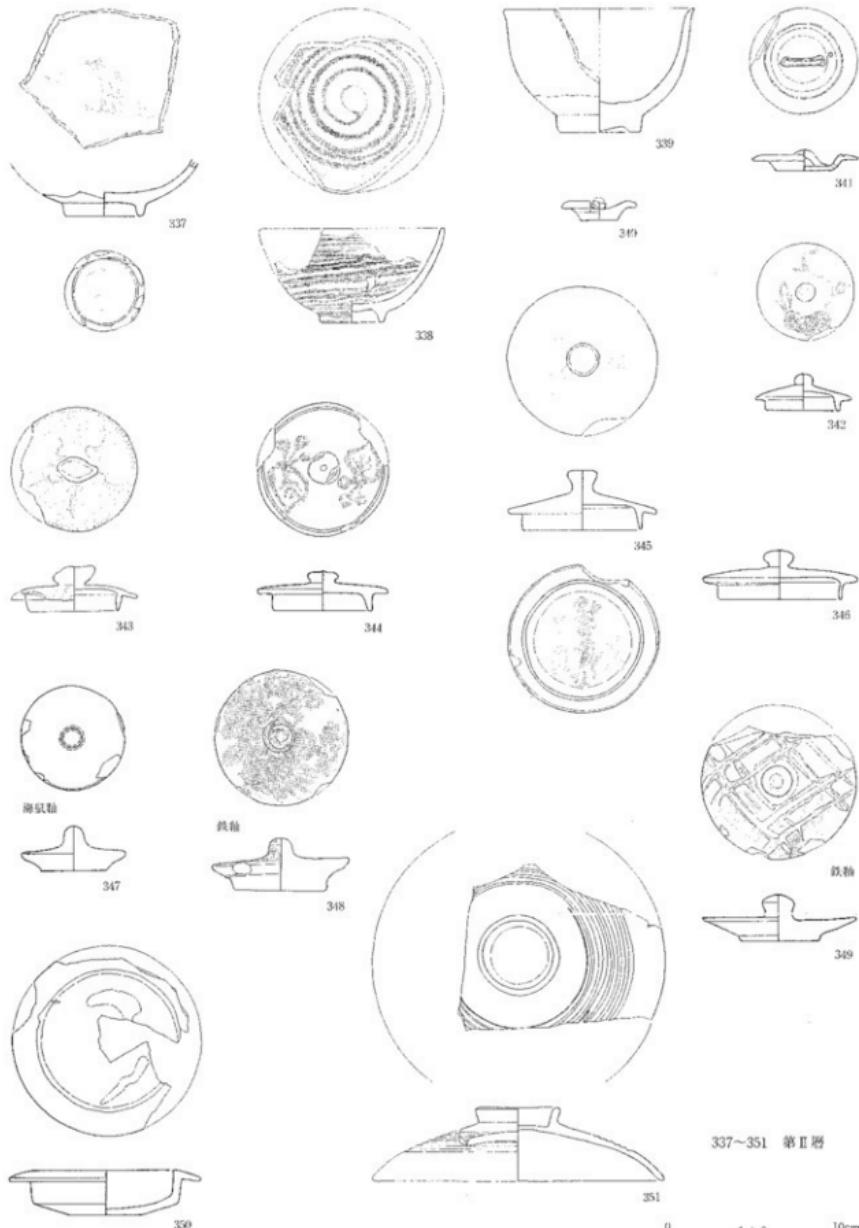
第63図 遺構外出土遺物



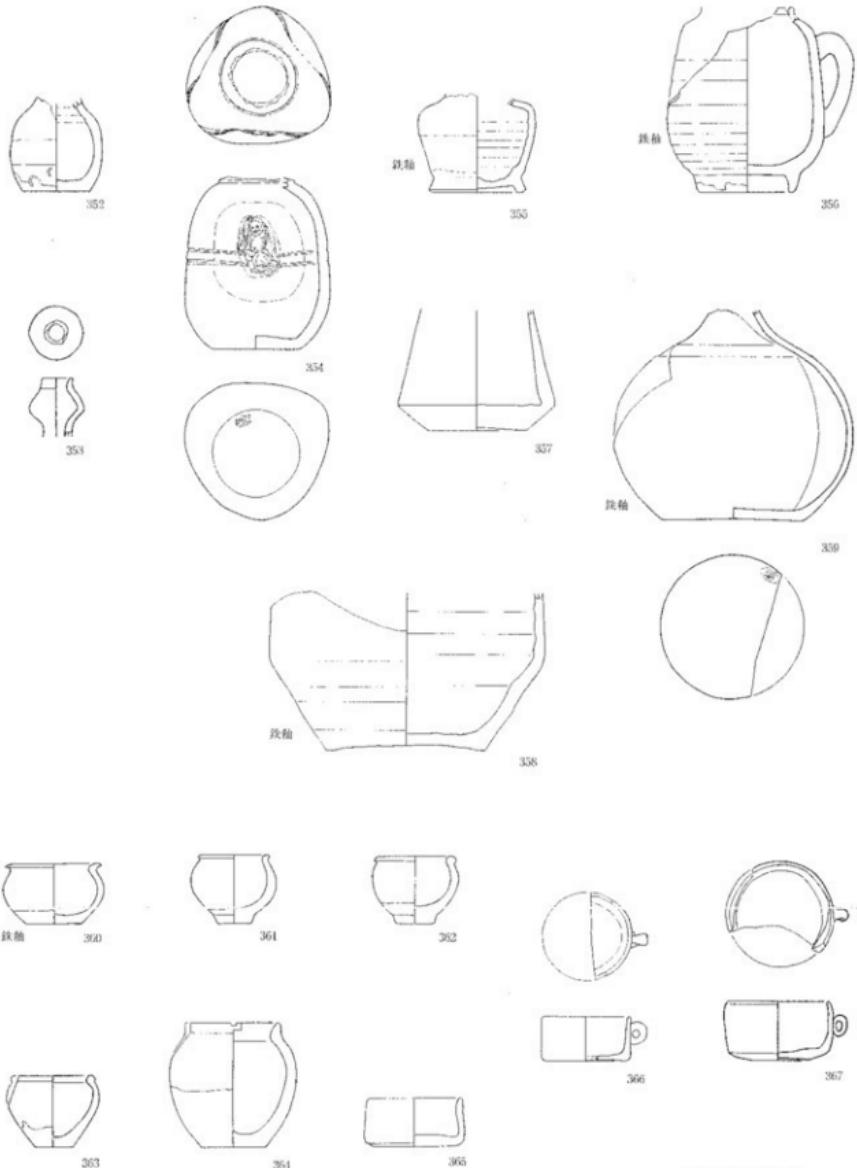
329~336 第Ⅱ期

0 1 : 3 10cm

第64図 遺構外出土遺物



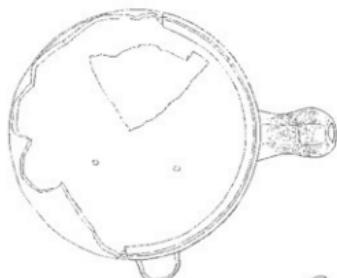
第65图 遗物出土遺物



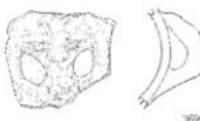
352~367 第Ⅱ層

第66図 遺構外出土遺物





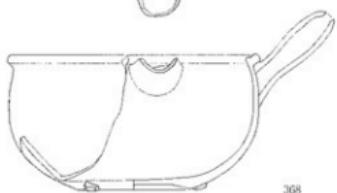
368



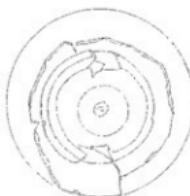
369



371



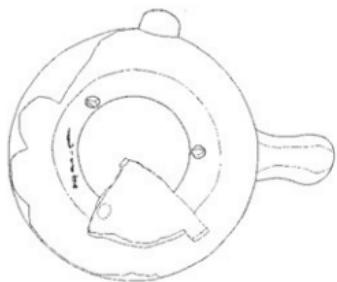
371



373



374



鉢



376



377



鉢

378

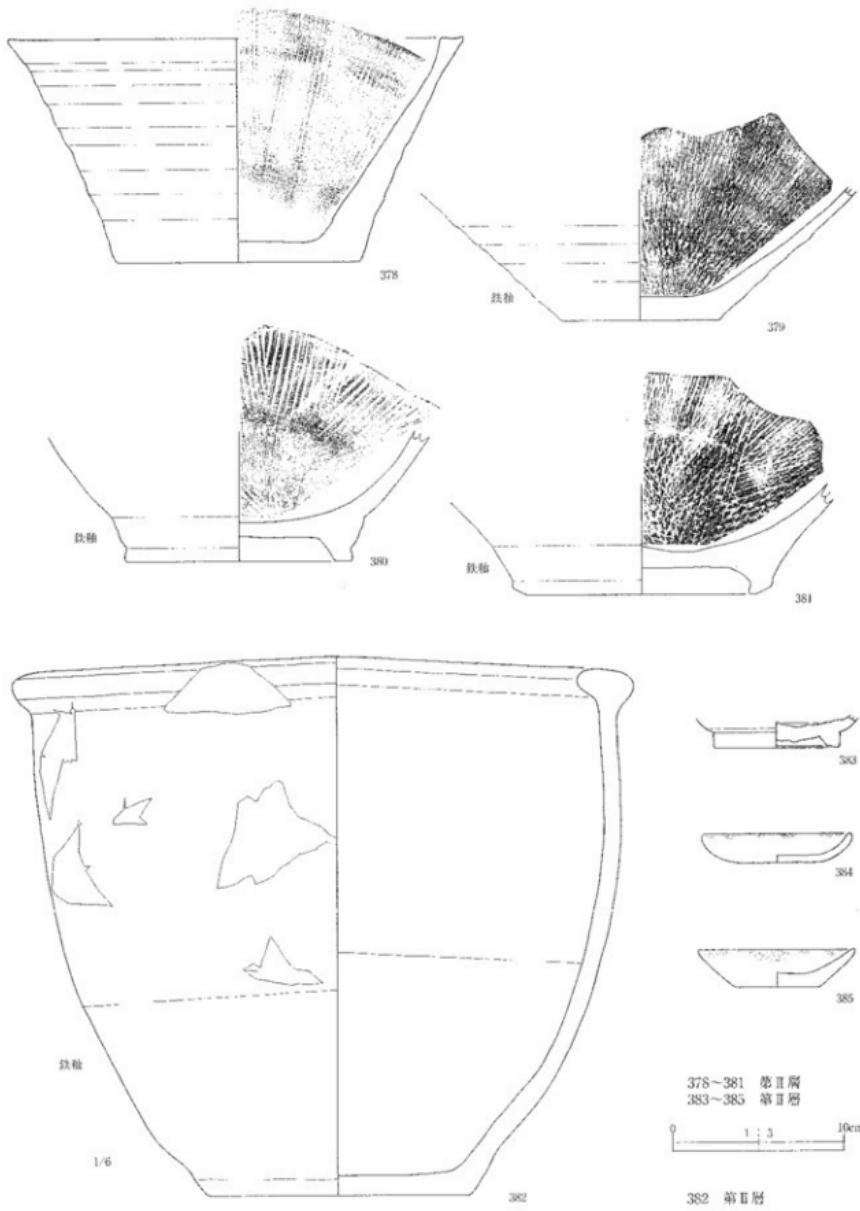


379

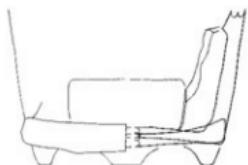
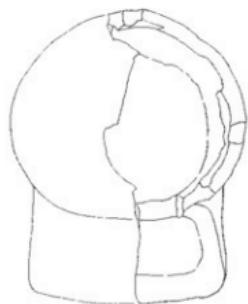
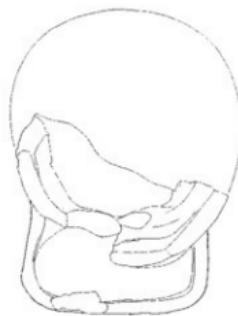
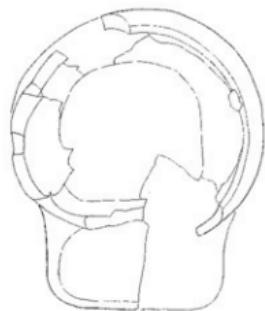
368~377 第Ⅱ層

第67図 遺構外出土遺物





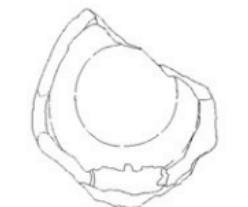
第68図 遺構外出土遺物



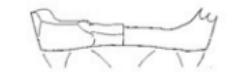
386

387

388



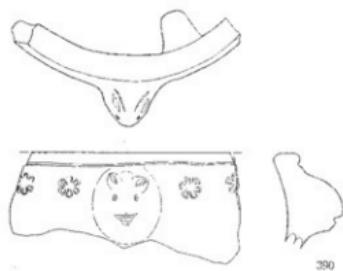
389



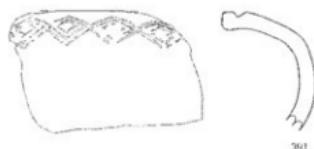
386~389 第II層

6 1 : 3 10cm

第69図 遺構外出土遺物



390



391



392



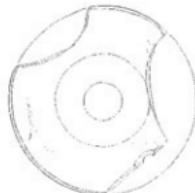
393



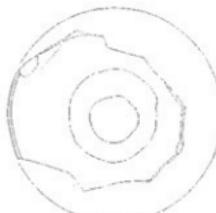
394



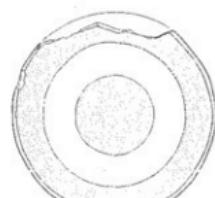
395



396



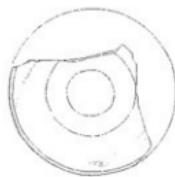
397



398



399

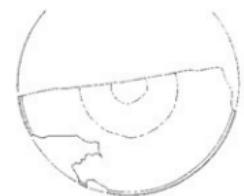


396

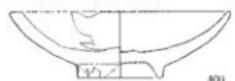
390~394 第Ⅱ層
395~399 第Ⅲ層



第70圖 遺構外出土遺物



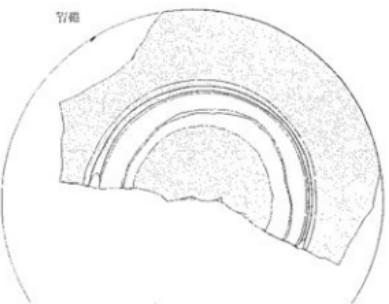
401



402



管轄



405



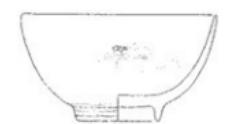
406



407



408



409



青磁

410



白磁

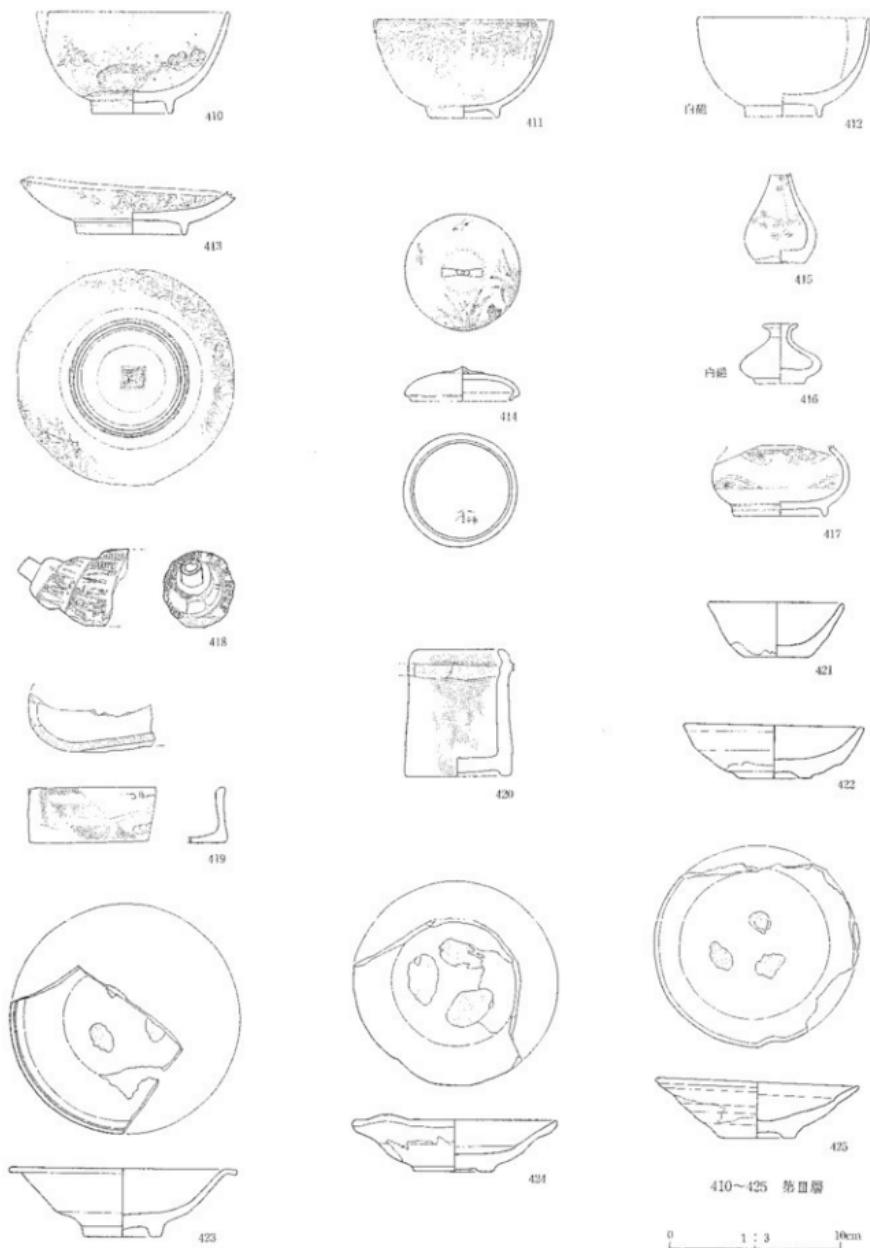
411



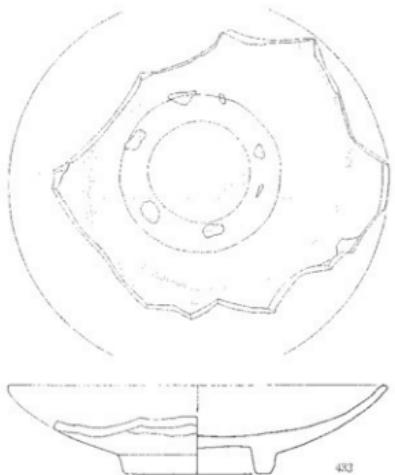
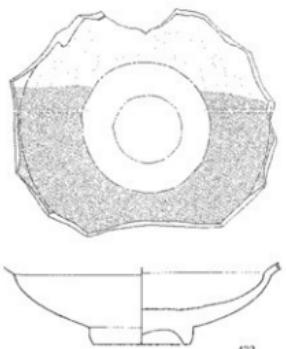
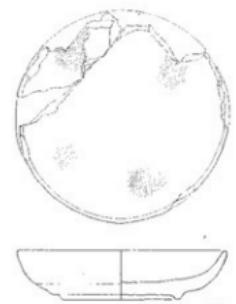
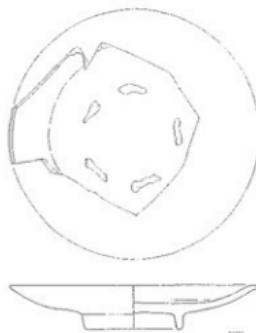
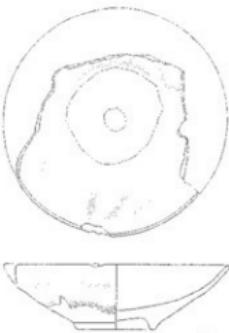
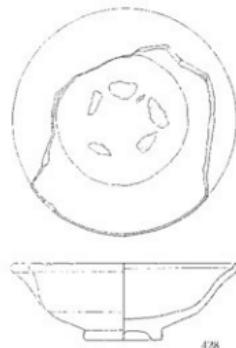
400~409 第五層



第71図 遺構外出土遺物



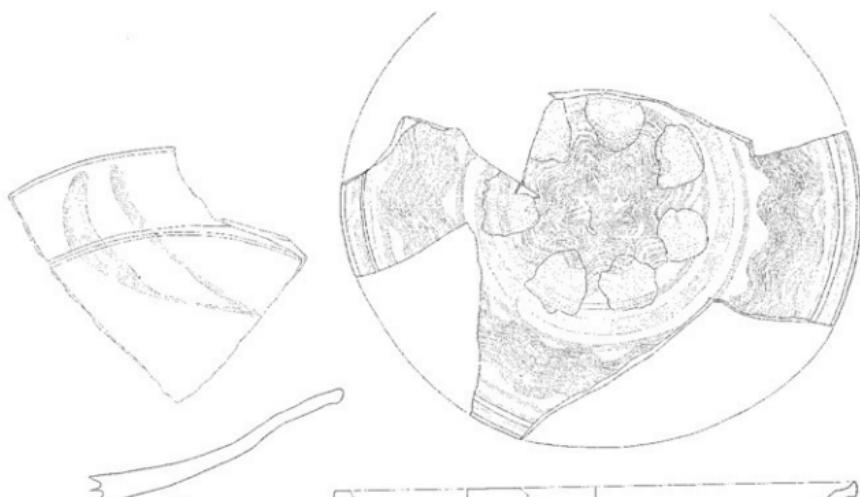
第72图 遗构外出土遗物



426~433 第Ⅲ周

0 1 : 3 10cm

第73図 造構外出土遺物



434



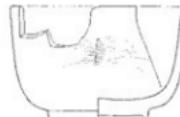
435



436



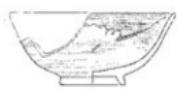
437



438



439

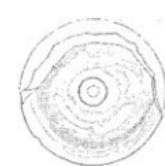


440



鉢輪

441

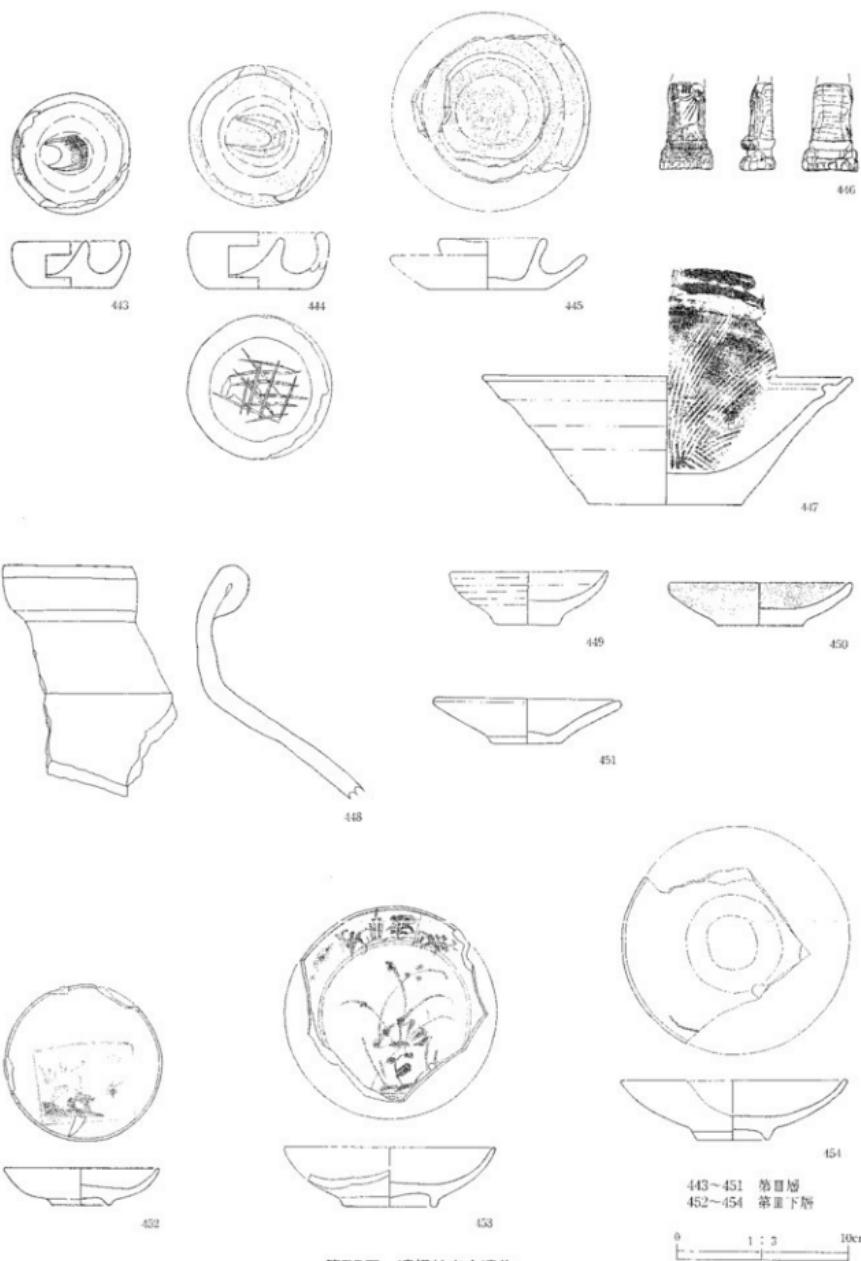


442

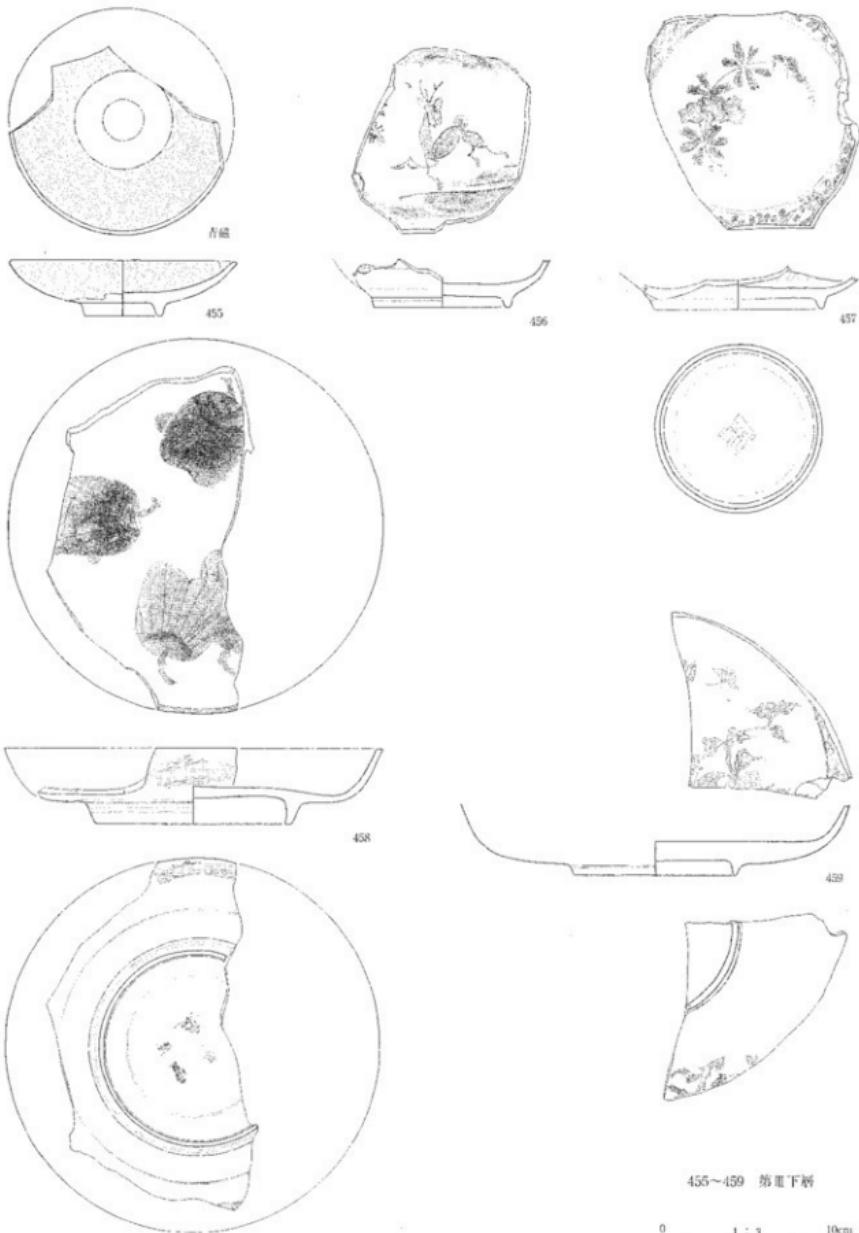
434～442 第Ⅴ類



第74図 遺構外出土遺物



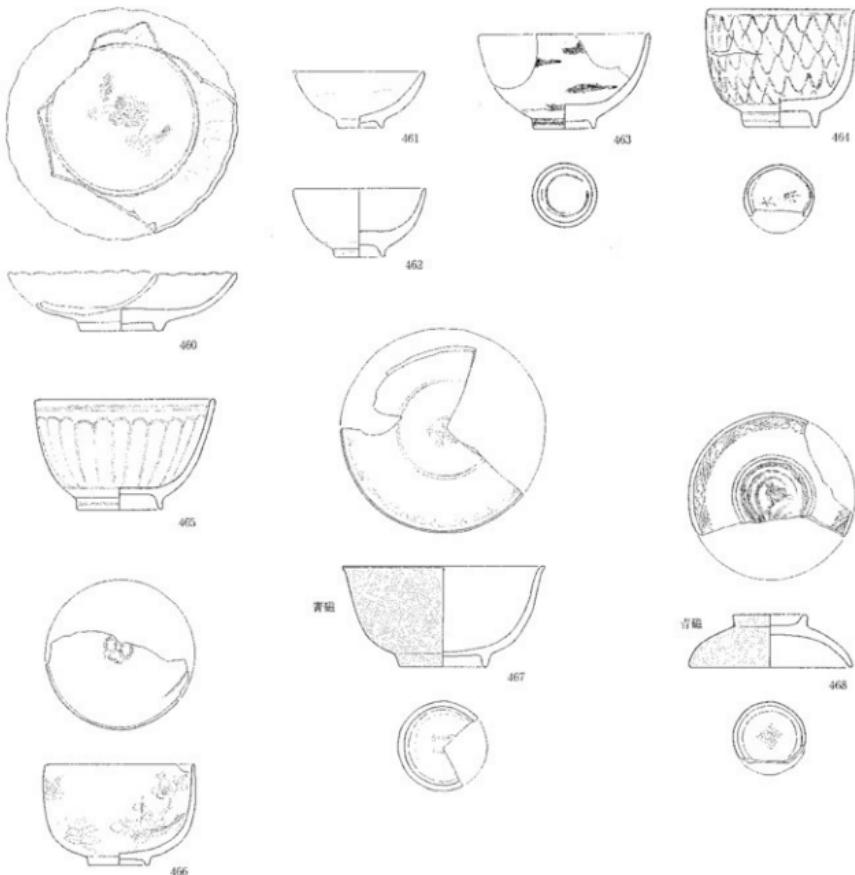
第75図 透横外出土遺物



第76回 遺構外出土遺物

455~459 第三下層



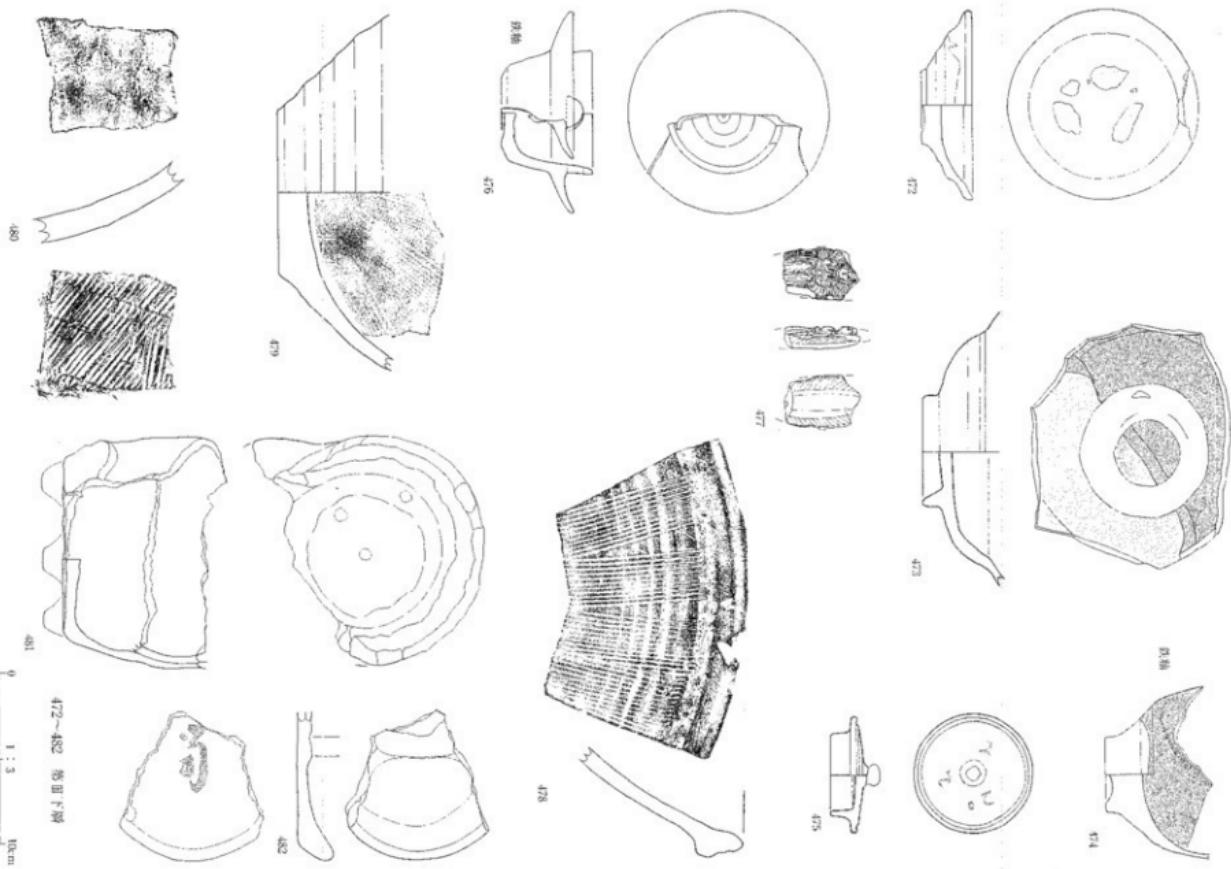


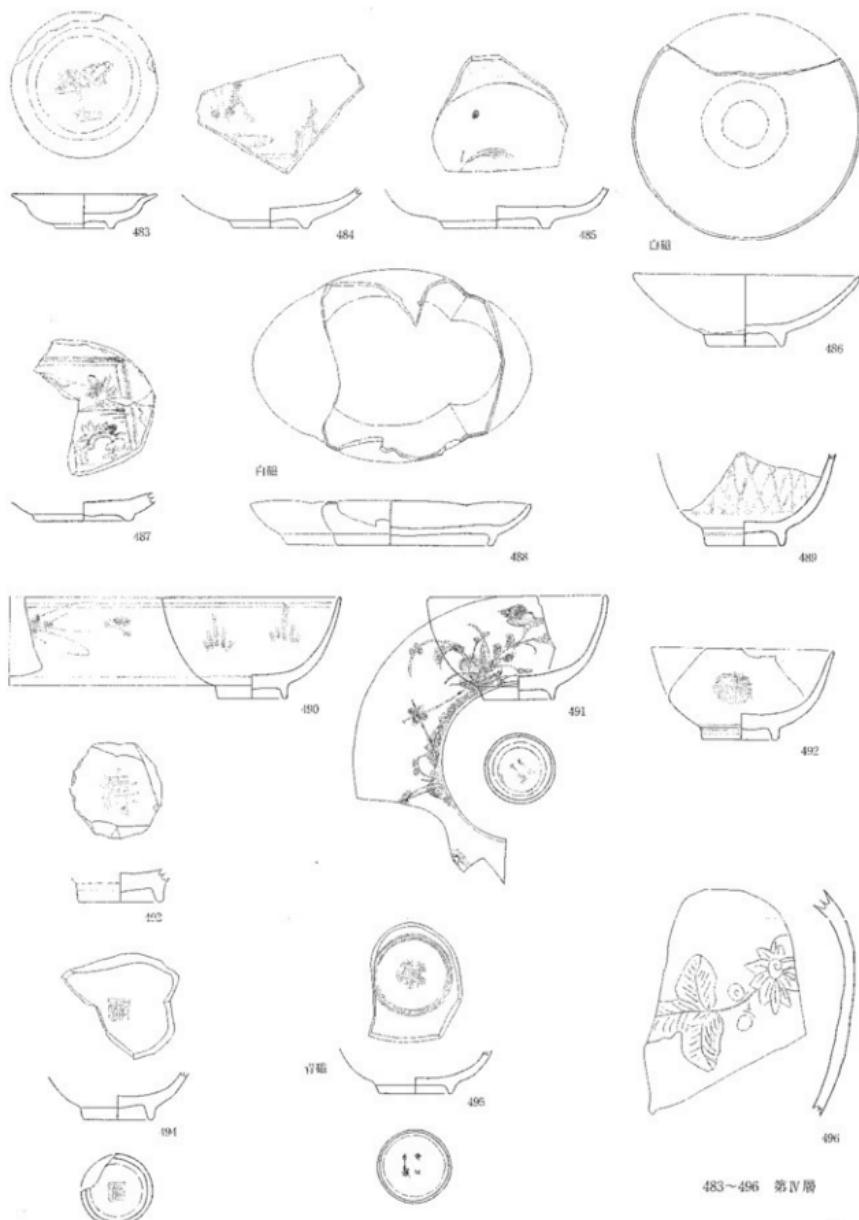
460~471 第77圖

0 1 : 3 10cm

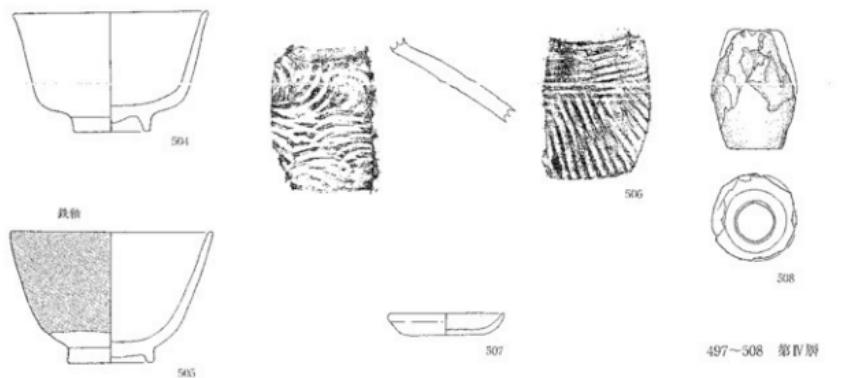
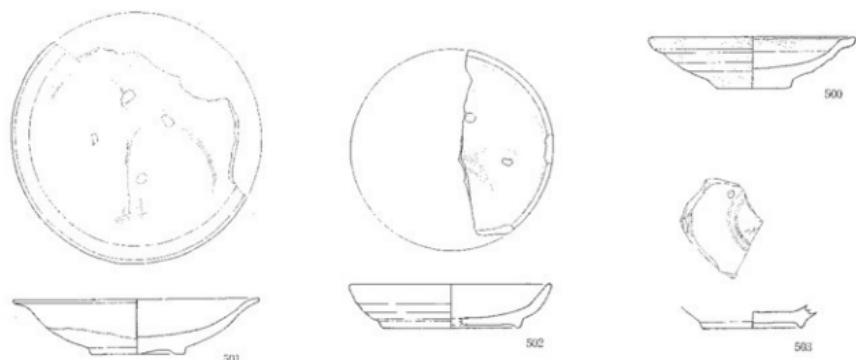
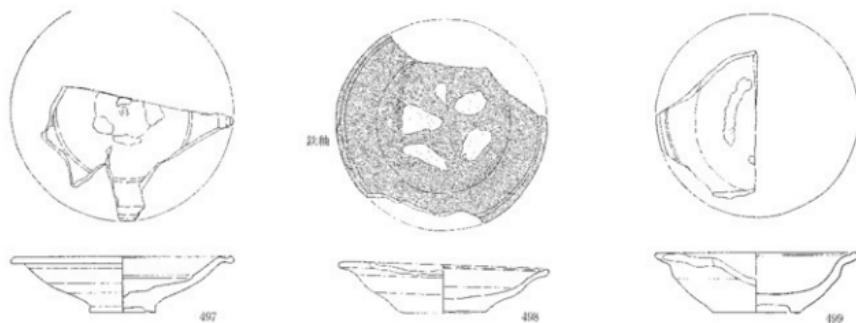
第77圖 遺構外出土遺物

第78圖 漢陽外出土遺物



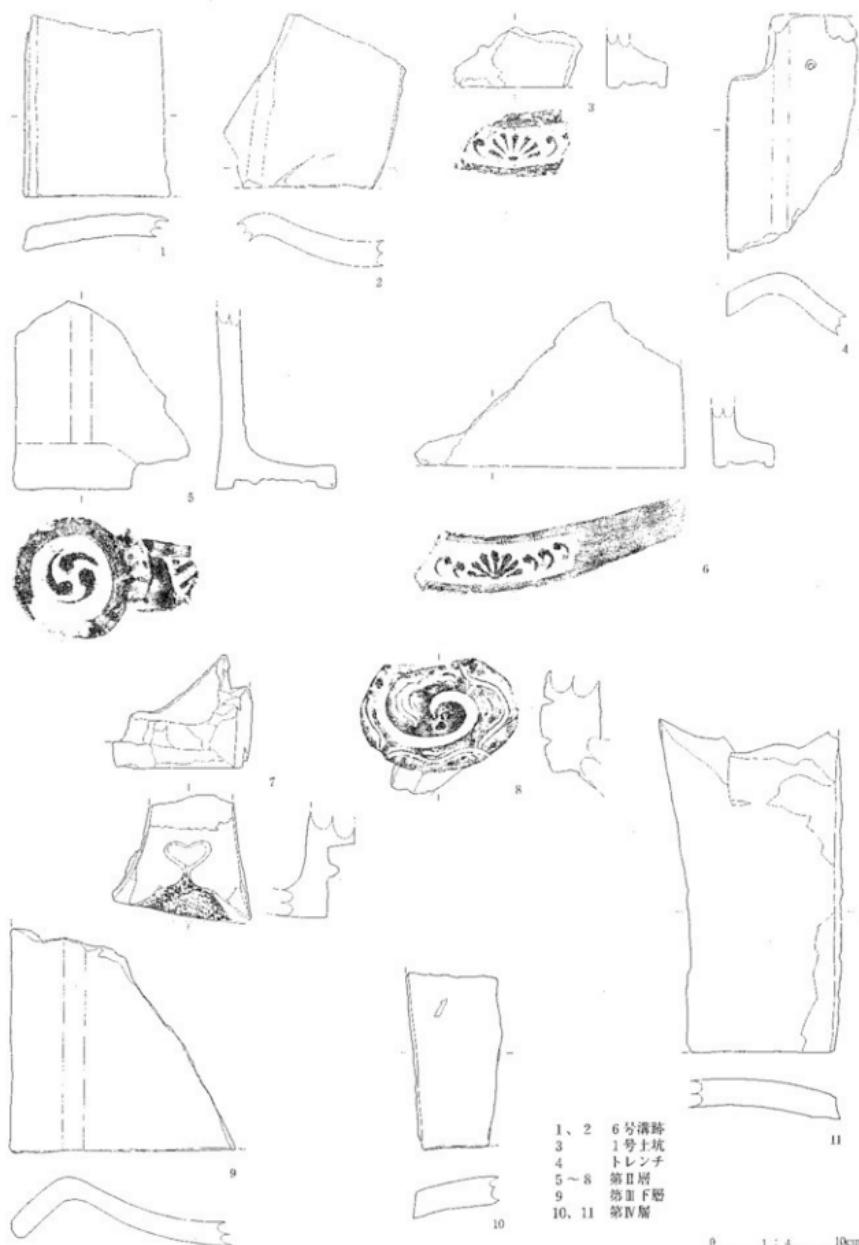


第79図 遺構外出土遺物



第80図 遺構外出土遺物





第81図 瓦

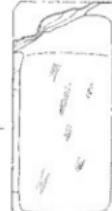


1~6 第II層
7~10 第III層

第82図 石製品



11



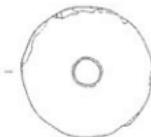
12



13



14



15



16



17



18

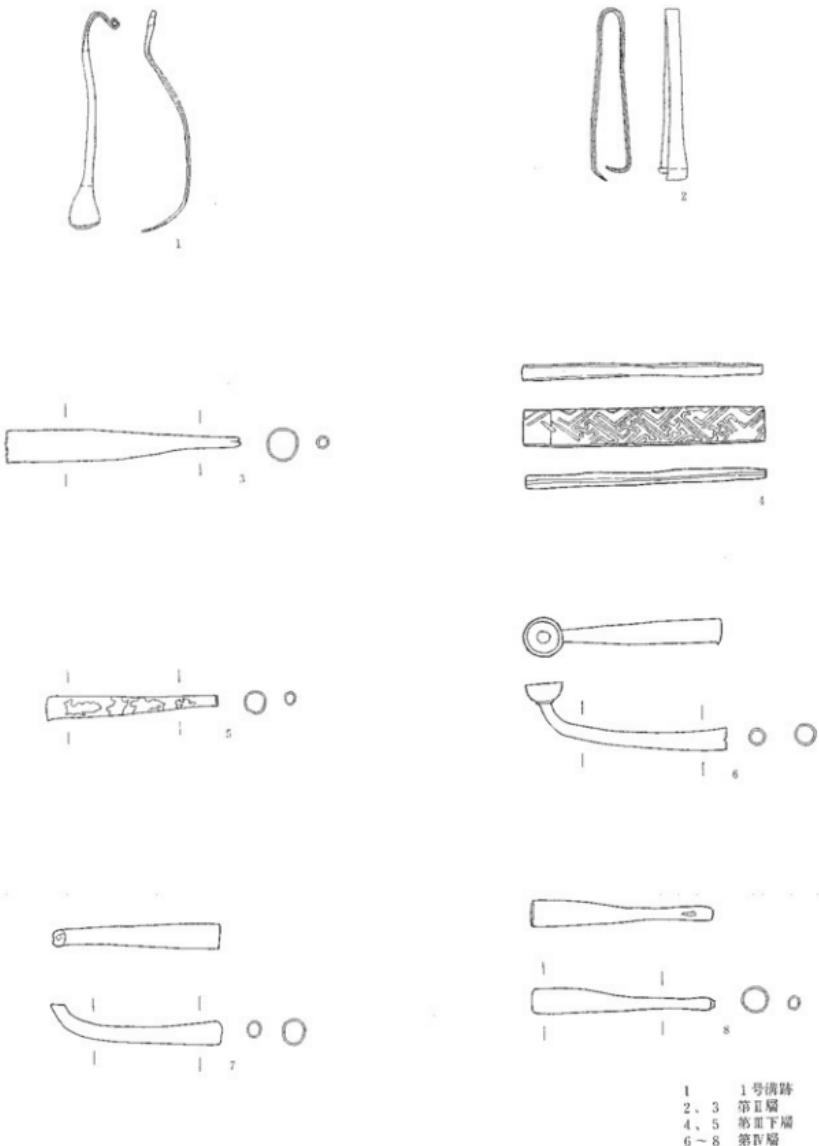


19

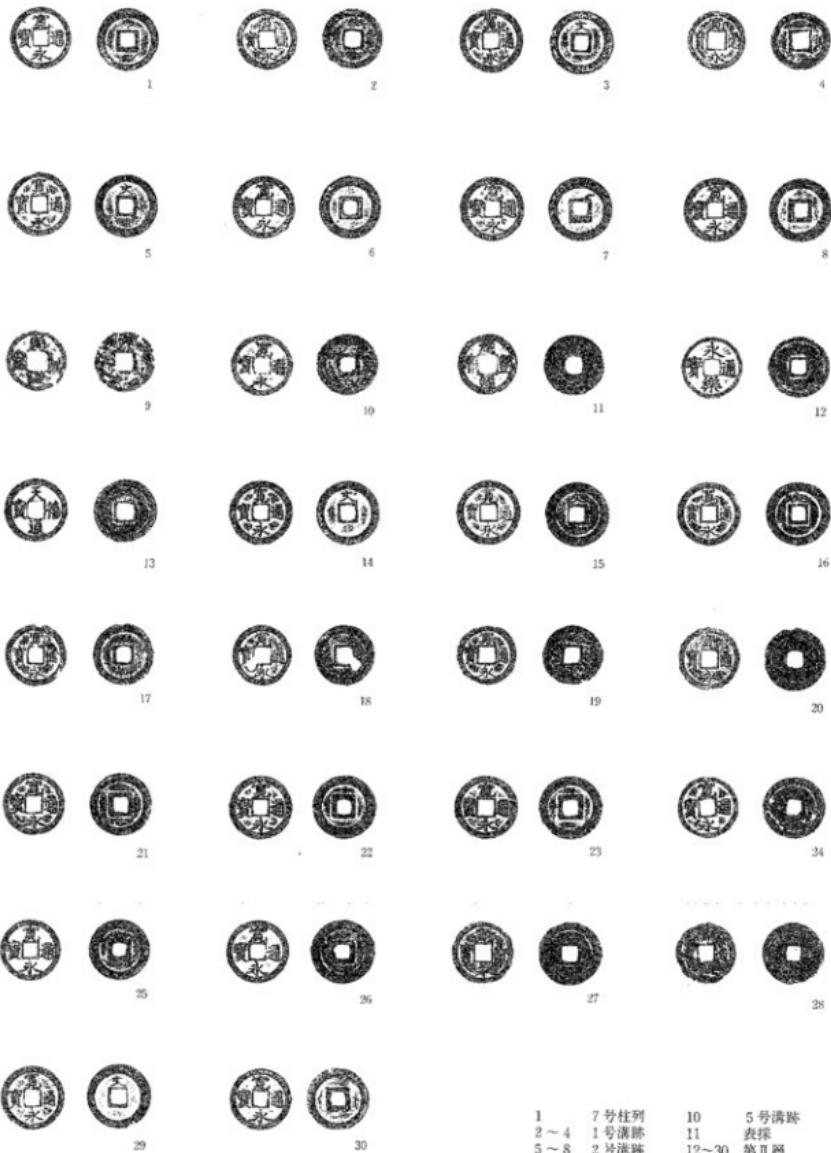
11 第Ⅱ層
12~15, 19 第Ⅲ下層
16~18 第Ⅳ層



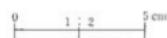
第83図 石製品

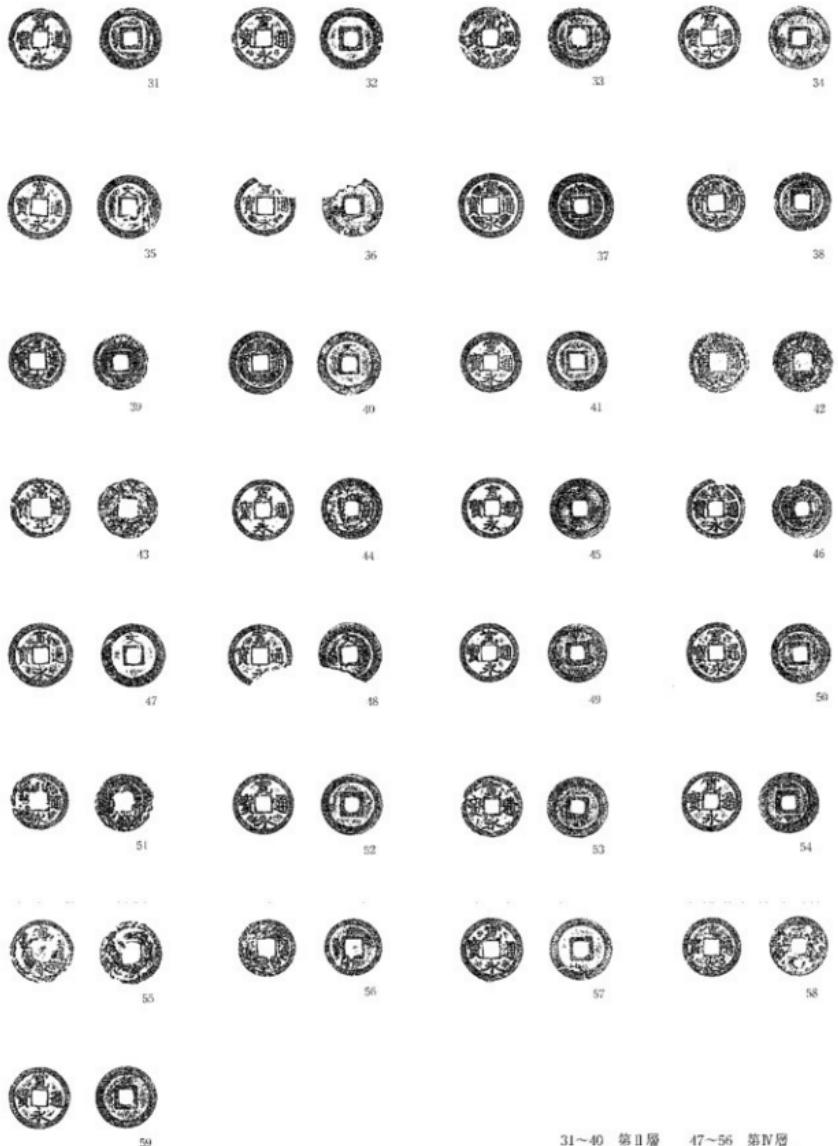


第84図 金属製品



第85圖 錢 貨

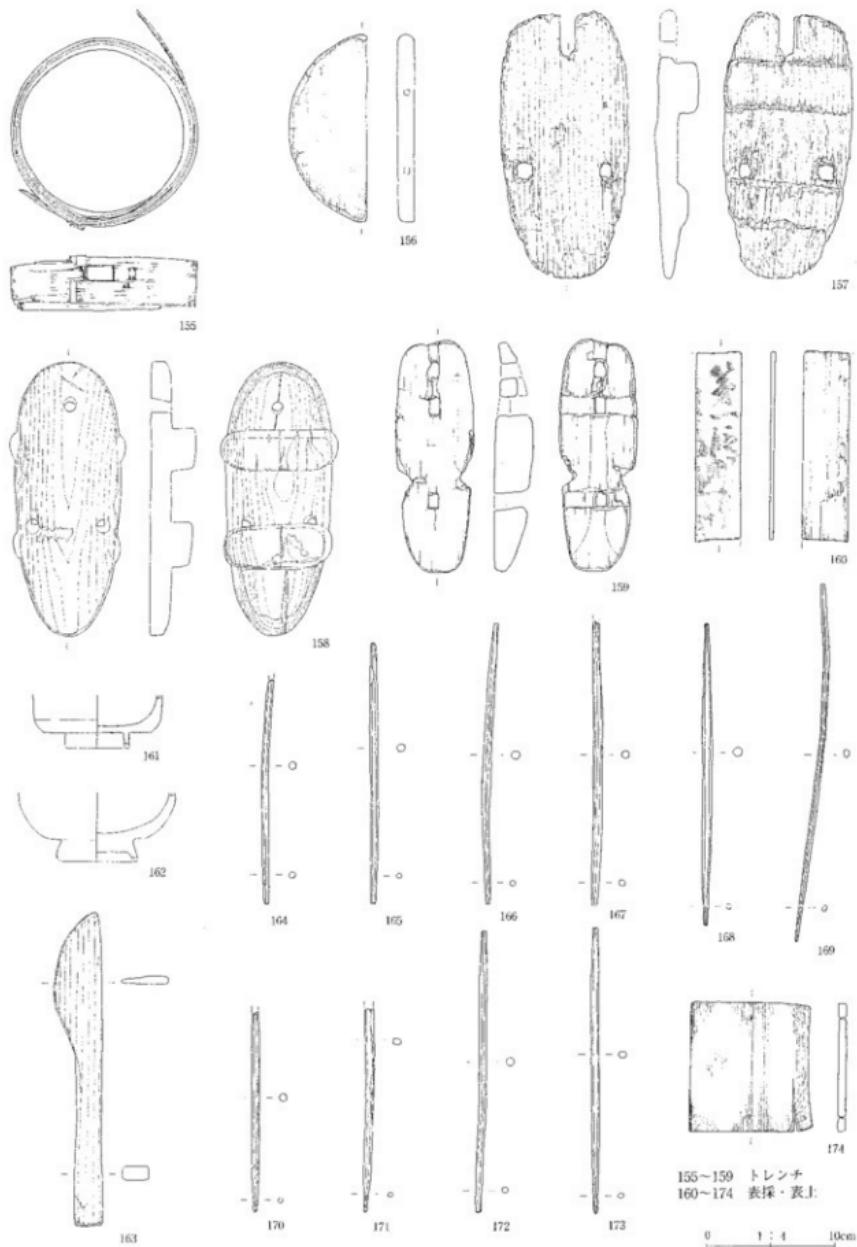




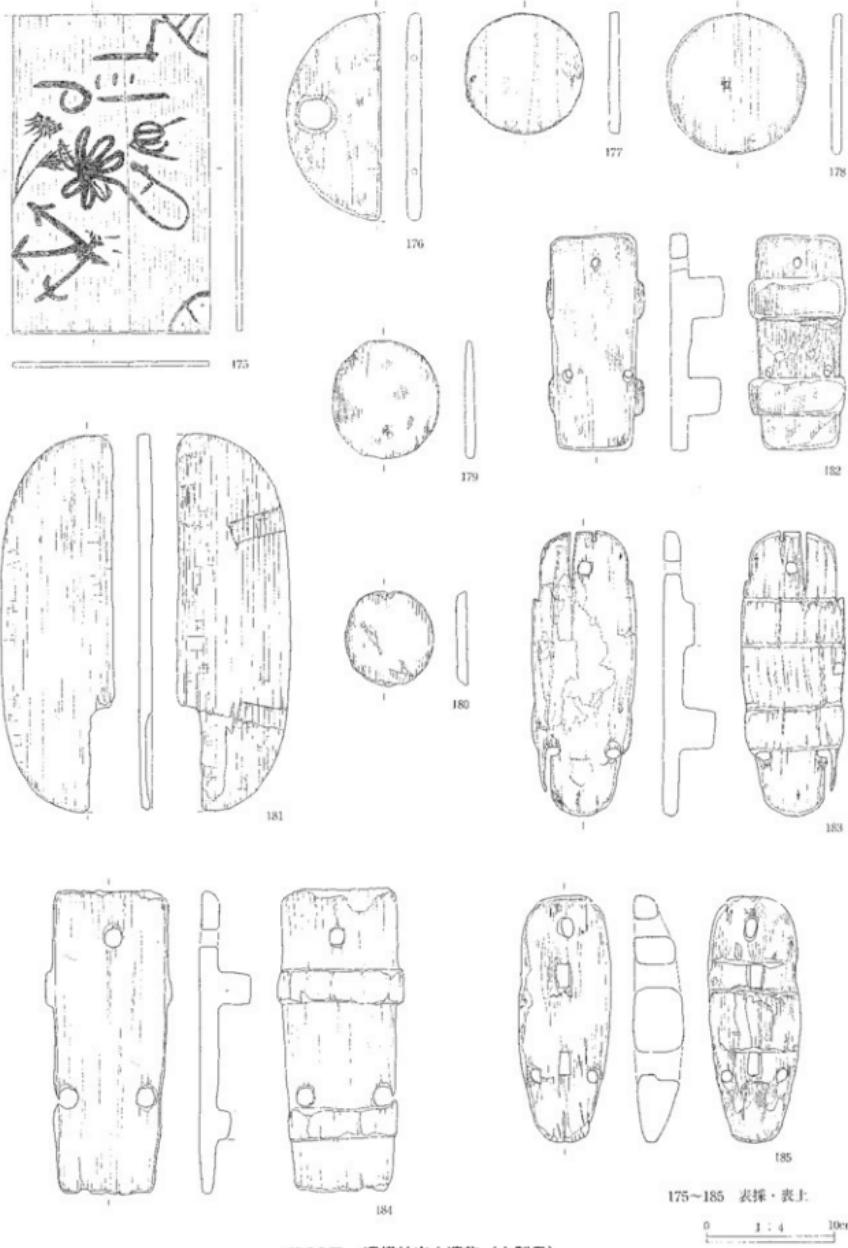
31~40 第Ⅱ層
 41、42 第Ⅲ層
 43~46 第Ⅲ下層
 47~56 第Ⅳ層
 57、58 11号土坑
 59 第Ⅳ層



第86図 錢貨



第87図 遺構外出土遺物（木製品）



第88図 遺構外出土遺物（木製品）

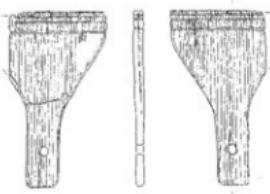
0 1:4 10cm

第89图 旗幡外出土遗物(木製品)

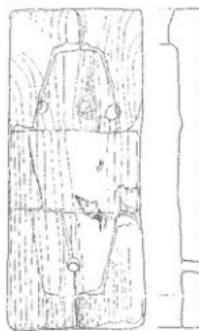
10cm

189~191 第Ⅱ号
192~193 長尺・其上

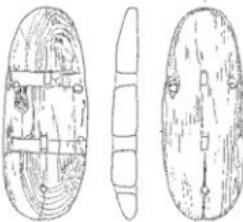
194



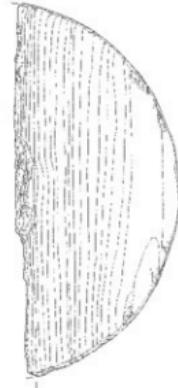
195



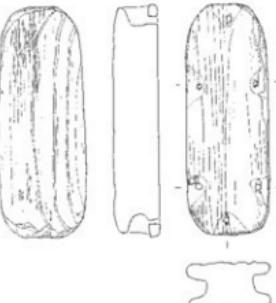
197



198



199



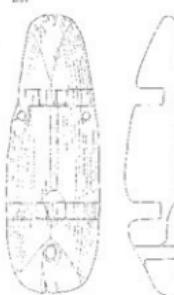
200



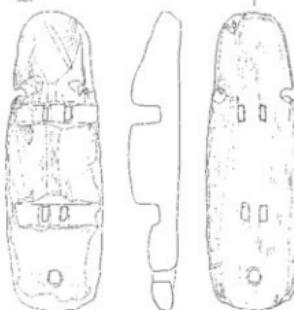
201

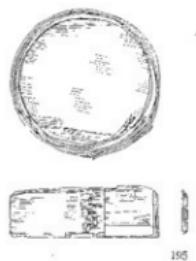


202

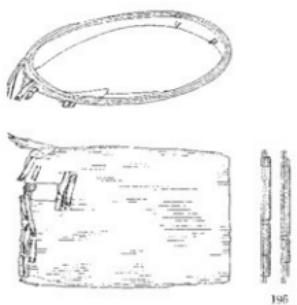


203

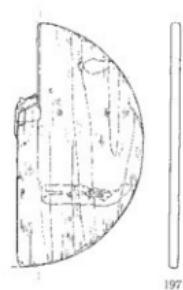




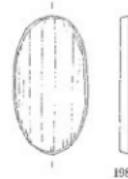
195



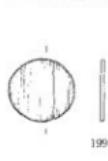
196



197



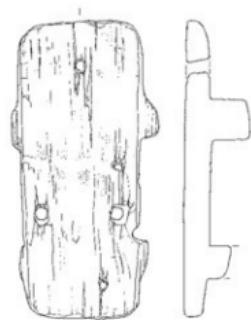
198



199



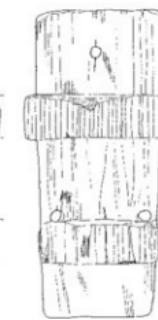
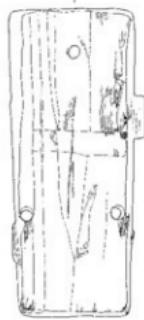
200



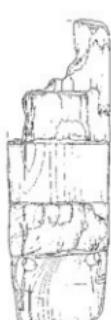
201



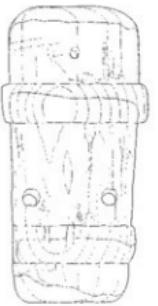
202



203



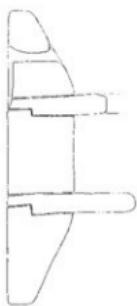
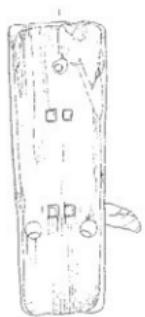
204



195~204 第Ⅲ層

0 1 : 4 10cm

第90図 遺構外出土遺物（木製品）



205



206



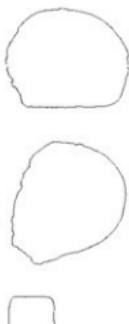
207



208



209



210



211



212

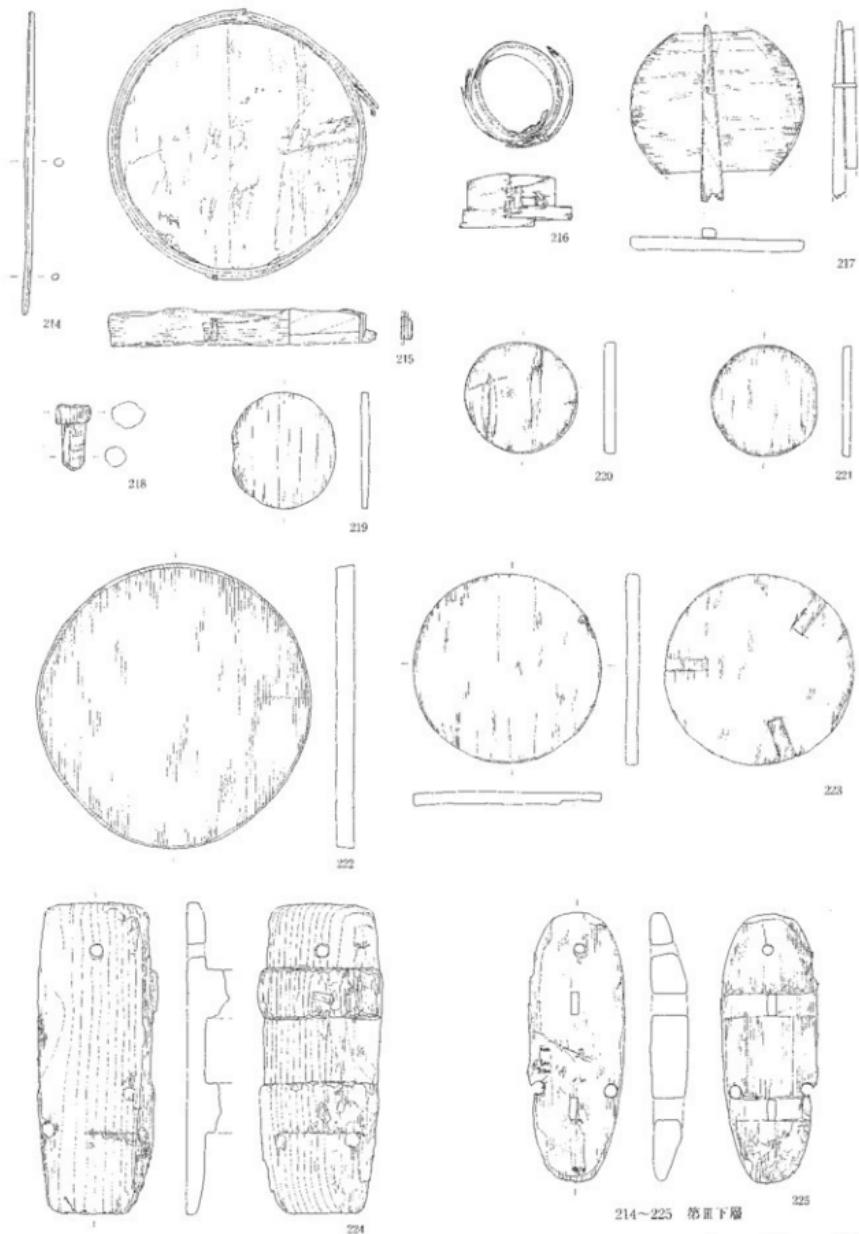


213

205~213 第Ⅱ層

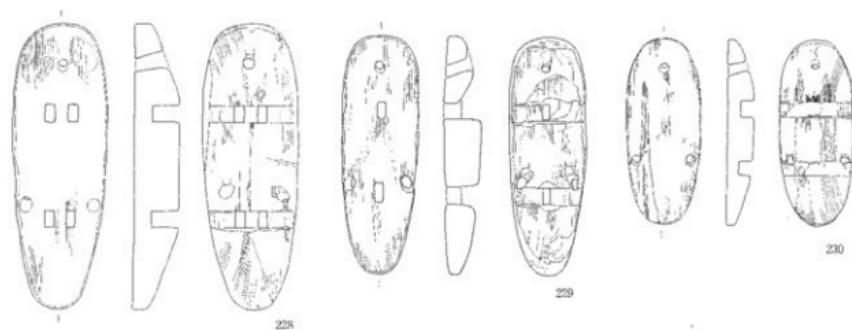
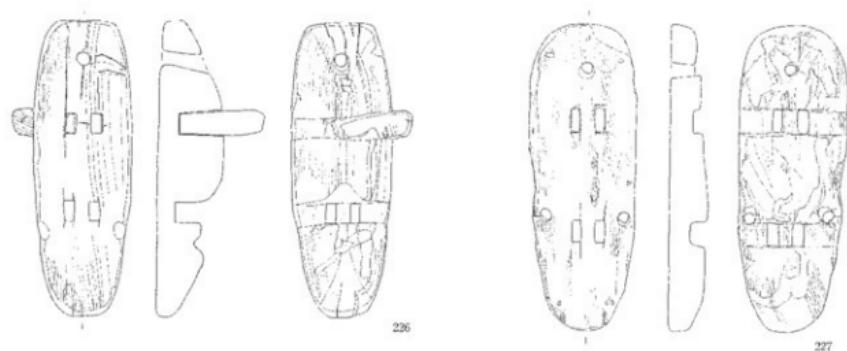
0 1 : 4 10cm

第91図 遺構外出土遺物（木製品）



第92図 遺構外出土遺物（木製品）

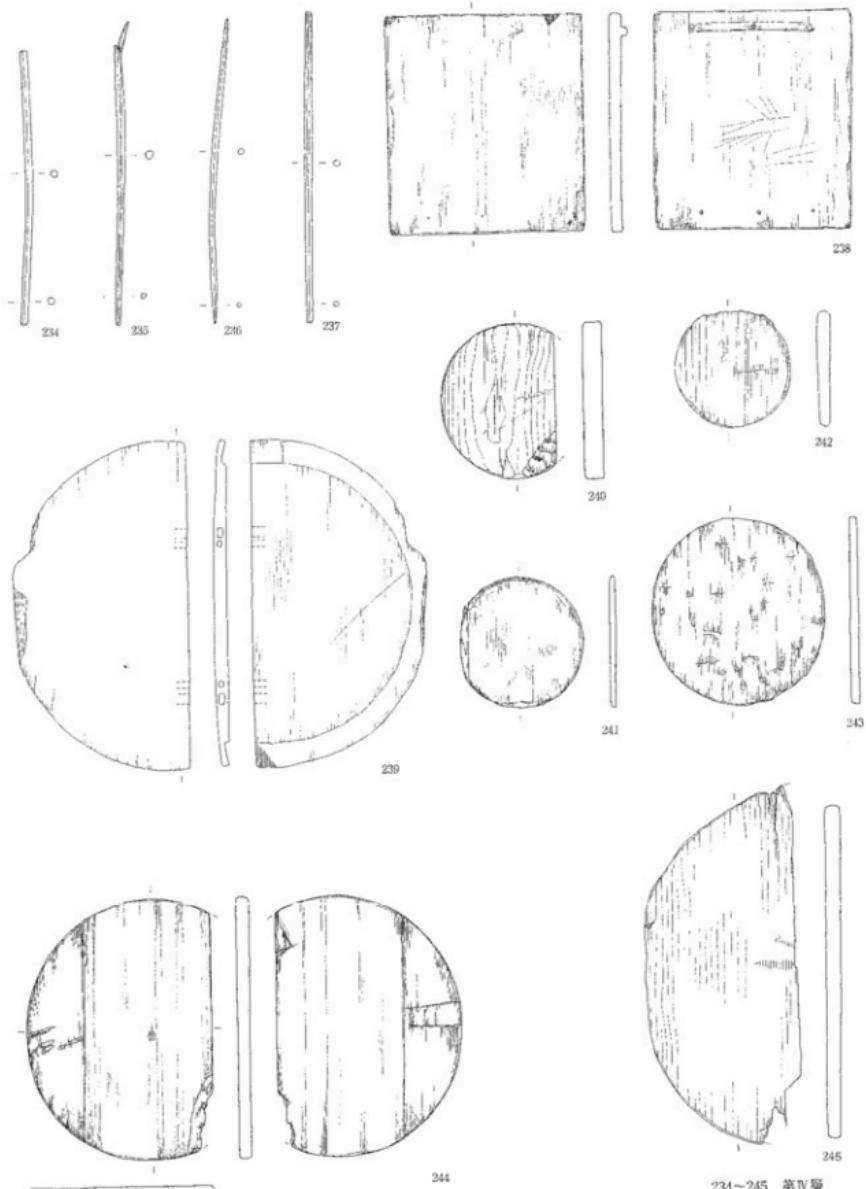
0 1 : 4 10cm



226~233 第Ⅲ下層

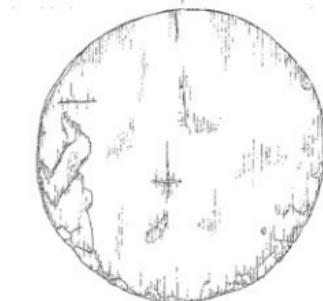
第93図 遺構外出土遺物（木製品）

0 1 : 4 10cm

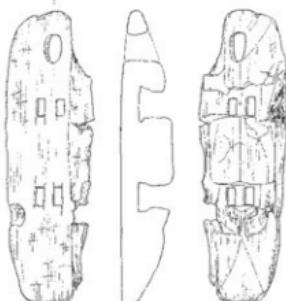


第94図 遺構外出土遺物（木製品）

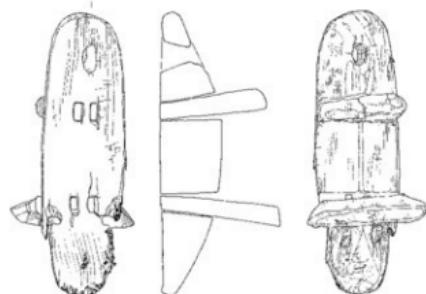
0 1 : 4 10cm



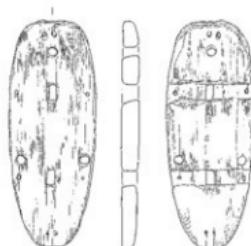
246



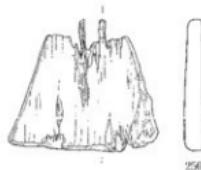
247



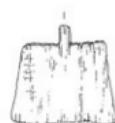
248



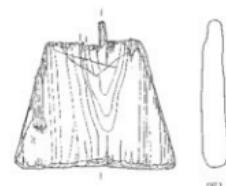
249



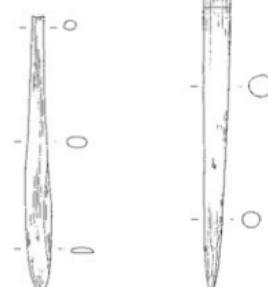
250



252



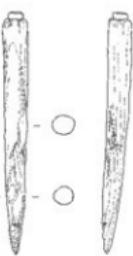
251



253



254



255

246~255 第IV層

0 1 : 4 10cm

第95図 遺構外出土遺物（木製品）

全て銅錢の寛永通寶である。銭文の書体等から50、52～54、59は古寛永（初鑄1636年）に、背面に「文」の字がある47、48は新寛永の「文銭」（初鑄1668年）に該当する。49、51、55、56、58は欠損、劣化により銭文が不鮮明で分類が困難である。47～56は紐は腐食していたが綴（銭差）の状態で一括で出土した。

木製品（第94、95図234～255、図版69、70）

234～237は箸である。両端を削って加工しているもので、ほぼ中心部に最大径があるが、234は両端を削っていないものである。237、238、239は蓋である。238は箱状の容器の蓋である。ほぼ方形をなし、内側の両脇に木釘で棧が付けられており、棧の一部が認められる。両面に黒色の漆が塗られており、刃物痕が認められる。239は下面の周縁部を一回り削って加工し、上面には赤色の漆が塗られている。中央部断面に小孔と木釘が認められることから2枚の材を合わせて加工したと考えられる。240～246は容器底板である。240～242は小型であることから柄杓の底板と考えられる。243の周縁部近くに1箇所小孔が認められる。244の下面には3箇所に長方形の削りが認められる。247～249は下駄である。全て差歎下駄で、台部は隅丸長方形ないしは橢円形をなす。248には漆が認められる。249は小型で、3箇の緒穴の他に小孔が8個穿たれている。250～252は下駄の差歎で、台形に加工されている。253～255は串である。253の身部は棒状をなし、先端部は範状に加工されている。254は身部は棒状で、先端部が尖るものである。255は身部が棒状で先端部が尖り、他方に刻みを施してツマミ状に加工している。

9 動物遺存体（図版71）

部位名の後の数字は図版の番号に一致する。計測法はイスについては斎藤（1963）、それ以外の種についてはDriesch（1976）に準拠した。

貝類 アワビ・ハマグリ・アサリなどが少量出土している。

鳥骨 左上腕骨24：第IV層出土。GL=153.4mm、SC=8.8mm。大型の鳥類。

ハクビシン 左肩胛骨16：第III下層出土。HS=56.6mm。

シカ 左肩胛骨23：第I層出土。LG=35.5mm、BG=31.0mm

左上腕骨18：第III上層出土。GL（現存長）=176.5mm、SD=19.7mm。

右上腕骨17：第II層出土。GL（現存長）=150.7mm、SD=21.1mm。

左脛骨 19：第II層出土。GL=300.0mm、SD=26.1mm。

右中足骨21：第II層出土。GL=249.5mm、SD=17.8mm。

ウマ 左前腕骨22：第III下層出土。GL=342.0mm、GL（桡骨部分）=283.0mm、SD=33.1mm。

クマ 右桡骨 20：第I層出土。GL（現存長）=192.5mm、SD=20.7mm。

イス 1号井戸跡から頭蓋骨1、下顎骨2、3、5、肋骨6～9、右寛骨10、右腓骨15、右脛骨13（全長（現存長）=178.0mm、体中央横径=12.3mm）が出土している。以下の表1、2に同一個体と思われる頭蓋骨1と下顎骨2、3の計測値を示した。第1トレンチ東側造成土出土の頭蓋骨4には脳室を取り出すためと考えられる切り出しの痕跡が見られ、第III下層出土の左寛骨11、1号井戸跡出土の肋骨7にも切痕が見られる。また、1号土坑から左上腕骨12（全長=162.0mm、体最狭部横径=13.7mm）、第III下層から左脛骨14（全長=173.8mm、体中央横径=12.5mm）が出土している。

表1 1号井戸跡出土イヌ頭蓋骨計測値表

(mm)

計測箇所(齧歯)	計測値	計測箇所(齧歯)	計測値	計測箇所(齧歯)	計測値
最大頭蓋長 (I-P)	168.4	両前頭顎突起端間 (Ect-Ect)	46.0	左犬歯幅径 (3~4)	5.7
基底頭蓋長 (I)	148.5	後頭三角最大高 (I-B)	44.4	左上裂歯長 (80~83)	17.2
硬口蓋最大長 (P-St)	86.1	後頭三角幅 (Ot-Ot)	62.9	左上裂歯幅 (85)	8.4
頭蓋幅 (eu-eu)	54.7	最小眼窓最小距離 (Ent-Ent)	30.2	左上第一後臼歯長 (80~87)	11.0
頬骨弓幅 (Zy-Zy)	98.7	顎長 (I) (P-N)	82.5	左上第一・後臼歯幅 (70~81)	11.5
頭蓋幅 (au-au)	62.3	吻長 (I) (P-Oo)	73.8	右犬歯頭最大長 (1~2)	10.1
脣頭蓋長 (I) (I-N)	90.0	吻長 (2) (P-If)	53.0	右犬歯幅径 (3~4)	4.7
頭蓋高 (I) (br-ho)	52.5	吻幅 (1) (7~7)	34.9	右上裂歯長 (80~83)	17.0
後頭孔開閉切痕より環状縫合		吻高 (1) (N-)	39.2	右上裂歯幅 (85)	8.1
頂点までの距離 (B-Br)	64.2	脊凹陥深 (18~19)	4.2	右上第一・後臼歯長 (80~87)	11.0
最小前頭幅 (fs-fs)	34.4	左犬歯頭最大長 (1~2)	9.8	右上第一・後臼歯幅 (70~81)	13.1

表2 1号井戸跡出土イヌ下顎骨計測値表

(mm)

計測箇所(齧歯)	計測値(左)	計測値(右)	計測箇所(齧歯)	計測値	計測箇所(齧歯)	計測値
下顎体高 (3)(10)	24.4	24.4	左犬歯頭最大長 (1~2)	10.1	右犬歯頭最大長 (1~2)	10.1
下顎体高 (6)(13)	19.1	19.5	左犬歯幅径 (3~4)	6.3	右犬歯幅径 (3~4)	6.4
下顎体厚 (1)(18)	10.2	10.2	左下裂歯長 (1~2)	18.3	右下裂歯長 (1~2)	18.4
			左下裂歯幅 (3~4)	7.5	右下裂歯幅 (3~4)	7.5

10 陶磁器・土器類一覧

凡例

- 番号は陶磁器類の報告書掲載の通し番号と一致する。
- 図版番号は、報告書掲載の出土遺物図版番号第26~36、46~80図と一致する。
- 出土地点・層位は、出土した遺構及び層位を示した。
- 分類は、陶磁器・土器類については材質や焼成等により陶器・磁器・陶胎染付・土器・土製品・ガラスの分類を示した。
- 種類等では、基礎形態や機能に基づく器種と器形、さらに陶器については施釉の種類、磁器については施釉や絵付により染付・青磁・白磁・色絵の種別を示した。
- 陶磁器の型類については、口径等によって小皿(口径12cm以下)、五寸皿(口径12~15cm台)、中皿(口径18~24cm台)、大皿(口径30cm以上)の区分を付加した。
- 生産地では、国外産の貿易陶磁については大きく中国系等の国別を示し、国内産については肥前系、瀬戸美濃系京信楽系等の主要な大規模生産地(地方)に拘り、その生産地産のものを主として、それに直接技術の影響を受けた周辺及び地方の窯のものも含め「系」として示した。また、より具体的な生産地として窯等を限定できるものについては、中国産の漳州窯、秋田県の在地窯である寺内窯や白岩窯等のように示した。
- 年代については、器形・文様・製作技法等によって編年区分に示す各生産地編年の各期年代幅に準じて西暦の実年代を用いないで時期を示し、より年代を限定できるものについては、より短い年代で示した。また窯を限定できるものについては、生産・操業期間等に基づいて年代を示した。
- 編年区分では、主要生産地についてその生産地の編年区分を示した。肥前系については、陶器及び磁器ともに大橋氏編年の時期区分を示し、瀬戸美濃系については、古瀬戸・大窯編年の時期区分を示した。
- 肥前系陶磁器の時期区分は次のようになっている。(九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』より)
 - I期 1580~1610年代 (I-1期1580~1594年頃、I-2期1594~1610年代に細分)
 - II期 1600~1650年代
(磁器についてはII期から開始。II-1期1610~1630年、II期-2期1630~1650年代に細分)
 - III期 1650~1690年代
 - IV期 1690~1780年代
 - V期 1780~1860年代

时期	出土地点	分 布	器 物	生 存	年 代	编年区分
新石器时代	2号沟	香山	陶器	寺内第 19C	肥前 I ~ Ⅲ期	
3 ~ 26	2号沟	麻田	灰褐色折腹盆	肥前系	17C初	
3	26	5号堆积群	陶器	袋足小瓶	肥前系	17C中带
4	26	5号柱列	陶器	袋足碗	不明	19C浅带
5	26	5号柱列	陶器	斜口碗	肥前系	17C末 ~ 18C初
6	26	5号柱列	陶器	灰褐色清酒皿	肥前系	17C面平
7	26	5号柱列	陶器	单耳罐	不明	8C ~ 9C偏下
8	26	8号柱列	陶器	灰褐色	肥前系	17C末
9	26	1号井	陶器	合身陶	肥前系	17C中带
10	26	1号井	陶器	灰褐色清酒皿	肥前系	17C浅带
11	26	1号井	七器	小わらけ小瓶	不明	18C ~ 19C浅带
12	26	2号井	陶器	灰褐色丸形容器	口	17C
13	26	2号井	陶器	米	不明	8C ~ 9C
14	26	4号井	陶器	空身丸形容器 (小瓶)	肥前系	17C中带
15	26	3号井	陶器	袋足丸瓶 (五寸瓶)	肥前系	17C末 ~ 18C
16	26	3号井	陶器	袋足瓶	肥前系	18C
17	26	3号井	陶器	袋足火人	不明	17C后半
18	26	3号井	陶器	袋足火人	肥前系	17C浅带
19	26	5号井	陶器	白底丸瓶 (五寸瓶)	肥前系	18C
20	27	1号沟	陶器	袋足扁坛瓶	肥前系	18C后半 ~
21	27	1号沟	陶器	袋足丸形容器 (小瓶)	肥前系	19C浅带
22	27	1号沟	陶器	袋足丸形容器 (小瓶)	肥前系	19C浅带
23	27	1号沟	陶器	袋足小环	肥前系	17C末 ~ 18C初
24	27	1号沟	陶器	袋足小环	肥前系	17C末 ~ 18C初
25	27	1号沟	陶器	袋足小环	肥前系	19C前半
26	27	1号沟	陶器	袋足小瓶	肥前系	17C中带
27	27	1号沟	陶器	袋足丸瓶	肥前系	18C浅带
28	27	1号沟	陶器	袋足丸瓶	肥前系	17C ~
29	27	1号沟	陶器	袋足丸瓶	肥前系	18C浅带
30	27	1号沟	陶器	青釉染色丸瓶	肥前系	18C浅带
31	27	1号沟	陶器	青釉丸瓶	肥前系	18C浅带
32	27	1号沟	陶器	白口小环	肥前系	17C浅带
33	27	1号沟	陶器	白色小瓶	肥前系	18C浅带
34	27	1号沟	陶器	袋足油瓶	肥前系	18C
35	27	1号沟	陶器	袋足瓶	肥前系	17C末 ~ 18C初
36	27	1号沟	陶器	白口合子	肥前系	17C末 ~ 18C初
37	28	1号沟	陶器	色釉香炉	肥前系	17C浅带
38	28	1号沟	陶器	脚(脚)	肥前系	17C浅带
39	28	1号沟	陶器	袋足火人	肥前系	19C浅带
40	28	1号沟	陶器	灰褐色	肥前系	17C浅带
41	28	1号沟	陶器	灰褐色折腹盆	肥前系	17C
42	28	1号沟	陶器	灰褐色	肥前系	17C浅带
43	28	1号沟	陶器	灰褐色折腹盆	肥前系	17C浅带
44	28	1号沟	陶器	灰褐色	肥前系	17C浅带
45	28	1号沟	陶器	挂件分付器	肥前系	17C浅带 ~
46	29	1号沟	陶器	挂件毛日文瓶	肥前系	17C浅带
47	29	1号沟	陶器	挂件带盖	肥前系	18C末 ~
48	29	1号沟	陶器	灰褐色	肥前系	18C末带
49	29	1号沟	陶器	灰褐色	肥前系	17C末 ~
50	29	1号沟	陶器	灰褐色	肥前系	17C末 ~
51	29	1号沟	陶器	灰火盆	肥前系	不明
52	29	1号沟	陶器	台杯	在地系	8C ~ 9C
53	29	1号沟	陶器	小わらけ小瓶	不明	17C

时期	出土地点	分 布	器 种	生 存	年 代	编年区分
54	29	1号沟	土器	かわらけ小瓶	不明	17C
55	29	1号沟	土器	人形	不明	17C ~ 19C
56	29	2号沟	土器	染付丸瓶 (五寸瓶)	肥前系	17C末 ~ 18C
57	29	2号沟	土器	染付中瓶	肥前系	17C浅半
58	29	2号沟	土器	染付挂瓶	肥前系	18C
59	29	2号沟	土器	染付人瓶	肥前系	17C末 ~ 18C初
60	31	2号沟	土器	青釉丸瓶 (五寸瓶)	肥前系	18C浅半
61	31	2号沟	土器	青釉罐	中村系	16C
62	31	2号沟	土器	青釉	肥前系	肥前中期
63	31	2号沟	陶器	刷毛口舟形	肥前系	17C浅半 ~
64	31	2号沟	土器	烧泥壁	不明	17C浅半 ~ 18C
65	31	3号沟	土器	坐付浅	肥前系	19C浅半
66	31	3号沟	土器	染付小瓶	不明	19C浅半 ~
67	31	4号沟	土器	染付小瓶	肥前系	18C浅半
68	31	4号沟	土器	染付瓶	不明	不明
69	31	4号沟	土器	ガラス瓶	不明	19C浅半 ~
70	31	5号沟	土器	染付梅花瓶	肥前系	17C浅半
71	31	5号沟	土器	青釉粗	肥前系	18C浅半
72	31	5号沟	土器	染付丸瓶	肥前系	18C初
73	32	5号沟	土器	染付丸瓶	肥前系	18C浅半
74	32	5号沟	土器	染付丸瓶	肥前系	18C浅半 ~
75	32	5号沟	土器	染付丸瓶	肥前系	18C浅半
76	32	5号沟	土器	染付丸瓶	肥前系	17C浅半
77	32	5号沟	土器	染付丸瓶	肥前系	17C浅半 ~
78	32	5号沟	土器	染付丸瓶	肥前系	17C浅半 ~
79	32	5号沟	陶器	刷毛口舟形	肥前系	17C浅半
80	32	5号沟	陶器	青釉折腹瓶	肥前系	17C浅半 ~
81	33	6号沟	陶器	染付浅	不明	19C浅半
82	33	6号沟	陶器	青釉染付丸瓶	不明	19C浅半
83	33	6号沟	陶器	染付小瓶	肥前系	19C浅半
84	33	6号沟	陶器	染付丸瓶	肥前系	19C浅半
85	33	6号沟	陶器	青釉大瓶	肥前系	17C中带
86	33	6号沟	陶器	大明里	不明	不明
87	33	6号沟	陶器	地垢瓶	不明	18C ~ 19C
88	33	6号沟	陶器	ガラス瓶	不明	18C ~ 19C
89	33	7号沟	陶器	染付粗	肥前系	17C浅半
90	33	7号沟	陶器	染付粗	肥前系	17C浅半
91	34	1号上坑	陶器	染付丸瓶 (五寸瓶)	肥前系	17C末 ~ 18C初
92	34	1号上坑	陶器	染付丸瓶	肥前系	17C中带
93	34	1号上坑	陶器	染付丸瓶	肥前系	17C末 ~ 18C初
94	34	1号上坑	陶器	染付丸瓶	肥前系	18C
95	34	1号上坑	陶器	天目烧	美濃系	16C ~ 17C初
96	31	3号上坑	陶器	染付粗	肥前系	17C中带
97	34	3号上坑	陶器	染付丸瓶	肥前系	18C
98	34	3号上坑	陶器	染付粗	肥前系	18C
99	34	3号上坑	陶器	染付粗	肥前系	18C
100	34	3号上坑	陶器	染付粗	肥前系	18C
101	34	3号上坑	陶器	染付丸瓶	肥前系	18C浅半
102	34	3号上坑	陶器	染付丸瓶	肥前系	18C浅半
103	34	3号上坑	陶器	染付丸瓶	肥前系	18C浅半
104	34	3号上坑	陶器	染付丸瓶	肥前系	18C浅半
105	35	11号上坑	陶器	染付浅	肥前系	17C末 ~ 18C初
106	35	11号上坑	土器	花瓶	不明	17C
107	35	11号上坑	土器	小わらけ小瓶	不明	17C
108	35	11号上坑	土器	かわらけ小瓶	不明	17C
109	35	11号上坑	土器	小わらけ小瓶	不明	17C

番号	地點・ 香号	出土地・ 香号	分類	器種等	生産期	年代	編年区分	番号	地點・ 香号	分類	器種等	生産期	年代	編年区分	
110	35 11号土坑	上器	かわらけ中器	不明	17C			161	48 表土	縦器	束付丸純	更崩系	17C後半		肥前中期
111	35 11号土坑	土器	かわらけ大瓶	不明	17C			162	49 表土	縦器	束付純	不明	19C		
112	35 11号土坑	土器	鏡形かわらけ	不明	17C			163	49 表土	縦器	束付純	不明	19C後半		
113	35 11号土坑	土器	瓦質火井	不明	17C			164	49 表土	縦器	束付純	不明	19C後半		
114	35 13号土坑	縦器	束付火井	18C	肥前中期			165	49 表土	縦器	染付純	肥前系	17C中期		
115	35 13号土坑	周器	灰陶瓶	肥前系	17C後半			166	49 表土	縦器	色绘油金	肥前系	17C後半		
116	35 14号土坑	縦器	束付丸組	17C後半	肥前中期			167	49 表土	縦器	色绘油金	肥前系	17C後半		
117	36 14号土坑	縦器	折筋罐	津州窯系	17C後半			168	49 表土	縦器	染付香炉	肥前系	17C後半		
118	36 14号土坑	縦器	束付丸組	肥前系	17C末~18C初	肥前中期		169	49 表土	縦器	染付仏龕置	肥前系	17C後半		
119	36 14号土坑	縦器	束付純	肥前系	17C中~	肥前中期		170	49 表土	縦器	人形	肥前系	17C後半		
120	36 14号土坑	縦器	束付純	肥前系	17C中~	肥前中期		171	49 表土	脚器	纹饰漆桶形	肥前系	17C後半		
121	36 14号土坑	縦器	束付丸組	17C~				172	49 表土	周器	染付丸組	肥前系	18C前半		
122	36 2号清酒用甌	周器	志野瓶	肥前系	16C末~17C初	大宰府4期		173	49 表土	脚器	切削丸組	肥前系	17C後半~		
123	36 瓢	縦器	束付丸組	肥前系	17C末~18C初	肥前中期		174	50 表土	脚器	刷毛口文具	更崩系	17C後半		
124	46 第3トレンチ	近器	束付純	肥前系	17C後半	肥前中期		175	50 表土	周器	灰釉輪	肥前系	17C後半		
125	46 第3トレンチ	縦器	束付丸組(小瓶)	肥前系	17C後半	肥前中期		176	50 表土	脚器	白石	18C後半~			
126	46 第3トレンチ	縦器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	17C末~18C初	肥前中期		177	50 表土	周器	白石	18C後半~			
127	46 第3トレンチ	縦器	束付梅花瓶	肥前系	18C末~	肥前中期		178	50 表土	上器	灯火具素燒	不明	18C後半~		
128	46 第3トレンチ	縦器	束付小碗	寺内窯系	19C前半			179	50 表土	上器	灯火具素燒	18C後半~			
129	46 第3トレンチ	縦器	束付益	不明	20C			180	50 表土	陶器	灯火具骨盆	不明	18C		
130	46 第1トレンチ	縦器	束付純	肥前系	18C後半	肥前中期		181	50 表土	陶器	铁鍛鉢	不明	18C		
131	46 第1トレンチ	縦器	束付純	肥前系	17C後半	肥前中期		182	50 表土	陶器	铁鍛鉢	肥前系	18C後半~		
132	46 第1トレンチ	縦器	束付純	肥前系	17C後半	肥前中期		183	54 表土	脚器	铁鍛馬鞍	不明	18C		
133	46 第1トレンチ	縦器	束付純	肥前系	17C後半	肥前中期		184	51 表土	陶器	铁鍛馬鞍	不明	18C		
134	46 第1トレンチ	縦器	束付純	肥前系	18C後半	肥前中期		185	51 表土	陶器	铁鍛馬鞍	不明	18C		
135	47 第1トレンチ	周器	灰陶折筋瓶	肥前系	17C後半	肥前中期		186	51 表土	脚器	脚钉ハマ	室内燃氣	18C前半		
136	47 第1トレンチ	周器	灰陶折筋瓶	肥前系	17C後半	肥前中期		187	51 表土	脚器	不明製品?	不明	18C		
137	47 第1トレンチ	周器	灰陶蓋	寺内窯系	18C末~	肥前中期		188	51 表土	脚器	剪刀	19C後半~			
138	47 風呂	縦器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C前半	肥前中期		189	51 表土	脚器	剪刀	在地塗	SC~9C		
139	47 風呂	縦器	白磁盤	肥前系	17C後半	肥前中期		190	52 第Ⅱ層	磁器	束付丸組	肥前系	16C後半		肥前中期
140	47 風呂	縦器	束付小碗	肥前系	18C	肥前中期		191	52 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(小瓶)	寺内窯系	19C前半		
141	47 風呂	縦器	束付小瓶	肥前系	18C	肥前中期		192	52 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(小瓶)	肥前系	17C末~18C初		肥前中期
142	47 風呂	周器	掛け分け斧	肥前系	17C後半~	肥前中期~IV期		193	52 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(小瓶)	肥前系	18C前半		肥前中期
143	47 風呂	縦器	銅鑄劍	不明	19C			194	52 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	17C末		肥前中期
144	47 表様・表土	縦器	束付丸組(小瓶)	肥前系	18C末~19C	肥前中期		195	52 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C前半		肥前中期
145	47 表様・表土	縦器	束付丸組(小瓶)	肥前系	17C中~	肥前中期~II期		196	52 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C		肥前中期
146	48 表土	縦器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	17C末~18C初	肥前中期		197	52 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C前半		肥前中期
147	48 表土	縦器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C	肥前中期		198	53 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C前半		肥前中期
148	48 表土	縦器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C前半	肥前中期		199	53 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C後半		肥前中期
149	48 表土	縦器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C前半	肥前中期		200	53 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C		肥前中期
150	48 表土	磁器	白磁紅鳳凰	肥前系	18C前半	肥前中期		201	53 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C		肥前中期
151	48 表土	磁器	白磁紅鳳凰	肥前系	18C前半	肥前中期		202	53 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C		肥前中期
152	48 表土	磁器	白磁紅鳳凰	肥前系	18C前半~中半	肥前中期		203	53 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C		肥前中期
153	48 表土	磁器	束付小瓶?	肥前系	17C後半	肥前中期		204	53 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C		肥前中期
154	48 表土	磁器	束付小瓶?	肥前系	18C後半	肥前中期		205	54 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C		肥前中期
155	48 表土	磁器	束付小瓶?	肥前系	18C前半			206	54 第Ⅱ層	磁器	束付丸組(五寸瓶)	肥前系	18C		肥前中期
156	48 表土	磁器	束付小瓶?	肥前系	18C	肥前中期									
157	48 表土	磁器	束付丸組	肥前系	18C	肥前中期									
158	48 表土	磁器	束付丸組	肥前系	18C	肥前中期									
159	48 表土	磁器	束付丸組	肥前系	18C前半	肥前中期									
160	48 表土	磁器	束付丸組	肥前系	17C中~	肥前中期~II期									

番号	出上地點・ 層	分類	器種等	生産地	年代	紀年区分	番号	出上地點・ 層	分類	器種等	生産地	年代	紀年区分	
207	54 第Ⅱ層	磁器	染付粗	不明	17C		253	57 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	18C	肥前中期	
208	54 第Ⅱ層	磁器	染付粗	肥前系	17C後半	肥前中期	254	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	不明	18C末	20C前葉	
209	54 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶 (中腹)	肥前系	18C	肥前IV期	255	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	18C	肥前IV期	
210	54 第Ⅱ層	磁器	染付粗	肥前系	17C後半	肥前中期	256	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	17C後半～18C	肥前IV期	
211	54 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶 (中腹)	肥前系	17C後半	肥前中期	257	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	17C後半～18C	肥前IV期	
212	54 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶 (中腹)	肥前系	17C後半	肥前IV期	258	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	17C後半～18C	肥前IV期	
213	55 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶 (中腹)	肥前系	18C	肥前IV期	259	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	染付丸瓶	肥前系	18C前半	肥前IV期
							260	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	18C	肥前IV期	
							261	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	染付丸瓶	肥前系	18C	肥前IV期
							262	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	18C	肥前IV期	
							263	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	染付丸瓶	肥前系	18C	肥前IV期
							264	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	18C後半～	肥前IV期	
214	55 第Ⅱ層	磁器	切削鳳	津州空窓	17C後半		265	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	19C初		
215	55 第Ⅱ層	磁器	白磁磨り鳳	肥前系	17C中葉	肥前中期	266	58 第Ⅱ層	磁器	染付丸瓶	不明	18C後半		
216	55 第Ⅱ層	磁器	染付花瓶 (小瓶)	寺内窓	18C中葉		267	59 第Ⅲ層	磁器	染付丸瓶	寺内窓	18C前半		
217	55 第Ⅱ層	磁器	染付花瓶 (小瓶)	肥前系	19C中葉	肥前V期	268	59 第Ⅲ層	磁器	染付丸瓶	美濃系	18C前半		
218	56 第Ⅱ層	磁器	染付花瓶 (小瓶)	肥前系	19C中葉	肥前V期	269	59 第Ⅲ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	17C前半	肥前II-III期	
219	56 第Ⅱ層	磁器	染付花瓶 (小瓶)	肥前系	19C中葉	肥前V期	270	59 第Ⅲ層	磁器	造反瓶	肥前系	18C後半	肥前IV期	
220	56 第Ⅱ層	磁器	染付花瓶 (小瓶)	肥前系	19C中葉	肥前V期	271	59 第Ⅲ層	磁器	造反瓶	寺内窓	18C本～19C		
221	56 第Ⅱ層	磁器	染付花瓶 (小瓶)	肥前系	19C前半	肥前V期	272	59 第Ⅲ層	磁器	造反瓶	肥前系	18C本～19C		
222	56 第Ⅱ層	磁器	染付花瓶 (小瓶)	肥前系	19C前半	肥前V期	273	59 第Ⅲ層	磁器	造物瓶	不明			
223	56 第Ⅱ層	磁器	染付花瓶 (小瓶)	肥前系	19C前半	肥前V期	274	59 第Ⅲ層	磁器	青磁泡底瓶	肥前系	18C前半	肥前IV期	
224	56 第Ⅱ層	磁器	染付木盒蓋	肥前系	17C後半	肥前中期	275	59 第Ⅲ層	磁器	白磁小杯	肥前系	17C後半	肥前IV期	
225	56 第Ⅱ層	磁器	染付木盒蓋	肥前系	18C後半	肥前中期	276	60 第Ⅲ層	磁器	白磁碗	肥前系	17C～18C前	肥前IV期	
226	56 第Ⅱ層	磁器	染付木盒蓋	肥前系	18C後半	肥前中期	277	60 第Ⅲ層	磁器	色絵紋口	肥前系	18C中～後半	肥前IV期	
227	56 第Ⅱ層	磁器	染付方盤	不明	18C後半～		278	60 第Ⅲ層	磁器	染付小瓶	肥前系	18C中～後半	肥前IV期	
228	56 第Ⅱ層	磁器	色絵方盤	肥前系	17C後半	肥前中期	279	60 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	不明	18C後半		
229	56 第Ⅱ層	磁器	染付粗	内藤紅葉	17C末～18C初	肥前IV期	280	60 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	肥前系	18C	肥前IV期	
230	56 第Ⅱ層	磁器	染付粗	白磁紅葉	肥前系	18C後半	肥前IV期	281	60 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	寺内窓	18C中葉	
231	56 第Ⅱ層	磁器	染付粗	白磁紅葉	肥前系	18C後半	肥前IV期	282	60 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	不明	18C前半	
232	56 第Ⅱ層	磁器	染付小碗	不明	17C～		283	60 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	不明	18C前半		
233	56 第Ⅱ層	磁器	染付小碗	肥前系	18C	肥前V期	284	60 第Ⅲ層	磁器	青磁打掛瓶	肥前系	18C後半	肥前IV期	
234	56 第Ⅱ層	磁器	染付粗	染付粗	肥前系	18C	肥前V期	285	60 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	肥前系	18C	肥前V期
235	56 第Ⅱ層	磁器	染付方盤	肥前系	17C後半	肥前中期	286	60 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	寺内窓	19C中葉		
236	56 第Ⅱ層	磁器	染付粗	内藤紅葉	17C末～18C初	肥前IV期	287	61 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	寺内窓	19C中葉		
237	56 第Ⅱ層	磁器	染付粗	白磁紅葉	肥前系	18C後半	肥前IV期	288	61 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	不明	19C後半	
238	56 第Ⅱ層	磁器	染付粗	白磁紅葉	肥前系	18C後半	肥前IV期	289	61 第Ⅲ層	磁器	染付小瓶	肥前系	18C後半	肥前IV期
239	56 第Ⅱ層	磁器	染付粗	白磁紅葉	肥前系	18C後半	肥前IV期	290	61 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	肥前系	18C	肥前V期
240	57 第Ⅲ層	磁器	染付小碗	肥前系	18C	肥前IV期	291	61 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	肥前系	18C	肥前IV期	
241	57 第Ⅲ層	磁器	染付小碗	肥前系	18C前半	肥前IV期	292	61 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	肥前系	18C	肥前IV期	
242	57 第Ⅲ層	磁器	染付小碗	肥前系	18C後半～	肥前IV期	293	61 第Ⅲ層	磁器	染付盒蓋	肥前系	18C	肥前IV期	
243	57 第Ⅲ層	磁器	染付小碗	肥前系	19C		294	61 第Ⅲ層	磁器	染付油壺	肥前系	18C	肥前IV期	
244	57 第Ⅲ層	磁器	染付小碗	美濃系	19C		295	61 第Ⅲ層	磁器	染付油壺	肥前系	18C	肥前IV期	
245	57 第Ⅲ層	磁器	染付小碗	美濃系	19C		296	61 第Ⅲ層	磁器	色絵水滴	肥前系	18C後半～	肥前IV期	
246	57 第Ⅲ層	磁器	染付小碗	美濃系	19C		297	61 第Ⅲ層	磁器	色絵水滴	肥前系	18C	肥前IV期	
247	57 第Ⅲ層	磁器	染付小碗	美濃系	19C		298	61 第Ⅲ層	磁器	色絵水滴	肥前系	18C前半	肥前IV期	
248	57 第Ⅲ層	磁器	染付小碗	不明	19C前半		299	61 第Ⅲ層	磁器	色絵水滴	肥前系	17C後半～	肥前IV期	
249	57 第Ⅲ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	18C前半	肥前IV期	300	61 第Ⅲ層	磁器	鉢彫き落とし し段人仕	肥前系	18C	肥前V期	
250	57 第Ⅲ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	18C前半	肥前IV期	301	61 第Ⅲ層	磁器	色絵段人	不明	19C後半～		
251	57 第Ⅲ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	18C	肥前IV期	302	62 第Ⅲ層	磁器	青磁人形	肥前系	17C後半～18C初	肥前IV期	
252	57 第Ⅲ層	磁器	染付丸瓶	肥前系	18C前半	肥前IV期	303	62 第Ⅲ層	磁器	青磁人形	肥前系	17C後半～18C初	肥前IV期	
							304	62 第Ⅲ層	磁器	青磁人形	肥前系	17C後半～18C初	肥前IV期	
							305	62 第Ⅲ層	磁器	青磁人形	青磁	不明	19C後半	
							306	62 第Ⅲ層	磁器	青磁人形	肥前系	17C中葉～	肥前II-III期	
							307	62 第Ⅲ層	磁器	青磁人形	肥前系	18C前半	肥前IV期	
							308	62 第Ⅲ層	磁器	染付人形	肥前系	18C	肥前IV期	
							309	62 第Ⅲ層	磁器	染付人形	肥前系	17C後半～18C初	肥前IV期	
							310	62 第Ⅲ層	磁器	染付人形	肥前系	18C	肥前IV期	
							311	62 第Ⅲ層	磁器	染付人形	肥前系	18C	肥前IV期	
							312	62 第Ⅲ層	磁器	染付火入	肥前系	18C	肥前IV期	
							313	62 第Ⅲ層	磁器	染付火入	不明	19C後半～		

番号	埋藏地點	分類	器種等	生産地	年代	編年区分	番号	埋藏地點	分類	器種等	生産地	年代	編年区分
番号	器種	分類	器種等	生産地	年代	編年区分	番号	器種	分類	器種等	生産地	年代	編年区分
214	62 第Ⅱ層	陶器	占領火入	肥前希	17C後半～ 18C初	肥前中期	362	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉小壺	寺内窓	18C末～ 19C中葉	
215	62 第Ⅱ層	陶器	色绘人形	肥前希	17C後半～18C 初期	肥前中期	363	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉小壺	寺内窓	18C末～ 19C中葉	
216	62 第Ⅱ層	陶器	色绘人形	肥前希	18C	肥前中期	364	66 第Ⅱ層	陶器	铁釉小壺	寺内窓	18C末～ 19C中葉	
217	62 第Ⅱ層	陶器	青釉人形	肥前希	17C後半～ 18C初	肥前中期	365	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉小壺	寺内窓	18C末～ 19C中葉	
218	62 第Ⅱ層	陶器	色绘人形	不明	不明		366	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉小壺	寺内窓	18C末～ 19C中葉	
219	63 第Ⅱ層	陶器	小形製品	不明	不明		367	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉小壺	寺内窓	18C末～ 19C中葉	
220	63 第Ⅱ層	陶器	戸車	不明	18C		368	67 第Ⅲ層	陶器	打手鉢	不明	18C末～ 19C初	
221	63 第Ⅱ層	陶器	灰釉小壺	不明	17C～		369	67 第Ⅲ層	陶器	火盆	肥前希	18C	
222	63 第Ⅱ層	陶器	从属丸瓶 (五寸瓶)	肥前希	17C後半～ 18C中葉	肥前中期	370	67 第Ⅲ層	陶器	灯火具灰釉	寺内窓	18C末～ 19C中葉	
223	63 第Ⅱ層	陶器	鋼線縫丸瓶 (小瓶)	肥前希	17C後半～ 18C初	肥前中期	371	67 第Ⅲ層	陶器	灯火具若狭	ひょうそく	18C後半～	
224	63 第Ⅱ層	陶器	側輪丸瓶 (五寸瓶)	肥前希	17C後半～ 18C中葉	肥前中期	372	67 第Ⅲ層	陶器	灯火具若狭	ひょうそく	18C後半～	
225	63 第Ⅱ層	陶器	糊継納丸瓶 (五寸瓶)	肥前希	17C後半～ 18C初	肥前中期	373	67 第Ⅲ層	陶器	灯火具支持座	不明	18C～	
226	63 第Ⅱ層	陶器	京焼風陶器瓶	肥前希	17C後半～ 18C初	肥前中期	374	67 第Ⅳ層	陶器	灯火具手鏡	不明	18C末～ 19C中葉	
227	63 第Ⅱ層	陶器	折枝瓶	肥前希	17C後半～ 18C初	肥前中期	375	67 第Ⅳ層	陶器	灯火具垂繩	不明	18C末～ 19C中葉	
228	63 第Ⅱ層	陶器	跳ね折経瓶	肥前希	17C後半～ 18C初	肥前中期	376	67 第Ⅳ層	陶器	伝	不明	18C末～ 19C中葉	
229	64 第Ⅱ層	陶器	跳ね折経瓶	肥前希	17C後半～ 18C初	肥前中期	377	67 第Ⅴ層	陶器	脚付ハマ	寺内窓	18C末～ 19C中葉	
230	64 第Ⅱ層	陶器	硝口日文鋺	肥前希	17C後半～	肥前中期	378	68 第Ⅴ層	陶器	錐体	越前カ	17C～	
231	64 第Ⅱ層	陶器	延喜袖八角瓶	白口	18C後半～		379	68 第Ⅴ層	陶器	錐体	不明	17C～	
232	64 第Ⅱ層	陶器	灰釉丸瓶	京窓包裏	18C後半～19C		380	68 第Ⅴ層	陶器	錐体	不明	19C～	
233	64 第Ⅱ層	陶器	灰釉丸瓶	寺内窓	19C		381	68 第Ⅴ層	陶器	滑足	不明	19C～	
234	64 第Ⅱ層	陶器	丸瓶	不明	19C～		382	68 第Ⅴ層	陶器	人差	不明	19C～	
235	64 第Ⅱ層	陶器	京燒風陶器瓶	肥前希	17C後半～	肥前中期	383	68 第Ⅵ層	陶器	直脚壺	内台环	18C～19C	
236	64 第Ⅱ層	陶器	京焼風陶器瓶	肥前希	17C後半～	肥前中期	384	68 第Ⅵ層	上笠	小わらけ小皿	不明	17C	
237	65 第Ⅱ層	陶器	京燒風陶器瓶	肥前希	18C後半～	肥前中期	385	68 第Ⅵ層	上笠	小わらけ小皿	不明	17C	
238	65 第Ⅱ層	陶器	朝毛立文瓶	肥前希	17C後半～	肥前中期	386	69 第Ⅱ層	土器	土瓶	寺内窓	19C	
239	65 第Ⅱ層	陶器	肥前瓶	肥前希	17C後半～	肥前中期	387	69 第Ⅱ層	土器	土瓶	寺内窓	19C	
240	65 第Ⅱ層	陶器	土瓶急須	寺内窓	19C～		388	69 第Ⅱ層	土器	土瓶	寺内窓	19C	
241	65 第Ⅱ層	陶器	土瓶急須	不明	18C～		389	69 第Ⅱ層	土器	土瓶	寺内窓	19C	
242	65 第Ⅱ層	陶器	土瓶急須	石川某系	19C～		390	70 第Ⅱ層	土器	土瓶	寺内窓	19C	
243	65 第Ⅱ層	陶器	七瓶急須	寺内窓	18C末～ 19C中葉		391	70 第Ⅱ層	土器	火鉢	不明	17C～	
244	65 第Ⅱ層	陶器	十瓶急須	寺内窓	18C末～ 19C中葉		392	70 第Ⅱ層	土器	火鉢	不明	17C～	
245	65 第Ⅱ層	陶器	土瓶急須	寺内窓	18C末～ 19C中葉		393	70 第Ⅱ層	土製品	土製品	不明	17C～	
246	65 第Ⅱ層	陶器	土瓶急須	不明	18C～		394	70 第Ⅱ層	土製品	土瓶	不明	17C～	
247	65 第Ⅱ層	陶器	土瓶急須	石川某系	19C～		395	70 第Ⅱ層	砂器	直脚壺	肥前希	18C後半～	肥前中期
248	65 第Ⅱ層	陶器	七瓶急須	寺内窓	18C末～ 19C中葉		396	70 第Ⅱ層	鐵器	安井丸瓶 (小瓶)	肥前希	18C	肥前中期
249	65 第Ⅱ層	陶器	七瓶急須	寺内窓	18C末～ 19C中葉		397	70 第Ⅱ層	鐵器	染付丸瓶 (小瓶)	肥前希	18C後半	肥前中期
250	65 第Ⅱ層	陶器	十瓶急須	不明	18C後半～		398	70 第Ⅱ層	鐵器	染付丸瓶 (小瓶)	肥前希	18C後半	肥前中期
251	65 第Ⅱ層	陶器	土瓶急須	不明	18C後半～		399	70 第Ⅱ層	鐵器	青磁丸瓶	肥前希	18C	肥前中期
252	66 第Ⅱ層	陶器	滿壺	寺内窓	18C末～ 19C中葉		400	71 第Ⅱ層	鐵器	白磁丸瓶 (小瓶)	肥前希	18C	肥前中期
253	66 第Ⅱ層	陶器	瓶	白口・ 寺内窓	18C後半～ 19C中葉		401	71 第Ⅱ層	鐵器	染付丸瓶 (小瓶)	肥前希	17C後半	肥前中期
254	66 第Ⅱ層	陶器	利	不明	18C後半～		402	71 第Ⅱ層	鐵器	青磁瓶	肥前希	17C後半	肥前中期
255	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉瓶	灰釉瓶	18C末～17C初		403	71 第Ⅱ層	鐵器	合金脚付瓶	肥前希	17C中葉	肥前中期
256	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉瓶	不明	?		404	71 第Ⅱ層	鐵器	華付丸瓶 (小瓶)	肥前希	17C中葉	肥前中期
257	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉花瓶	寺内窓	18C～ 19C中葉		405	71 第Ⅱ層	鐵器	華付变形瓶	肥前希	17C後季	肥前中期
258	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉瓶	不明	?		406	71 第Ⅱ層	鐵器	白磁紅耳	肥前希	18C後季～ 19C前季	肥前中期
259	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉瓶	不明	?								
260	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉瓶	不明	?								
261	66 第Ⅱ層	陶器	灰釉小壺	寺内窓	18C～ 19C中葉								

番号	出土地点・ 名号	分類	器種等	生産地	年 代	編年区分	番号	出土地点・ 名号	分類	器種等	生産地	年 代	編年区分
407	71 佐伯郡 稻荷町	磁器	染付丸瓶	肥前系 美濃系	17C後半		460	77 布施下層 稻荷町	磁器	染付梅花形瓶 (五寸瓶)	肥前系	17C後半	肥前Ⅲ期
408	71 第四町 稻荷町	磁器	染付丸瓶	肥前系	17C末~18C初		461	77 第四下層 稻荷町	磁器	染付小壺	肥前系	18C後半~ V期	肥前Ⅳ期
409	71 第四町 稻荷町	磁器	染付丸瓶	肥前系	17C末~18C初		462	77 第四下層 稻荷町	磁器	染付小壺	肥前系	18C	肥前Ⅳ期
411	72 第四町 稻荷町	磁器	染付丸瓶	肥前系	17C末~18C初		463	77 第四下層 稻荷町	磁器	染付丸瓶	肥前系	17C後半	肥前Ⅳ期
412	72 第四町 稻荷町	磁器	白磁丸瓶	肥前系	17C~18C初		464	77 第四下層 稻荷町	磁器	染付青花瓶	肥前系	17C後半	肥前Ⅳ期
413	72 第四町 稻荷町	磁器	染付青花	肥前系	17C後半		465	77 第四下層 稻荷町	磁器	染付丸瓶	肥前系	18C後半	肥前Ⅳ期
414	72 第四町 稻荷町	磁器	染付青花	肥前系	18C後半		467	77 鹿屋下層 稻荷町	磁器	青花染付	肥前系	18C	肥前Ⅳ期
415	72 第四町 稻荷町	磁器	染付小瓶	肥前系	17C中葉		468	77 鹿屋下層 稻荷町	磁器	青花染付碗	肥前系	18C後半~ V期	肥前Ⅳ期
416	72 第四町 稻荷町	磁器	白磁油滴	肥前系	17C末~18C初		469	77 第四下層 稻荷町	磁器	染付瓶	肥前系	17C後半	肥前Ⅳ期
417	72 第四町 稻荷町	磁器	染付小瓶	肥前系	17C後半		470	77 第四下層 稻荷町	磁器	染付小壺	肥前系	17C後半	肥前Ⅳ期
418	72 第四町 稻荷町	磁器	白磁水滴	肥前系	18C後半		471	77 第四下層 稻荷町	磁器	染付青花瓶	肥前系	18C	肥前Ⅳ期
419	72 第四町 稻荷町	磁器	染付小瓶	肥前系	18C中葉		472	78 第四下層 稻荷町	陶器	灰釉折沿盤	肥前系	17C後半	肥前Ⅳ期
420	72 第四町 稻荷町	陶器	志野鐵部瓶	美濃系	16C末~17C初		473	78 第四下層 稻荷町	陶器	染付分口	肥前系	17C後半~ V期	肥前Ⅳ期
421	72 第四町 稻荷町	陶器	灰釉小环	肥前系	17C後半		474	78 第四下層 稻荷町	陶器	白磁折沿瓶	肥前系	17C	
422	72 第四町 稻荷町	陶器	灰釉小环	肥前系	17C後半		475	78 第四下層 稻荷町	陶器	土器急須	寺内窯	18C~19C中	
423	72 第四町 稻荷町	陶器	灰釉挂颈瓶	肥前系	17C後半		476	78 第四下層 稻荷町	陶器	青白釉急須	寺内窯	18C~19C中	
424	72 第四町 稻荷町	陶器	灰釉折沿瓶	肥前系	17C後半		477	78 第四下層 稻荷町	陶器	白底	不明	18C後半~	
425	72 第四町 稻荷町	陶器	灰釉折沿瓶	肥前系	17C後半		478	78 第四下層 稻荷町	陶器	猪鉢	明石窯	19C後半	
426	73 第五町 稻荷町	陶器	灰釉折沿瓶	肥前系	17C後半		479	78 第四下層 稻荷町	陶器	猪鉢	不明	18C後半~	
427	73 第五町 稻荷町	陶器	灰釉折沿瓶	肥前系	17C後半		480	78 第四下層 稻荷町	陶器	珠斑系中肌 向物	不明	12C後半~15C	
428	73 第五町 稻荷町	陶器	灰釉折沿瓶	肥前系	17C後半		481	78 第四下層 稻荷町	上器	土器	寺内窯	19C	
429	73 第五町 稻荷町	陶器	灰釉丸瓶	肥前系	17C後半~ V期		482	78 第四下層 稻荷町	上器	土器	寺内窯	19C	
430	73 第五町 稻荷町	陶器	灰釉折弦瓶	肥前系	17C中葉		483	79 第五町 稻荷町	追器	白磁折弦瓶 (小皿)	肥前系	17C中葉	肥前Ⅱ~Ⅲ期
431	73 第五町 稻荷町	陶器	黄瀬江丸瓶	美濃系	17C		484	79 第五町 稻荷町	磁器	染付(小皿)	肥前系	17C中葉	肥前Ⅱ~Ⅲ期
432	73 第五町 稻荷町	陶器	掛分け	肥前系	17C後半~ V期		485	79 第五町 稻荷町	磁器	染付(小皿)	肥前系	17C後半	肥前Ⅲ期
433	73 第五町 稻荷町	陶器	挂絆瓶	肥前系	17C後半		486	79 第五町 稻荷町	磁器	白磁(小皿)	肥前系	17C~ 18C前半	肥前Ⅳ期
434	74 第五町 稻荷町	陶器	贴花口日文瓶	肥前系	17C前半		487	79 第五町 稻荷町	磁器	染付青花瓶	肥前系	17C中葉	肥前Ⅱ~Ⅲ期
435	74 第五町 稻荷町	陶器	贴花口日文瓶	肥前系	17C後半		488	79 第五町 稻荷町	陶器	白磁青花瓶	肥前系	17C中葉	肥前Ⅱ~Ⅲ期
436	74 第五町 稻荷町	陶器	贴花口日文瓶	肥前系	18C後半		489	79 第五町 稻荷町	陶器	染付丸瓶	肥前系	17C後半	肥前Ⅲ期
437	74 第五町 稻荷町	陶器	色刷瓶	京焼窑系	18C後半		490	79 第五町 稻荷町	陶器	染付丸瓶	肥前系	18C後半	肥前Ⅲ期
438	74 第五町 稻荷町	陶器	京焼風磨忍忍瓶	肥前系	17C後半		491	79 第五町 稻荷町	陶器	染付丸瓶	肥前系	18C後半	肥前Ⅲ期
439	74 第五町 稻荷町	陶器	京焼風磨忍忍瓶	肥前系	17C後半		492	79 第五町 稻荷町	陶器	染付丸瓶	肥前系	18C	
440	74 第五町 稻荷町	陶器	灰釉	灰釉	17C後半		493	79 第五町 稻荷町	追器	吉備燒付瓶	肥前系	17C~ 18C前半	肥前Ⅳ期
441	74 第五町 稻荷町	陶器	灰釉	灰釉	17C後半		494	79 第五町 稻荷町	追器	染付碗	肥前系	17C~ 18C前半	肥前Ⅳ期
442	74 第五町 稻荷町	陶器	灰釉	灰釉	17C後半		495	79 第五町 稻荷町	追器	染付碗	肥前系	17C	
443	75 第五町 稻荷町	上器	火打具素燒	不明	18C後半~		496	79 第五町 稻荷町	追器	染付碗	肥前系	17C後半	肥前Ⅳ期
444	75 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	18C後半~		497	80 第六町 稻荷町	陶器	灰釉折沿盤	肥前系	17C後半	肥前Ⅳ期
445	75 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	18C		498	80 第六町 稻荷町	陶器	灰釉折沿盤	肥前系	17C後半	肥前Ⅳ期
446	75 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	18C		499	80 第六町 稻荷町	陶器	灰釉折沿盤	肥前系	17C後半	肥前Ⅳ期
447	75 第五町 稻荷町	陶器	挂拂	不明	17C		500	80 第六町 稻荷町	陶器	灰釉折沿盤	肥前系	17C中葉	肥前Ⅳ期
448	75 第五町 稻荷町	陶器	挂拂	染付	17C~17C初		501	80 第六町 稻荷町	陶器	灰釉折沿盤	肥前系	17C~ 17C初	肥前Ⅳ期
449	75 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	18C~19C中葉		502	80 第六町 稻荷町	陶器	吉備燒付丸瓶	美濃系	16C~ 17C初	肥前Ⅳ期
450	75 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	18C~19C中葉		503	80 第六町 稻荷町	陶器	吉備燒付丸瓶	美濃系	16C~ 17C初	肥前Ⅳ期
451	75 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	17C		504	80 第六町 稻荷町	陶器	灰釉碗	肥前系	17C	
452	75 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	17C		505	80 第六町 稻荷町	陶器	铁釉碗	美濃系	8C~9C	
453	75 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	17C~18C初		506	80 第六町 稻荷町	陶器	挂拂	美濃系	17C	
454	75 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	18C		507	80 第六町 稻荷町	土器	かわらけ小皿	不明	17C	
455	76 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	18C		508	80 第六町 稻荷町	土器	土器	不明	18C	
456	76 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	18C								
457	76 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	17C後半								
458	76 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	17C後半								
459	76 第五町 稻荷町	土器	火打具素燒	不明	17C後半								

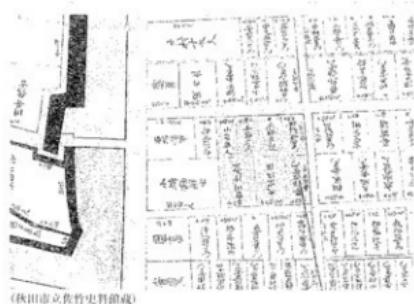
第4章 まとめ

1 遺構について

藩校明徳館跡は、久保田城下の内町（侍町）に位置し、遺跡の範囲は東西108m、南北85mと推定され、今回の調査は事前に実施したトレンチ調査によって擾乱を受けていない約1,400m²を対象とした。

調査の結果、建物跡7棟、柱列9条、溝跡10条、井戸跡5基、土坑18基、性格不明遺構3基が発見された。層位別に見ると、調査区の土層は基本的には6層認められ、第Ⅰ層は現在の生活面で、以前建っていた県立児童会館や秋田県交通災害センター解体時の造成土が堆積している。第Ⅱ層は礎石と布基礎を用いた規模の大きな建物跡が1棟発見された。第Ⅲ層は建物跡4棟、柱列4条、溝跡7条、土坑2基、性格不明遺構1基が発見された。この中で、4号建物跡は確認した範囲で東西約53mであるが、南側に伸びる規模の大きな建物跡と考えられる。なお、7条の溝跡は建物跡に平行して走っていることから、建物に付随するものと考えられ、1号溝跡等は雨落溝と推測される。また、第Ⅳ層では柱列1条を発見した。以上、第Ⅱ層から第Ⅲ層で発見した建物跡を中心とする遺構は、秋田大学の前身である秋田県師範学校関係（明治～昭和期）の校舎及び関係施設の一部と考えられる。校舎は焼失によって4回の建て替えを行っているが、火災の痕跡は第Ⅱ層面でのみ確認されている。調査区東側の第Ⅳ層及び調査区西側の地山面では、建物跡2棟、柱列4条、溝跡3条、井戸跡5基、土坑16基、性格不明遺構2基が発見された。この中で、6号建物跡は東西約49m認められ、南側に伸びる規模の大きな建物跡である。最下層での発見であるが、藩校明徳館跡の建物平面図と一致する部分がないことから、明治6年に藩校明徳館関係（秋田本部学校）の建物が焼失した後に建築された秋田県太平学校や秋田県師範学校関係の建物跡の可能性が高いと考えられる。調査区東側第Ⅴ層の黒褐色スクモ層は調査区西側では発見されず、調査区中央部から東側に行くに従って深くなることから、旧地形は低湿地であったと考えられる。第Ⅳ層はその低湿地に久保田城下の町割りの際に造成工事を行った土層を巻き込みながら18世紀後半に造成されたと考えられる。これらのことから、西側の地山面と東側の第Ⅳ層が基本的には江戸時代の遺構面と考えられるが、明治時代初め以降の造成等によって江戸時代の生活面は失われ、年代的に新しい遺構も発見されている。なお、各土層の造成・堆積時期と年代の根拠については、後述する（2 遺物について（3）遺物包含層出土遺物の年代と堆積時期について）の項で述べる。

藩校明徳館が建設される以前の当該地の町割りの変遷を見ると、寛文初期のものと考えられる『御城下絵図』（第96図）によれば、家臣の屋敷が7棟建っていた。その後、宝曆13年（1763）に作成されたと考えられる『久保田城下絵図』（第97図）によれば、北側の3棟の家臣の屋敷が接収されて廃となり、南西部に新しい家臣の屋敷が1棟割り込んでいる。藩校明徳館の前身である明道館の平面図（第7図）によると、廃とその南側にあった2棟の家臣の屋敷が接収されている。しかし南側にまだ3棟の家臣の屋敷がある



第96図 御城下絵図

ことから、当初は規模が小さく東西に門があったことが分かる。そして、文化8年（1811）に明道館から明徳館に改称された時の平面図（第7図）によると、南と北側に敷地が広がって南側に門を構えていることから、南側にあった残り3棟の家臣の屋敷も接收されて南側が通路に接したことが分かる。これは嘉永2年（1849）に幕府に提出した絵図の写しとされている『御城下絵図』（第97図）でも確認できる。

以上のことから、今回の調査で発見された遺構と藩校明徳館の建物平面図を照らし合わせてみると、一致する部分は確認されなかった。これは、調査区が中心施設の北側空閑地であることや、藩校明徳館関係の建物が焼失または解体した際に処理されたこと、また造成によって削除された可能性があると考えられる。なお、7、8、9号柱列等は家臣の屋敷の跡と考えられ、井戸跡については家臣の屋敷で使用されていた可能性が考えられる。また、5号溝跡は町割りによって作られた道路の備溝の可能性も考えられる。

2 遺物について

（1）出土遺物について

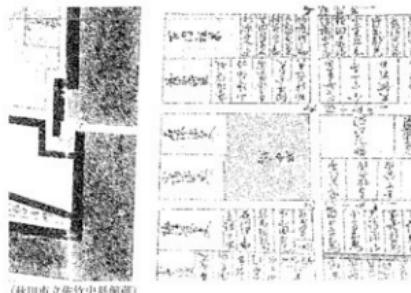
遺物の種別は、陶磁器・土器・土製品・石製品・金属製品・錢貨・木製品等が出土している。出土量は、全体でコンテナ（54×34×15cm）110箱であり、そのうち陶磁器は特に多く80箱で、全体の約73%を占めている。種別ごとの器種構成や様相については、以下のように概説される。

①陶磁器について

陶器・磁器・陶胎染付等が出土している。種別は、陶器は灰釉や鉄釉等の施釉陶器や無釉の焼締め陶器が、磁器は染付・色絵・青磁・白磁等が出土している。器種及び用途別に見た場合、碗類・皿類・鉢類等の食膳具、鉢・鍋類等の調理具、壺・壺・瓶類等の貯蔵具、火入・火鉢等の火具、ひょうそく・灯明受付皿の灯火具、香炉・仏壇器・花生・人形等の祭祀具もしくは調度品に分類され、多様性を示している。分類及び用途別に見た場合、調理具・火具・灯火具は陶器製品が多く、食膳具は17世紀後半以降の磁器製品が卓越する傾向がある。

②土器・土製品について

かわらけ・土師質の風炉（涼炉）や火鉢、瓦質の火鉢等の火具、土師質のひょうそく・灯明受付皿等の灯火具、土鍾等が出土している。火を扱う火具や灯火具が多く、火具は17~18世紀代にかけての火鉢類、19世紀以降は風炉（涼炉）類が多く出土する傾向がある。灯火具は17~18世紀代にかけての灯明皿と器高の低い灯盞式の受付皿、18世紀後半以降はひょうそくが多く出土する傾向がある。かわらけは灯明皿としての使用が認められるものが多いが、儀礼用に使用した可能性を残すものもある。秋田県内における近世かわらけについては、出土資料も少なく不明な点が多い。今回の調査では、特に非クロロ製手づくねのかわらけ類として、11号土坑出土資料のように一括で出土したものがある。それらはナデ調整によって口縁部から体部上半にかけて段を形成する古い要素を残しているが、形態等によって17世紀代に位置付けられるものと考えられ、秋田県内の中世から近世のかわらけの変遷を検討する上で注目される資料といえる。



第97図 御城下絵図

③石製品について

硯・砥石・温石等が出土している。硯は粘板岩製で、方形と円形を呈するタイプがある。砥石は凝灰岩製で、複数面を使い込んだものが多い。温石と考えられる石製品が1点出土しており、孔が穿たれている。

④金属製品について

銅製の匙、刀装具の小柄、真鍮製もしくは銅製の煙管等が出土している。煙管は古泉弘氏による煙管
^(元)編年Ⅳ、V期に該当するものである。

⑤錢貨について

全て銅錢で、波来銭（中国銭）4枚、日本銭54枚、不明銭1枚が出土している。日本銭は全て寛永通寶で、古寛永（初銭1636～1659年にかけて鋳錢）が23枚、新寛永の「文銭」（初銭1668～1683年にかけて鋳錢）が10枚、新寛永（初鋳1697～1747年、1767～1781年）が12枚出土している。また新寛永のうち、秋田市川尻の錢座で錢誂された秋田川尻銭（初鋳1738～1745年にかけて鋳錢）が1枚出土している。なお、欠損や劣化によって銭文が不鮮明で分類が困難なものが9枚ある。波来銭は元豐通寶（北宋、初鋳1078年）、永樂通寶（明、初鋳1408年）、天禧通寶（北宋、初鋳1017年）、治平通寶（北宋、初鋳1064年）が出土しているが、元豐通寶・治平通寶は錢容より模鋳錢の可能性がある。

⑥木製品について

木製品は数多く出土しているが、これは調査区東側が元々低湿地であったことから保存状態が良かったと考えられる。

木製品の種類は、木簡、飲食器としての椀・箸・板杓子・折敷、調理・炊事具としての蓋・柄杓、容器としての曲物・曲物底板・栓、履物としての下駄・下駄差歵、建具としての楔、形代としての人形、用途不明具としての棒状木製品・板状木製品などである。この中で量が多いのは箸と下駄である。箸は土坑などに一括廃棄されているが、破損していないものも多い。両端を削った形態で、大きさにさほど差は認められない。下駄は基本的には台部と歎部とを一本で作る連歎下駄と、台部に別の歎部を差し込む差歎下駄に分けることができるが、台部下面の周縁を残して削りぬくものや、歎を意識しないで厚底風に加工しているものも認められる。

（2）陶磁器について

出土遺物の中で陶磁器が特に多く、年代比定資料ともなることから考察を加えていくこととする。

今回の調査区は、江戸時代の久保田城下町から現在まで市街地の中心部に位置し、近世以降の頻繁な土地利用によって度重なる造成と改変を受けている。そのため、町割初期からの造成土（遺物包含層）は失なわれ、近世の遺構も少ない状況である。また、特に近現代の造成の影響が大きいことから、造成土からの遺物の出土が多くなっている。これらのことから、遺構及び層位ごとの出土資料により、近世の流通及び消費状況の抽出を行うのは困難な状況にある。しかし、近世陶磁器については流通及び消費量が多く、また使用期間が短く、一部の高級品・調度品を除いて伝世要素も少ないという性格を考慮した場合、「出土土器陶磁器一覧表」に示す各陶磁器個別の産地同定及び年代比定や全体の整理分析をとおして、おおよそではあるが、時期ごとの様相や流通及び消費状況の把握は可能と考えられる。以下、その概要を述べてみたい（出土土器陶磁器一覧表、132～136ページ参照）。

①陶磁器の生産地について

陶磁器について、年代を問わず生産地の同定が可能なものについて全体的に分類を行うと以下のように考えられる。

(磁器)

中国系－明朝、清朝時代の中国産貿易陶磁である。本遺跡では16世紀代の青磁碗、16世紀末～17世紀前半の漳州窯産の呉須赤絵折緑皿、呉須染付折緑皿、18～19世紀の産地不明の染付小杯等が出土している。

肥前系－九州肥前地方の窯で生産されたもの、及び肥前の技術・技法を直接取り入れて生産されたものである。17世紀前半の砂目積み段階の磁器から始まり、17～19世紀代を通じて組成の主体を占める。特に染付（碗・皿・瓶類）を主体とし、青磁染付（碗・蓋類）、色絵（皿類・油壺・鬱水入れ・人形）、青磁（皿類・香炉・仏花瓶）、白磁（碗・皿類・紅皿）等が出土している。有田周辺窯の高級製品の他、波佐見周辺の雜器窯の製品も多く出土している。

瀬戸美濃系－江戸時代後期18世紀末以降の瀬戸地方で生産された磁器で、いわゆる新製焼である。胎土は白色で釉に光沢があり、濃くほんやりとした染付が多い。小碗・端反小碗を主体とする。

寺内窯－秋田市所在の在地の地方窯で、天明7年（1787）に陶器生産を開始し、天保8年（1736）頃には肥前の技術を間接的に導入し、磁器生産も開始したとされる。明治時代初め頃（1870年前後）まで磁器を生産した。碗・皿類が出土するが少量である。

その他－産地不明磁器の中には、19世紀以降に生産を開始した東北地方の近世在地窯産のものが含まれている可能性がある。

(陶器)

肥前系（唐津系）－九州肥前地方の窯で生産されたもので、いわゆる唐津焼である。16世紀末～17世紀初めの胎土日積み段階の鉄絵唐津に始まり、18世紀前半代の銅緑釉皿まで一定量出土しており、陶器としては主体を占める。年代の下限については、擂鉢等は19世紀代まで下がる可能性もあるが明確ではない。

瀬戸美濃系－美濃を含めた瀬戸地方周辺で生産されたものである。16世紀末～17世紀初めの大窯第4期以降のもの（志野鉄絵皿・黄瀬戸灰釉皿等）があり、17世紀前半以降18世紀代にかけては香炉・鉄釉碗等が少量出土している。

京信楽系－京都地方及び信楽地方などの京都周辺で京焼の影響を受けて生産されたものである。灰色で硬質緻密の胎土の地に、透明釉を掛け色絵付けする碗・蓋が18～19世紀代にかけて極めて少量出土している。

白岩窯－秋田県仙北郡角館町白岩に所在した近世陶器窯で、明和8年（1771）の生産開始とされる。技術系譜では相馬焼の影響を受けて始まり、京焼や楽焼の技術も加味されているといわれている。

寺内窯－前述した秋田市内所在の在地の地方窯である。江戸時代後期の天明7年（1787）に白岩窯から工人が移動して生産を開始したとされる。操業にあたり白岩窯からは直接的な影響を受けていることから、両窯の識別が困難な点もあり、それらは「白岩・寺内窯」として表記した。鉄釉・灰釉・海鼠釉・豪灰釉等を施釉する雜器が少量出土している。また、土製品の上部質感の中に、寺内窯産のものが含まれている可能性もある。

その他－産地不明陶器の中で、東北地方の近世在地窯産のものが含まれている可能性がある。

②陶磁器の流通・消費の様相と動向について

今回出土した陶磁器類の様相として、伝世もしくは造成時の擾乱によって出土した古代や中世の遺物を除くと、最も古い段階は佐竹氏による久保田城下の町割り開始（1607）前後からと考えられる。

16世紀末～17世紀初めにかけての段階では、肥前I～2期、胎土目段階の絵唐津などの肥前系（唐津系）陶器と大窯第4期段階の志野鉄絵皿などの瀬戸美濃系陶器が出土しているが、町割り当初ということもあり出土量は極めて少ない。中国系漳州窯産の呉須染付・呉須赤絵の折縁皿が2点出土している。

17世紀前半段階では、肥前系陶器と磁器がほとんどを占めるが、出土量は依然少ない。肥前系（唐津系）陶器は、肥前Ⅱ期砂目段階の灰釉折縁皿や溝縁皿・灰釉碗等が出土している。磁器は肥前Ⅱ～1期の砂目段階の皿が1点出土しており、肥前磁器生産開始当初の製品も流通している。その他にも肥前Ⅱ～2期の染付小皿や碗、また、17世紀中葉にかかるが1640～1650年代の肥前Ⅱ期からⅣ期にかけての染付皿や碗等も出土している。

17世紀後半段階でも肥前系陶器と磁器がほとんどを占め、出土量が増加する。肥前系（唐津系）陶器は肥前Ⅲ期の刷毛目文碗・鉢、銅緑釉と鉄釉の掛け分け皿・鉢、京焼系陶器碗・皿等が出土している。また、肥前Ⅲ期からⅣ期に該当する17世紀後半～18世紀前半の蛇ノ目釉剥ぎの銅緑釉皿も出土しているが、主体は18世紀前半と考えられる。肥前系磁器は一重網目文や角福鉢などの裏鉢、ハリ支え底を有する染付の碗・皿類、糸切り細工の変形皿、青磁の皿・仏花瓶類等の時期的な特徴を示すものが出土している。いわゆる柿右衛門様式の白磁皿や、色絵皿・色繪人形等も少量であるが出土している。磁器は他の時期と比較して、延宝年間（1673～1681）前後を中心として高級品が多い傾向が指摘される。

17世紀末～18世紀の段階では、依然として肥前系陶器と磁器がほとんどを占めるが、この段階で磁器の割合が卓越し、18世紀後半には碗・皿類といった食膳具のほとんどが磁器となる。今回の調査では陶磁器全体の出土量もピークとなる。肥前系（唐津系）陶器は前段階からの蛇ノ目釉剥ぎの銅緑釉皿が出土しているが、銅緑釉碗はほとんどない。肥前系磁器は肥前Ⅳ期に該当するものが雜器類を主として出土している。17世紀末～18世紀初めにかけては、手書き五弁花文と角福鉢を有する比較的良品の碗・皿類が出土している。18世紀前半になって、見込みコンニャク印判の五弁花文や、渦福鉢を有する碗・皿類、染付及び鉢も雑ないわゆるくらわんか碗や蛇ノ目釉剥ぎの染付皿・青磁皿・白磁皿等の雜器類が多量に出土している。また、青磁染付の蓋・碗も出土している。

18世紀末～19世紀中葉の段階では、陶磁器の出土量自体が減少する。磁器は肥前系磁器に加え、19世紀前半以降新たに瀬戸美濃系磁器が一定量出土している。さらに、19世紀中葉の段階からは在地の寺内窯産の磁器も若干出土している。陶器は在地の白岩窯や寺内窯産の製品が壺・壺類、土瓶・急須類、餌入れ等の雜器を主として出土している。他にこの時期に該当すると考えられる産地不明の製品も多い。肥前系磁器は肥前Ⅴ期に該当する山水文の輪花小皿や広東碗が出土し、瀬戸美濃系磁器は主として小碗・端反碗が出土している。寺内窯産の磁器は染付小皿や広末碗が若干出土するのみである。

全体をとおして陶磁器の流通と消費の様相をみた場合、17～18世紀にかけて肥前系が產地別組織のほとんどを占めている。しかし、陶器については18世紀後半に入つて肥前系は減少し、18世紀末以降は在地窯産と考えられる製品が増加する。19世紀に入って磁器は肥前系磁器に加え、瀬戸美濃系の新製品の磁器が一定量を占めるようになり、19世紀中葉には在地窯の製品が若干認められるようになる。

以上のような様相と変遷は、大橋康二氏の指摘する東北地方における肥前陶磁の流通消費状況とほぼ

(注7) (注8)
一致する。また、羽柴直人氏の指摘する北東北日本海側の近世陶磁器の流通消費状況とも一致するといえる。今後は、今回の調査区が上級家臣の屋敷という特性も考慮し、久保田城内や城下町の他地区出土資料との比較検討等をとおして、全体的な消費と流通の実態把握に努める必要があると考えられる。

(3) 遺物包含層出土遺物の年代と堆積時期について

各遺物包含層からの出土遺物の年代と堆積時期から、利用状況の変遷について検討すると以下のように考えられる。

最下層である第IV層出土遺物は、上限が16世紀末～17世紀初めで18世紀後半を下限とすることから、18世紀後半にそれ以前の堆積土を巻き込んで造成されたと考えられる。

第Ⅲ層及び第Ⅲ下層の下限は19世紀前半から中葉頃であり、大きな時期差は認められない。つまり、19世紀中葉頃の幕末から明治時代初めにかけて造成されたと考えられる。

第Ⅱ層は西洋の酸化コバルトを使用した染付や、銅版転写の染付、ガラス片など19世紀後葉の明治時代以降の遺物であることから、明治期以降の近現代の造成と考えられる。

前述したとおり、出土遺物全体の中では17～18世紀代の江戸時代前期から中期の遺物が多く、18世紀末～19世紀の江戸時代後期の遺物が少なくなるという傾向があるが、寛政2年（1790）の学館開設以前は今回の調査区が上級家臣の屋敷として利用されていたことから、不用品の廃棄による遺物が多いと考えられる。また、学館開設後は敷地北側の空閑地が占める割合が多いことから、生活に伴う遺物が少ないという利用状況を反映している可能性が考えられる。

以上のことから、第IV層は寛政2年（1790）の学館開設に伴う大規模な造成による土地利用の変化に伴って堆積した土層と考えられ、第Ⅲ層は幕末から明治期初めの明徳館から秋田県太平学校への変遷に伴う造成によって堆積したと考えられる。

3 おわりに

今回の調査は、秋田藩が久保田城下に始めて設立した藩校明徳館跡の緊急発掘調査であるが、後世の開発等によって明徳館の一部分の調査に留まった。従って、明徳館の遺構を明確に捉えることはできず、今後の検討が課題として残った。しかし、近世とそれ以降の遺構は残っていることが確認され、また、遺物は多量に出土し、中でも陶磁器類は膨大な量であり、これまで県内では出土例の少ない近世陶磁器の解明に大きく役立つものと考えている。

今回の調査は秋田市内では始めて行った久保田城下の調査であり、予想以上に多くの資料を得ることことができ、貴重な成果があった。久保田城下は市街地化されており、調査にあたっては多々問題があるが、今後の踏み台にしていきたいと考えている。

注1 『御城下絵図』 秋田市立佐竹史料館所蔵（秋田市指定有形文化財）

注2 『久保田城下絵図』 秋田県立博物館所蔵（秋田県指定有形文化財）

注3 『明道館草創記』 財團法人千秋文庫所蔵 1793年

注4 『御学館祭酒日記』 秋田県公文書館所蔵

注5 『御城下絵図』 秋田市立佐竹史料館所蔵（秋田市指定有形文化財）

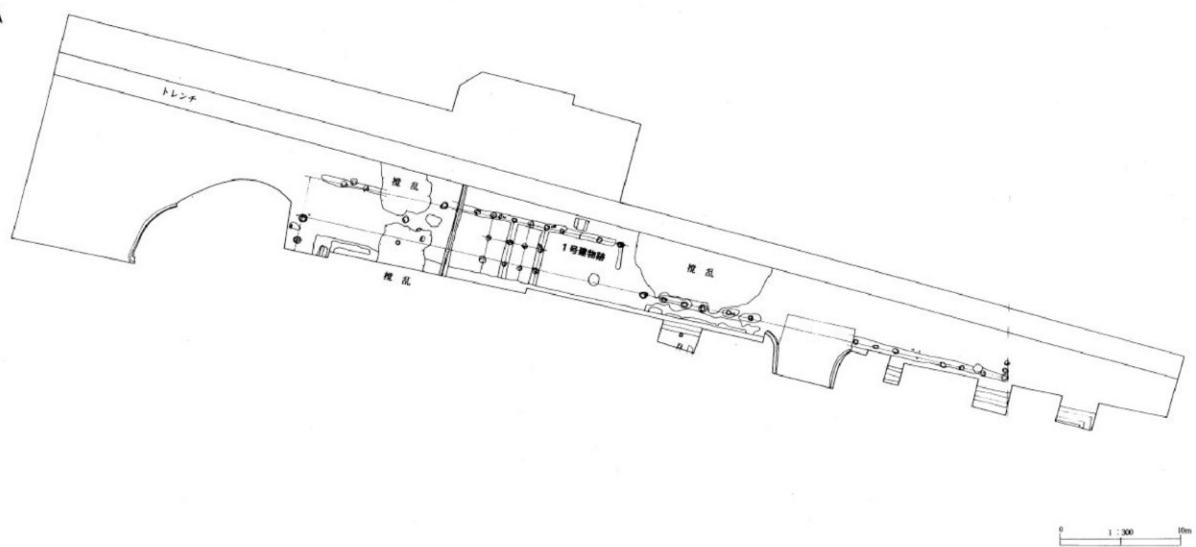
注6 古泉 弘 『江戸の考古学考古学』（ライブラリー48） ニューサイエンス社 1987年

- 注7 大橋康二 「北海道・東北地方出土の肥前陶磁」『国内出土の肥前陶磁－東日本の流通をさぐる－』 九州近世陶磁学会 2001年
- 注8 羽柴直人 「東北地方北部における近世陶磁器の様相－1690～1780年代の消費状況の修正－」 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要 XIV 1994年

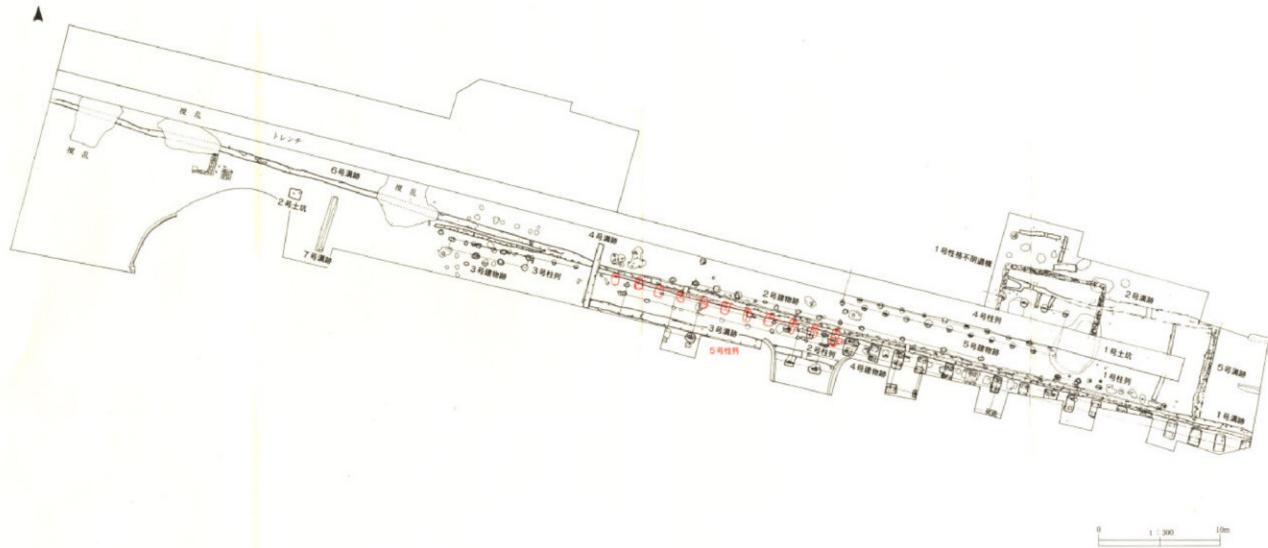
参考文献

- 愛知陶磁資料館 「呉州赤絵・呉州染付・辯花手ーストウ・ウェアの世界－」 1996年
- 秋田県教育委員会 「洲崎遺跡」 2000年
- 秋田県師範学校、秋田県女子師範学校 「秋田県総合郷土研究」 1982年
- 秋田市教育委員会 「寺内焼窯跡」 1991年
- 秋田市教育委員会 「久保田城跡」 1997年
- 秋田市教育委員会 「久保田城跡」 2001年
- 秋田大学教育学部創立百周年記念会 「創立百年史 秋田大学教育学部」 (株) 文天閣 1973年
- 有田町史編纂委員会 「有田町史 古窯編」 1985年
- 飯能市郷土館 「黎明のとき－飯能焼・原窯からの発信－」 2001年
- 江戸遺跡研究会 「国説 江戸考古学研究事典」 柏書房 2001年
- 江戸遺跡研究会 「江戸文化の考古学」 吉川弘文館 2000年
- 江戸陶磁土器研究グループ 「シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ」 1992年
- 江戸陶磁土器研究グループ 「シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ」 1996年
- 笈川栄助 「小學教科 秋田縣史話」 鮮進堂 1893年
- 大橋康二 「肥前陶磁」 (考古学ライブラリー-55) ニューサイエンス社 2000年
- 加藤民夫 「秋田藩校 明徳館の研究」 (株) カッパンプラン歴史文庫 1997年
- 加藤嘉太郎・山内昭二 「家畜比較解剖図説上巻 第2次増訂改版」 養賢堂 1995年
- 九州近世陶磁学会 「九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－」 2000年
- 九州近世陶磁学会 「国内出土の肥前陶磁－東日本の流通をさぐる－」 2001年
- 斎藤弘吉 「犬科動物骨格計測法」 私家版 1963年
- 佐賀県立九州陶磁文化館 「柴田コレクション展(Ⅰ)」 1990年
- 佐賀県立九州陶磁文化館 「柴田コレクション展(Ⅱ)」 1991年
- 佐賀県立九州陶磁文化館 「柴田コレクション展(Ⅵ)」 1998年
- 佐藤清一郎 「秋田貨幣史」 1972年
- 静岡県教育委員会 「駿府城跡I 遺物編1」 1998年
- 瀬戸市史編纂委員会 「瀬戸市史 陶磁史編4」 1993年
- 瀬戸市史編纂委員会 「瀬戸市史 陶磁史編5」 1993年
- 瀬戸市史編纂委員会 「瀬戸市史 陶磁史編6」 1998年
- 田口昭二 「『美濃焼』(考古学ライブラリー-17)」 1983年
- 東北陶磁文化館 「東北の近世陶磁」 1987年
- 徳島県教育委員会 「新蔵3丁目遺跡」 2000年

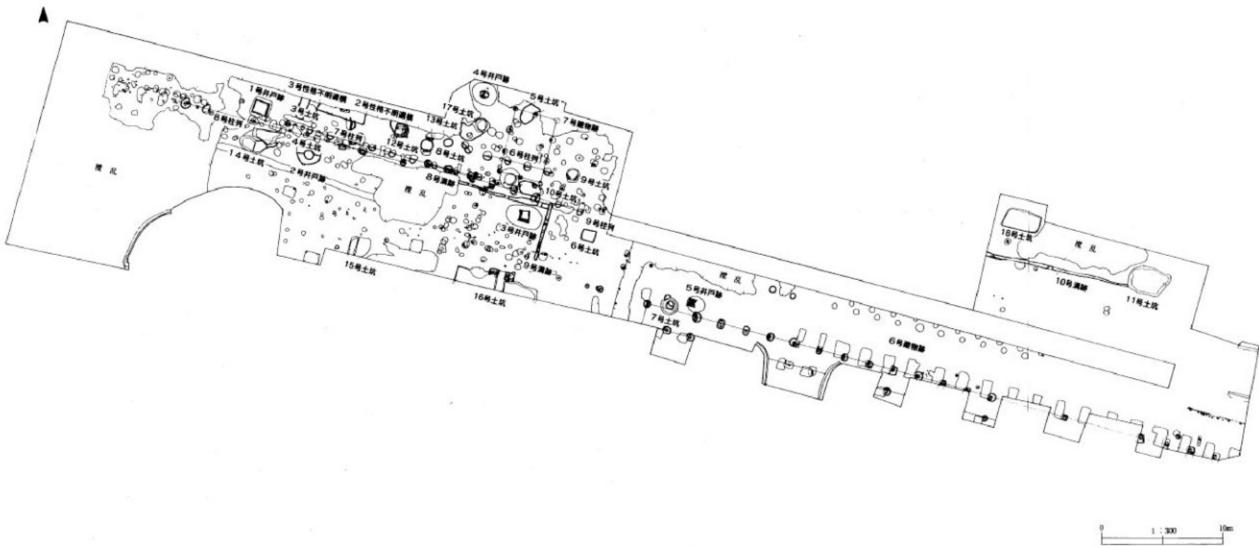
- 徳島県教育委員会 『新蔵1丁目遺跡』 2000年
- 戸田金一 『秋田県の教育史』 (株)思文閣出版 1984年
- 万圓山・天徳寺 『秋田・天徳寺史』 1994年
- 兵庫埋蔵銭調査会 『日本出土銭總覧』 1996年
- 福島県立博物館 『企画展 東北の陶磁史』 1990年
- 渡部景一 『久保田城下町の歴史』 無明舎出版 1983年
- 渡部景一 『佐竹氏と久保田城』 無明舎出版 1979年
- 渡部景一 『秋田市歴史地図』 無明舎出版 1984年
- 渡部景一 『図説 久保田城下の歴史』 無明舎出版 1983年
- 渡辺爲吉 『白岩瀬戸山』 (復刻版) 1979年
- Angela von den Driesch 『A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archeological sites.』
Peabody Museum Bulletin 1. Harvard : Peabody Museum. 1976年



第98図 第II層面造構配置図



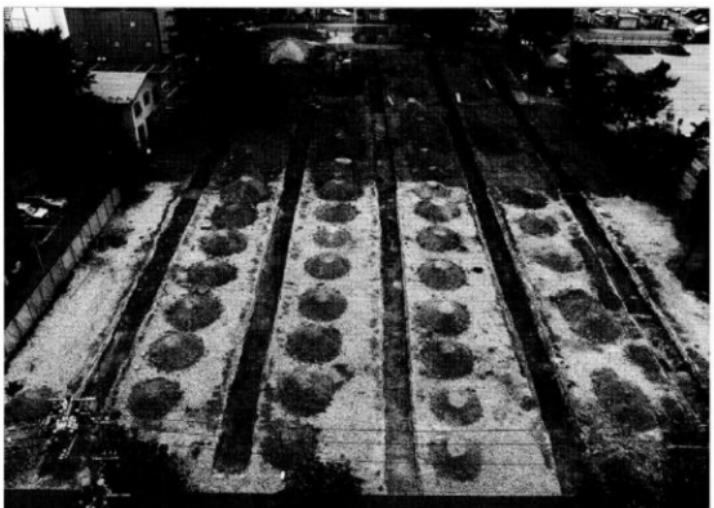
第99図 第三層面遺構配図



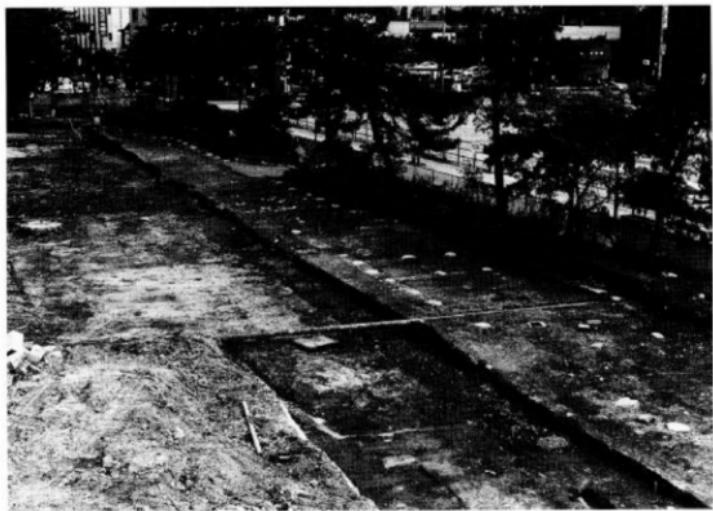
第100圖 第IV層面遺構配置圖



調査区全景



トレンチ調査

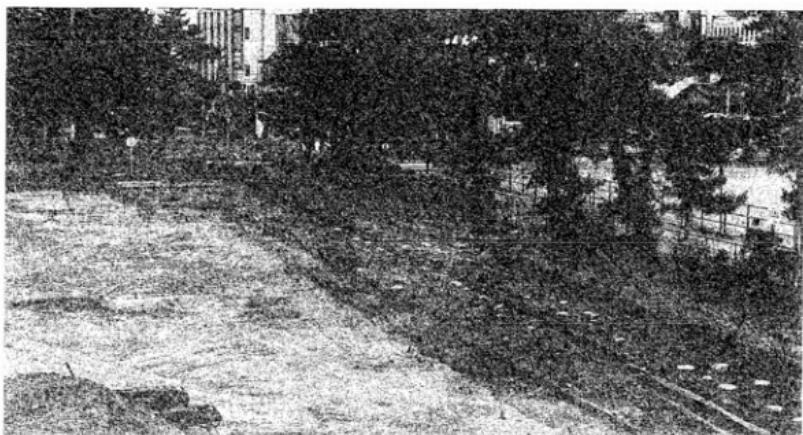


第Ⅱ層面全景（北西→）



1号建物跡（西→）

圖版2



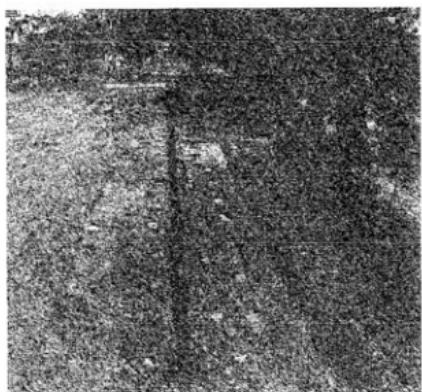
第Ⅲ層面全景（北西→）



2号遺物跡（西→）



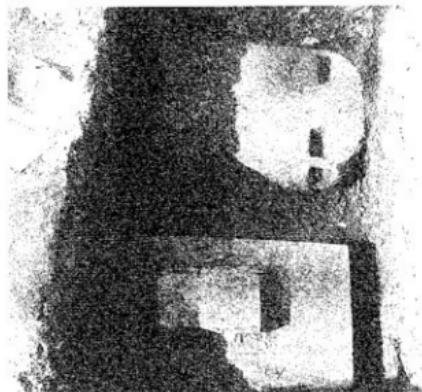
3号遺物跡（西→）



4号建物跡（西→）



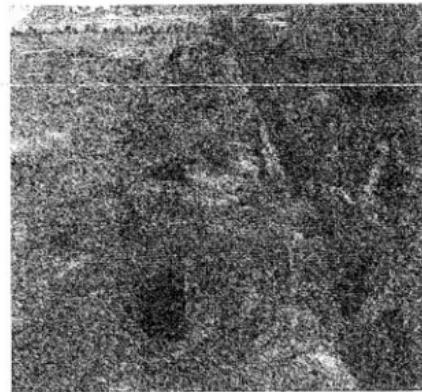
4号建物跡柱・礎板



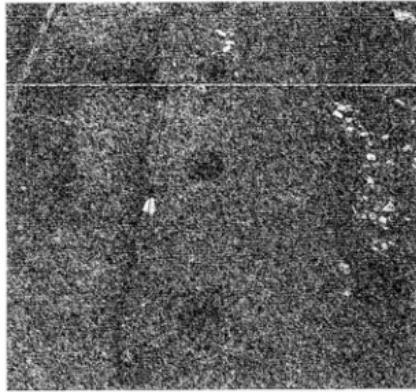
4号建物跡礎板



5号建物跡（西→）



1号柱列（西→）



4号柱列（西→）



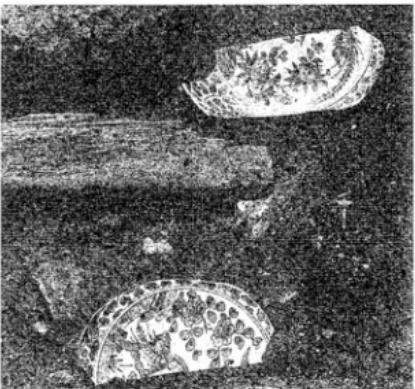
1号溝跡（東→）



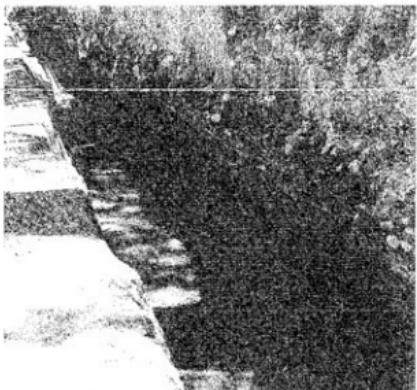
1号溝跡（北東→）



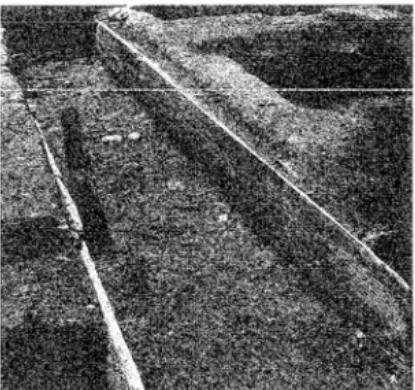
2号溝跡（西→）



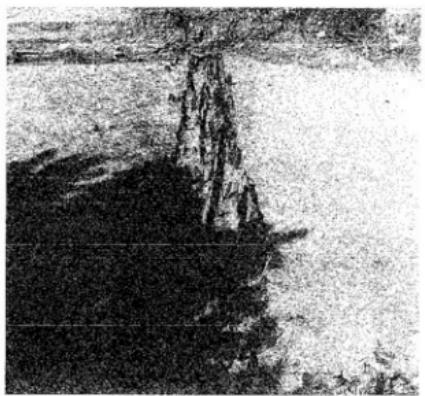
2号溝跡遺物出土状況



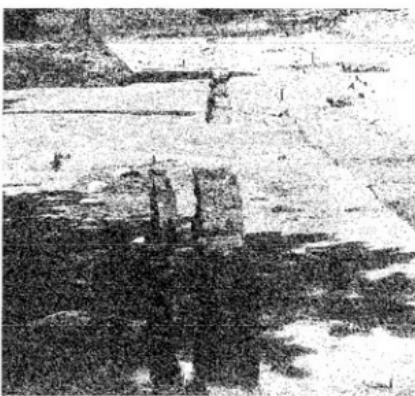
3号溝跡（西→）



4号溝跡（北→）



5号溝跡（南→）



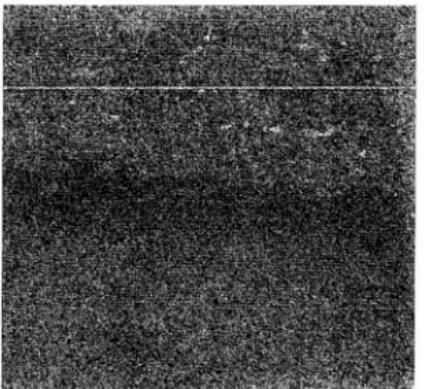
6号溝跡（東→）



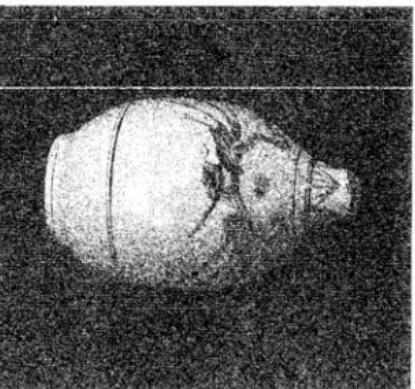
7号溝跡（北→）



1号土坑（南→）



2号土坑（南→）



第III下層遺物出土状況